

< 平成 27 年度修士論文（静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科） >

浜松におけるブラジル人移住第 2 世代の発信活動

—ライフストーリー分析を中心に—

Messages for Younger Cohorts: A Life Story Analysis of Second Generation Migrants from Brazil in Hamamatsu

近藤 大祐 Daisuke KONDO

（論文指導：静岡文化芸術大学教授 池上重弘）

目 次

論文要旨	1
はじめに	3
第 1 章 ブラジル人移住第 2 世代を取り巻く状況と日本の多文化共生	4
第 2 章 浜松市の施策展開と移住第 2 世代の台頭	8
第 3 章 発信する移住第 2 世代の語り	10
第 4 章 発信する移住第 2 世代を支えるエージェント	19
第 5 章 考察—ブラジル人移住第 2 世代の発信活動	22
おわりに	26
謝辞	27
注記	27
引用・参考文献	29
図表	35
インタビュー資料	38

論文要旨

本論文は後続の子どもたちのために自らの声をホスト社会に発信するブラジル人移住第2世代の若者に焦点を当てる。そして、第2世代の若者の活躍が今日の浜松市で何故実現しているのか明らかにすることを目的とする。そのために、浜松市におけるブラジル人移住第2世代の「発信活動」の過程および変化をライフストーリーの手法で分析した。本研究における「発信」とは、日本語を用い、ホスト社会の住民および、外国にルーツのある後続の世代の子どもとその保護者に届く形で教育に関する情報提供と意思表示を行うことを指す。第2世代は発信に至るまでに、将来の見通しに関する「情報」を獲得し、「時間」の捉え方に質的な転換が見られた。加えて、「アイデンティティ」は他者との関係を契機に葛藤、肯定、深化の過程を経ていることが分かった。第2世代は日本社会において、外国人の子ども一般を取り巻く環境を知り、問題意識を抱き、当事者性を意識する。そして、事業担当者(エージェント)と出会い、自分の思いを発信するに至った。さらに、発信の規定要因を明らかにするために、当事者の資源獲得に加え、発信を支えるエージェントの機能を分析した。エージェントは「仕組みづくり」、「人への働きかけ」、「舞台の設え」の機能を果たし、移住第2世代の声を社会につなぐ媒介者となっていることが明らかになった。浜松におけるブラジル人移住第2世代による発信活動の規定要因は以下の通りに結論づけることができる。すなわち、①ある立場を人が担い、上記3つの機能を持っていること、②所属する機関・団体間でエージェントを中心に、ゆるやかなネットワークを形成していること、③多文化共生の地域づくりで資金や場の工面ができる環境にあること、④資源を獲得したブラジル人移住第2世代がホスト社会へ台頭していること、である。

キーワード：ブラジル人移住第2世代、ライフストーリー、編成的資源、エージェント、浜松市

Abstract

This paper examines factors of activities in which second generation migrants from Brazil (SGMBs) in Hamamatsu communicate to younger cohorts. First, this research uses the life story analysis method for the concerned individuals when obtaining resources. The analysis shows they gained a perspective for the future and changed perceptions of time. Moreover, they changed negative perceptions to positive attitudes towards their understanding for each ethnicity. Having known about the situations of non-native children and youth, they had an awareness of issues and a sense of their ethnicity. Then, they encountered agents and accessed to spreading their own opinions. Second, this research analyzes the roles of agents collaborating with SGMBs. The functions of agents are 1) creating systems, 2) approaching people concerned, and 3) arranging stages. In conclusion, the factors of activities of SGMBs in Hamamatsu for younger cohorts are as follows. To begin with, one person is given a certain post and has the capacity of the above three functions. Additionally, networks among agents support SGMBs in activities for younger cohorts are in existence. Thirdly, agents can raise funds and prepare opportunities of building a diverse society. Finally, SGMBs who gained resources are appearing in the host society.

Keywords: second generation migrants from Brazil, life story, organizing resources, agents, Hamamatsu

はじめに

1990年の改定出入国管理及び難民認定法(以下、改定入管法と表記)施行により、就労を目的とした日系人をはじめとする、いわゆるニューカマー¹⁾の来日が急増した。今日では200万人を超える外国人が日本で生活している。彼らの定住志向は年々高まっており、日本での子どもの教育が肝要となる。しかしながら、後述するダブルリミテッド、不就学、低い学業達成率等、依然として課題は山積している。

一方、静岡県浜松市では、多文化共生の地域づくりが新たな局面を迎えている。欧州のインターカルチュラル・シティ²⁾政策の知見を参照した「浜松市多文化共生都市ビジョン」を2013年に策定する等、まちづくりに外国人の多様性を生かす流れにある。その流れの中で、外国人の子どもとその保護者にモデルを示し、かつ、ホスト社会の人々に気付きをもたらす発信³⁾活動を行うブラジル人⁴⁾移住第2世代⁵⁾の若者⁶⁾が地域社会に台頭しつつある。

ニューカマーの教育に関する研究領域は「言語」、「適応」、「学力」、「進路」、「不就学」、「アイデンティティ」[志水2008:17-23]に大別される。これら6つの領域はそれぞれが影響を与え合っているため、はっきりとした分類をすることはできない。それぞれの領域における近年の研究を整理すると、「言語」に関するもの[太田1996;太田2000;佐藤2010]、「適応」に関するもの[志水・清水2001;江淵2002]、「学力」に関するもの[宮島1999]、「進路」に関するもの[乾2008;伊藤・富永2011;鍛冶2011;池上2014a;イシカワ2015;高谷・大曲・樋口・鍛冶・稲葉2015]、「不就学」に関するもの[宮島・太田2005;佐久間2006;小島・中村2006]、「アイデンティティ」に関するもの[関口2003;イシカワ2008]等、多岐に渡る蓄積がなされている。

移住第2世代は上記6領域等において、多岐に渡る困難を抱えている場合が多く、困難を抱える者の支援をいかにするかという点に研究の焦点が当てられている。つまり、これまでは支援の対象として移住第2世代が語られてきた。しかしながら、自発的な活動を行う第2世代の存在が散見されるようになってきた今日では、周辺化されている存在、つまり客体としてニューカマーの若者を捉えるだけでなく、主体的行為者としても捉えていく必要がある。

前述のように日本における第2世代研究は問題を抱えた者に対する支援の対象として第2世代が取り上げられるも

のが大半を占める。彼らの自発性に焦点を当てた研究は以下のようなものがあるが、取り上げられている事例は地域が限定されており、多くない。第一に、神奈川県いちよう団地に暮らすニューカマーの子どもたちによる当事者としての自治的な活動が展開されるまでの過程に焦点を当てたもの[清水2006;清水・児島・家上2007;清水・児島・家上2008]がある。次に、兵庫県神戸市に位置するたかとりコミュニティセンター(以下、TCCと表記する)をフィールドに、少数者の発信活動の事例を紹介し、彼らの発信の意味を述べているもの[吉富2005]がある。同様にTCCを主な舞台にした在日コリアン・ブラジル人・ベトナム人の外国人青少年の自己表現活動に焦点を当てた研究者に落合知子がいる。落合のそうした一連の研究は以下のものがある。はじめに、外国人青少年の表現活動を支えるボランティアに焦点を当てて、その機能を検討したものがある[落合2007]。表現活動の発話を分析し、外国人青年の発信がホスト社会にもたらす気付きを明らかにしたもの、表現活動に至るまでの過程および、活動に携わることによるエスニシティへの意識の変化、さらには自己表現に至る場の特徴を検討したもの[落合2010;落合2011]がある。そして、外国人市民や彼らを取り巻く人々がどのような異文化間リテラシーをどのように獲得しているのかを検討し、外国人市民がホスト社会にもたらす豊かさを明らかにしたもの[落合2012]がある。第三に、国際交流協会での日本語教室をフィールドに関西で外国にルーツのある子どもの教育支援に携わっているペルー・中国・台湾出身の大学(院)生が自らの人生と現在の活動をどのように意義づけているのかを語りから明らかにしたもの[御館2010;御館2011]がある。そして、浜松市における多文化共生のまちづくりでの第2世代の活躍に焦点を当てているもの[池上2014b;池上2014c;松岡2014;池上・上田2015]がある。

しかしながら、後続の世代のための発信がなぜ実現しているのか、その様相を描き出している研究は存在しない。浜松市は先述のように、まちづくりに外国人住民の多様性を生かす旨を基本計画等に掲げるようになったのがここ数年である。日本で学齢期を過ごし、学業達成を果たした第2世代の若者による発信活動の規定要因について、当事者の資源獲得およびエージェントの機能を通じてアプローチすることは外国人の子どもの教育および、多文化共生社会構築に新たな視点をもたらすと考えられる。

本研究の目的は、多様性を生かす施策とブラジル人移住第2世代の発信を結び付け、第2世代の若者が資源をいかに獲得・活用し、後続の子どものためにどのような声をホスト社会に発信しているのかを描き出し、なぜ発信が今日の浜松で実現しているのか明らかにすることである。そのために、浜松で発信するブラジル人移住第2世代4人の語りをライフストーリー[桜井・小林 2005]分析で読み解く。加えて、発信を支えるエージェントへの調査から、エージェントの機能を考える。これらに浜松市の施策展開を加え、ブラジル人移住第2世代の発信が実現している要因を探っていきたい。

第1章では、先行研究をもとに、移住第2世代を取り巻く環境および、日本における多文化共生社会構築の意義を整理する。次に第2章では、浜松市の施策展開と第2世代の状況を明らかにする。第3章は、発信するブラジル人移住第2世代の若者の語りを資源獲得の観点から分析する。第4章においては、エージェントへの調査から、移住第2世代との協働における各エージェントの役割を検討する。第5章では、以上の章をもとに、浜松市におけるブラジル人移住第2世代の発信がなぜ実現しているのか考察する。

第1章 ブラジル人移住第2世代を取り巻く状況と日本の多文化共生

第1節 日本におけるブラジル人移住第2世代を取り巻く状況

本節では先行研究を用い、ブラジル人移住第2世代の抱える諸問題について、志水[2008]の分類に沿って教育分野から整理する。ニューカマーの教育に関する研究領域は先述のように、「言語」、「適応」、「学力」、「進路」、「不就学」、「アイデンティティ」に分類できる[志水 2008 : 17-23]。本論文では、特に「言語」、「適応」、「進路」に焦点を当てて取り上げる。子どもたちの学校適応は、言語的ハンディキャップに加えて低い学習意欲を伴い、その多くに困難さが確認された[志水・清水 2001]という指摘がなされているためである。なお、ブラジル人子女の教育の選択肢として、ブラジル人学校も挙げられる。ブラジル人移住第2世代の発信は日本の学校に在籍する子どもたちを対象にしているのが現状である。そのため、ブラジル人学校に在籍する子どもを取り巻く環境については本論文では割愛し、日本の学校に在籍するブラジル人に焦点を当てる。

第1項 言語

1990年代にニューカマーの子どもたちが多く日本に入ってくるようになって最初に注目されたのが、言語の問題と学校適応であった[志水 2008 : 18-19]。言語に関する研究は日本語教育と母語教育の2種類に大別される。言語の問題については認知・学力言語能力(Cognitive Academic Language Proficiency, CALP)と伝達言語能力(Basic Interpersonal Communicative Skills, BICS)の習得年数のギャップがまず挙げられる。前者は「学習思考言語」、後者は「社会生活言語」と呼ばれている[太田 1996 : 128-129]。一般的に社会生活言語の習得には1~2年、学習思考言語の習得には5~7年程度を要する。したがって、日常会話の日本語が難なくできるようになったからといっても、学習に必要な日本語ができるようになったと言い切ることはできず、その点を考慮した教育が必要である。

2つの言語の間に置かれる子どもの言語習得タイプについては、佐藤によると、理論的には、4タイプが想定できるという。すなわち、①日本語の力も母語の力も十分という子ども(二重バイリンガル)、②日本語の力はあるが母語の力は十分でない子ども(偏重バイリンガル)、③日本語の力はおぼつかないが母語の力は十分という子ども(偏重バイリンガル)、そして、④両方とも不十分な子ども(ダブルリミテッド)である。そして、現実には③と④のタイプが多い[佐藤 2010 : 103]。③と④のタイプの子どもの日本の学校で授業についていくことができず、不適応につながる場合もある。

第2項 適応

次に適応についてである。ここでは、特に日本の学校での適応に焦点を当てる。江淵は異文化への適応の状態を4つに整理した。ホスト社会に同化されてしまう「文化変容型(同化型)」、自文化とホスト社会の双方の文化を自分のものにした「二文化型(統合型)」、どちらの文化からも疎外される「境界人型(移行型)」、自文化に固執しホスト社会と交わりたくない「非文化変容型(伝統・保守型)」である[江淵 2002 : 109-111]。江淵によれば、「異文化への適応過程は決して直線的ではなく、いくつかの段階を行きつ、戻りつ、ホスト社会と自集団文化の間を揺れ動くなどジグザグコースをたどりながらその人なりの安定した心理状態とアイデンティティを獲得する」[江淵 2002 : 116]という。

また、近年では、日本で生まれ、日本語で育ってきたブラジル人の子どもが増加している⁸⁾。そのような状況下で、ブラジルというのは親に教えられる「ブラジルの記憶」であり、現実的な記憶ではなく、子どもたちは適応過程において、日本人としてのアイデンティティが芽生えてくると考えられる[イシカワ 2008 : 185-186]。ポルトガル語を十分に用いることができない場合もあり、そして、ブラジルの文化はよくわからないにも関わらず、ブラジル人として扱われるということに違和感を持つ等、アイデンティティに揺らぎが見られる場合もある。

最後に、学校適応についてである。恒吉や太田は日本の学校文化に焦点を当てた研究を行っている。日本の学校は、「一斉共同体主義」[恒吉 1996 : 226]や「奪文化化」[太田 2000 : 223]と表現される。「みんな一緒」がよしとされる同化圧力が日本の学校には存在し、違いを排除する傾向にある。その同化圧力は必ずしも教師から受けるというわけではなく、「ピア・プレッシャー」という形で仲間集団から受けることが多い[太田 2000 : 206]。その結果、ブラジル人であることを隠す等、自己表出が抑制され、自分に自信を持つことができない子どももいる。言語や学校の習慣、いじめ等が原因で不適応を起こす子どもは珍しくなく、就学義務のないブラジル人の子どもは学校をやめてしまい、不就学⁹⁾に陥ることもある。

第3項 進路

ニューカマーの教育に関する研究は小中学校を中心に行われてきたわけであるが、これはかつて高校において「生き残っている」ニューカマーが少なかったことが一因である[乾 2008 : 29]。そのため、中学校卒業後の進路に関する研究はあまり蓄積がなされていない。進路選択に際して重要な要素である学力については、ニューカマーの学力問題を扱う際に参考にできるような適切な資料は、ほとんど存在しない[志水 2001 ; 宮島 2014]。宮島は太田[1996]の言う学習思考言語をさらに抽象的学習言語と歴史文化言語の2つに分類し、日本の文脈についての文化資本に欠けるニューカマーの子どもは特に歴史文化言語において困難を抱えるとしている[宮島 1999 : 146-153]。

進路実現に当たって、志水・清水と宮島は示唆に富む視点を提示している。言語の違いや日本の教育システムに関する基本的な情報の欠如ゆえに親が子どもの学習をサポート

トできなかつたり、親の学校経験が限られたりしていることや、身近なモデルの不在により、子どもがどのように学校で生活すればよいかという点で大きく資源が不足する、かつ帰国か定住かの親の見通しが明確でないゆえに将来を展望できない状況が生じやすくなっている[志水・清水 2001 : 56-60]。さらに、モデルという社会関係資本の希薄さによる、ニューカマーの子どもたちの将来の職業生活のための具体的戦略の不在が指摘されている[宮島 2002 : 138-139]。つまり、具体的なモデルが身近に不在であることから、適応や進路実現が困難になっていると言える。

高校進学者数と大学進学者数については、鍛冶[2011]が2000年の国勢調査を検討し、高校在学率と大学在学率からアプローチしている。鍛冶は日本や韓国・朝鮮、中国国籍者に比べ、ブラジル国籍者の高校在学率が極端に低いこと、そして大学在学率は男女とも0%と言ってよいほど低い[鍛冶 2011]ことを指摘している。大学進学者はおろか、他の国籍の子どもに比べ、高校進学者も少ないことが指摘されているブラジル人の第2世代であるが、2000年国勢調査から10年余りが経過した今日では、大学進学を果たす者が現れ始めている。2010年の国勢調査をもとにした調査では、グラフ上に初めてブラジル人大学進学者の山ができたという報告がなされた[高谷・大曲・樋口・鍛冶・稲葉 2015]。また、日本人と同じ試験に合格し、日本の大学に進学しているブラジル人第2世代の事例を複数取り上げ、彼らの現状をイシカワ[2015]は紹介している。イシカワは大学進学を果たしたブラジル人第2世代は依然として特例な存在であるが、今後は学士の学位を取得する日系ブラジル人の若者は増加するだろうと述べている[イシカワ 2015 : 7]。学業達成を果たしたブラジル人移住第2世代の絶対数はまだまだ多くはないが、後続の子どもにとって、モデルとなり得る存在が着実に増加している。

第2節 日本の多文化共生

第2節では、日本における国際化の状況および、外国人増加に伴った施策展開を概観する。さらに、多文化共生を推進する意義を述べる。

第1項 日本の内なる国際化と多文化共生

1990年以前の日本には、アイヌ民族や沖縄人、オールドカマーと呼ばれる在日コリアン等、多様な出自の人々が居

住していた¹⁰⁾。日本で暮らす外国人は1990年の改定入管法施行により、南米からの日系人を中心に増加の一途をたどった。ここでは、ブラジル人増加の要因を述べる。1990年代当時の増加について考えると、プッシュ要因としては、2点挙げられる。①ブラジル経済が低迷し、極度のインフレーションが発生したこと、②日本とブラジルの所得格差が大きく、日本で働くことはブラジルで働くことよりも価値が高くなるということである。加えて、日本側のプル要因においても、2点挙げることができる。すなわち、①好景気により、製造業を中心に求人が増加し、人手不足となっていたこと、②いわゆる3K(きつい、きたない、きけん)労働に就く若者が減少したことである。送り出し国と受け入れ国のこうした事情が合致していたことに加え、1990年の改定入管法が施行されたことで、ブラジルからの労働者が急増した。図1からわかるように、ピーク時における外国人登録者数は2008年に2,217,426人まで上った。その後、2008年の世界的経済危機および、2011年の東日本大震災を機に外国人登録者数は減少に転じた。ブラジル人の人口推移についても、2008年を契機に減少傾向にあることが図2からわかる。その一方で、表1の外国人総人口に占める永住権取得者数の割合を参照すると、永住権取得者が増加していることがわかる。1990年以降に急増したブラジル人¹¹⁾についても、例外でない。表2を参照すると、ブラジル人については、在留ブラジル人総人口に占める永住権取得者の割合は外国人総人口での割合に比べると顕著に高いことがわかる。2008年にはブラジル人総人口の内、永住権取得者の割合は約35%であった。しかしながら、2014年時には、約63%もの人々が永住権を取得している。未曾有の危機後のこの結果からは、外国人住民の定住志向が伺える。そして、ブラジル人については、定住志向が特に強い傾向にあることが見て取れる。当初はデカセギ目的での来日であったが、滞在の長期化に伴い、ブラジルから家族を呼び寄せたり、日本で新たに家庭を設けたりするようになった者も多い。

日本の国際化を受け、阪神淡路大震災後に「多文化共生¹²⁾」という言葉が行政用語としても定着した。しかしながら、「多文化共生」については、統一された定義は存在しない。田村太郎によると、最初に定義づけをして組織の名称に使用したのは「多文化共生センター」だという。同センターは、「多文化共生」を「国籍や文化のちがいを越え、と

もに尊重し合う社会」と定義した[田村 2014 : 55]。2006年に出された総務省の「地域における多文化共生推進プラン(以下、総務省プランと表記)」では、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていく」ことだとされている[総務省 2006a]。さらに、第2項で詳述する外国人集住都市会議は「豊田宣言—外国人住民とともにつくる活力ある地域社会をめざして—」の中で、多文化共生社会を「日本人住民と外国人住民が、互いの文化や価値観に対する理解と尊重を深めるなかで、健全な都市生活に欠かせない権利の尊重と義務の遂行を基本とした真の共生社会」と定義している。これらの定義から「文化や価値観における多様性の尊重」、「相互理解」、「権利・義務を守ること」、「社会参加の促進」が共通する概念として抽出でき、上記4点を推進していくことが多文化共生の地域づくりと言えらる。

具体的な施策の方向性として、田村は3つの視点を提示している[田村 2014 : 60]。1つ目は「あってはならないちがいをなくす」視点である。2つ目は「なくてはならないちがいを守る」視点である。そして、3つ目は「ちがいに寛容な地域をつくる」視点である。1つ目の視点は、多言語での情報提供を行ったり、教育等の社会保障を整備したりすることである。次に、2つ目の視点として、母語・母文化保持を保障し、同化を強いることのない施策が求められる。最後に3つ目の視点では、住民それぞれが互いの違いを尊重し、違いを排除することのないようにすることが求められる。これらの視点で不足していることを行政施策や市民活動等で補っていくことが多文化共生の地域づくりにおいて必要である。

第2項 施策展開

はじめに、地方自治体による施策を概観する。外国人施策に積極的に取り組む自治体は、大きく3つに分類される[山脇 2004 : 231]。すなわち、在日コリアン施策を中心に外国人施策の体系化を図っている自治体(人権型)、ニューカマー施策を中心に外国人施策の体系化を図っている自治体(国際型)および在日コリアン施策とニューカマー施策の統合を試みながら、外国人施策の体系化を図っている自治体(統合型)である。在日コリアンの多い自治体では、1970年代以降、人権政策として取り組みを進めた。また、南米か

らのニューカマーが急増した1990年代以降では、国際化施策として取り組みを進めてきた自治体もある。そして、1990年代後半頃になると、「多文化共生」がキーワードとなり[山脇 2009 : 34]、自治体の取り組みが活発化した。こうした自治体の外国人施策の広がり、草の根の市民活動と自治省が進めてきた地域の国際化施策を推進力としている[山脇 2009 : 35]。

各自治体の取り組みに加え、外国人が多く暮らす自治体間でネットワークを形成し、情報共有・国への提言の動きが見られるようになった。2001年には、浜松市の呼びかけに南米系のニューカマーが多く暮らす13の基礎自治体が参加し、外国人集住都市会議が設立された。2015年現在の会員都市は27都市となっている。他方、広域自治体レベルでは、群馬、岐阜、静岡、愛知、三重に名古屋市を加えた5県1市の6都市で構成される多文化共生推進協議会が2004年に設立された。現在は長野と滋賀を加えた7県1市の8都市で構成される。

次に、国の取り組みについて述べる。自治体に比べ、国の取り組みは大きく遅れてきた。1990年の改定入管法の施行によって急増したブラジル人労働者に関わる課題について、関係省庁の対応は後手に回り、省庁間の連携に乏しく、「対策」はあっても「政策」なしと言わざるを得ない状況だった[山脇 2009 : 34]。自治体の取り組みが先行した状況の中、国の動きが活発化した契機として「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～」が2006年3月に発表されたことが挙げられる。この報告書には、以下の3点の意義があると山脇は述べる[山脇 2009 : 34]。1つ目に、総務省が地域国際化の柱としていた国際交流と国際協力に加えて、在住外国人に関わる取り組みを多文化共生と呼び、第3の柱に位置づけたことである。2つ目に、各地の自治体の取り組みを整理し、体系化して、多文化共生に関わる施策の全体像を示したことである。3つ目に、もっぱら労働力確保や治安維持の観点から「外国人問題」にアプローチしていた国に対して、「生活者としての外国人」という観点を打ち出すことを求めたことにある。2006年3月には、総務省プランが総務省によって発表された。同プランに追随して都道府県や市町村で多文化共生推進プランが策定され始めた。総務省プランでは、①コミュニケーション支援、②生活支援、③多文化共生の地域づくり、④多文化共生施策の推進体制の整備が施策の

基本的な考え方とされている[総務省 2006a]。総務省プランに照らして、これまでの多文化共生施策を考えると、①と②の外国人に対する支援は取り組みが盛んに行われてきているが、③については、山脇[2013b]に指摘されるように、取り組みが薄いように思われる。すなわち、これまでの多文化共生施策は外国人支援の色が強かったと言える。近年では、国際化施策として取り組みを進めてきた浜松市を皮切りに、外国人のもつ多様性をまちづくりに生かしていくという、これまでの施策から一線を画した取り組みも増えてきた。2015年現在、浜松市に続き、愛知県や長野県でもこの理念が導入されている¹³⁾。多様性を生かす近年の施策については、第2章で詳細を述べる。

第3項 多文化共生社会構築の意義

第1項と第2項では、日本における国際化の現状と施策展開について概観した。多文化共生を推進する意義は大きく4点挙げられる。

はじめに、社会の在り方を問い直し、ホスト社会の住民にとっても住みよい社会の実現が期待できる点である。志水らの調査グループは日本の学校に在籍するニューカマーに着目し、かれらの教育体験を丹念にたどることによって、学校や教育システムのもつ問題性をあぶり出すことができると述べている[志水・清水 2001 ; 児島 2006]。学校だけでなく、社会全体についても同様のことが指摘できる。多様な文化的背景を持つ人々が自らの能力や資質を開花させる社会は柔軟性と開放性に富み、外国人のみならず社会から阻害・排除されがちな日本人にとっても生きやすい社会となる[池上 2012b : 13]。まちづくりが成功するには、「よそもの」、「わかもの」、「ばかもの」の存在が必要だと一般的に言われる。地域の利害に深く関わっていないがゆえの自由な発想と大胆な切り口で活路を見いだすことができるのがこれらの共通点であるが、そうした可能性を秘めているのは、まさに外国人である[田村 2012 : 11]。つまり、少数者とされる外国人の視点を生かすことで、社会の活性化が期待できるのである。

次に、コミュニティづくりの一助を担う点である。日頃の関係づくりをしておくことで、災害等の非常事態に対応できる。さらに、多文化共生のまちづくりを進めることで、これまで地域への関わりが薄かった日本人住民の社会参加につながる¹⁴⁾。そして、新たにつながりが創出され、近年

問題となっているコミュニティの衰退への歯止めや閉鎖性の打破が期待できる。

3つ目として、国際感覚をもった人材育成につながるということである。身近な異文化と接触することによって、異文化間リテラシー¹⁵⁾を育むことが期待できる。近年、グローバル人材¹⁶⁾の育成が叫ばれるようになった。移住第2、第3世代が日本で育ち、母国と日本をつなぐ働きをする、ひいては国際社会で活躍する人材となる可能性が十分にある。そして、身近な異文化と触れ合いながら育ったホスト社会の人々も、異文化間リテラシーを育み¹⁷⁾、国際社会で活躍する存在となることが考えられる。

最後に、経済面で影響をもたらす点である。3点目のグローバル人材育成に付随して、グローバル人材が地域で育つことで、地元企業のグローバル展開にも資することが可能となる。人々のみならず、企業においても魅力あるまちとなり、ひいては地域経済の活性化にもつながる。

第3節 小括

1990年の改定入管法施行を機に外国人人口は急増した。その後は、世界的経済危機や東日本大震災等を機に減少したものの、2015年現在では微増を続けている。そして、外国人の定住志向は高まっている。その中でも、ブラジル人移住第2世代は様々な困難を抱えている場合が多い。しかしながら、そのような苦境においても、学業達成を果たし、社会で活躍する者が2010年頃から現れ始めた。そうした第2世代が多文化共生社会構築の取り組みの新たな担い手となっている例も見受けられるようになった。ブラジル人移住第2世代が活躍し、多様性を生かすまちづくりを展開している点で浜松市は全国に先駆けている。第2章では、浜松の施策展開と第2世代の状況を概観する。

第2章 浜松市の施策展開と移住第2世代の台頭

第1節では、浜松市における国際化の現状を明らかにする。第2節は国際化に伴い、どのような取り組みが浜松市で行われてきたのか概観する。はじめに、行政施策に着目し、どのようなビジョンのもとに組みが行われているのか整理する。次に、教育面での取り組みに焦点を当て、どのような取り組みが行われてきたのか明示する。第3節では、第2世代の子ども・若者の現在の状況を述べていく。

第1節 国際化する浜松市

第1節では、国際化する浜松市の状況について言及する。静岡県浜松市は人口約81万人¹⁸⁾の政令指定都市である。輸送機器・楽器・繊維産業等の工業が盛んであり、「ものづくりのまち」として知られる。また、「音楽のまちづくり」を掲げ、ユネスコ創造都市ネットワークの音楽分野での加盟が2014年に認定された。そして、市内には多言語での表記やブラジル食料品店等が散見される。

以下では、2015年5月15日更新の「浜松市教育委員会 視察資料」で公表されたデータを用いる。2015年5月15日現在の外国人登録者数20,987人のうち、国籍別に上位の在住者数に着目すると、ブラジル人が41%を占め、次いでフィリピン人(15%)、中国人(12%)、ペルー人(8%)の順となっている。1990年の改定入管法施行により、南米を中心とした日系人労働者の来日が全国で急増したことは先述の通りだが、図3からもわかるように、浜松市においてもブラジル人の増加が顕著であった。2015年現在では、日本国内で最も多くのブラジル人が暮らす都市となっており、浜松市内では外国人総人口のうち、44.9%をブラジル人が占める。しかし、2008年の世界的経済危機と2011年の東日本大震災の影響で帰国者が増加し、総数は減少傾向にある。

第2節 取り組みの展開

第1項 行政の施策

2014年12月に策定された「浜松市総合計画」では、30年後の都市の理想の姿を「浜松市未来ビジョン」に示した。「浜松市未来ビジョン」は、都市の将来像に「市民協働で築く『未来へかがやく創造都市・浜松』」を掲げ、「創造都市」、「市民協働」、「ひとづくり」を3つの柱に設定している。今日の浜松市では創造都市¹⁹⁾の文脈の中でも、多文化共生が語られるようになった。

浜松市は他自治体に比べ、早くから国際化施策に取り組んできた[池上 2001:52]。栗原勝市長²⁰⁾在職時においては、1992年度に「国際交流のまち推進基本計画」を策定した。そして、1994年には自治省で設置された「世界に開かれたまち」大臣表彰の初の受賞団体となった。しかし、この時点での国際化施策は原則の順守に終始する部分が多々あり、国際化に関わる問題を役所の外に向けて問いかけたり、本来に求められていることに柔軟に対応したりする志向性に欠けていた[池上 2001:53]。

北脇保之市長²⁰在職時には、2001年に「浜松市世界都市化ビジョン」を策定し、「共生」、「交流・協力」、「連携」、「発信」を推進する取り組みを実施した。「地域共生²²」の理念のもと、新たな取り組みとして、地域共生会議や外国人学習サポート事業、外国人学校への支援、外国人集住都市会議の呼びかけ、カナルハママツ²³の開設、浜松市立高校インターナショナルクラスの設置がなされた。

現職である鈴木康友市長²⁴の就任後は、2007年度に「浜松市世界都市化ビジョン」を改訂し、「共生」、「交流・協力」、「発信」の3本柱を打ち立て、施策整備を目指した。また、2012年度に「浜松市多文化共生都市ビジョン」を策定した。欧州で進められている都市政策である、インターカルチュラル・シティ政策の知見を参照し、外国人住民の持つ文化の多様性を都市に生かしていく理念を掲げた。「浜松市多文化共生都市ビジョン」では、施策体系を「協働」、「創造」、「安心」に整理し、「未来を担う子どもの教育」、「安全・安心な暮らしのための防災」、「多様性を生かしたまちづくり」が重点施策として位置付けられている。ホスト社会の住民と外国人住民がともに地域をつくりあげていく「協働」や、国籍を問わず、誰もが自らの持つ能力を発揮でき、多様な文化を織り込んで新たな価値を創出する「創造」がこれまでのプラン以上に強く押し出されている。「多文化共生2.0」[山脇 2013c : 183]と表現されるように、これまでの多文化共生施策とは一線を画している。

第2項 教育に関する取り組み

1998年より外国人学習サポートに関する事業を市長部局の国際課から教育委員会へ移管された。外国語に堪能な職員や指導経験豊富な職員が帰国・外国人児童生徒相談員として配置され、就学相談や学校訪問等を行ってきた。また、就学支援員や就学サポーターが外国人児童生徒の多い学校に派遣され、日本語や教科指導援助、通訳・翻訳に対応している。

NPOへ委託して実施している取り組みもある。2006年度段階では外国人子ども教育支援協議会への委託事業として行われている事業として、市の教育委員会が行ってきた「ことばの教室」が挙げられる。ことばの教室では日本語学習を中心に各教科の学習や適応指導が行われた。市内2ヶ所の小学校で小中学生を対象に行われており、参加を希望すれば午後の授業として「ことばの教室」に通うことに

なっていた。さらに、不就学防止を目的としたカナリーニョ教室が外国人子ども教育支援協議会への委託事業として2002年度から2006年度まで実施された。カナリーニョ教室終了後の該当枠では、「はまっこ」、「まつっこ」教室が開催されるようになった。2010年度は市内の小中学校等の9会場で日本語教室「はまっこ」、母語・母国の文化に触れるための教室「まつっこ」をポルトガル語・スペイン語・ベトナム語で3会場での開催だった。2013年度は「はまっこ」8会場9教室、「まつっこ」4会場4教室であった。

2007年度からインターナショナルクラスが浜松市立高校に設置された。定員は20名であり、インターナショナルクラスの特徴としてポルトガル語での入試と授業の実施が挙げられる。選択科目に海外の大学進学を見据えた科目群や当クラスの特色を出す科目群を設置している。必修科目では外国人講師の通訳が入る。2年次以降は一般クラスに合流する。浜松市立高等学校が公開している「平成28年度インターナショナルクラス選抜実施要領」には、設置目的として、将来、母国と日本の架け橋となり、世界都市・浜松の発展に寄与する人材を育成するという旨が掲げられている。

外国人学校への支援としては、各種学校認可を取得した2校に補助金を交付しており、さらには外国人学校に通う就学年齢の子どもが購入する教科書代の3分の1を助成している。加えて、日本語教師の派遣も行っている。

また、外国人青少年の不就学対策や学び直しとして「プロジェクト・ジュントス」が2009年度から2011年度にかけて実施された。HICEが市から委託された事業であり、教室の運営は4団体が行った。プロジェクト・ジュントスの枠内で、①南米系の子どもたちの仲間づくり教室、②フィリピンの子どもたちのための学習支援教室、③ベトナムの子どもたちのための学習支援教室、④義務教育年齢を超過した青年たちのための学び直し教室が開催された。そして、2011年度から3年間、「不就学ゼロ作戦」を実施した。これは、外国人登録と照合させながら、外国人の子どもの就学状況を調査し、不就学の背景を把握したうえで、心理カウンセラー等による個別支援等の体制を整え、不就学を解消するものである。

第3節 外国人の子どもの状況と移住第2世代の新たな動き

第1項 浜松における外国人の子どもの状況

浜松市の公立小中学校に在籍する子どもたちの状況に焦点を当てる。本項では、2015年5月15日更新の「浜松市教育委員会 視察資料」のデータを参照する。1989年から2008年にかけて外国人の子どもの人数は増加が続いたが、世界的経済危機の翌年の2009年以降、減少傾向にあったが、2015年は1,435人(うち、小学生970人、中学生465人)となり、再び増加に転じた。その内訳をみると、ブラジル(53%)、フィリピン(13%)、ペルー(12%)と続いており、ブラジルとペルーの南米系の子どもたちが全体の6割を占める。全体としては、減少傾向にあるが、一方でフィリピン人の子どもたちは増加傾向にある。なお、2014年4月に小学校1年に入学した外国人168人中116人が日本生まれ日本育ちの外国人の子どもであり、69%が日本生まれの日本育ちである。ブラジル人の子どもにおいても、757人中497人が日本生まれであり、約65%を占める。

浜松市の特徴として、齋藤他は2点述べている[齋藤・池上・近田 2015:17]。すなわち、外国人の児童生徒が全児童生徒数の1割から2割を占める小中学校もある一方で、少人数在籍校が市内広域に点在していること、そして、日本生まれ日本育ちの子どもが増えていることである。

外国人生徒の高校進学は年度によって差はあるものの、着実に増加している。図4を参照すると、ここ数年は高校への進学率が80%を超えていることがわかる。しかしながら、2014年度の進学者の内訳から、「入試に学力検査のない定時制へ進学する割合が3割以上を占め、依然として高い」ことが指摘され、さらに全体の98%以上という高校進学率とは開きもあり、進学者が増加している一方で、学力の格差があることが伺える。

第2項 ニューカマー移住第2世代の若者による新たな動き

移住第2世代には地域社会への貢献の意識が芽生え始めている者もいる[津村 2013]。これまでは「支援の対象」であったニューカマーの移住第2世代の若者が主体となり、地域活動の担い手として、地域社会に参画し始めている。例えば、防災学習会の場で通訳を行ったり、日本人住民とブラジル人住民をつないだりしたことが報告されている[池上 2014b:11]。支援者となっている第2世代は2015年現在、各地で見られるようになったが、後続の子ども・若者

のために自らの声を社会に発信していることに浜松の特徴がある。発信の主な足場にはHICE、N-Pocket、そしてSUACがあり、複数の団体の取り組みに参画している者も見られる。詳しくは第4章で述べる。

第4節 小括

全国の自治体の先導的存在として、浜松市は早くから国際化施策に取り組んできた。改定入管法施行から25年、浜松における多文化共生の地域づくりの担い手として、ニューカマーの移住第2世代、とりわけ、ブラジル人第2世代の台頭が見られる。浜松では外国人人口の中でブラジル人が最も多いこと、そして、ブラジル人第2世代の発信活動については管見の限り、研究の蓄積は事例の紹介に留まっており、発信がなぜ実現しているのか明らかにしたものも存在しない。したがって、ブラジル人移住第2世代による発信の規定要因を探ることを目的とし、第3章では、浜松を足場に発信活動を行うブラジル人第2世代の語りを分析する。

第3章 発信する移住第2世代の語り

本章では、発信するブラジル人移住第2世代を対象にした調査結果について検討する。彼らの語りを紹介し、どのような資源獲得がなされているのか分析する。第1節では、調査対象者と調査方法について述べる。第2節は語りに対する分析枠組みを整理する。第3節では、第2節で設定した分析枠組みを援用し、ブラジル人移住第2世代の語りを個別に検討する。

第1節 調査対象者と調査方法

第1項 調査対象者

浜松で発信するブラジル人移住第2世代の若者を対象とし、4人に調査を依頼して承諾を得た。調査協力者は浜松を立脚点として、各地で発信を行う存在になりつつあり、全国でもイニシアティブを取っている。調査協力者のプロフィールは以下と表3を参照されたい。

Aさん

7歳で来日。浜松市に隣接する湖西市の公立学校に小中高と通学する。高校の担任教員の勧めで英語を学ぶことができる愛知県名古屋市に位置する大学に進学。大学休学時に浜松市の就学サポーターとして働き、外国人の子どもの置

かれている状況を知る。以後、外国人の子どもの教育に関する活動を中心に浜松、名古屋を拠点として展開。現在は浜松市の外国人児童生徒就学支援員を務める傍ら、関西のシンポジウム等でもパネリストを務めている。

Bさん

10歳で来日。小学校6年生から浜松の公立学校に通学し、高校はインターナショナルクラスのある進学校に通う。ロールモデル²⁵⁾と呼ぶことのできるブラジル人の先輩との出会いにより、大学進学を考え、浜松に位置する大学に進学を果たした。大学のプロジェクトに加え、HICEやN-Pocket等でも活動に従事。学習支援や、外国にルーツを持つ同世代の仲間とともに若者向けのイベント企画、自分の経験と今後を語る企画、お芝居やブラジルの祭りを介した交流促進企画等、多岐にわたって活動を展開している。浜松に加え、磐田や滋賀県、横浜市で開催されたフォーラムにおいても発信を行う。

Cさん

1歳で来日し、小学校4年時にブラジルに戻る。2年後に再び来日し、浜松のブラジル人学校に通い、ブラジルの義務教育課程を修了。その後、浜松の公立中学校への編入を志願するも学校側が受け入れを渋ったために難航。Bと同様にインターナショナルクラスのある高校に進学し、浜松に立地する大学に進学を果たす。日本人の持つブラジル人に対するイメージを変えたいという思いと、子どもたちの手本でありたいという思いを持って、学習支援プロジェクトや交流支援プロジェクト、自分の経験と今後を語る企画、外国にルーツを持つ同世代の仲間とともに若者向けのイベント企画を行い、さらにはシンポジウムのパネリストとして活動。浜松と磐田を中心に、静岡市や横浜のフォーラムでも発信活動を展開。

Dさん

日本生まれ。浜松に隣接する磐田市で育つ。親の離婚に伴い、小学校3年生から2年間ブラジルで過ごし、磐田に戻る。「ブラジル人だからできない」という周囲の視線が嫌で、常に先を見据えながら、負けたくないという気持ちで奮闘。通っていた学習支援教室にBとCが教えに来ており、以来Bをロールモデルとするようになる。浜松にある大学への進学後は、学内の調査プロジェクトや本人が通っていた学習支援、学外の地域団体では、就学前クラス支援事業や子どものエンパワーメント²⁶⁾企画等に従事。関連する静岡県

の委員会にも公募にて参加。磐田のフォーラムでのパネリストも務める。最近では豊橋市のブラジル人中学生と保護者、市役所職員の前で自分の経験を語った。

第2項 調査方法

4人の発信に至る過程、発信後の変化を明らかにするために、ライフストーリー研究を採用した。ライフストーリー研究とは、調査する一人ひとりがインタビューを通してライフストーリーの構築に参加し、語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することである[桜井・小林 2005: 7]。つまり、語った内容だけでなく、語られた状況や文脈も大切なのである。A、B、C、Dのそれぞれに日本語での半構造化インタビューをひとりずつ実施した。調査協力者の発言に応じて質問の順番を入れ替えたり、質問内容を増やしたりしたインタビューとなっている。インタビューは各々複数回実施しており、ひとりあたり合計約2時間の聞き取りとなっている。インタビューには以下のAは喫茶店、B、C、Dは調査協力者の在籍する大学を利用した。なお、インタビューは本人の了承を得て、ICレコーダーで録音し、逐語による文字起こしを行った。話の内容ごとにコードを付け、それをもとに、クロノロジー(時間的配列)による編集[桜井・小林 2005: 224]を行い、ライフストーリーを構成する。BとCについては、さらに自分の経験や決意、後続の子どもたちへのメッセージを語るトークイベントでの語りを補足的に分析対象および、インタビュー調査の際の参考資料としている。なお、インタビューでの会話については、巻末のインタビュー資料に全録している。語りの内容の詳細は、そちらを参照されたい。

4人の若者の語りは、「半構造化インタビュー」(A、B、C、D)、「講演記録²⁷⁾」(B、C)と語られた状況に違いが見られる。しかし、共通しているのは「ブラジル人移住第2世代の発信活動」に関心のある人間(筆者)を聞き手に彼らが発信活動に至るまでの自分、その後の自分を語っている点である。主な調査内容は、「ライフ・ステージ²⁸⁾ごとの経験と自分」、「活動と自分」、「自分のルーツの捉え方」についてである。

第2節 分析枠組み

一社会のマイノリティの成員においては、家族は生存と基本的な適応を可能にするものという見地から論じられて

きた[宮島 1999 : 117]。下層やマイノリティの成員のなかにも、家族を抑圧と感じ、そこからの離脱を願う者がいることは事実であり、その面も視野に入れる必要があるとしつつも、宮島は次のように述べる。「人は集団的存在として生活のノウハウの知を伝達され、アイデンティティの補強を受け、社会生活に参加していくわけであるが、このような集団として家族は、個人としての適応に困難を感じている者にとっては、リアリティをもつ」[宮島 1999 : 117]。

イギリスの人類学者サンドラ・ウォルマン[1984=1996 福井訳 : 48-49]は家族を一つの資源システムとして捉え、家族がある場所ですまくやっつけられるかどうかは家族のもちうる「資源」をどのように活用するかによって決まると述べている。併せてウォルマンは「資源」を構造的資源(土地・労働力・資本)と編成的資源(時間・情報・アイデンティティ)とに大きく2分している。ウォルマンは編成的資源について以下のように述べる。

土地、労働力、そして資本は物質的であるばかりでなく構造的な資源(ストラクチャル・リソース)である。それらのいかにでその時期やその場所に役に立つ行為の枠がきまり、生活のハード面にあたる客観的構造が作られる。それに反して、時間、情報、そしてアイデンティティの資源は、生活のソフト面にあたる編成とずっとかかわっている。客観的な構造の枠内でことを決定し、「可能な状態」の限界にのぞむのがこれらの資源である。したがって、環境の制約とうまく折りあうこと、つまり、人がチャンスに出逢ったり、問題解決にあたり、役に立ちうる機会をうまく利用するといったことは、これらの編成的資源(オーガナイズ・リソース)で説明できるのである[ウォルマン 1984 =1996 福井訳 : 48-49]。

ウォルマン[1984=1996 福井訳]は、ロンドンのバタシー地区に住む移民8家族に着目している。皆平等にある1日の内の「時間」をどのように使うのか、家庭ごとに描き出している。また、「情報」という資源の価値は、ある面で極めて大きく、人は「情報」を掌握することによって生活を

コントロールしているとし、ネットワークを駆使しながら仕事や福祉サービス等についての「情報」を手に入れる様相を明らかにしている。そして、「アイデンティティ」の対象は、民族の出自、(職業や雇用といった狭義の)仕事、および地域共同体という3点にしばられるとする。

清水[2006]は学校と家庭以外の第3の場でのニューカマーの子どもたち自身による日常的支援の組織化のもとで蓄えられた資源に対してウォルマンの編成的資源の枠組みによる考察を行っている。ウォルマンが捉えようとした「資源」そのものというよりは、清水は「資源化」までを視野に入れた分析を行っている。「資源化」という概念については「エスニシティへの肯定感」というアイデンティティに関わる資源を例に挙げた説明がされている。ニューカマーの子どもたちの日常世界において負のレッテルを貼られている「異質性」の象徴としての「エスニシティなるもの」が異なるコンテキストのもとで読みかえられることによって「資源」となるのであり、そうした解釈の変更を捉えるためには、「資源化」という概念が有効である[清水 2006 : 187]。清水[2006]は「時間(エスニック的背景を伴う過去・具体的な将来像を伴う未来)」、「情報(在日外国人モデル)」、「アイデンティティ(エスニシティへの肯定感)」の資源を獲得していること、さらに「時間」が「情報」および「アイデンティティ」に影響を与えていることを明らかにしている。

本研究においても、清水[2006]と同様に「資源化」まで見据えながら、家族とともに移住し、日本で暮らす浜松の移住第2世代の若者が資源を獲得・活用し、発信機会を獲得していく様相をウォルマンの編成的資源の枠組みを利用して分析する。ただし、「時間」については、時間をどのように使っているのかという点に加え、清水[2006]と同様に時間をどのように捉えているのかという点も検討する。さらに、「情報」はどのような「情報」をいかに得ているのかを探る。「アイデンティティ」については、エスニシティに関する帰属意識として捉える。

第3節 移住第2世代4人の語り

第1項 情報

(1) A の場合

獲得されている「情報」として、ブラジル人に対する日本人の眼差し、進学、外国人の子どもが置かれる状況、自

らの経験の役立て方、多文化共生に資する活動の情報に分類した。

高校受験時には、受験についての「情報」が乏しく、苦労を強いられた。高校進学後、2年生から特進クラスに在籍したAは担任教員から将来の進路についてアドバイスを受ける。アドバイスを受け、大学進学を考えるようになった。また、進学に関する情報を担任教員や友人から得ている。

「(前略)その先生説得力があって、わたしがポルトガル語と日本語できるから、もし、で英語が好きだったから、英語やれば、なんか将来ステータスだよ、みたいなことを散々、なんか言われて、それで、ああ、じゃあやってもいいかなみたいな。で、それで大学考えるようになった」²⁹⁾。【インタビュー資料：44】

「全然自分、大学、日本の大学がどういうものか、どういう学部があってどういう学部があってっていうのを全く知識がない、状態だし、親に聞いてももちろんわからないから、情報がない、じゃんね。だから友だちから言われたこととか、先生が言うことを聞いたりとか(後略)」【インタビュー資料：44】

大学進学後は「別になあなあと、楽しかったけど、全然。でも別に一生懸命にかやりたいということもな」かったと言うAであるが、大学2年を終えて、学費の支払いが出来なくなった。そして、大学を2年間休学し、学費の工面のために働くことになる。休学1年目はポルトガル語のブラッシュアップのために浜松市の就学サポーターとして学校で、2年目は工場労働の実態を把握するために工場で働いた。Aにとって、就学サポーターの仕事が外国人の子どもたちに関わる初めての仕事だった。就学サポーターの仕事をする中で、外国人の子どもの置かれている状況を知る。そして、子どもたちと接する中で自らの経験が生かされることがわかった。

「外国人の子どもたちと関わって、勉強、日本語を教えたりとか、彼らの悩みを聞いたりとか、親の通訳をしたりとか翻訳したりする中で、わたしの経験を話すと彼らは、ね、似たような経験を持ってたりだとか、似たような気持ち持っていたりとかして、将来A先生みたいになりたいとかいう子が出てきて、ああ、こうやって生かされるんだあって思い始めてから、そういう活動に興味が出てきて、そこからHICEの活動とかも、なんかその講座を受けたりとか、名古屋の方のね、国際センターで講座受けたりとか、もっと勉強しようってなって、外国人の子どもたちの教育の現状とか支援の仕方とかを勉強し始めたって感じ」。【インタビュー資料：46-47】

外国人の子どもに関する講座を受講するようになり、講座を担当する財団職員から声をかけられ、自分の生い立ちや経験を語るようになった。その際に初めて、家族や自分の歴史について聞く機会を持った。

「(家族や自分の歴史は)たぶんそういうHICEか何かの発表のときに自分の生い立ちを発表するときに聞いた」。【インタビュー資料：48】

「そういうの(自分の経験を話す機会)があって、そういう(自分の経験を語る)活動を始めてからちゃんと聞いた。お父さんになんでブラジル行ったかとか。おじいちゃんおばあちゃんなんでブラジル行ったかとかっていうのは詳しくはそういう活動し始めてから初めて聞いた」。【インタビュー資料：58】

(2) Bの場合

進学、外国人の子どもを取り巻く状況、多文化共生に資する活動、自分の生かし方についての「情報」を獲得している。

中学1年次には、中学卒業後、ブラジル人学校への進学を考えていた。当時の担任教員からインターナショナルクラスのある高校を勧められる。その時に初めて自分が日本の高校に進学可能だと知る。紹介してもらった高校を調べ、志望校とした。

「先生に言われて、ああ私高校行けるんだってわかったんですよね。成績はまだまだ足りなくて、でも頑張れば行けそうな、手は届きそうな、入試システムも3教科で済んだんですよ、あたしが苦手な社会がいらなかったから、だったら国語頑張ろうかなって」。【インタビュー資料：74】

志望高校に合格したBは高校1年生の1年間をインターナショナルクラスで過ごした。その際には、自分がこれまで悩んできたことが皆も悩んでいることだと知る。さらに、様々な背景を持つ人々の存在に気付く。

「そういう外国にルーツを持つ子たちだけで集まったクラスは初めてだったので、面白かったですね、なんか。同じ悩みだったんですよ、みんな。例えば、国語のことわざが出てきたときに、これ意味わかんないしって言うともみんなも、ああそうだよ意味わかんないよね、逆に先生が困る」。【インタビュー資料：75】

インターナショナルクラスの担任教員の姿勢を見て、外

国人の子どものために自分も何かできることがあるのではないかと思い始めた。

「(高1の時の担任教員が)自分で希望を出して、(外国人生徒の多い定時制高校に)異動されて、それを見て、だったらあたしたちにもできることあるでしょって思って(後略) [インタビュー資料: 77]

高校や大学に進学する方がよい仕事に就くことができるのにと、進学せずに働く周りの友人たちのことをこれまで理解できなかったが、外国人の子どもの置かれる状況を知り、進学しない子どもの状況に関心が向くようになり、考え方が変化した。

「(大学生になってから)授業とか、いろいろ自分で勉強して。(それまでは、進学する)自分が当たり前だと思っていたんですよ。だからこう進学できない子たちはたぶん働きたいだけだと思ってたんですけど、そうじゃなくて、もっとなんか要因があるんじゃないかって思って」。[インタビュー資料: 84]。

(3) C の場合

再来日後、浜松にあるブラジル人学校にてブラジルの義務教育課程を修了し、その後、日本の公立中学校2年に編入を希望したが、当時その中学校に在籍していたブラジル人の素行からブラジル人はイメージが悪かった。そのため、学校側が受け入れを渋ったために難航し、なかなか編入が進まなかった。そうした出来事を発端に、ブラジル人のイメージを変えたいという強い思いを持つようになる。

「(日本の中学校に)編入するときもなかなか編入させてくれなかったっていうのもあって、あの、日本の中学校に行った時になんか、結構ブラジル人、ブラジル人のイメージがよくなくて、すごい騒ぎとかを起こす代のブラジル人が多くて、その当時、で、なかなか受け入れてもらえずみたいな感じで」。[インタビュー資料: 110]

「その時にブラジル人のイメージを変えたいってすごく思ったんですね。その時にもう絶対いい成績取ってやるとか、もう日本語ペラペラになってやるとか、すごい思ったんですね。もう、お手本になってやろうって思って、もうそこからずっとブラジル人のイメージを変えたいっていう思いがすごくあって、もうブラジル人だからこう、っていうのはもう言わせたくなくて」。[インタビュー資料: 118]

ブラジル人のイメージを変えたいという思いと社会に恩

返しをしたいという思いを持って現在では活動している。最初に自分の経験を語ったのは、高校生の時である。Cの思いに担任教員が応える形で、外国人の中学生を対象に、Bとともに場を設けてもらった。

「g(高校)に入れたっていうことがすごい助けられたんですね私は。すごく未来が切り開けたというか。それがなければ、工場行きだったかもしれないっていうその感謝する気持ちがあった。恩返しをしたいって、思うんですね。この地域だったり、日本という社会だったり、その恩返しの気持ちで何か私にできることがないかという思いで、そういう活動に参加してますね」。[インタビュー資料: 116]

「(C自身が)やりたいってずっと言っていて、何か自分にできないことはないか(→自分にできることはないか)っていうこと言っていて、(インターナショナルクラスの担任の)先生がそれを用意してくれた」。[インタビュー資料: 116]

大学進学後は、さらに活動の幅が広がりを見せていく。大学の講義で行われる学生の活動紹介を聞いて、学内の取り組みに参加するようになった。

「あの文化人類学で、あの、あるじゃないですか。毎回(活動の)紹介みたいな感じで。それですごく興味を持って、で、先輩からも勧められて、やりたいって思ったんです」。[インタビュー資料: 117]

学外での活動をするようになったきっかけは、浜松学院大学でのフォーラムに参加した際にHICEの職員である松岡真理恵氏と出会ったことである。その際に、HICEの企画である、「はままつグローバルフェア」で企画をやってみないかと誘われ、本稿第4章で後述する「外国にルーツを持つ若者のトークイベント×音楽ライブ 可能性へ向けてのRESTART(以下、RESTARTと表記する)」を企画し、当日は自分の経験や決意、後続の子どもたちへのメッセージを語った。

「中川(正春)大臣が浜松学院大学でしゃべりに行った時に、HICEの松岡さんと出会ったんですね。その時に松岡さんからちょっと声がかかって、で、グローバルフェアで何かやらないか、がそこが始まりですね」。[インタビュー資料: 119]

そして、発信を行ったことによって、自分の影響力の大きさを実感した。ロールモデルと言われ、認めてもらえることを嬉しく感じるとともに、活動のモチベーションとな

っている。

「こんなにも影響力があるとは知らなかったっていう、自分自身が。小さいことやっているなって思っていたんですけど、ま、結構総合的に見ると、いろんなところにこう、発信できたりとか、影響力があるのかなあって、最近思いますね。最近よくあの、ロールモデルとか言われたり、先生から、すごく嬉しいんですけど、うん。それが自分のモチベーションを上げる、何て言うんだろう、自分のモチベーションも上がる。で、さらに他の人のモチベーションも上がれば最高だなと」。[インタビュー資料：117]

大学の講義等で関心を持つようになってから、自分の生い立ちや家族の歴史を両親に聞く機会を持った。中学生や高校生の時には、家族の移住の歴史等については、あまり関心がなかったという。

調査者：それまでは自分がブラジルと日本を移動しているとか、家族のバックグラウンドとか、移民の背景を知る機会があった？

対象者：うーん。

調査者：例えばお父さんが話してくれたとか

対象者：ありますあります。

調査者：それはCさんが自発的に聞いてみたのか、お父さんやお母さんが話してくれたのか？

対象者：聞きに行きましたね。うん。

調査者：それはRESTARTの時？それとも中学生とか高校生の時？

対象者：(中学生や高校生の時は)あまり関心がなかったかもしれないですね、その時は。大学に入って、そういうことに興味関心を持ち始めてから、ああだこうだ聞いたり、なんでこうなったのとか。

調査者：それはRESTART以前に大学の多文化関係の授業がある中で興味が出てきて聞いた？

対象者：うん。

調査者：聞いてどういう感想をもった？

対象者：すべて正しい道を歩んできたなって思いますね。

調査者：正しい道、

対象者：うん、一步も間違えてないなってすごく思います。

両親の決断が一步も間違えてないなって。

[インタビュー資料：120-121]

(4) D の場合

自身が中学生の時より母親同士の会話から、外国人の子どもが置かれている状況を耳にすることがあった。

「(D が中学生の時に)『全然馴染めない、日本語もそんなにうまくない、どうしようね、帰りたいけども帰ったら帰ったで、あんまうまくポルトガル語を使って馴染める気がしない』って。悩んでるんだなあっていうのもあるし、何だろうなあ、

ちょっと同じような子も一人、家の近くにいたんですけど、いて、その子は部活、野球すごい頑張ってる高校も推薦、野球の推薦で行った感じだったんですけども、苦労はしているんだなあとは、やっぱり小耳にはさんだりしてましたね。[インタビュー資料：150]

現在在籍する大学のパンフレットを見た時に「多文化共生」が目にとまり、これまでは英語を学びたいと考えていたが、情報を得たことによって、大学で学びたいことに変化が見られた。

「(D が高校生の時に学習支援の場で出会って以来、ロールモデルとする B が在籍していた)大学のパンフレットとかいろいろ見て、ああでも英語を勉強するだけじゃなくて、多文化共生って、何でしょうね、そういうものに従事したものをやりたくなってきたなって。そういうのもあるんだって知って、やっぱり変わってきたのかな、きっと」。[インタビュー資料：152]

そして、大学進学が決定してから、自身が学習者として参加していた学習支援の場で今度は自分が支援する側になった。自身の経験から、外国人の子どもを応援したいという思いをもっており、活動への意欲が生まれた。

「なんか、どっかで腐っちゃったりせずに、たぶん何かで悩んだりしているだろうからやっぱ、頑張ってもらいたいっていうのもあって、たぶんそこからかな、こういう活動したいなってちらって頭に浮かんだ気がしましたね。[インタビュー資料：149]

さらに、自らのルーツを重んじており、家族のブラジル移住の経緯等を詳しく知る機会を過去に持っている。

調査者：自分を含め、家族の歴史、ブラジルに渡った歴史、おじいちゃんおばあちゃんがとか。そもそも、どういう感じでブラジルに渡って、自分は日本で生まれてるわけだから日本に戻ってってこう歴史というか、知る機会があった？

対象者：なんか、もう崇拜ってわけじゃないですけども、なんかすごい、自分たちのルーツここから始まったってすごく重んじているというか大切にしているっていうのもあったんで、ブラジル行ったときもね、あの、君のひいじいちゃんひいばあちゃんね、って話はされたりしましたね。

[インタビュー資料：157]

第2項 時間

(1) A の場合

大学休学前は何となく大学の講義を受けていたと言う A は、復学後には以下の語りに見られるように、目標が明確化し、自らの将来への見通しを立てることができ、主体的な行動になっている。将来の見通しという「時間」の資源を獲得したと言える。

「休学してその子どもたちの支援に関わって、そこがあたしのなんていう、目標ていうか、もうメインがそこになったから、全てあたしのやることは全部そのため、みたいになった。だからそのね、休学1年目も学校で働いて勉強したり、工場行きながらもその講座とかいろいろな活動とかをしてたし、工場実態もね、結局自分の体験経験のためも含め、お金のためでもあったけど、もちろん。でもそれもあり、復学したら、1,2年(生)は適当に大学行っていただけ、復学したらやっぱり、その教育？一番彼らに関われるのはやっぱり学校の現場かなあってとりあえず思ったから、教育の授業とか取り始めて、せっかくな、自分でお金を稼いで行ってる大学だから英語もちゃんと身につけなきゃって思って結構必死で。今度はちゃんとね、目標を立てて、授業もちゃんと出て、勉強してたって感じ。(中略)結局はやること全ては、ね、彼ら子どもたちのことを考えてって感じになった」。【インタビュー資料：47】

(2) B の場合

両親の姿や、母親の話から、将来の見通しをつけることができていることが以下の語りから読み取れる。

「(両親から)普通に、なんか勉強しなさいと言われてたことがなくて、うん、やりたいことをやりな、ただ自分でやることはちゃんと自分で責任を持つていう。学校行きたくないんだったらどうするの？っていうのがずっとお母さんが言ったのがひとつと、お母さんお父さん工場だったんですねその時期。で、それを、しかも派遣だったので、それをずっと見てきて、お母さんは『絶対工場で働くな』って言ってくれたんですね。そうならないために、じゃあどうすればいいだろう、高校出なければいけない大学も出なきゃいけないっていう話が中2の後半ぐらいから出てきて、余計高校行かなければいけないというのがわかりました」。【インタビュー資料：80】

担任教員からインターナショナルクラスのある高校を紹介され、志望校として以来、勉強に対する姿勢が変わった。自分の現状と合格に求められるレベルの差を自覚し、何をすべきか明確化させている。

「(学校を知る前、知った後では勉強に対する意欲は)変わりますね。それを聞いて国語頑張らないとまずいし、なんか内申点、元々レベルの高い高校だったので、内申点はないとまず

いって言われて必死で全部上げて」。【インタビュー資料：74】

インターナショナルクラスの担任教員の姿勢を見て、同じ境遇の子どもたちのために自分にできることを考えだした。そして、ロールモデルとしていたブラジル人移住第2世代の先輩が大学進学を果たした話を聞いて、後続の子どもたちのためにできることとして、自分も大学進学を目指した。

「(高校1年生の時の担任教員が)自分で希望を出して、(外国人生徒の多い定時制高校に)異動されて、それを見て、だったらあたしたちにもできることあるでしょって思って、で、ちょうど上に先輩、あの、(ブラジル人移住第2世代の)Tさんなんですけど、(中略)先輩がここ(Bが現在在籍する大学)に入ったんですよ。なんで、あ、じゃあ先輩と同じようにあたしも大学行ったら、下で見てる子たちもきっと大学行きたいんじゃないかって思ってとりあえず大学」。【インタビュー資料：77】

(3) C の場合

教育に対して熱心であった両親から大学に進学するように言われていた。さらに、両親の努力する姿勢を見ながら、自身も勉強に励んだ。

「絶対大学は出てほしかったんですね両親は。どちらも大学出て、大学は絶対出なさいってずっと。教育熱心な両親で、まあ2人とも日本語もすごい頑張っていて、日本語能力試験を家族で受けに行ったりとか、3人で受けに行ったりしたり。なので、その(両親の)頑張っている姿を見ているので、あたしもじゃあ頑張らなきゃっていう。お互いこう、刺激し合えるという。(両親は自分に対して)働けといったことは一切ないです」。【インタビュー資料：117】

大学1年生の時に HICE で携わった RESTART で発信したことで、さらなる発信の機会を獲得している。RESTART での発信が自分の活動の「原点」としており、そこから活動のエリアが広がった。また、発信にあたって、これまでの自身を振り返っている。

「結構(RESTART が)きっかけになった部分が多くって、池上先生もすごく取り上げてくれることも多くって、そのおかげで、どんどんいろんな、ま、講演会だったり、中学校に講演会に行けたりだとか、うーん、そういうきっかけを与えてくれたのがやっぱりグローバルフェアの RESTART だったかなって思いますね。動画もアップロードされてますし、すぐアクセスしやすいっていうのもあって。(中略)原点と言えるかもしれないですね。で、あれほど、自分を振り返ってってというのは初めてだったので」。【インタビュー資料：120】

(4) D の場合

母親の言動を見て、先を見据える姿勢を学んだ。目の前にあることをしっかりこなすことで将来がつながるということも幼少の頃から言われていた。

「(母親が)やっぱすごい働いて、それでも生活がきつい親の姿を見て、うん、ここで頑張らなかつたらちょっとなんか痛い目を見るじゃないですけどなんか、うん。自分の思うような生活はできていけないのかなってのがあって。これに負けたら社会に負ける。ダメだって。(中略)先を見るっていうのがあって。それは親にもなんか、小っちゃい頃なんですけど、『ここでこういうのがしっかりできないと将来何もできないよ』みたいなものは(言われていた)」。[インタビュー資料：165]

将来については、母親の取り組みを常々見ていたことから、中学生の時点で自分の将来像を見出すことができていた。また、高校生になってからは、当時通っていた学習支援の場に大学生ボランティアとして参加していた B と出会い、具体的な道筋を見出し、以来 B をロールモデルとするようになる。

「日本語もポルトガル語もどっちも使えるから、なんか有効活用と言いますか、薄々思っていて、そこからまあ、漠然とした感じで言語どっちも使える仕事ができればいいなっていう。(中略)たぶん親の姿を見てだと思うんですけども。いわしんバモス³⁰⁾のやつもそうですし、そこら辺で日本語を教えたってのもありますし、あの一、幼稚園で通訳の仕事って言えばいいですかね、もやっつて、かっこいいなっていうのもありましたし、そこを見て自分もなんか需要があるならば、供給したいなっていうイメージはそこから生まれたかなと思いますね」。[インタビュー資料：147]

「(高校時代に学習支援に来ていた B と接して)憧れっていうのと、なんか、なんか道筋、ロールモデルになったのかな、どうなのかな。やっぱ見えて、ハッて、いいかもしれないって」。[インタビュー資料：151]

第3項 アイデンティティ

(1) A の場合

最後に「アイデンティティ」について検討する。活動を始める前の A はブラジル人として見られない悩みがあり、「ブラジル人ぽくなりた」かったと語っている。自身はブラジル人だと認識しているけれども、周りの人々にはブラジル人だと見られず、葛藤していた。その当時の悩みを以下のように述べている。

「あたし結構皆あたしブラジル人って言うてもなんか、みえないとか言われたりとかして、特に高校のときは。だからなんで、何が違うんだろうとかずっと思っていて、何がなんか雰囲気とかでもね、なんか外国人でわかるけど、ブラジル人には見えないって言われて、何かええ、何が違うのかなあって。もっとブラジル人ぽくなりたいなあって思う、思っているいろいろ悩んでた時期はあった。(中略)日本人からしたら外国人だし、ブラジル人で思われるかもしれんけど、ブラジル人から結構、ブラジル人でパッと見てすぐブラジル人やなってどんなに日本人の顔でも、日系の人でもあたしより日本人ぽい顔してるのになんであの人にはブラジル人ってわかって、あたしはわからないんだってずっと思っていて、雰囲気？なんで、なんなん？みたいな感じでなんか、嫌やなって感じ」。[インタビュー資料：49]

学費の支払いが難しくなり、大学休学後に外国人の子どもに関する活動をするようになり、行動範囲が広がることで様々な人々との出会いがあった。その中でアイデンティティの面でも変化があった。先に挙げた「ブラジル人ぽくなりた」という思いに変化が見られるようになったという。自分自身をしっかり確立することができた様子が伺える。

「活動、休学してそういう活動するようになって目標ができて、子どもたちとか話をしたりとかいろいろ活動する中で、もちろんそれだけじゃないと思うんだけどね、でも大学戻っているんな人と出会って、留学もして、てしてる、で、でも活動の中で同じ、ね、境遇の人たちとか、同じ悩みを持った人たちとかいろいろ話している中で、今比べて今の気持ち、今あたしの気持ち、思うと全然そういうの(ブラジル人に見られない悩みを)もう気にしなくなった。もうどう見られてもどうでもいいっていう。ちゃんと自分を持てるようになったって感じ。AはAだしみたいな。ブラジル人とか日本人とかっていう枠にはめられたくない自分。だから何人ってね、自分何人だと思いませんか？ってこう質問みんなにされるけど、その別に地球人みたいな。うん、聞いてどうすんの？みたいな感じ<笑い>。っていうのをただ口だけじゃなくても、ほんとに自分でそう思えるようになった」。[インタビュー資料：51]

現在では、「自分のルーツがあるからこそ子どもたちに支援ができる」と語るように、自分のルーツを積極的に生かしている。他者との関係から「情報」を獲得したことを契機に、葛藤があった状態からアイデンティティが変容し、肯定、そして深化し、エスニックバックグラウンドを生かすことが可能となっている。

対象者：ありましたね。
調査者：どっちだった？
対象者：どっちもありましたね。日本の学校(中学校)に行っている時は日本人ぼくならう、ブラジル人としてではなく、日本人として見てもらいたかったなあととか。同等の扱いをしてもらいたかったっていうのもあったので、他のブラジル人がすごくイメージ悪かったので、見放されないようにも、日本人ぼく振る舞ったりとか。
調査者：ブラジルにいた時と日本のブラジル人学校にいた時はどうだった？
対象者：もう、すごく日本人ほいって言われたんですね。真面目だとか、もう、勉強できたので、まあ、勉強できるのは日本人だからだとか、そういうことを言われて。
調査者：じゃあその期間はブラジル人により近づきたかったというか、日本ぼさを消したかった
対象者：化粧濃くしたりとか。うんまあ結構そうですね。ブラジル人ぼくなりたかった。
調査者：そういうどちらかを消そうとしていた自分に対してはどう思っていた？
対象者：どっちでもないなあって思ってた。
【インタビュー資料：125-126】

その後、高校に進学し、多様な背景を持つ生徒が集まるインターナショナルクラスで過ごし、ブラジルと日本のどちらかではなく、それらのどちらもあってよいという気付きがあった。自分のエスニシティを肯定したことが伺える。

「(ブラジルか日本かの)どっちかじゃなくって、どっちでもいいんだっていう。どっちがあってもいいんだっていう」。【インタビュー資料：126】

現在では、ブラジルと日本の両方にルーツがあることで、異なる視点で物事を見られるというように考えており、ブラジルか日本かのどちらかではなく、どちらもあることがよいのだと思うようになった。自身のエスニシティを強みとして生かすことができている。

「ブラジルっていう背景があるから、こう、世界がこう、別の視点で見れるのかなって思ったり、日本だけだったらどうなっていたんだろうって思いますね。もしくはブラジルだけだったらとか。だから両方あるから、いいんだなって」。【インタビュー資料：118-119】

(4) D の場合

ブラジルから日本に戻って来た後、ブラジル人として見なされ、違和感を持つようになった。自身を日本人だと捉

えていたためである。ブラジル人と見なされる中で、まわりの日本人と同じ日本人として扱ってほしく、人生の中で一番アイデンティティに葛藤があったとしている。

「(日本に)帰国しても、完全にブラジル人だっていう扱いになって、そこの温度差って言えばいいんですかね、なんか。そこでなんか違和感を感じて、そこからなんか、違和感感じましたんですけども」。【インタビュー資料：143】

「あの、(ブラジルから日本に戻って来た時)たぶん人生の中で一番葛藤した時期なんじゃないかなって思うんですけども、やっぱ、自分はどうあるべきなんだって悩んだわけなんですけども、自分は日本路線でいきたかったなって。たぶん、そうですね。見た目もこんななんで、自分はやっぱ日本人だっと思ってたんで、やっぱ、みんなと一緒にしょって感じになりましたかかったですね」。【インタビュー資料：144】

中学校に進学し、同じブラジル人の生徒がいたことで、エスニシティの悩みについては気にならなくなったという。

「中学入ってなんか、別の小学校と混ざるじゃないですか。それで、同じブラジル国籍の子がまあ、クラスにひとりいるっていうぐらいの数でいたと思うんですけど1人2人いて、で、まあ普通に接しているからなんか、なんかいいのかなって。なんか、別になんか全然気にしなくていいのかなみたいな感じになっていって」。【インタビュー資料：145】

現在は国籍やアイデンティティについて悩むことがなくなった。そして、他者との違いを生かす術を得ており、積極的に自分のエスニシティを生かし、多文化共生に資する活動に取り組んでいる。

「簡単に言うと、一地球人だなと。すごい広く。国籍はもう何も気にしなくなったっていうのはありますね。ぶっちゃけ言えば人間でしょって感じで。国籍の有無はあまり気にしなくなりましたし、アイデンティティとしても真ん中の人間だとは思っているんですけども」。【インタビュー資料：160】

「今こういう活動(多文化共生に資する活動)ができるというのも自分に対してプラスに働いているところなんで、むしろ本当に日本人のままだったら、もう何もなくて、今過ごしているのかなって思っ」。【インタビュー資料：159】

第4章 発信する移住第2世代を支えるエージェント

第4章では、移住第2世代と協働して事業を行うエージェント³²⁾への調査結果を整理する。第1節では、調査対象者および調査方法を述べる。第2節では、調査対象者が所

属する機関・団体のプロフィールを概観する。第3節では、4人のエージェントを対象とした調査結果を述べていく。

第1節 調査対象者と調査方法

第1項 調査対象者

浜松で発信する第2世代と協働するエージェントを対象に調査を行った。調査対象者は(公財)浜松国際交流協会(HICE)職員2名、(特活)浜松NPOネットワークセンター(N-Pocket)職員1名、静岡文化芸術大学(SUAC)教員1名の計4名である。

第2項 調査方法

HICE職員およびN-Pocket職員には、一人ずつ個別にインタビュー調査を行った³³⁾。方法は、一人につき約30分～50分の半構造化インタビューとなっている。インタビューは本人の了承を得てICレコーダーにて録音し、文字起こしを行った。SUAC教員への調査については、映像資料での語りや対象者が発表している既存の資料を用いた³⁴⁾。調査の主な内容は、移住第2世代との協働目的、第2世代との協働における自身の役割についてである。

第2節 調査対象者が所属する団体のプロフィール

第1項 公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)

HICEは1982年に任意団体として発足してから今日まで、浜松市の国際化施策とともに歩んできた[松岡 2014 : 45]。1990年の入管法改正により南米からの日系外国人が急増してからは主に多文化共生のまちづくりに取り組んできたが、その取り組みは多岐に渡る[松岡 2014 : 45]。2015年現在、HICEは浜松市多文化共生センターと浜松市外国人学習支援センターの運営を行い、これら2つの施設を拠点に、国際化により生じる諸課題を解決する施策を講じている。事業として、「多文化共生のまちづくり」、「グローバル人材の育成」、「国際ボランティア・市民活動支援」、「情報提供」を柱に据えた取り組みを行っており、浜松市の多文化共生を語るうえで欠かすことのできない存在である。

第2項 特定非営利活動法人浜松NPOネットワークセンター(N-Pocket)

N-Pocketは1997年に設立された。設立以来、「異なる存在」、「多様な文化」が共生することのできる社会、すべて

の人が生きやすい社会をつくる「ソーシャル・インクルージョン」をコンセプトに、地域社会の優先度の高い課題に応える多数の事業を展開している[小林 2011 : 36]。N-Pocketは「for them」ではなく「with them」の立場に立って、問題の渦中にある人々の「セルフヘルプ」を支援する役割に徹している[山口 2004 : 149]。外国人の健康や教育、労働や人権は、日本人にとっても重要な問題ととらえ、日本人が外国人を「支える」のではなく、「ともに」安心して暮らせる社会をつくるための仕組みづくりを目指して、「医療」、「子どもの教育」、「アート」を3本柱に多文化共生事業を展開している[小林 2011 : 36]。

第3項 静岡文化芸術大学(SUAC)

SUAC³⁵⁾では、開学当初から特別研究によって多文化共生をめぐる基礎的な研究が進められた[池上・広瀬 2014 : 217-218]。SUACにおける多文化共生教育の特色として、学生たちを巻き込む形で繰り広げられている活動がある[池上・広瀬 2014 : 223]。それらは、学内の特別研究や外部からの委託研究、外部機関との連携活動ではあるが、授業という枠組みとは別に学生たちが極めて積極的に関わっている[池上・広瀬 2014 : 223]。学生の活動は交流促進活動、学習支援活動、調査研究活動等、多岐に渡って実施されている。そして、近年、SUACへの進学を果たす移住第2世代の学生³⁶⁾が増加しており、日本人学生に加え、こうした学生がプロジェクトに参加するようになっている。

第3節 移住第2世代との協働と各エージェントの働き

第1項 公益財団法人浜松国際交流協会(HICE)

(1) HICEと移住第2世代

初めてHICEが第2世代との協働事業を行ったのは2009年の「多文化教育ファシリテーター養成プログラム」である³⁷⁾。これは、日本で育った外国にルーツを持つ若者を対象に、自身の体験を振り返り、日本社会への思いを表現するために行われた[松岡 2010 : 16]。彼らのような人材が自分自身の多文化的要素をプラスと捉え、その経験や思い、考えを日本社会へ伝えていくことが、日本社会を真の意味で多文化社会へと変える貴重な機会を提供すると確信したためだという[松岡 2010 : 16]。彼らが自身もしくは家族の経験を見つめ直し、その意義を再確認することを通し、彼ら自身の存在意義を確認する、つまりエンパワーメントす

ることを目指した[松岡 2010 : 16]。

2013年には、「はままつグローバルフェア」内企画のひとつとして「外国にルーツを持つ若者のトークイベント×音楽ライブ 可能性へ向けての RESTART」が行われた。写真等を示しながら、自分たちの生い立ちや経験をまとめたスライドを用い、同じ境遇の子どもたちにメッセージを送った。また、この場では子どもたちの他に、ホスト社会の住民も聴いており、様々な人々に気付きをもたらした。

さらに2014年1月、外国にルーツのある若者グループであるCOLORS³⁸が発足した。COLORSは2013年10月にHICEが主催で行われた「78カ国の浜松市民が大集合! ? 未来はみんなで作る!」を企画運営した、インドネシア、ブラジル、フィリピンにルーツのある若者が「定期的に気軽な交流の機会をつくりたいと考え」、発足したグループである。2015年6月24日現在では、アメリカ、イタリア、インドネシア、フィリピン、ブラジル、ペルーにルーツのある若者がメンバーとなっている。教育に関する取り組みとして、2015年に静岡県立浜名高等学校(定時制)と連携し、COLORSメンバーが高校に赴き、定時制クラスの外国人生徒と交流し、ロールモデルを提示する機会を設けている。

(2) エージェントの役割

松岡真理恵氏は、①社会が変化していることを目に見える形で伝えたい。外国人が住みよい社会は皆が生きやすい。そうした社会を創っていくこと、②第2世代に自信を持ってもらうことと同じ境遇の人々が集まれる場をつくることを協働の目的としている。その中で自身の役割は、①こちらから何か話して仕掛けるというよりも聴くということ、②第2世代にスポットライトが当たる場づくりをすることだとしている。役割の①については、松岡氏から企画内容について要望はあまり出さずに、あくまで本人たちの自主性に任せ、必要があれば、提案する。役割の②では、関係者へつないだり、活躍する第2世代のメッセージがしっかり人々に伝わるように学校の先生等に趣旨は伝えておく等の趣旨説明を事前に行ったりしている。また、第2世代のエンパワーメントを図るために、彼らの話を聴いて受け止めるという役割がある。つらい話をするのを強いることはないが、話したら止めずに聴く。そして、彼らの話してくれることを拾い上げて、自らが語る言葉に気づくようにする。

鈴木恵梨香氏は、第2世代の活躍を社会に発信することを協働の目的だと捉え、①第2世代がアイデアを考えるので、その企画を実現するための環境整備をすること、②移住第2世代の若者と年齢が比較的近いので、密なやりとりをして彼らの状況を把握、HICE内で共有すること、③COLORSについては、メンバーを増やすため、そして、グループ活動を関係機関に紹介するための広報をすることが自身の役割であるという。協働する第2世代のエンパワーメントのために、①彼らに活躍の場を与えており、②彼らの姿をホスト社会、外国人コミュニティにアピールもしている。

それぞれが担う役割もあるが、移住第2世代の主体性を尊重し、彼らの思いを形にしていけることが共通した姿勢であり、実現のための環境をつくっていくことがエージェントの役割である。

第2項 特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター(N-Pocket)

(1) N-Pocket と移住第2世代

2003年に「ミューラル・プロジェクト³⁹」が行われた。「高校進学を果たした高校生」の実態を把握し、彼らがミューラル作成ワークショップに参加する過程で、「次世代のリーダーとして、後輩のロールモデル」を果たしてもらうことになった[山口 2004 : 147]。これは公立高校に進学した外国人生徒が中心になって行われ、その存在やメッセージをアートの手法で地域に発信した。次に、多文化な若者の全国交流会である。教育について等、交流会で話し合った点を提言という形でまとめている。他にも、映像制作ワークショップを2004年度と2010年度に行い、若者の生い立ちや経験、思いを映像制作を通して発信している。

(2) エージェントの役割

小林芽里氏へのインタビューによると、不就学等が問題になっていた中でのロールモデルとして移住第2世代との協働を行った⁴⁰という。ご自身の役割としては、①第2世代の背中を押すこと、②資金面の工面があるという。①については、企画の大枠を作り、あとは第2世代に企画を自分たちで作ってもらえるようにしたいが、なかなか難しいとのことである。第2世代の自主性を生かせるように、あまり企画内容については要望を出さないのが基本的なスタ

ンスである。しかしながら、時として小林氏がイニシアティブを取っていかないと企画が動かない場合もある。2013年の「多文化わかものカンファレンス 2013」で当事者自身が企画を作っていく流れができたので、N-Pocket としてはひとつの役割を終えたと思っているという。②として、第2世代の思いを形にするための環境をつくるための資金調達として、助成金申請は小林氏が行っている⁴¹⁾。

第3項 静岡文化芸術大学(SUAC)

(1) SUAC とブラジル人移住第2世代

SUAC を足場にした発信として初めて行われたのは、2008年7月実施の「ブラジル人大学生と高校生との座談会」である。この座談会には学生実行委員のブラジル人学生3人と、ブラジルにルーツのある高校生8人が参加し、進路や将来の夢を中心に話し合った[鏡田・池上 2009]。NHKニュースや新聞各紙で取り上げられた上、そのエッセンスを編集したDVDが同年10月に実施された移民パネル写真展「ブラジルの中の日本、日本の中でのブラジル〜写真で見る100年、過去から未来へ〜」の展示の中で紹介され、大きな反響を呼び起こした[池上・イシカワ・立入・古田 2009 : 55]。多文化子ども教育フォーラム⁴²⁾ (以下、FICEと表記する)においても、移住第2世代が発信活動を行っている。行政職員や学校関係者、NPO職員、研究者等が聴いている場でSUACの移住第2世代学生が自分のこれまでの経験および、経験から考えられた学校現場の改善点等を話す場がFICEにおいて設けられる⁴³⁾等、移住第2世代の発信が見られる。

(2) エージェントの役割

SUACには「実務型の人材を養成する大学」「社会に貢献する大学」という2つの理念があり、この理念を体現できるような活動機会がある[近田 2015 : 248]。エージェントである池上氏自身は、リーダーとなる学生をがっちりつかみ、後は学生に任せる[近田 2015 : 248]というスタンスでいる。学生に任せることで学びが深まるという[近田 2015 : 249]。国際文化学科1年次の必修科目であった「文化人類学」にて、学生に情報を提供するためのチャンス、場を与える[近田 2015 : 249]。自身の役割は大きなコンセプトを提示した上で、場と資金を確保するのみだとし、学生たちに任せることで彼らにスポットライトの光を当てる

ようなマネジメントになっていくのだという[近田 2015 : 249]。今後はロールモデルとなり得る学生たちをつくりコミュニティにも知らせていくことも重要であるとしている[近田 2015 : 250]。子どもの頃に来日し、日本での進学や就職を通して日本の社会に確実に根を張る第2世代の若者たちの姿を知らしめることで、彼らをロールモデルにして育つ子たちが増えるのではないかと池上氏は考えている⁴⁴⁾。

第5章 考察—ブラジル人移住第2世代の発信活動

本章では、第3章で取り上げたブラジル人移住第2世代の資源獲得ならびに、第4章で検討した第2世代との協働の意義、発信を支えるエージェントの機能を考察する。そして、ブラジル人移住第2世代による発信活動の規定要因を明らかにする。

第1節 ブラジル人移住第2世代の資源獲得

発信活動を行うブラジル人移住第2世代には、発信に至るまでに親世代である移住第1世代の持ち得なかった将来の見通しに関する「情報」を獲得し、「時間」の捉え方に質的な転換が見られる。加えて、「アイデンティティ」は他者との関係を契機に葛藤、肯定、深化の過程を経ていることがわかった。外国人の子どもを取り巻く環境を知り、問題意識を抱き、当事者性を意識する。そして、エージェントと出会い、発信に至るといった段階を経ると考えられる。

初めに「情報」について見ていく。事例の4人は教員や友人、第2世代の先輩や後輩、親から「情報」を得ている。獲得した情報は、①日本の学校生活ならびに進路形成について、②外国人の子どもを取り巻く環境について、③多文化共生に関係する活動についての3点に大別できる。情報を得ることで、「時間」や「アイデンティティ」に変化が見られる。

次に、「時間」についてである。時間軸の中で生きる情報を獲得し、漠然としていた未来に具体的な将来像が見出されており、その時々が目的志向的で主体的となっていることが指摘できる。例えば、大学休学前は何となく大学の講義を受けていたと言うAは大学休学時に携わった浜松市の就学サポーターの仕事で外国人の子どもの置かれている状況を知り、復学後は大学やHICE等での子どもの教育に関する講座に参加するようになった。Aは以下のように語る。「休学してその子どもたちの支援に関わって、そこがあた

しのなんていう、目標ていうか、もうメインがそこ(外国人の子どもの教育)になったから、全てあたしのやることは全部それのため、みたいになった」。自分の存在や経験が後続の子どもにとって意味のあるものだと思いき、将来の明確なビジョンを描くことができるようになった。加えて、これまでの自分を立ち返り、家族の越境の経緯等、エスニック的背景を伴う家族の歴史とでも言うべき過去について知る機会をもっている。

「アイデンティティ」については、自らのエスニシティをどう捉えるかという点で、変動が見られる。葛藤期には、エスニシティに関する悩みや揺れがある。具体的には、「日本人と同じになりたい」、「自分は日本とブラジルのどちらにも当てはまらない」等の声があげられる。肯定期には、他者との関係から自身のエスニシティを承認している。深化期には、自らのエスニシティを劣位性としてではなく、強みと捉えている。「いろんなこういう活動(多文化共生に資する活動)にも手を出しちゃったっていうのもそうなんですけど、いろんな人たちからも見て、これ(自分のルーツ)は自分にとってプラスなんですよね」と語る B のように発信活動を行う第 2 世代は他者との違いを生かす術を得ている。浜松において発信するブラジル人移住第 2 世代の若者は清水[2006]による分析結果と同様、アイデンティティの資源化がなされていることが確認できる。

発信活動を行ったことによる影響として、ある発信機会が今の自分にとっての「原点」と言う C のように、そこから次の発信機会につながる事が確認された。さらに、発信が自身の進路を切り開く例も見られた。発信により、発信者自身は「時間(エスニック的背景を伴う過去・具体的な将来像を伴う未来)」、「情報」、「アイデンティティ(自己効力感)」、新たな発信の「場」という資源を獲得していることがわかる。

第 2 節 協働するエージェント

第 1 項 第 2 世代との協働がもたらす意義

第 2 世代の若者の活躍がもたらす意味をエージェントへの調査から 3 点に分類した。すなわち、(1)ロールモデルの提示、(2)ホスト社会にもたらす気づき、(3)当事者のエンパワーメントである。ここでは、インタビューや報告書等から、声を拾い上げ、協働の目的について検討する。

(1) ロールモデルの提示

第 2 世代の若者との協働の目的として、ロールモデルとして協働する第 2 世代を提示することがまず挙げられる。先述のように、日本で暮らす外国人の子どもと保護者は、言語の違いや日本の教育システムに関する基本的な情報の欠如ゆえに親が子どもの学習をサポートできなかったり、親の学校経験が限られたりしていることや、身近なモデルの不在により、子どもがどのように学校で生活すればよいかという点で大きく資源が不足する[志水・清水 2001: 56-60]。そのような状況下で、進学情報の多言語化や、多言語での高校進学ガイダンスが実施されてきた。近年では、そうした取り組みに加えて、高校・大学進学を果たした若者の体験をひとつのモデルとして示すことが可能となっている。

「共感できることもたくさんありました。もうすぐ高校生なので、私も自分のやりたいこと、自分にできることを見つけて、前に進みたいと思いました」(2013年2月10日はままつグローバルフェア「若者企画」若者企画アンケートでのブラジルにルーツのある15歳の感想より)[公益財団法人浜松国際交流協会 2013]。

「(Bと接した時に)憧れっていうのと、なんか、なんか道筋、ロールモデルになったのかな、どうなのかな。やっぱり見えて、ハッて、いいかもしれないって」。(2015年4月29日に実施したDへのインタビューより)[インタビュー資料: 151]

これらの語りから、第 2 世代の若者の活躍を目の当たりにした外国人の子どもは将来の見通しという「時間」に関する資源を獲得したと言えよう。「子どもたちの選択肢をひとつ増やしてあげたい。やりたいことが既にあるなら、背中を押してあげたい」という B の思いが反映された結果である。その一方で、進学を果たし、活躍している若者のようには自分になれないと思う子どもたちがいるのも事実で、そうした子どもたちのロールモデルはどうするべきかが今後の課題でもあるとの声もインタビュー中に挙げられた⁴⁵⁾。

(2) ホスト社会にもたらす気づき

次に、第 2 世代の発信によってホスト社会の人々の意識に変化をもたらすという点である。外国人当事者の声を認識し、外国人をどう捉えるかという点、さらには自身を内省し、これからどうするかという点にまで気づきをもたらしていることが見受けられた。

① 日本社会の在り方への気付き

「進学のことや、取り出し授業のこと、経験した当事者の意見を聞くことができ良かったです。いろんなルーツの人の意見がこれからの日本をつくっていくのだと思いました。もっともっと交流したい!」(多文化わかものカンファレンス 2013 「日本のわかもの」の参加者感想より)[The TOKAI Branch of the “GAIJIN”(企画製作),(特)浜松 NPO ネットワークセンター(編集協力) 2014 : 17]

日本の学校での身の振り方について、学齢期を日本で過ごした当事者の意見を聞くことができ、さらには、日本社会を考える上で、外国にルーツのある人々の存在にも目が向くようになった。

② 外国人へのまなざし・自らの在り方の変容

「これからもっと周りの外国人への接し方を変えていける気がしました」(多文化わかものカンファレンス 2013 「日本のわかもの」の参加者感想より)[The TOKAI Branch of the “GAIJIN”(企画製作),(特)浜松 NPO ネットワークセンター(編集協力) 2014 : 17]。

「自分は偏見の目は持っていないつもりでしたが、より深く知ろう、考える思慮深さが足りないことに気づかされました」(多文化わかものカンファレンス 2013 「日本のわかもの」の参加者感想より)[The TOKAI Branch of the “GAIJIN”(企画製作),(特)浜松 NPO ネットワークセンター(編集協力) 2014 : 17]。

外国人に対する姿勢が変わったことが上記の感想から伺える。また、自分自身について内省する機会となっていると言っているだろう。自身を内省し、自らの在り方考えることを促している点については、以下の感想からも読み取ることができる。

「私は言葉や文化の違いで悩んだこともないのに、自分のやりたいことを見つけるとか、そういった努力が全然できていないなと感じました。私もまだまだ頑張れる」(2013年2月10日はままつグローバルフェア「若者企画」若者企画アンケートでの19歳の日本人の感想より)[公益財団法人浜松国際交流協会 2013]。

「日本人は協調性があると言うけど、周囲に合わせすぎて自分が足りなくなっている気がする。自分の悪い所も隠すのではなく、受け入れ、自分に胸を張って生きる事が大事ですね。

それができているメンバーが輝いて見えました」(2013年2月10日はままつグローバルフェア「若者企画」若者企画アンケートでの33歳の日本人の感想より)[公益財団法人浜松国際交流協会 2013]。

(3) 当事者のエンパワーメント

当事者のエンパワーメントについて検討する。企画作りでは第2世代の主体性を生かし、彼らの思いを聴き、その思いを形にするためのサポートをエージェン트가行っている。そして、第2世代が自分たちで企画作りを進めることができるようにエージェン트가自立のための運営補助をしている。また、関連組織やコミュニティへのアピールを行うことで第2世代と場をつないでいる。これらを通じて、エージェン트는協働する第2世代のエンパワーメントをしている。

① 個人を尊重する

「自分を認めてくれるじゃないですか。その HICE だったり、N-Pocket だったり。今まで結構否定されてきたっていうことが何度かあって、認めてくれるっていうのが本当に自分の中で嬉しくて、その思いが、で、ぜひぜひっていうところがあって、すごく楽しく、楽しく活動できるのは本当にありがたいなって」。(2015年3月11日に実施した C へのインタビューより)[インタビュー資料 : 122-123]

協働の場が個々の第2世代の若者を認めてくれるということを読み取ることができる。

② 同じ境遇の者が集まることのできる機会を提供する

「(前略)学校では常に孤独を感じていた。そんな私が変わるきっかけとなったのは、8月の交流会。(中略)みんな自分のルーツに自信を持っていること、全てが私にはうらやましかった。まぶしかった。たった2日だけけど、私には衝撃的で刺激的な2日間だった。外国人であることは悪いことじゃないのかも。むしろ、いいことなのかも。日本があってブラジルがあって私なんだ」。(「特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター 映像ワークショップ 2011年3月」映像作品より。)

N-Pocket の小林芽里氏によると、同じ境遇の人々の話を聞くと、この境遇は自分だけのものではないという気付きがあり、安心感をもたらしているのだという⁴⁶⁾。N-Pocket や HICE、SUAC は、そのような同じ境遇の者同士が集ま

ることのできる機会を提供していると言うことができる。

③ 自立を促す機会を提供する

このような同じ境遇の若者が集まる場で、自分たちで企画を作り上げていけるように自立を促す運営補助を行っている。例えば、イベントの告知チラシを第2世代に作成してもらおう等、これまではエージェントが行っていたことを徐々に第2世代に行ってもらおうようにしている。

「運営に関しては、『予算』『会場』『物品』『時間』『企画』を意識する重要性を学びました。さらに、『どのようなイベントなのか』や『なぜ大学の広場を使用するのか』といったコンセプトの明確化や、規模の推定、集客見込みの概算、協賛金の資金確保なども全部自分たちで行いました」[池上・宮城：3]。

「もっと自分が感じることを常に発信して、日本人の方に伝えていかなきゃ何も変わらないんだなって思いました」(多文化わかものカンファレンス 2013「外国ルーツのわかもの」の参加者の感想より)[The TOKAI Branch of the “GALJIN”(企画製作),(特)浜松 NPO ネットワークセンター(編集協力) 2014：16]。

④ 第2世代に社会のスポットライトが当たる機会を提供する

第2世代の若者の存在を関係団体や外国人コミュニティにアピールすることで、協働する第2世代に社会の注目が集まる。第2世代の活躍を目にする日本人および外国人に対して気付きをもたらすことに加え、自分は社会の役に立つことのできる存在なのだという自己効力感を第2世代に持ってもらおうことが期待できる。

「家庭訪問プロジェクトを通じて各家庭にブラジル人のロールモデルを届けただけでなく、今の浜松市が抱えている外国人に関連する教育の問題、親の大学への関心を肌で感じることができました。さらに今後、自分たちは大学生として何ができるのか、何をすべきなのかを考えるきっかけにもなりました」[宮城 2014：20]。

「こんなにも影響力があるとは知らなかったっていう、自分自身が。小さいことやっているなって思っていたんですけど、ま、結構総合的に見ると、いろんなところにこう、発信できていたりとか、影響力があるのかなあって、最近思いますね。最近よくあの、ロールモデルとか言われたり、先生から、すごく嬉しいんですけど、うん。それが自分のモチベーションを上げる、何て言うんだらう、自分のモチベーションも上がる。で、さらに他の人のモチベーションも上がれば最高だな

と」。

(2015年3月11日に実施したCへのインタビューより)[インタビュー資料：117]

第2項 エージェントの機能

第4章で述べた移住第2世代の発信を支えるエージェントに対する調査結果から、エージェントの機能を考察する。各エージェントの役割から、その機能を3点に分類する。

(1) 仕組みづくり=人を組織(場)につなぐ

はじめに、「第2世代と組織をつなぐ」働きをしている。協働する第2世代をリクルートするために、関連機関への声かけを行ったり、他所での講座等に足を運んだりし、事業と第2世代をつなげる。また、発信する機会(場)の確保をエージェントが行い、場と第2世代をつなげていく。さらに、事業の関係団体との連絡調整をエージェントが行う。その際には事業の趣旨や第2世代の思いがしっかり伝わるように、あらかじめ先方の担当者に説明しておく場合もある。他方、関係する組織や外国人コミュニティに協働する第2世代の存在をアピールし、第2世代のエンパワーメントや、モデルの提示を行っている。

(2) 人への働きかけ=エンパワーメントをする

次に、「協働する第2世代のエンパワーメント」である。同じ境遇の人々が集まる場を作っており、この境遇は自分だけではないという視点を当事者にもたらしめている。加えて、自ら企画づくりができるようになるために、エージェントが主体となって企画立案や準備を進めるのではなく、エージェントは彼らの言葉を聞き、第2世代の主体性を尊重した企画作りを進める。そして、外国人コミュニティや関連団体に第2世代の若者をアピールし、協働する第2世代のエンパワーメントを行っている。

(3) 舞台の設え=資金を工面する

そして、「資金を工面する」役割である。当事者の考えたアイデアを企画として実現させられるよう、事業資金の用意をしている。予算があらかじめ割り当てられている事業の中で企画を行う場合と、それ以外の場合がある。既存の事業枠組み外で事業を行う場合は外部の助成金を用いている。具体的には、(財)自治体国際化協会の「地域国際化協会等先導的施策支援事業」、「多文化共生のまちづくり促進事業」や、(公財)日本財団の「NPO 支援センター強化プログ

ラム)、浜松市の「みんなのはままつ創造プロジェクト事業」による助成を受けて事業を実施しており、SUAC については、「特別研究」や「イベント・シンポジウム等開催費」から資金を確保している。

移住第 2 世代の声をホスト社会につなぐ媒介者として、協働する移住第 2 世代の思いを形にする環境整備ならびに協働する第 2 世代当事者に自信を持たせる働きかけを行っていることがわかる。

第 3 節 発信の規定要因

1990 年の改定入管法施行後における、いわゆるニューカマーの増加を受け、浜松市は多文化共生に関する施策に力を入れてきた。この間、多文化共生の地域づくりを行う機関や団体が現れ、多岐に渡る側面から事業が展開されてきている。多文化共生に関する事業で資金を用意することのできる各機関・団体において、エージェントはそれぞれが移住第 2 世代との協働事業を展開している。そして、移住第 2 世代の主体的な取り組みをサポートする、ゆるやかなネットワーク⁴⁷⁾を形成してきた。すなわち、移住第 2 世代の若者を自らの団体に囲い込むことなく、関係機関の皆で移住第 2 世代の活躍を促進していこうとするネットワークである。近年においては、ブラジル人移住第 2 世代の中でも学業達成を果たす者が着実に増加している。そうした若者の中には第 5 章第 1 節で検討した資源を獲得している者がいる。移住第 2 世代がアクターとして多文化共生に関連する取り組みへ参加していくことを浜松のエージェントが促し、取り組みのネットワークの中を第 2 世代は行き来しながら、新たなネットワークを構築し、多文化共生に資する取り組みへの参加を深めていく。

今日の浜松市におけるブラジル人移住第 2 世代の発信活動が実現している要因として、ある立場を人が担い、先に検討した 3 つの機能を担うことで、第 2 世代の声を社会につなぐ媒介者となっていること、さらに、エージェントを中心に所属機関・団体の間で取り組みのゆるやかなネットワークを形成していること、多文化共生の地域づくりで資金や場の工面ができる環境にあること、資源を獲得したブラジル人移住第 2 世代がホスト社会へ台頭していることが合致していることが考えられる。

おわりに

本論文では、第 1 章で、先行研究を踏まえ、移住第 2 世代を取り巻く状況について、「言語」、「適応」、「進路」の領域を中心に整理し、加えて日本の国際化と多文化共生の状況を述べた。第 2 章では、浜松市での行政、NPO、大学の取り組み、さらには移住第 2 世代の動向を概観した。第 3 章では、サンドラ・ウォルマンの編成的資源の枠組み、つまり「時間」、「情報」、「アイデンティティ」を採用し、発信するブラジル人移住第 2 世代の若者 4 人へのライフストーリー・インタビューをもとに、発信する当事者の資源獲得および、発信に至る過程と発信後の変化を検討した。第 4 章では、移住第 2 世代と協働し、発信をサポートする 4 人のエージェントに対する調査から各機関・団体における、移住第 2 世代の若者との協働目的や、エージェントの役割を明らかにした。第 5 章では、まず第 1 節で、第 3 章での調査をもとに発信する当事者の資源獲得および、発信に至る過程と発信後の変化を検討した。次に、第 2 節で第 4 章での調査から第 2 世代との協働の意義やエージェントの機能を分析した。分析の結果、移住第 2 世代の声を社会につなぐ媒介者としてのエージェントの機能は「仕組みづくり」、「人への働きかけ」、「舞台の設え」に分類できた。そして、第 1 節と第 2 節での検討を踏まえ、浜松におけるブラジル人移住第 2 世代の発信活動がなぜ実現しているのか、その要因を考察した。ある立場を人が担い、上記の機能を担い、取り組みのゆるやかなネットワークを所属機関・団体同士がエージェントを中心に形成し、第 2 世代の声を社会につなぐ媒介者となっていること、多文化共生関連で資金や場の工面ができる環境にあること、資源を獲得したブラジル人移住第 2 世代のホスト社会への台頭が合致していることが考えられる。

本論文の考察から、ブラジル人移住第 2 世代が発信に至る過程および、発信を行うことによって現れた影響を明らかにした。将来の見通しに関する「情報」を獲得し、「時間」の捉え方に質的な転換が見られる。加えて、「アイデンティティ」は他者との関係を契機に葛藤、肯定、深化の過程を経ていることがわかった。外国人の子どもを取り巻く環境を知り、問題意識を抱き、当事者性を意識する。そして、エージェントと出会い、発信に至るという段階を経ると考えられる。発信活動を行ったことによる影響として、次の発信機会につながることを確認された。さらに、発信が自

身の進路を切り開く例も見られた。発信により、発信者自身は「時間(エスニック的背景を伴う過去・具体的な将来像を伴う未来)」、「情報」、「アイデンティティ(自己効力感)」、「場(新たな発信機会)」という資源を獲得したことがわかった。

さらに、移住第2世代と協働するエージェントの機能が明らかになった。「仕組みづくり」、「人への働きかけ」、「舞台の設え」の機能をエージェントが担っており、移住第2世代の主体性を生かすことが可能となっている。

最後に今後の課題を挙げたい。本研究では、発信活動を行っていない移住第2世代の若者へのインタビューを行うことができなかった。さらに、発信するブラジル人移住第2世代の資源獲得とこれまでの浜松市の施策の兼ね合いを十分に検討できていない。そして、発信が後続の世代のライフコースにどのような影響をもたらすのかという点を調査するには、時間を置くことが必要だと判断し、今回は検討ができなかった。今後はこれらを探っていくことで、ブラジル人移住第2世代の発信活動をさらに検討することが可能となる。

謝辞

はじめに、インタビュー調査に快諾してくださり、御協力いただいたブラジル人第2世代の皆様には貴重なお話をさせていただきました。また、公益財団法人浜松国際交流協会の松岡真理恵氏、鈴木恵梨香氏、特定非営利活動法人浜松NPOネットワークセンターの小林芽里氏は御多忙にも関わらず、調査に対して丁寧な御対応をしてくださいました。調査に御協力くださった皆様の御厚意がなければ修士論文を書き上げることはできませんでした。そして、神戸大学大学院国際協力研究科研究員落合知子氏ならびに大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授吉富志津代氏には、たかとりコミュニティセンターでの取り組みを伺い、本研究に対する大きな示唆をいただきました。

本研究を進めるにあたり、本稿第3章および第5章第1節に該当する部分を多文化関係学会第14回年次大会で、第4章ならびに第5章第2節部分を移民政策学会2015年度冬季大会にて研究発表しました。その際に、諸先生方や大学院生の皆様には御助言や情報共有をさせていただきました。

最後に、静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科の先生方には研究方法から研究に対するご意見まで、懇切丁寧な

御指導をいただきました。イシカワエウニセアケミ先生は筆者が壁にぶつかった折には相談に応じてくださり、いつも的確なアドバイスをしてくださいました。副指導の森俊太先生は社会学の初学者であった筆者に理論と調査法をわかりやすく教えてくださいました。加えて、修士課程2年次になっても継続して丁寧な御指導をいただきました。主指導の池上重弘先生は、毎週1対1で時間を設定してくださり、端から端まで行き届いた的確な御指導をしてくださいました。まとまらない筆者の話をいつも聞いてくださり、さらに、筆の遅い筆者をいつも鼓舞してくださりました。

この修士論文を執筆するにあたって、多くの方々に厚い御指導御協力をいただきました。皆様に心からの感謝と御礼を申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

注記

- 1) 1970年代後半以降に外国から新しく日本にきて居住するようになった者[志水・清水 2001: 3]を指す。
- 2) 欧州で進む多様性を生かした都市政策を指す。山脇はインターカルチュラル・シティのアプローチを以下のように説明する。「移住者(migrant)や少数者(minority)によってもたらされる文化的多様性を、脅威ではなくむしろ好機ととらえ、都市の活力や革新、創造、成長の源泉とする新しい都市政策」[山脇 2013a: 27]。
- 3) 本研究における浜松の若者の「発信」は、日本語を用い、ホスト社会の住民および、外国にルーツのある後続の世代の子どもとその保護者に届く形で教育に関する情報提供と意思表明を行うことを指す。浜松市では主に公益財団法人浜松国際交流協会(以下、HICEと表記)、特定非営利活動法人浜松NPOネットワークセンター(以下、N-Pocketと表記)、静岡文化芸術大学(以下、SUACと表記)でのシンポジウムや企画を通して、移住第2世代の若者が発信活動を行っている。浜松市で発信活動を行う第2世代の若者は主として、日本で学齢期を過ごした先輩としての自らの経験、経験から導かれる教育の改善点、そして後続の子どもへ直接訴えかけるメッセージを発信している。
- 4) 本論文におけるブラジル人とは、国籍が日本であるかブラジルであるか、もしくは二重国籍であるかに関わらず、ブラジルにルーツのある者を指す。以後、断りが無い場合には、「ブラジル人」とは、この条件に該当する者を指すこととする。
- 5) これまでの研究では「移民第2世代」と表記されている場合がほとんどである。しかし、日本には実質的な「移民」が存在する一方で、移民という形での受け入れを行っていない点を考慮し、本研究では「移住第2世代」を用いる。外国にルーツをもち、親の移住に伴って学齢期を移住先で過ごした者と定義する。
- 6) 1990年代以降に日系ブラジル人が浜松市で急増したこと、そして親の移住に伴い来日し、移住先で学齢期を過ごした者を対象とすることを踏まえ、本研究における若者とは10代後半～30代の者を指すこととする。
- 7) ブラジル人学校の状況については、国際カリキュラム研究会

- [2007]や坪野[2010]に詳しい。
- 8) 新藤・菅原[2009]に詳しい。大泉町・豊橋市・浜松市の公立学校に在籍するブラジル人の子どもを対象とした調査を、新藤を含む小内透らのグループが行った。大泉は1998年に公立小中学校7校を、豊橋は2006年に公立小中学校8校を、浜松は2007年に公立小中学校7校を対象とした調査である[新藤・菅原 2009: 5]。大泉では日本生まれが皆無であるのに対し、豊橋では36.5%、浜松では44.7%と割合が高まっており、2008年時点では、4割程度が日本生まれであるとわかった[新藤・菅原: 14-15]。
 - 9) 不登校と不就学の違いを明記しておく。前者の場合、「学校に在籍するものの、その学校に通っていない状態を指しており、フリースクールなどの教育機関において学習の場を得ている者も少なくない」[太田・坪谷 2005: 18]。そして、後者の場合は、小・中学年齢相応の子どもたちが「そもそも学校に在籍せず、教育を受ける機会をもたない状態を意味して」おり、日本国籍をもたない子どもにのみ生じている[太田・坪谷 2005: 18]。
 - 10) 日本社会の多文化状況については、久米[2011]を参照されたい。日本では、「国民」=「民族」=「日本人」という定式が作用し、アイヌや沖縄人、韓国・朝鮮人(今日の在日コリアン)・台湾人等の人々が存在していても、ほとんどは「見えない人びと」とされてきた[渡戸 2010: 22]。
 - 11) ここでいう「ブラジル人」はブラジル国籍者を指す。
 - 12) 多文化共生という概念には、批判的な見方もある。飯笹は多文化共生の範疇から、在日コリアン等のオールドカマーやアイヌ民族が抜け落ちており、もっぱらニューカマーを対象とした施策となっていると述べる[飯笹 2013: 192-193]。また、多文化共生の定義で用いられる「対等な関係」を問題視しており、そもそも「対等な関係」とはどのような関係なのか、それがどのように築かれるべきかという点での議論が見られないとしている。そして、日系人の多くが非正規雇用の不安定な就労状況にあり、社会、経済的に「対等な関係」を築いていくうえで大きなハンディキャップを負っていることをどう考えるのかという点を指摘している[飯笹 2013: 195-196]。
 - 13) 池上[2014b]は、2013年3月に策定された「あいち多文化共生推進プラン 2013-2017」の特徴を、山脇[2015]は、2015年3月に策定された「長野県多文化共生推進指針」の特徴を説明している。
 - 14) 池上[2012a]は学習支援に携わる日本人の社会参加について、「共育」をキーワードに説明している。詳しくはそちらを参照されたい。
 - 15) 外国人市民がもたらす異文化間リテラシーについて研究した落合知子は、異文化間リテラシーを以下のように定義する。「既存の知識・視点にとらわれず、エスニックマイノリティが独自の視点で世界を捉え、そこから構築される意見を認識し、対話を開く」。そして、「その対話を通じ、当事者は自らの視点を相対化するという自己改革を体験し、さらに当事者を超えて広く対話の場をもつことで多様な視点の存在が認知され、地域もしくは社会の変革を促していく力」のことを指す[落合 2012: 20]。
 - 16) グローバル人材とは、「グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更には
- そうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」である[産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 2010: 31]。
- 17) 落合は外国人青少年の実践に関わる大学生ボランティアに着目し、ボランティアに形成される異文化間リテラシーについて考察を行っている。実践に関わった大学生ボランティアは自己改革を促され、その後、就職・進学先において、多様性に配慮した取り組みを提案・実践していることが報告された[落合 2012: 93-97]。
 - 18) 『町字別世帯数人口一覧表』(平成24年1月～平成26年12月1日)によると、2014年12月1日現在、総人口は810,539人である。2005年に12市町村が合併し、現在の浜松市を構成している。
 - 19) 「浜松市総合計画」では、創造都市を以下のように定義している。「地域固有の文化や資源を活かした創造的な活動が活発に行われ、その活動が新しい価値や文化、産業の創出につながり、市民の暮らしの質や豊かさを高めていく都市」のこと[浜松市企画調整部企画課 2015: 64]。
 - 20) 1979年5月より1999年4月まで在職。
 - 21) 1999年5月より2007年4月まで在職。
 - 22) 「地域共生」とは、外国人も市民であるという認識のもとに、市民としての権利を保障するとともに、義務や責任を果たしてもらおうという考え方である[浜松市企画部国際課 2004: 9]。
 - 23) 外国人住民が母語で情報収集できるように、インターネットを活用し、情報提供を行うウェブサイトである。<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamaj/> (閲覧日: 2015年11月9日)
 - 24) 2007年5月より2015年12月現在まで在職。
 - 25) 特定の(一つあるいは少数の)社会的役割の遂行にふさわしい価値・態度・行動の模範的持主とみなされる人物をいう。ひとはこの役割モデルへの同一化を求め、その役割遂行を模倣しようとする[濱嶋・竹内・石川 2005: 600]。
 - 26) 自らの内在する力に依拠し、その力を全面的に発揮できるような環境や他者との関係をつくり上げていくこと[安藤 2010: 148]。
 - 27) 2013年2月10日に開催された第3回はままつグローバルフェア内企画「外国にルーツを持つ若者のトークイベント×音楽ライブ 可能性へ向けてのRESTART」における当日の映像を資料として用いた。<https://www.youtube.com/watch?v=WpTtemOFGX8&feature=youtu.be> (閲覧日 2015年12月14日)
 - 28) 蘭は中国帰国者の生活を描くにあたって、「ライフ・ステージ」という概念を用いることが重要であるとし、サブカテゴリーとして、「幼年期」、「少年期」、「青年期」、「中年期」、「老年期」の5つに分類している。そして、各ステージに応じた生活課題(学校生活、進学、就職、職場での生活、結婚等)が日常を支配すると述べる[蘭 2000: 32]。本研究においては、蘭の言う「少年期」、「青年期」を「小学校時代」、「中学校時代」、「高校時代」、「大学時代」、「現在」と細分化し、調査を行った。
 - 29) インタビューでの語りの箇所はブラジル人移住第2世代の語りをそのまま記述する形とする。また、語り内の()は筆者が文脈に合わせて言葉を補った箇所である。
 - 30) 「いわしんバモス日本語! 南御厨実行委員会」の主催で、地域住民・企業・行政が協働し、外国人の就労援助を目的とする日本語教室を開催した。

- <http://www.city.iwata.shizuoka.jp/shimin/kyoudou/teianjigyou.php> (閲覧日: 2015年12月15日)
- 31) 小学校入学前の子どもたちを対象にした事業。事業のコーディネートを行った堀永乃氏へのインタビューによると、挨拶の練習や名札作り、学校探検に学校クイズ、文房具を使う体験や鉛筆で絵を描く練習、グループ作業や掃除等を学習活動として組み込んだという[斎藤 2015: 243]。さらに、給食体験や登下校体験もある[斎藤 2015: 243]。
 - 32) 本研究で用いるエージェントは、アンソニー・ギデンズの構造化理論に立脚する[ギデンズ 1987=1998 藤田監訳: 87-90]。社会構造に制約されつつも構造を利用しながら人々のエンパワメントを促進する手助けをする者と定義する。
 - 33) 2015年9月11日にHICEの松岡真理恵氏、鈴木恵梨香氏に、同年9月14日にN-Pocketの小林芽里氏にインタビューを行った。
 - 34) 池上氏への調査で用いた資料は本研究の調査開始以前に公表されたものである。
 - 35) 一連の取り組みについては、以下の静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターのウェブサイト詳しく紹介されている。<http://www.suac.ac.jp/researchcenter/research/priority/diversity/> (閲覧日: 2015年12月14日)
 - 36) ブラジル人第2世代の入学者は、2006年度: 1名(国際文化学科)、2008年度: 2名(デザイン学部)、2011年度: 2名(国際文化学科)、2012年度: 4名(国際文化学科)、2013年度: 4名(国際文化学科)、2014年度: 3名(国際文化学科)である[池上・上田 2015: 60]。
 - 37) 2015年9月11日に行った松岡真理恵氏へのインタビューより。
 - 38) COLORSについての情報は、HICE職員である鈴木恵梨香氏が提供してくださったCOLORS活動紹介チラシに主に基いている。Communicate with Others to Learn Other Roots and Storiesの頭文字を取ってCOLORSである。2014年の発足から現在に至るまでに、「あなたのルーツとストーリーを語ろう」、「もっとキビシイことを話そう♪私たちはこうやって学んだんだ!」、「キビシイ話その2〜結婚の話をしよう!結婚にいたるまで〜」、「就職について語ろう」を各回のテーマに設定し、座談会形式で集まる場を設けている。その流れで、「キャリアプランニングワークショップ」、「第2世代のためのグローバル人材就職応援セミナー」を行っている。
 - 39) ロールモデルの発掘と次世代のリーダーの育成を目指した事業として、「ミューラル・プロジェクト」が行われ、2003年に巨大な壁画「ミューラル」を作成した。浜松ではブラジル人やペルー人の高校生の参加者を募り、乗り越えた困難と希望を「あなたはひとりじゃない」、「あきらめないで」、「学ぶのは未来のために」、「夢を叶えよう」というメッセージを込めて描いた[小林 2011: 39]。作成の過程では、静岡県立浜松江之島高校と美術部の協力があり、さらに静岡文化芸術大学でもコミュニティ・ペインティングデイが開催された。外国人と日本人の高校生・大学生や子どもたちが一緒に色を塗り、彼らの背景や課題を共有した[小林 2011: 39]。そして完成した作品は、浜松市まちづくりセンターや国立民族学博物館でも展示された[小林 2011: 39]。
 - 40) 小林氏によると、N-Pocketでの多文化なわかもとの協働事業は一緒に事業を行っていく若い人材がいなかったため、現在は休業中だという。今回のインタビューでは、過去の取り組みでの話をいただいた。なお、進学ガイドブック作成等の事業は継続して行っている。
- 41) 第3章で取り上げたブラジル人移住第2世代のAによると、会場の確保は小林氏が行っていたという[インタビュー資料: 62]。
 - 42) 2012年度から2015年12月現在までにFICEは10回に渡って開催されており、地域国際化協会職員やNPO職員等の実務家、市教委、教員、行政担当者、研究者等のネットワーク・情報共有の一助を担っている。
 - 43) 第5回FICEでは、「教育支援策をめぐって当事者学生が物申す」というテーマのもと、日本で教育を受けた自身の経験から、「物申す5項目」を提言した。第6回では「日本の大学に進学したブラジル人たちの経験から学ぼう」をテーマに、大学進学を果たしたブラジル人学生たちの経験の紹介がフォトストーリーの手法でなされた。学生の提言内容や各回の内容については、以下のFICEページを参照されたい。<http://www.suac.ac.jp/~ikegami/fice00.html> (閲覧日: 2015年12月14日)
 - 44) ベネッセ教育総合研究所が行った池上氏へのインタビュー記録より。ベネッセ教育総合研究所、「外国にルーツを持つ子どもたちが直面する就学問題」フォーラム 静岡文化芸術大学池上重弘教授編【後編】http://berd.benesse.jp/special/co-bo/co-bo_theme1-6.php (閲覧日: 2015年11月12日)
 - 45) 2015年9月14日に行った小林芽里氏へのインタビューより。進学を希望しない子どもにとってのロールモデルは別に考えていく必要があるという。
 - 46) 2015年9月14日に実施した小林芽里氏へのインタビューより。
 - 47) 例えば、FICEの準備会メンバーにN-Pocketの小林氏やHICE職員が入っていること、NPO協働推進フォーラム「県西部における多文化共生の地域づくりにむけた共育(教育)」の準備会参加メンバーには、SUAC、N-Pocket、HICEが入っている[特定非営利活動法人ボランティア支援ネットワークパレット 2009: 5]ことが挙げられる。

引用文献

- 蘭信三.2000.「中国帰国者とは誰なのか、彼らをどう捉えたらよいのか」蘭信三『「中国帰国者」の生活世界』行路社, 19-47.
- 安藤幸一.2010.「エンパワメント」多文化共生キーワード事典編集委員会『多文化共生キーワード事典【改訂版】』明石書店, 148-149.
- 飯笹佐代子.2013.『「多文化共生」という無難な安全地帯』伊豫谷登士翁『移動という経験—日本における「移民」研究の課題』有信堂高文社, 185-209.
- 池上重弘.2001.「浜松市における国際化施策の展開—外国人市民増加への総合的対応—」池上重弘『ブラジル人と国際化する地域社会—居住・医療・福祉』明石書店, 38-59.
- .2012a.「多文化共生社会へ地域で共に—『ユニバーサルデザイン』と『共育』をキーワードに」『労働の科学』67(5): 9-13.
- .2012b.「ポスト東日本大震災の多文化共生社会のあり方—社

- 会のユニバーサルデザインのひとつとして』『住民行政の窓』377: 2-13.
- .2014a.「定住外国人学生の就学実態調査報告—静岡県西部地域の大学を中心に—」『静岡文化芸術大学研究紀要』14: 97-100.
- .2014b.「多様性を生かした多文化共生の地域づくり」『21世紀ひょうご』16: 3-14.
- .2014c.「浜松市における多文化子ども教育フォーラムとバイリンガル絵本プロジェクト—移住第2世代の活躍に焦点をあてて—」『国際人流』27(6): 4-11.
- 池上重弘・イシカワ エウニセ アケミ・立入正之・古田祐司.2009.「ブラジルの中の日本、日本の中でのブラジル—写真で見る100年、過去から未来へ—」『静岡文化芸術大学研究紀要』10: 45-56.
- 池上重弘・上田ナンシー直美.2015.「ブラジルからの移住第2世代とバイリンガル絵本プロジェクト—浜松市における静岡文化芸術大学の試み—」『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要』9: 59-69.
- 池上重弘・広瀬英史.2014.「地域の国際化と多文化共生」静岡文化芸術大学10年史編集委員会『静岡文化芸術大学10年史』平凡社, 216-227.
- 池上重弘・宮城ユキミ.2014.「Festa Julina na SUAC」『文化と芸術』(文化・芸術研究センターニュースレター) 20: 3
- イシカワエウニセアケミ.2008.「『日本の記憶』と『ブラジルの記憶』—日系ブラジル人のアイデンティティ—」『Quadrante: クアドランテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』10: 177-186.
- .2015.「ブラジルと日本間のトランスナショナル・マイグレーション: 移動する子どもたちへの教育の影響」『静岡文化芸術大学研究紀要』15: 1-8.
- 伊藤悦子・富永優花.2011.「日系ブラジル人高校生のアイデンティティと進路選択—『特色ある公立高校』とブラジル人学校の比較—」『京都教育大学紀要』119: 179-194.
- 乾美紀.2008.「高校進学と入試」志水宏吉『高校を生きるニューカマー 大阪府立高校にみる教育支援』明石書店, 29-43.
- 江淵一公.2002.『バイカルチュラルイズムの研究—異文化適応の比較民族史—』九州大学出版会.
- 太田晴雄.1996.「日本語教育と母語教育—ニューカマー外国人の子どもたちの教育課題」宮島喬・梶田孝道『外国人労働者から市民へ』有斐閣, 123-143.
- .2000.『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 太田晴雄・坪谷美欧子.2005.「学校に通わない子どもたち—『不就学』の現状」宮島喬・太田晴雄『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会, 17-36.
- 御館久里恵.2010.『地域日本語教室における外国人支援者の存在意義とかれらの「語り」に関する研究』平成20-21年度科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号20720139).
- .2011.「外国にルーツを持つ子どもの支援活動に参加する渡日経験者の語り—かれらのライフコースと支援活動における当事者性—」『異文化間教育』33: 115-126
- 落合知子.2007.「多文化共生のための媒介力: NPOによるニューカマー支援に携わるボランティアに関する研究」『多文化関係学会』4: 15-32.
- .2010.「外国人青年がホスト社会にもたらす気づき—表現活動における発話分析—」『多文化関係学』7: 123-135.
- .2011.「表現活動を行う外国人青年に関する研究—ライフストーリー分析を通じて—」『多文化関係学』8: 3-15.
- .2012.『外国人市民がもたらす異文化間リテラシー—NPOと学校、子どもたちの育ちゆく現場から』現代人文社.
- 鏡田綾乃・池上重弘.2009.『ブラジル人大学生と高校生との座談会: 移民パネル写真展の関連イベントとして』静岡文化芸術大学.
- 鍛冶致.2011.「外国人の子どもたちの進学問題—貧困の連鎖を断ち切るために—」移住連貧困プロジェクト『日本で暮らす移住者の貧困』移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 38-46.
- 久米昭元.2011.「多文化社会としての日本」多文化関係学会『多文化社会日本の課題—多文化関係学からのアプローチ』明石書店, 9-16.
- 国際カリキュラム研究会.2007.『平成18年度文部科学省「外国人教育に関する調査研究」委託研究報告書 外国人労働者の子女の教育に関する調査研究(3) 日系外国人児童生徒を対象とする「学校」の現状と課題に関する調査研究』群馬大学教育学部結城研究室内.
- 児島明.2006.『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- 小島祥美・中村安秀.2006.「外国人の子どもたちの就学状況に関する変動—パイロット地域・岐阜県可児市における実態調査から」『移民研究年報』12: 166-177.
- 小林芽里.2011.「多文化は豊かだ、というメッセージとともに—浜松のN-Pocketの実践から」『月刊社会教育』55(7): 36-41.
- 近田由紀子.2015.「地域社会とつながり、地域社会をつなぐ大学の

- 役割 池上重弘さん(静岡文化芸術大学 教授) 齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子.2015.『外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み—』くろしお出版, 247-250.
- 齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子.2015.『外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み—』くろしお出版.
- 齋藤ひろみ.2015.「グローバル人材の育成と子どもたちの支援 堀永乃さん(浜松国際交流協会・一般社団法人グローバル人材サポート浜松)」齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子.2015.『外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み—』くろしお出版, 242-246.
- 佐久間孝正.2006.『外国人の子どもの不就学—異文化に開かれた教育とは』勁草書房.
- 桜井厚・小林多寿子.2005.『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房.
- 佐藤郡衛.2010.『異文化間教育—文化間移動と子どもの教育—』明石書店.
- 志水宏吉.2001.「問題としてのニューカマー」志水宏吉・清水睦美『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店, 11-30.
- .2008.「ニューカマーと日本の学校」志水宏吉『高校を生きるニューカマー 大阪府立高校にみる教育支援』明石書店, 12-28.
- 志水宏吉・清水睦美.2001.『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店
- 清水睦美.2006.『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界』勁草書房.
- 清水睦美・児島明・家上幸子.2007.『『当事者になっていく』ということ(前編)』『東京理科大学紀要 教養篇』40 : 219-236.
- .2008.『『当事者になっていく』ということ(後編)』『東京理科大学紀要 教養篇』41 : 249-266.
- 新藤慶・菅原健太.2009.「公立学校に通うブラジル人児童・生徒と保護者の生活と意識」小内透『在日ブラジル人の教育と保育の変容』講座 トランスナショナルな移動と定住 第2巻—定住化する在日ブラジル人と地域社会 御茶の水書房, 3-34.
- 関口知子.2003.『在日日系ブラジル人の子どもたち—異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店.
- 高谷幸・大曲由紀子・樋口直人・鍛冶致・稲葉奈々子.2015.「2010年国勢調査にみる外国人の教育—外国人青少年の家庭背景・進学・結婚—」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39 : 37-56.
- 田村太郎.2012.「多文化共生のまちづくり～外国人パワーで地域を豊かに!」『国際文化研修』75 : 6-11.
- .2014.「都市問題としての多文化共生—外国人とともに創る地域の未来」『都市問題』105(5) : 52-60.
- 恒吉僚子.1996.「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久・久富善之『学校文化という磁場』講座学校6 柏書房, 216-240.
- 津村公博.2013.「デカセギ二世世代の市民性形成への萌芽—二世世代による実践共同体—」松尾知明『多文化教育をデザインする—移民時代のモデル構築』勁草書房, 209-230.
- 拝野寿美子.2010.『ブラジル人学校の子どもたち「日本かブラジルか」を超えて』ナカニシヤ出版.
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘.2005.『社会学小辞典[新版増補版]』有斐閣.
- 浜松市企画部国際課.2004.「地域共生の実現に向けて」『自治体国際化フォーラム』179 : 9-11.
- 松岡真理恵.2010.「多文化共生のとびら 多文化教育ファシリテーターの養成と外国にルーツを持つ若者・TCKのエンパワメント」『自治体国際化フォーラム』250 : 16-18.
- .2014.「多様な浜松市民とつくる未来の社会」『月刊自治研』56 : 45-49.
- 宮城ユキミ.2014.「きっかけと今—自分のルーツに誇りを持って—」『国際人流』27(6) : 19-21
- 宮島喬.1999.『文化と不平等』有斐閣.
- .2002.「就学とその挫折における文化資本と動機づけの問題」宮島喬・加納弘勝『変容する日本社会と文化』国際社会2 東京大学出版会, 119-144.
- .2014.『外国人の子どもの教育 就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会.
- 宮島喬・太田晴雄.2005.『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会.
- 山口祐子.2004.「浜松市におけるNPOの試み」駒井洋『移民をめぐる自治体の政策と社会運動』講座グローバル化する日本と移民問題第Ⅱ期第4巻 明石書店, 127-150.
- 山脇啓造.2004.「現代日本における地方自治体の外国人施策」内海愛子・山脇啓造『歴史の壁を超えて—和解と共生の平和学—』法律文化社, 219-248.
- .2009.「多文化共生社会の形成に向けて」『移民政策研究』1 : 30-41.

- .2013a.「移民統合をめぐる欧州都市のネットワーク—ユーロ
シティーズとインターカルチュラル・シティー」『国際人流』
26(12) : 26-29.
- .2013b.「浜松市多文化共生都市ビジョン」JIAM メールマガ
ジン「多文化共生社会に向けて」(2013年6月26日)
<https://www.jiam.jp/melmaga/kyosei/newcontents75.html>
(閲覧日:2015年12月15日).
- .2013c.「国・自治体と多文化共生施策」吉原和男『人の移動
事典』丸善出版株式会社, 182-183.
- .2015.「長野県多文化共生推進指針」JIAM メールマガジン「多
文化共生の新時代」(2015年4月22日).
[https://www.jiam.jp/melmaga/kyosei_newera/newcontents1.
html](https://www.jiam.jp/melmaga/kyosei_newera/newcontents1.html) (閲覧日:2015年12月14日).
- 吉富志津代.2005.「少数者の発信活動に取り組んで—長田から世界
へ—」『ヒューマンライツ』202 : 8-13.
- 渡戸一郎.2010.「多民族・多文化化する日本社会—問題の所在とア
プローチの視点」渡戸一郎・井沢泰樹『多民族化社会・日本—
多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』明石書店, 13-30.
- Giddens, Anthony.1987.Social Theory and Modern Sociology.
US: Stanford University Press. (アンソニー・ギデンス.藤田
弘夫監訳.1998.『社会理論と現代社会学』社会学の思想① 青
木書店.)
- Wallman, Sandra.1984. Eight London households. London:
Tavistock Publications. (サンドラ・ウォルマン.福井正子
訳.1996.『家庭の三つの資源—時間・情報・アイデンティティ』
河出書房出版社.)
- 引用資料
- 外国人集住都市会議.「豊田宣言—外国人住民とともにつくる活力
ある地域社会をめざして—」
[http://www.shujutoshi.jp/siryu/pdf/20041029toyota.pdf#sear
ch=%E8%B1%8A%E7%94%B0%E5%AE%A3%E8%A8%8
0](http://www.shujutoshi.jp/siryu/pdf/20041029toyota.pdf#search=%E8%B1%8A%E7%94%B0%E5%AE%A3%E8%A8%80) (閲覧日:2015年12月5日)
- 公益財団法人浜松国際交流協会.「2013年2月10日 はままつグ
ローバルフェア 『若者企画』6」
<https://www.youtube.com/watch?v=WpTtemOFGX8> (閲覧
日:2015年12月3日).
- .2013.「若者企画アンケート」(2013年3月26日)
http://www.hi-hice.jp/j_report.php?pageno=7 (閲覧日:2015
年12月30日).
- .2014.『HICE 中期計画』
[http://www.hi-hice.jp/doc/aboutus/H26chukikeikaku.pdf#se
arch=HICE%E4%B8%AD%E6%9C%9F%E8%A8%88%E
7%94%BB](http://www.hi-hice.jp/doc/aboutus/H26chukikeikaku.pdf#search=HICE%E4%B8%AD%E6%9C%9F%E8%A8%88%E7%94%BB) (閲覧日:2015年12月3日).
- .「浜松市の外国人登録者数」2015-04-01.
http://www.hi-hice.jp/j_population.php?pageno=8 (閲覧日:
2015年12月24日)
- .「COLORS」活動紹介チラシ(平成27年6月24日現在).
産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会.2010.
『報告書～産学官でグローバル人材の育成を～』
[http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/20
10globalhoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf) (閲覧日:2015年11月20日).
- 総務省.2006a.「地域における多文化共生推進プラン」
http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b6.pdf (閲覧
日:2015年12月18日).
- 特定非営利活動法人浜松 NPO ネットワークセンター「映像ワーク
ショップ 2011年3月」DVD
- 特定非営利活動法人ボランティア支援ネットワークパレット.2009.
『平成20年度NPO協働推進フォーラム 県西部における多文
化共生の地域づくりにむけた共育(教育)』特定非営利活動法人
ボランティア支援ネットワークパレット.
- 浜松市.2013.「浜松市多文化共生都市ビジョン」
[http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/do
cuments/iccvision_jp.pdf](http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/do) (閲覧日:2015年12月18日).
- .『外国人登録国籍別人員調査表』(各年版).
- .『外国人国籍別人員調査表』(各年版).
- .『町字別世帯数人口一覧表』(平成24年1月～平成26年12
月1日).
- 浜松市企画調整部企画課.2015.『浜松市総合計画』
[http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/totalplan20
15/documents/zenpen.pdf](http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/totalplan2015/documents/zenpen.pdf) (閲覧日:2015年12月18日).
- 浜松市企画部国際室.2001.『浜松市世界都市化ビジョン～技術と文
化の世界都市・浜松へ』浜松市企画部国際室.
- .2008.『浜松市世界都市化ビジョン Hamamatsu City A
Grobal City Vision Cidade de Hamamatsu Plano de
Globalizacao』浜松市企画部国際室.
- 浜松市教育委員会.「浜松市教育委員会 視察資料」(2015年5月
15日).
- 浜松市総務部文書行政課統計グループ.「1.人口・世帯数の概要」
平成26年浜松市の人口

http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/gyousei/library/1_jinkou-setai/documents/h26_gaiyou.pdf (閲覧日: 2015年12月20日).

浜松市立高等学校. 「平成28年度 インターナショナルクラス選抜実施要領」
<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/ichiritsu-h/sub-menu/sub/zyukennsei/2016-inc-zissiyouryou.pdf> (閲覧日: 2015年12月2日).

ベネッセ教育総合研究所. 「外国にルーツを持つ子どもたちが直面する就学問題」フォーラム 静岡文化芸術大学 池上重弘教授編
【 後 編 】
http://berd.benesse.jp/special/co-bo/co-bo_theme1-6.php (閲覧日: 2015年11月12日).

法務省. 『在留外国人統計』各年版.

The TOKAI Branch of the “GAIJIN”(企画製作),(特)浜松 NPO ネットワークセンター(編集協力).2014.『多文化わかものカンファレンス 2013～「多文化×教育」の未来を創造する～』(平成25年度 浜松市「みんなのはままつ創造プロジェクト」事業).

参考文献

今井貴代子.2008.『「今ここ」から描かれる将来』志水宏吉『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援』明石書店, 182-197.

岩淵功一.2010.「多文化社会・日本における<文化>の問い」岩淵功一『多文化社会の<文化>を問う 共生/コミュニティメディア』青弓社, 9-34.

小笠原美喜.2015.『「多文化共生」先進自治体の現在—東海及び北関東の外国人集住自治体を訪問して—』『レファレンス』775: 109-126.

川上郁雄.2010.『私も「移動する子ども」だった—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』くろしお出版.

———.2014.「ことばとアイデンティティ—複数言語環境で成長する子どもたちの生を考える—」宮崎幸江『日本に住む多文化の子どもと教育—ことばと文化のはざままで生きる』上智大学出版, 117-144.

齋藤ひろみ.2009.「子どもたちのライフコースと学習支援—主体的な学びを形成するために」齋藤ひろみ・佐藤郡衛『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房, 251-265.

鈴木アリネ由香里.2014.「自分の可能性を信じて、国際人を目指す」

『国際人流』27(6): 17-18.

原田なほみ.2004.「外国人集住都市浜松における地域共生の取り組み」駒井洋『移民をめぐる自治体の政策と社会運動』講座グローバル化する日本と移民問題第Ⅱ期第4巻 明石書店, 45-67.

松岡真理恵.2011.『「協働の場」を通して形成される専門性—外国人集住地区でのコーディネート実践から』『シリーズ 多言語・多文化協働実践研究』14: 54-67.

村井忠政.2005.「自治体の外国人住民施策—東海地域における多文化共生の現状と課題—」武者小路公秀監修・財団法人名古屋国際センター(NIC)編集『財団法人名古屋国際センター設立20周年記念論文集 国際交流・国際協力・多文化共生活動の現状と課題』財団法人名古屋国際センター(NIC), 78-90.

毛受敏浩・鈴木江理子.2007.『「多文化パワー」社会—多文化共生を超えて—』明石書店.

山野上麻衣・林寄和彦.2007.「浜松市における外国人の教育問題と協働—カナリーニョ教室による不就学対策より」矢野泉『多文化共生と生涯学習』明石書店, 141-186.

吉富志津代.2012.「地域社会の『豊かさ』を考える—多文化共生をめざす活動現場から—」『計画行政』35(3): 21-26.

参考資料

一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR/クレア)多文化共生事業事例集(CLAIR 助成事業)「公益財団法人 浜松国際交流協会 多文化教育ファシリテーター養成とプログラム開発事業—『多文化なわたし あなた みんな』—」
<http://www.clair.or.jp/j/multiculture/shiryou/docs/16.pdf> (閲覧日: 2015年10月4日).

一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR/クレア)多文化共生事業事例集(CLAIR 助成事業)「公益財団法人 浜松国際交流協会 ミックスルーツが地域を変える! 様々なルーツを持つ若者たちによる文化創造事業」
<http://www.clair.or.jp/j/multiculture/docs/hamamatsu.pdf> (閲覧日: 2015年10月4日).

一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR/クレア)多文化共生事業事例集(CLAIR 助成事業)「特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワークセンター『わかものたちの多文化共生全国交流会 2010』の開催」
http://www.clair.or.jp/j/multiculture/docs/23-8_sizuoka.pdf (閲覧日: 2015年10月4日).

磐田市ウェブサイト

<http://www.city.iwata.shizuoka.jp/shimin/kyoudou/teianjigyou.php> (閲覧日: 2015年12月15日).

株式会社ラーズ「Vol.25 いろはインタビュー(静岡文化芸術大学
教授 池上重弘先生 前篇)」

http://www.learn-s.co.jp/shop/irohanippon/int_025.aspx

(閲覧日: 2015年10月2日).

株式会社ラーズ「Vol.26 いろはインタビュー(静岡文化芸術大学
教授 池上重弘先生 後篇)」

http://www.learn-s.co.jp/shop/irohanippon/int_026.aspx

(閲覧日: 2015年10月2日).

総務省.2006b.「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域に
おける多文化共生の推進に向けて～」

http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf (閲覧

日: 2015年12月18日).

日本財団 図書館「浜松 NPO ネットワークセンター」

http://nippon.zaidan.info/dantai/228954/dantai_info.htm

(閲覧日: 2015年10月4日).

ベネッセ教育総合研究所.「外国にルーツを持つ子どもたちが直面
する就学問題」フォーラム 静岡文化芸術大学 池上重弘教授編

【 前 編 】

http://berd.benesse.jp/special/co-bo/co-bo_theme1-5.php (閲覧

日: 2015年11月12日).

図表

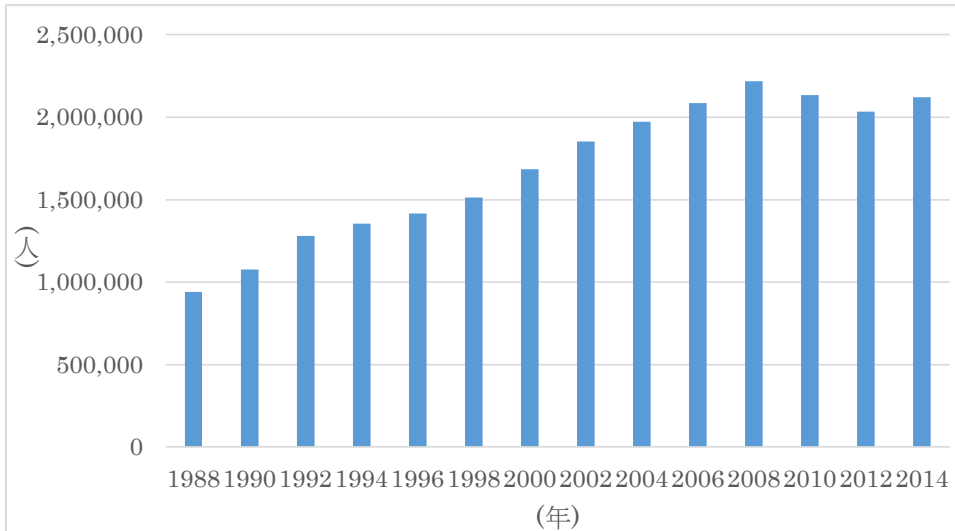


図1. 外国人総人口の推移『在留外国人統計』より筆者作成

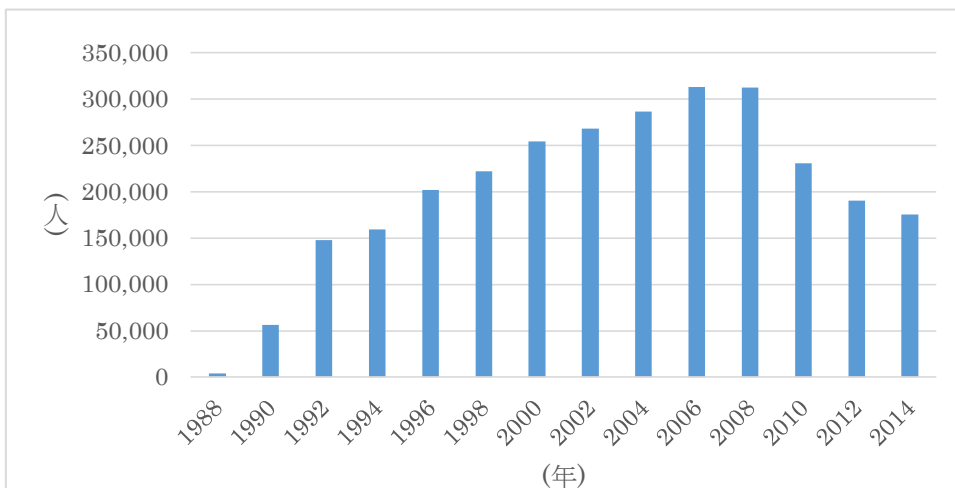


図2. ブラジル人人口推移『在留外国人統計』より筆者作成

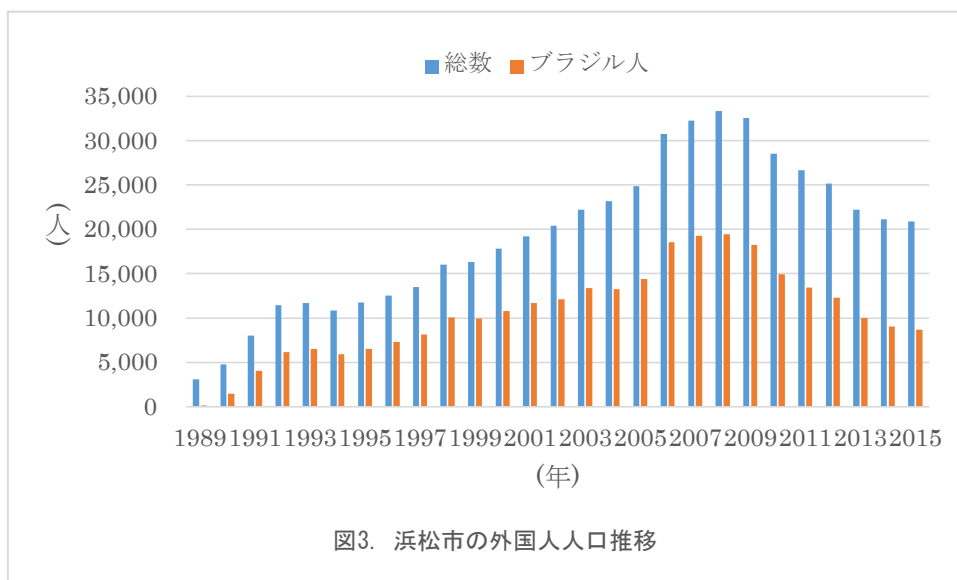


図 3 : 浜松市が作成している『外国人登録国籍別人員調査表』および、『外国人国籍別人員調査表』における各年の 3 月末現在のデータを使用している。ただし、2015 年については(公財)浜松国際交流協会のウェブサイトで公開されている「浜松市の外国人登録者数」内の 2015 年 4 月 1 日のデータを使用した。

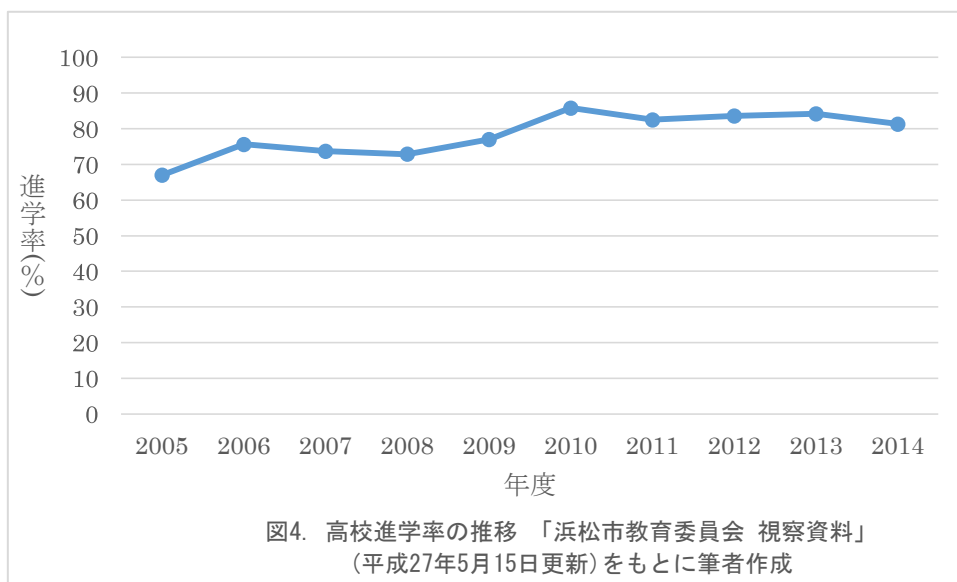


表 1 外国人総人口に占める永住権取得者の割合

年	総人口	永住権 取得者	比率
2006	2,084,919	394,477	19%
2008	2,217,426	492,056	22%
2010	2,134,151	565,089	26%
2012	2,033,656	624,501	31%
2014	2,121,831	677,019	32%

表 2 ブラジル人人口に占める永住権取得者の割合

年	ブラジル 人人口	永住権 取得者	比率
2006	312,979	78,523	25%
2008	312,582	110,267	35%
2010	230,552	117,760	51%
2012	190,609	114,641	60%
2014	175,410	111,077	63%

表 3 調査協力者のプロフィール

	仮称	年齢	性別	学歴	職業	滞日年数	移動経験	家族構成
1	A	20代	女	大学 卒業	就学 支援員	19年	伯→日	父、母、兄、妹
2	B	20代	女	大学 在学中	学生	10年	伯→日	父、母、妹、妹
3	C	20代	女	大学 在学中	学生	19年	伯→日→伯→日	父、母、妹、妹
4	D	10代	男	大学 在学中	学生	17年	日→伯→日	母、弟、弟、妹

【インタビュー資料】

目 次

はじめに	39
凡例	40
略称	40
A : 1 回目	41
A : 2 回目	56
B : 1 回目	68
B : 2 回目	93
C : 1 回目	106
C : 2 回目	127
D : 1 回目	138
D : 2 回目	166

はじめに

本研究では、発信するブラジル人移住第2世代を対象にライフストーリー・インタビューを実施した。ライフストーリー研究とは、調査する一人ひとりがインタビューを通してライフストーリーの構築に参加し、語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することである[桜井・小林 2005: 7]。したがって、語りの内容だけでなく、語られた状況やインタビューでの文脈も大切である。A、B、C、Dのそれぞれに日本語での半構造化インタビューをひとりずつ実施した。調査協力者の発言に応じて質問の順番を入れ替えたり、質問内容を増やしたりしたインタビューとなっている。調査は各々複数回実施しており、ひとりあたり合計約2時間の聞き取りとなっている。インタビューの際には、Aは喫茶店、B、C、Dは調査協力者の在籍する大学の個室を利用した。なお、インタビューは本人の了承を得て、ICレコーダーで録音し、逐語による文字起こしを行った。本資料は文字起こしを行ったものに、下記に記す凡例の編集を加えたものである。ライフストーリー研究は、調査者と調査協力者との間で語りや社会現象を解釈する共同作業によって成り立つという点を踏まえ、本研究ではインタビューを逐語で文字化したものを資料として添付する。

凡例

1. 筆者(調査者)が補った部分は、()内に表記する。
2. 語りに誤りがある場合は、(→)で矢印の後に正しい内容を表記する。
3. 本人の希望により、詳細を伏せた部分は、[]で示す。
4. 聞き取ることができなかった部分は、_____で表記する。
5. 動作については、< >内に表記する。
6. 「・」ひとつにつき、1 秒の間を表す。

略称

1. 公益財団法人 浜松国際交流協会：HICE
2. 公益財団法人 名古屋国際センター：NIC
3. 特定非営利活動法人 浜松 NPO ネットワークセンター：N-Pocket ; N ポケ
4. インターナショナルクラス：インター
5. ロジスティック部：ロジ部
6. 外国にルーツを持つ若者のトークイベント×音楽ライブ 可能性へ向けての **RESTART** :
RESTART
7. 第 5 回多文化子ども教育フォーラム～教育支援策をめぐって当事者学生が物申す～：物申す

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：A
- ・ 日時：2015年3月6日17時～18時30分
- ・ 回数：1回目
- ・ 場所：湖西市の喫茶店
- ・ 記録：59分9秒

■ 育ち(資源形成)

小学校

調査者：教育はどのような形で受けてきましたか？

対象者：小1の3学期から(日本の小学校に)入った。全然、あたし、(日本語に対して)これ何、という状態から。日本語ゼロから入ったから、そんな記憶ないんだけど。でも全然わからなくて、授業ぼーっと聞いてたなあっていうのを覚えている。ぼーっと聞いてて。でもまあ、別に嫌でもなく、でも皆優しくて面倒みてくれていたし、すごい先生も心配してくれて、ていう感じですよ。同じ学年には外国出身の子どもはいなかったです。別の学年はいた。でも、うんそう、上の学年に、1人いて、お兄ちゃんと同じ学年の子が一人いたんだけど、その子がたまに通訳してくれたりとかはしてくれて、はい。あたしが1年に入った時に6年に1人で、その人が通訳してくれて、その人が中学上がったから、だからお兄ちゃんと同じ年齢。2個上の子がもう1人いて、ポルトガル語と日本語両方わかっていたから、そのあと、その子が通訳してくれたりはして。2年はあまり記憶にないですけど、そうそう。2年の終わりごろには日本語結構わかってたなああって、という感じです。なんだろうね、今思うと、だよ。そんな時は全く意識なかったけど、今思うと、たぶん最初に入ってわからないのが当たり前？ただ写して、で、わからないまま過ごすのは当たり前だったから、日本語がわかるようになって、結構わからないことがあっても別に、そんなになんか、わからないのがダメなんだ、頑張ってわかるようにしなきゃっていう意識もなく、なんとなく過ごし、社会とかもね、言葉とかわからないっていても言葉わからないのがありすぎて、そんな調べる気にもねえ、ならなくて、ほんとただなんとなく、なあなあに過ごしていたって感じ。(日本語は)自然とだね、自然と。でもうちの学校一応取り出し授業はあった。その外国人の子を取り出して、その国語とか算数とかやっていた。

調査者：該当する時間になったら、取り出し授業でってことで。

対象者：そうそうそう、その教室で、わたしと、もう一人の子と一緒に勉強してた、ね。

調査者：いつまで取り出し授業があった？

対象者：でもそれ、小学校、小6まであった気がする。小学校の間はあって中学校になってなくなった。

調査者：まわりの友だちは教室に残っているけど自分は別の教室に行って別の授業を受けることに抵抗というか

対象者：いや、記憶にないです<笑い>。たぶんなかったと思います。記憶にないってことは、やってたなあっていうのしか覚えてないですね。

中学校時代の部活動

調査者：小学校の時に学校行くの嫌だなあって思ったことは何かあった？

対象者：<即答で>ううん、ない。中学校は嫌だった。なんでかという、部活が嫌いだった。なんでこんな厳しいのみたいな<笑い>。ソフトボール部だったんだけど、でも何、何だろう、ひとり誰かがさあ、何かダメなことをしたら、宿題忘れたとか、それでなんか、ねえ、教えてた人がなんか、じゃあ、もう、何、もう、みんなに全体、連帯責任だからっていうのがあって、みんなで行って頭下げて謝って、っていうのが意味が分からんって感じ<笑い>。

調査者：それは突っぱねることなくやってたの？

対象者：突っぱねることなく、素直にやってたけど、意味がわからん、もう嫌々みたいな感じ。

調査者：部活は3年間続けた？

対象者：でも結局、わたしが中1の時は妹がまだ小さかったから、8個離れているから、だから、あたしが中学校のとき、妹何歳だ？8(歳差)だもんで、6歳？ちょうど小学校に上がるときで、親も2人とも働いてて、で、妹が独りになるから、早く帰ってきてって言われて、まあ、部活は早めに切り上げて、妹を迎えに行って、一緒に帰ってたから結局は中途半端。やめなかったけど、そんなにしっかり出てない。

調査者：でも、出るときはしっかり出ていらっしやった、

対象者：うん。

調査者：その時は部活のまわりのメンバーとは特に問題もなくですか？

対象者：うん。

高校受験

調査者：中学で勉強も難しくなってくる

対象者：うん、なあなあに勉強してきて痛い目にあったのが中3で、中3になってみんなが高校受験モードになって、今まで全く意識してなかったけど、勉強しなきゃまずいんだこれと思って、勉強し始めたら、何もわかってないことに気が付いて、そこから勉強し始めたって感じ。

調査者：受験関係については学校の先生から、受験だから、高校受験があるという話は？

対象者：でもそれ、話していたんだろうけど、全然、意識してなくて、ほんとに周りのその空気が変わり始めたころから、あ、そんなやばいんだって、高校受験ってという実感して、勉強し始めた。

調査者：その実感はいつしたんですか？

対象者：ほんと中3の夏休みの部活が終わって、勉強しなきゃっていう雰囲気になった頃。

調査者：今だったら、地域のNPOとか、市の関係で日本語教室とか学習支援教室をやってるわけだけど、そういったところでは何か行かれていたりとかは？

対象者：全然、全然。学校以外のそういう、何、勉強するところに行ったことない。

調査者：塾行くとかも特になく？

対象者：ない。

調査者：自分で勉強を進めていた感じ

対象者：そう。

調査者：学校の先生に質問して回ったりとか？

対象者：でも、そう、そうだね、わからない時は先生に聞いたりとかはして、うん。

調査者：先生の対応はその時しっかり？

対象者：うん。自分で問題集買って、勉強してたって感じ。

将来の目標

調査者：小学校中学校の段階で目標だとか、将来こういうことをしたいとか、こういう夢があったとか、ありましたか？

対象者：いや特になくて、特定したものはないけど、小学校ね、日本語が分かるようになってから、わたしが高学年になってもっと低学年にブラジル人の子が入ってきたりとかして、逆にあたしが通訳で行かされることとか何回かあって、だからなんか、漠然と？ほんとあたし、ブラジルにいたときは、あたし小さいときから歯医者になりたいってずっと言ってたの。でも日本に来て、で日本で日本語もわからないし、勉強もできないし、あっちでは成績よくて、こっちきたら成績いいも何も、外国人は(成績が)つかないし、自分はわかってないし、もう歯医者なんて無理だろうなっていうのは何となく子どもなりにわかってて、歯医者とかいうのをいつの間にかやめてて、高学年になったら、何となく、漠然と、まあ将来はそういう日本に住む外国人のために役立つものをしたいなあっていうのは言ってた。けど、具体的にこうしたい、ああしたいっていうのはなかった。

調査者：それは下の学年の子どもたちに通訳するようになってから思った？

対象者：そうそうそうそう。

高校生活と進路選択

調査者：高校生になって、その思いに変化はあった？

対象者：でも高校生になって、そんな強く思ってたけど、高校も何となく、まあとりあえず、高校ってなって、その後ねえ、高校でY高だけど、特進クラスがあって、で普通クラスに入って、高校のレベルが低いから<笑い>、その勉強、中学校で分からな

くて、最後必死になって勉強したところを、高校ではすごい、なんかレベルが低いから先生たちがすごい分かりやすく、こう説明してくれて、それで結構勉強が分かるようになって、クラスの中で、こう上位の方に入っていて、それで特進の先生に声かけられて、2年生から特進来ないかって言われて、別に自分それを考えたことなかったんだけど、Y高ふつうはねえ、仕事、普通クラスは仕事で、特進は大学行きたい人じゃんね、大学は考えたことなかったの、でもその先生に「特進来ない？」って言われて、ちょうどその時に、特進クラスにいたあたしの友だちが、なんか結構女の子たちのなかで仲が悪いみたいな、自分ひとりみたいな感じで言ってたから、「うーん、じゃあ入っていいですよ」、みたいな感じで、それが友だちがきっかけで、入って、そこから大学ね、行く人たちのクラスだから、その先生説得力があって、わたしがポルトガル語と日本語できるから、もし、で英語が好きだったから、「英語やれば、なんか将来ステータスだよ」、みたいなことを散々、なんか言われて、それで、ああ、じゃあやってもいいかな、みたいな。で、それで大学考えるようになった。

- 調査者：大学決めるきっかけ、こういうことを学びたいからこういう学部に行こうみたいな、
- 対象者：そう、英語が好きで、英語話せるようになればいいなあとと思って、たまたま、そのX大学の、でもまあ、全然自分、大学、日本の大学がどういうものか、どういう学部があってどういう学科があってっていうのを全く知識がない、状態だし、親に聞いてももちろんわからないから、情報がない、じゃんね。だから友だちから言われたこととか、先生が言うことを聞いたりとかだから、そしたら、名古屋にX大学ていうのがあって、みてたら、英語だけじゃなくて、情報だとかいろいろやってるから、ちょうどうちの学校から推薦で行ける学校だったし、じゃあ、それでいいかなっていう超適当なく笑い。超適当な道を選んでいきましたけど<笑い>。
- 調査者：こういう職業に将来就きたいから、ではなく、英語が好き、英語が話せるようになりたいってことで、
- 対象者：そうそう。英語を話せたら、まあ一応ね、自分が元から思ってた外国人の役に立つてのは、まあ英語を話せたら、英語圏の人も助けられるしね、みたいな。後付の理由をつけてました<笑い>。

家族のスタンス

- 調査者：中には中学卒業したら働いてほしいという親もいるわけですが、大学進学するまでに、親であったり、家族の教育に対する理解、どういうスタンスでしたか？
- 対象者：でもなんか、もう、自分のしたいように、勉強したいんだったら、すればいいし、お父さんは本当にもう、何も言わないって感じで。お母さんは、まあ、ぜひ勉強を続けてほしいっていう感じ、だったかな。
- 調査者：自分が高校受験や大学受験するときも応援してくれた
- 対象者：うん。反対はしなかった。

調査者：高校生までで学校やめたいなと思ったことは？

対象者：ほんと中学校のその部活以外はない<笑い>。

地域社会との関わり

調査者：友だちやまわりの人間関係もよく？

対象者：うん、そう。逆にたぶん、ねえ、Zね、小さいまちだけど、外国人も少ないし、それが逆によかったのかなあと。近所の人たちもあたしたちのこと知ってて、A と言えばあそこの家みたいな感じで、近所の子を結構なんかこう、ね、まち全体で子どもたちをみている感じだから、応援してくれているみたいな。心配してくれたりとか、いつも声かけてくれたりとかも、学校まではねえ、あいさつするのは当たり前みたいな環境だから、それがよかったかなあって思います。

外国にルーツがあるということ

調査者：外国にルーツがあってよかったことを教えてください。

対象者：うーん、でも今も結局、そのルーツがあったから、今のその外国人の役に立ちたいという思いがあったし、今の仕事につながったから、結局それがなかったら、今わたしはないし、わたしの今の仕事はないし、今子どもたちにやってあげている支援はできなかったから、もうそれがよかったかなあ。

調査者：外国にルーツがあって大変だったことを教えてください。

対象者：大変だったこと？でも、結局、あたしはお父さんは日本で生まれて、ほんと幼いときにブラジルに渡っているのね、お父さんの祖父母は日本人だし、お父さんも日本で生まれたしお父さん日本人なの、でも育ったのはブラジルだから、考え方もブラジルじゃんね、でも日本で生まれているから日本の国籍。あたしたちはその子どもだから、一応日本国籍もらっているの。だから、書類上は日本人。でも、自分のことを日本人と思ってないけど、書類上日本人なのに、こう、なんか手続き行ったりとか、なんか、こう、ハローワークとかでもさ、外国人と日本人のね、分けられるじゃない、それでまあ一応書類上日本人だから、そっちに行くと、いやあなたはあっちみたいな感じで、もう見た目でね、やられるときはもうなんか、めんどくせーってなります。

家族との言語

調査者：お父さんは血筋は日本だけど、ブラジルで育ったということで、言語はどういう？

対象者：お父さんはポルトガル語。

調査者：日本語は？

対象者：日本語話せる。けど、うん、わかるし、話せるけど、そんな。まあ流暢だけど、おじいちゃんおばあちゃんの日本語だから、こう、昔のみたいな。でももちろん、ポルトガル語の方が得意。

調査者：Aさんは家族と話すときは？

対象者：ポルトガル語。

調査者：妹と話すときは？

対象者：日本語。兄弟同士で話すときは日本語。親と話すときはポルトガル語。

移動の経緯

調査者：妹は日本生まれ？ブラジル生まれ？

対象者：いや、最初にお父さんがあたしが4歳の時に(日本に)来て、お父さんだけ日本に来て。

お父さんが1年おきにブラジル戻ってきて、だからあたし4歳のとき、だからあんまりお父さんの記憶なくて、1年に1回みるおじさんみたいな感覚だったの。でもあたしが6歳のときにお母さんも日本に来ることになって、ふたりで頑張って働いて2年ぐらいで戻ろうってなったんだけど、その2年の間にお母さんが妊娠しちゃって、しょうがなく、(日本に)いることになったから、あたしとお兄ちゃんも呼ぼうってなって、あたしとお兄ちゃんがおばさんと来て、やっと一緒になったって感じ。だから妹はずっと日本。

大学休学・就学サポーターと工場勤め

調査者：外国籍の子どもに対する活動は大学生になってから？

対象者：そうそう。休学してから。だからあたしの人生結構適当<笑い>。高校(→大学)もたまたま英語やりたい、英語話せるようになりたい、ここ推薦で行ける、OKみたいに決まり、大学入ってから、別になあなあと、楽しかったけど、全然。でも別に一生懸命なにかやりたいということもなく、休学したのも、大学費払えないってなって、私立だから高くて払えない、ああ、どうしようって思って、とりあえず休学して働くかってなって、休学して、でもせっかく働くだったら、ポルトガル語を話せるけど、そんなに、上手じゃなかったし、読み書きもね、忘れてるし、でもまあだから生かせる仕事ないかなあって探してたら、本当は浜松市の浜松の母語支援員の仕事があって、それに応募したの、朝から昼までだったから、というか15時までだったから。でもあたしの事情を話したら、1年限定、休学1年間限定だったから、「1年はちょっと」と言われて、「5年はやってほしい、5年間の契約だから」って。「よかったらサポーターって言ってその、午前中だけ、8時から12時までの仕事だったらあるよ」って言われて、「じゃあそれでいいです」ってなって、それで初めて、その直接本当に外国人のための仕事みたいな、をすることになって。それで小学校でまあその、8時から12時の間に通訳として入ることになって、元から子どもは好きだったから、それで外国人の子どもたちと関わって、勉強、日本語を教えたりとか、彼らの悩みを聞いたりとか、親の通訳をしたりとか翻訳したりする中で、わたしの経験を話すと彼らは、ね、似たような経験を持っていたりだとか、似たような気持ち持っていたりとかして、「将

来 A 先生みたいになりたい」とか言う子が出てきて、ああ、こうやって活かされるんだあって思い始めてから、そういう活動に興味が出てきて、そこから HICE の活動とかも、なんかその講座を受けたりとか、名古屋の方のね、国際センターで講座受けたりとか、もっと勉強しようってなって、外国人の子どもたちの教育の現状とか支援の仕方とかを勉強し始めたって感じ。そこから始まって今に至ると、長い<笑い>ね。1 年目が、学校で働いて、子どもたちのいろんな問題とかをいろいろ勉強して、でも何、まあ子どもたちの親みても皆工場だし、あたしのブラジル人の友だちとかみても皆工場で、彼らがいつもあたしになんか、その何、「あんたは大学とか行ってそんな楽な生活してるから俺たちの気持ちわからないだ」みたいなこと言ってたりだとか、まあ親も大変だから、いろいろこう、家庭でできないんだろうなっていうこともあって、わたしなんか勉強とか考えるとかは苦手だから、体験しないとわからんもんで、結局 1 年休学して 1 年働いただけでは学費稼げんかったし、だから 2 年目はじゃあ工場で働こうと思って工場で働いた。

調査者：工場では 1 年間働いた？

対象者：そうそうそう、2 年目は 1 年間工場で働いた。

目標の明確化

調査者：実際に働かれて、復学されて自分に変化があった？

対象者：変化、まあ、うーん、結局自分でねえ、何だろう、結局、もう休学してその子どもたちの支援に関わって、そこがあたしのなんていう、目標ていうか、もうメインがそこになったから、全てあたしのやることは全部そのため、みたいになった。だからそのね、休学 1 年目も学校で働いて勉強したし、工場行きながらもその講座とかいろいろ活動とかをしてたし、工場実態もね、結局自分の体験経験のためも含め、お金のためでもあったけど、もちろん。でもそれもあり、復学したら、1,2 年(生)は適当に大学行っていただけで、復学したらやっぱり、その教育？一番彼らに関われるのはやっぱり学校の現場かなあってとりあえず思ったから、教育の授業とか取り始めて、せつかくね、自分でお金を稼いで行ってる大学だから英語もちゃんと身につけなきゃって思って結構必死で。今度はちゃんとね、目標を立てて、授業もちゃんと出て、勉強してたって感じ。

調査者：働いた 2 年間の経験で自分のやることははっきりしたと。

対象者：そうそう。結局彼らのためにどういう立場の人がどういう風にやればいいのかっていうのがはっきり未だにね、出てないと思うんだけど、いろんな人が関わってる中でだと思ってるから。だからでも結局はやること全ては、ね、彼ら子どもたちのことを考えてって感じになった。

自分の歴史

調査者：自分の歴史、家族の歴史を学ぶ機会がありましたか？

対象者：たぶんそういう HICE か何かの発表のときに自分の生い立ちを発表するときに聞いた
<笑い>。

調査者：それは自分じゃなくて別の人の発表の時？

対象者：違う違う。あたし自身が発表することになって、それがきっかけで、なんでお父さんはブラジルに行ったのって聞くきっかけになった。それまでは別に聞いたことなかった。

調査者：それを聞く前と聞いた後では自分自身何か変化がありましたか？

対象者：変化はないけど、お父さんてすごい苦労してるんだねって。昔の話を聞いて、なんか、まずブラジルに渡った時も、ねえ、祖父母が移民したときも、日本にいた時に約束されていたことも全然違っていたり、本当にすごい、お父さん兄弟がもうめっちゃくちゃ 11 人いるんだけど、もう約束されていたことと違ったから、でも頑張ってるんで、自分にももうそこで、何、畑みたいな？とこに呼ばれたんだけど、でも全然お金払ってくれないし、もう奴隷みたいな扱いだっただから、親戚がサンパウロにいて自分たちが仕事ができるまで住ませてもらおうって、でも親戚の家の倉庫にこう子ども 11 人と祖父母がまとまって暮らして、でもまだ子どもだけ、もう皆で手伝って、かまぼこを作って売っていたんだって。その時は結構何か、それでなんとか生計を立てたけど、でもどんどん工場ができて、機械化されて、今度はバーを作っていろいろやりながら、お父さん子どものうちから働きながら家族を手伝いみたいな話を聞いて。苦労してたんやなあって思って。

今の自分がある理由とブラジル人ぽくなりたい自分

調査者：いかにして今の自分があると考えていますか？

対象者：うーん。何だろうね。いつ変わったんだろうわたし。何だろうなあ。いつだろうなあ。結構、ブラジルにいたときは結構どっちかっていうとおとなしかったし、なんか皆によしよしされるぐらいだったけど、日本来ると目立つじゃない？外国人だから。それがいつの間にか、なんか目立つのは嫌って思ってもしょうがないから目立つの好きになろうみたいな感じのそういうチェンジをするようになったのがいつかあったんだけど、いつかはよくわからん<笑い>。小学校のときかな、小学校だったと思う。だからなんかこうねえ、言ってもしょうがないしみたいな感じで考えるようになったのが、どっかであって、でもまあそれは考え方の違いでしょ？でも結構大学入ってから、でもまあ小中高の友だち、あたしがブラジル人っていうことを言うとか意識させられることとか全然なくて、大学に入ってから、X 大だったから結構みんなからしたらこう、「すごい、ハーフなんだあ」みたいな、みんな外国好きな子たちがねえ、やっぱり英語科に入るから、すごいブラジルに興味津々で聞いてくれたり、同じクラスにちょうどなんか、中国のルーツの子がいて、その子とすごい仲良くなって、ふたり

いても、ブラジルルーツ中国ルーツで、なんか少人数で英語で話すクラスとかあっても、そこだけすごいインターナショナルみたいな感じがあったりして、それがすごく楽しくて、それであたし大学入るまではブラジル人の友だちあんまりなくて、でもブラジル人の友だちもほしくて、それでいろんな子に出会うきっかけとかあって、そこから、大学からかなあって、今の自分が出来始めたのは。

調査者：大学入るまではその時の自分嫌だなあという思いがあった？

対象者：嫌だなあっていうよりかね、高校になって、特になんか、自分の高校があんまり好きじゃなくて。なんでかって言うと、そのまず特進入ったのが友だちがねえ、女の子と一緒に仲良くやれていないとか、いじめられているとか言ったから入ったんだけど、まあ実際そうで、なんかひとりボスみたいなやつがいて、こいつとしゃべるなって言ったらなんかもうしゃべらないみたいなとかあって、くだらねーって見てて、っていうのがあったり、他のクラスは普通クラスはなんか、特進はすごい勉強するからなんだあいつらみたいなそういうくだらんことしてたり、いや、くだらんみたいにずっと見ていて、男女意識したり、ねえ、しててさ、でもそこで一人だけブラジル人の友だちがいて、その子はブラジル人学校行って、その子の話を聞くとほんと男女関係なく、皆仲良く友だち友だちわいわいしてたりとかでブラジル人の集団とかをよく遊んでいるのを見てなんか、楽しそうやなあって思って、でも自分はそういうのなくて。だからあたし結構皆あたしブラジル人って言ってもなんか、みえないとか言われたりとかして、特に高校のときは。だからなんで、何が違うんだろうとかずっと思ってて、何がなんか雰囲気とかでもね、なんか外国人てわかるけど、ブラジル人には見えないって言われて、何かええ、何が違うのかなあって。もっとブラジル人ぽくなりたいなあって思う、思っているいろいろ悩んでた時期はあった。

調査者：日本人になりたいってことではなく？

対象者：そう、ブラジル人ぽくなりたかった。

調査者：ブラジル人として見られてないのが自分としては嫌だったということ

対象者：そうそう。でも、日本人からしたら外国人だし、ブラジル人て思われるかもしれんだけど、ブラジル人から結構、ブラジル人てパッと見てすぐブラジル人やなってどんなに日本人の顔でも、日系の人でもあたしより日本人ぽい顔してるのになんであの人にはブラジル人てわかって、あたしはわからないんだってずっと思ってて、雰囲気？なんで、なんなん？みたいな感じでなんか、嫌やなって感じ。

調査者：ブラジルにいた時はおとなしくて、日本に来てから目立つことに抵抗はなかった？

対象者：抵抗、でもまあ本当に、なんか環境はね、まわりの人たちは優しくかったから、嫌だじめるとかはなかったんだけど、やっぱ、でもやっぱ、子どもだからさ、彼らからしたら、「なんでAだけ肌黒いの？」とか言ったりとかあって。「ううん、そんなこと聞かれても」、みたいな感じで、あって。

調査者：それはやっぱり嫌だった？

対象者：嫌だって思ったことはない。でも、家帰っても。お母さんが、お父さんとお母さんが結婚はお父さんの家族が反対したの、なんか日系は日系で結婚するみたいな時代だったから。だからそこを反対されて、お母さんも結婚反対されていたのを未だに気にしてるていうか、まあ、そういうのもあって、トラウマか知らんけど、小学生のわたしに対して、「日本人はブラジル人のこと好きじゃないからね」みたいな、黒人とか好かれるからねみたいな散々聞かされていたから、わたしはずーっと、ああ日本人はわたしのことなんかそういう風にならね恋愛対象として好きになることは絶対ないんだなあっていうのをなんとなく一く思っていた。別にまあ、その、そういうなんとなくお母さんに聞かされていたから、そうなんだって思ってたただあただけで、それで苦しいとかじゃなくて、あ、そうなんだみたいな感じであきらめ、普通にあきらめてたって感じ。

活動と同じ境遇の人

調査者：大学生になってから活動をするようになったわけですが、それまでにこの人みたいになりたいと思える人はいましたか？ロールモデル

対象者：同じ境遇でってことでしょ？

調査者：同じ境遇であってもなくても。

対象者：いや、別に特になくて、でも、その一番最初にそういう活動でそのあたしがねえ、講座受けに行ったりとか、勉強しに行ったりする以外でこう、話してみない？自分の経験、って言われたのが、たぶん HICE か何かのきっかけだったと思うんだけど、そこであたし一人じゃなくて、あと3人も一緒に、やるときに初めて会って、その彼らと一緒に、で、なんか同じ、ね、外国ルーツで子どもの時に来てて、でも自分のその何、経験を、もう散々いろんなところで話してきてる人たちだったから、すげーって思ったの覚えてる。

調査者：自分と同じ境遇の人がいる、話を共有することは安心するとか、そういうことはありますか？

対象者：ああ、でもそうだね、やっぱ、そう、それあってから思い出すと、やっぱ中学校とか、高校とかの時に、ね、わたしがもっとブラジル人らしくなりたいって思ってた悩みとか、その学校での友だち？とか、あと結構家で、その家の悩み、家庭の悩みがあったりしても、どうせ日本人の友だちしかなくて、日本人の友だちの家庭は全然環境が違うから話してもなあって思って、あの、相談しなかったりとかしたことが何度もあったから、その同じ境遇の子たちが、あたしがねえ、学生とか中学校とか高校の時に、いたらなんか相談もっと分かりあえたなあっていうのは、思う。

調査者：先ほど、ブラジル人学校の友だちがうらやましいという話がありましたが、自分もブラジル人学校に移ろうとは思わなかった？

対象者：ああ、ならない、だってあたし高3だったもん、その時。思ったことはないね、ブラ

ジル人学校っていうの。

■ 活動と自分

活動の理由

調査者：大学3年生から活動をされてて、その思い、活動される理由は？先ほどおっしゃっていた、外国籍の子どもたちのためにできることをしたいということによい？

対象者：そうですね。

調査者：きっかけも、話にあった小学校高学年の時の思ってたことがあって、実際に働くときに、じゃあやってみようって、

対象者：うん。でも、まあ、最初ねえ、休学して通訳の仕事し始めたのは、ただポルトガル語を生かしたかっただけだけど、ほんとに外国のね、子どもたちの活動を始めるきっかけになったのは、その小学校で出会った子どもたちがきっかけ。

活動と自己の変化

調査者：大学2年生までの自分と実際に活動をされている今では、気持ちの面での変化はあった？ブラジル人として見られない悩みとか。

対象者：そうだね、その活動だけがあってかは知らないけど、活動、休学してそういう活動するようになって目標ができて、子どもたちとか話をしたりとかいろいろ活動する中で、もちろんそれだけじゃないと思うんだけどね、でも大学戻っていろんな人と出会って、留学もして、てしてる、で、でも活動の中で同じ、ね、境遇の人たちとか、同じ悩みを持った人たちとかいろいろ話している中で、今比べて今の気持ち、今あたしの気持ち、思うと全然そういうの(ブラジル人とみられない悩み)もう気にしなくなった。もうどう見られてもどうでもいいって。ちゃんと自分を持てるようになったって感じ。AはAだしみたい。ブラジル人とか日本人とかっていう枠にはめられたくない自分。だから何人ってね、自分何人だと思いませんか？ってこう質問みんなにされるけど、その別に地球人みたい。うん、聞いてどうすんの？みたい。感じ<笑い>。っていうのをただ口だけじゃなくても、ほんとに自分でそう思えるようになった。

調査者：留学はどこに行ったの？

対象者：オーストラリア。

調査者：いろんな人たちが集まっている中に行った、

対象者：そうそうそう、行った。

調査者：その経験は大きかったですか？

対象者：大きかったね。やっぱり大きかった。たぶん。まあ、休学してからほんとまあ、今もそうだけど、どっぷり、こういう外国人の友だちの教育に関してのこととか教育だの子どもだの、うん、その心理だのにね、外国人の問題だのってどっぷりはまって、よ

く大学4年の後期に留学ぽんって行ってあっちではみんな、あたしの経験もやってきてることも知らない中で、で、その、ね、バックグラウンドも知らない中で、でもなんか、でもあの、いろんな国の人が集まって、まずあのなに、みんないろんな国だから、元はね、このコミュニケーションとれないはずが、英語があることによってコミュニケーションがとれているっていうその経験もすごい大きかったし、だからみんな日本語もってね、あの話せるようになればね、そんだけ楽しいことはないよって思う。ちゃんと説得できるようになったし、あとはなんか、ほんとにAっていう人間？そういうバックグラウンドとかブラジル人とか日本とか関係なくて、みんなはただほんとはそこらから出会ったあたし、Aっていう人間だけを知って、ね、こう一緒にいてくれて、そうそう、だからすごい楽しかった。こう完全に素って感じの。

調査者：どれぐらい行かれていたんですか？

対象者：4か月。

COLORS

調査者：COLORSの自分の中でどんな位置づけにありますか。

対象者：うーん。

調査者：参加しようと思ったきっかけは？

対象者：でも、まあ、元から活躍してるメンバーの中で名前がついたってだけだから、元はね。でも本当にHICEとかそういう活動するようになってもちろん自分にできることがあればね、なんでもOKみたいな感じで全部OKしてきたから、でもその中であたし以外にもね、こう継続的に、なんかしたいとかCとかBみたいなすげー、すごいやる気があってこうしたいっていう思いの子とやったのも、ね、刺激的だし、自分のためにもなるし、なんか、ね、こう一緒にやるのもね、すごい楽しいし・・・やっぱなんかそういういろんな合宿とかもね、何個か行ったけど、やっぱ、そこで一番得られるのは、みんなの活動とか見てて、あ、自分まだまだやな、もっと頑張らなきゃってこう、元気をもらえるところ、だからこういう活動を、COLORSとかもね、その仲間がいるっていうことがあると、こう、活動、こういう活動してると、やっぱもうどうしようもないのかなーって、諦めるしかないのかなーって思うときもあるけど、そういう仲間がいると、ちょっと心強い。

調査者：自分のために、という話がありましたけど、もう少し具体的に話すと？

対象者：自分の、何、エネルギー、元気をもらえるところ。あと、こう諦めずにこれを、活動がどんなにこう、解決策が遠く見えても、続けられる元気とパワーをくれるみたいな。

外国籍の子どもの日本社会への参加について

調査者：中にはブラジル人だったらブラジル人コミュニティの中で生活してて日本人と接点がないような状況もある。ブラジル人や外国籍の子どもたちが日本社会に接点を持つこ

とについて考えることを教えてください

対象者：うーん。環境で左右されているんだと思うけど。あたしの場合にはだって、(ブラジル人の)コミュニティでまず育ってないから、(日本社会に)参加せざるを得ないよね。でも、コミュニティで親もコミュニティ自分もコミュニティで育ってなんかそれが当たり前の子どもの時から当たり前で育ってれば、それがほんと当たり前になるし、親もやってることだから子どももね、親の背中を見て育つて言うから、まあそうなるよね、って思うけど、そんなことをずうっと続けてても、親と同じようなことしかできなくなるし、彼らの場合なんて、親は、ね、こう、ちゃんとブラジルで教育を受けてきて来た人も多いと思うんだけど、だからせめてポルトガル語はちゃんとできてるけど、今の子どもたちは、ポルトガル語もできないまま、学校でも勉強ちゃんとしないまま、なんとなく卒業して工場行って、ほんとに何もできなくて将来が、じゃあ工場であんたら仕事なくなったらどうするねんってなった時に生活していけないってなっちゃう時に、どうするのーって。あと人間性としてもねえ、ちゃんと自分を持ってないし、何も、もう考えなくてもここは卒業できちゃうし、こう何か自分のことについてとか自分のねえ、夢とかについて考えるきっかけもなく卒業して働き始める、でも働き口があるからね。働き口はある。ちゃんと勉強もなくても何もそういう、ね、このことについてあなたどう思いますかって言って、それに答えられない子でも、月に 20 万円もらってるっていうこの環境が、どうかなって。そういう人たちが今度は親になるからね、その子どもがどうなるんだよって。その子どもにどういう教育を受けさせるんだよって泣けてきます。

HICE や N-pocket などの活動する場について

調査者：HICE や N-pocket のような活動する場について考えていることを教えてください。

対象者：何かしたいときにサポートしてくれるから助かります。でも、できる活動はちゃんと目的があって、すぐに何か結果が出るものに限られるから、きっとそこじゃない気がするんだよね。必要なのは。それはそれで多文化共生に貢献してるかもしれないけど、でも本当に心配で、支援を必要としている人たちは、そういう国際交流協会とか講演会とかに参加しない。私の友だちらを見ていても、心配って思う人たち、平日は仕事し、週末は遊ぶ。飲みに行ったり、クラブに行ったり。その人たちが自分の週末を潰してまでそういうイベントに参加するというのは考えられないかな。でも本当はその人の考え方、その人たちが子どもを持った時にもっと教育に関心を持ってくれないと私たちの課題はずっと変わらないと思う。

調査者：それはどうしたらよいと思う？

対象者：結局、資金がなかったら何もできない。でも資金を提供してもらうためには、その活動によって何が得られるかというはっきりした結果を示さなければいけない。でもすぐ変わるものじゃないと思うんだよね。もっと縛りが緩くなれば活動しやすく

なると思う。

調査者：こういったアクターと一緒にやっていくうえで、資金面とか制約がある中で、意識の差、例えば、行政の施策は期間が決められている、今までやってきたけど、今年は急にやらないとか。そういったことについてはどう思いますか？

対象者：期間決めてさ、そういう日本語教室だとかさ、まあ、虹の架け橋とかもあったけど、これ何年とか言って、それまで通ってきた子たちは必要だから通ってきたわけじゃん。それがなくなったから行き場がなくなって支援がなくなって、いきなり支援がなくなっても彼らが困るだけであって、でも結局、もうそれじゃ、人数が少なくなったからとか必要ないというわけじゃないし、一人でも来てたら、その子にとっては必要なわけじゃん。だからすごい中途半端だなんて思う。

調査者：どうしたらよいと思いますか？

対象者：でもまあ、それもねえ、Bと話してたけど、結局行政とかそういう支援とかボランティアとかそういう資金とか頼っててもしょうがないから、もうちゃんとやるだったら、全部ね、ボランティアとかになっちゃうもんで、国の資金とか頼っちゃうけど、もう親に、ね、出せる人は出せばいいし、ビジネスにしていくしかないよねって言う風に考えている人もいる。

調査者：やっぱり継続性のあるものが必要、

対象者：そう。継続性のある形も必要だし、やるからにはちゃんと何が必要でこう、ちゃんとしたシステムがあるものじゃないといけないと思う。あたしの仕事も今支援員だけど、結構、通訳、翻訳、子どもたちのその母語による就学支援員だから授業の通訳したりとか説明してあげるんだけど、もう、基本言われて学校にポンって入れられて、でもそれぞれの学校やり方は違うし、担当の先生によっても、全然違うし、で、支援員自身の考え方にもって、全然違うし、でも支援員になるためにもポルトガル語と日本語ができてればなれちゃうから、テストがあるけど、筆記試験と通訳の試験があるけど、結局、ポルトガル語と日本語が話せませ、でも教育について何も関心がなかったりとか、子どもたちのそのね、心理的なさ、心のケアについて何も関心がない人たちがもしそこでなったら、またそこで全然違うし、そう、だから立場、その人の考え方によって全然違う立場になったりするから、それもどうかなあって。わたしは学校にいながら自分が一番こう、共通、共感しあえる立場な人は学校にいるスクールカウンセラーの人なの。スクールカウンセラーじゃないわ、スクールソーシャルワーカーの人で、結構そういう問題抱える人たちのこと見てる人なのね、で、あたしは、もう彼らの勉強よりもやっぱりそういうね、彼らの心のね、悩みとかの方が気になっちゃうから、すごい、その人と話をして一番近いんだけど、でも別にそれは仕事として言われているわけじゃないじゃん、あたしの考え方としてだから、だからその市はお金を出して通訳さんやっているけど、ちゃんとシステムもう一回考えた方がいいんじゃないかなって思う。ちゃんとそれぞれの役目、通訳って言っても、何を求めている

るのかをはっきりした方がよいと思う。子どもと関わって親と関わって学校と関わっているから結構重要なところだけど、そこら辺のこうしなきゃいけないとか、こういうこととしてはいけないとか言われたいのね、

調査者：支援員としての指針みたいなものがない、支援員の裁量で決まっちゃう

対象者：そうそう。だから元はたぶん、結局は通訳の目的はただ、学校側が困ってて、親とかとのやり取りが、こう好き放題やってるから、でもそれもコミュニケーション、言葉によっては伝えられない、じゃあ通訳を入れようって入れて通訳を入れたの、じゃんね。でももっとできることはあるし、子どもたちと関わってるから影響はすごいでかいし、でもその結局たぶん、一番最初の目的はそのトラブルさえなくなればいいっていう考えだから、そこしか、こう、じゃあポルトガル語とね、日本語できる人ってなって、そうするとそこコミュニケーションがとれる、トラブルが減る、終わり、じゃんね。でも結局実際、学校の中でやれることはもっともっとあって子どもたちにある意味一番近い存在になれるから、ほんともっとちゃんと考えを持った人たちにやってほしいなって。

■ エスニシティへの肯定感

エスニシティへの肯定感

調査者：自分のエスニシティ(ルーツ)への肯定感。1(低)～5(高)でお答え下さい。

対象者：<即答で>5です。

調査者：なんでそう思ってる？

対象者：ええ、自分大好きだからです<笑い>。

肯定感の変遷

調査者：物心ついた時からずっと一緒？

対象者：基本ね、ルーツを嫌と思ったことはないから、ブラジルのルーツあるのにブラジル人として見られないのが嫌だった。だから自分があたし考え方としては、自分の与えられたものとか環境とかをもってそれに合わせてこう、こう都合よく、こう、ね、よく思うようにするから、だからルーツがあるのにブラジル人として見られないのが嫌だったてことはルーツを嫌って思ったことはない。ブラジルはずっと大好きだし、ブラジル人の友だちもほしかったし、みたいな。そうそう。だから、ね、全然、嫌って思ったことはない。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：A
- ・ 日時：2015年11月9日16時～17時30分
- ・ 回数：2回目
- ・ 場所：湖西市の喫茶店
- ・ 記録：38分40秒

■ インタビュー

オーストラリア留学での経験

調査者：それでは、お願いします。

対象者：はいはい。

調査者：オーストラリア留学は今の自分にどのような影響をもたらしていると思いますか。

対象者：うん・・・オーストラリア留学ねえ。オーストリア行って一、やっぱり出会い？友だちとの出会いが、すごい大切だったんだよね。出会った人たちみんなが、いろんな国籍の友だちと出会ったんだけど、なんか、それぞれの人が何て言うんだろう、お互いがお互いを国籍とか宗教とか言語とか、そういうの関係なく、みんなその1人の人間として、お互いと接していて、で、その中にい(ら)れたことがすごい居心地よかったし、ただなんかみんな一緒に楽しみたいっていう気持ちだけでつながってたし、それが未だにその関係が続いているから、私にとっては心強いものだし、もう世界中そうなればいなって理想に思えるような場だった。

調査者：うん。そういう経験があったからこそ、留学から戻ってきて、今やっているような活動をされている？

対象者：それもあるし、そういう経験があったからこそ、なおさら自分らしさっていうものが確立されて、それがあからこそ、自身が持てるというところがあるし、こう、子どもたちにもっと自分らしさ、自分のアイデンティティに悩む子たちもいるけど、なんかそれをまわりにどう言われようと、自分が何が好きかとか、自分がまあ、どういう人間かを自分のために探す？自分のアイデンティティを追求する？っていうことを語れるようになったのかなっていう。前よりは説得力が持てるようになったのかなって思います。

大学1年生のクラス

調査者：はい。ありがとうございます。それで、話に移るんですけども、

対象者：うん。

調査者：大学時代の話で、前回お話を聞かせてくださった時に、その、英語クラスでの思い出であるとか、まわりの英語科の子たちから、こう、ブラジルに関心を持ってもらった

とか、「ハーフなんだ、すごい」っていう話をされたと思うんですけど、そういったようなことがあったのは、大学時代のいつのことになりますか。

対象者：うん。大学1年生。

調査者：1年生。

対象者：そう。1年生のメンバー。クラスのメンバー。

休学時の活動

調査者：はい。わかりました。それで大学2年生が終わってから、

対象者：そう

調査者：休学されて、

対象者：うん

調査者：休学されて1年目に就学サポーターをやられてて、いろんな気付きがあったって前回、

対象者：うんうん。

調査者：言われてて、外国籍の子たちが、こういう状況なんだとか、自分のある種なんていうか、こう自分の話をするとすごく役に立ったという話をしてもらったと思いますが、そういった気付きがあったから、こう、例えば HICE の講座とかに行くようになったっていう話をされていたと思うんですけど、それは(休学している時に)働かれて1年目に顔を出すようになったのか、仕事と同時進行でというか、

対象者：そう、同時進行だね。それで、働き始めて、で・・・HICE とは講座でバイリンガル教師っていう講座をやっているのをチラシで見て、で、それで自分のスキルアップのために受けに行って、そこで HICE とつながり、で、同時に同じ年、確か同じ年だったと思うんだけど、ま、関心持ったから、NIC の方の外国人児童サポーター養成講座っていうのも受けに行って、それは全部あの、休学の何、サポーターの仕事をやりながら、どっちの講座も同じ年に受けた。

調査者：2年目で、(就学)サポーターから今度は工場勤務を実際にやってみるってなって、その時もそういう関係のところ(HICE や NIC のような関係機関)に通っていた？

対象者：いや、その時は時間がなかったから、確か、そう、行ってなかったと思う。どっちもサポーターやりながらだったはず。

調査者：2年目は間が空いたって言うか、

対象者：そう。講座はやっていなかったけど、でもそこで講座をやっていたから、HICE と NIC とつながって、で、なんかそういう自分の経験語ってくれませんかという場を誘われるようになって、で、そこからちよいちよい？その、工場やっていた時も、年に何回か、こう、自分の経験を話す場があったり、そのサポーターやりながらもあつたりっていう感じだった。

調査者：それっていうのは、なんかこう、子どもたち対象なのか、もうそういうの関係なしにとりあえず話す場があつて、という感じで

対象者：1番最初はHICEからなんか、高校で国際交流で、国際理解だ、

調査者：あー出張の出前(講座)?

対象者：そうそうそう。で頼まれて、そこが1番最初、自分の経験を話す。ほんとにね、人前でね、自分の経験話してくださいって言われた機会がそれが1番最初で、なんかそれは高校生、高校何年だっけなあ。2年生かな、2年生かな・だったんだけど、そこで高校生に対して話をして、その後はでもあれだね、関係者(を相手に話すことが)が多い。子どもって言うよりも。その頃は。

家族の歴史について聴く機会

調査者：その、支援者とか

対象者：そうそうそう。関心ある人たちが、みたいなの。

調査者：それ話す時って、事前にこう、自分のことについて、例えば親御さんに聴くとか、こう、背景というか。自分が何でここで今暮らしているかとか、そういうのって聞いたりしました?

対象者：うん。あー、したね。

調査者：前から親御さんからそういう話聴いていたってということは、前回話してくれたじゃないですか、

対象者：いや、でもそういうの(自分の経験を話す機会)があって、そういう活動をし始めてからちゃんと聞いた。お父さんになんでブラジル行ったかとか。おじいちゃんおばあちゃんなんでブラジル行ったかとかっていうのは詳しくはそういう活動し始めてから初めて聴いた。

発信を聴いた反応

調査者：その、人前で話をするようになって、こう、その話を聴いた人たちのリアクションって何か返ってきたりとか、ありますか。その場で質問とか、コメントとかでも何でもいいですし。

対象者：うーん。いや、高校生たちは何だろ・何て言ってたけなあ。でも、まあ、「知らなかった」っていう反応はあったし、うーん・・同じ、高校生の中にも同じルーツの人たちもいたから、なんか「同じ経験してるんだあ」っていう反応があったりとか、反応してくれる子もいたし、・・関係者は関係者はやっぱりあれだよ、ね、「どうすればそういう風にできますか」みたいなく笑い>、質問をされたりとか。

調査者：他に活動されていたりしましたか。

対象者：でも、ほんとそのいつもどっかに呼ばれて、話しに行って、とか、あと、あの何かその、ブラジル人学校に、うーん、あたしがやった活動というか、ね、誰かがやっている活動のお手伝い、何か、その子どもたちと一緒に、あのフォトストーリー?

調査者：はいはいはいはい。

対象者：NIC もやってたけど、フォトストーリーの、を一緒に手伝いに行ったりとか。あと、ブラジル人学校で健康診断やっていないから、そのお手伝いしに行ったりとかっていう。継続的に何かやっていたわけじゃなくて、こう、あれば行ってっていう。

調査者：実際に子どもと接する、それで子どもたちの例えば、「同じブラジル人なの？」とかそういうリアクションって(ありましたか)、

対象者：あーでも、話をブラジル人学校でもやっぱりねえ、経験があるから話をしてって頼まれて、そしたらやっぱり子どもたち、「あーやればできるんだ」とか「そういう経験ある人がね、大学行ってるんだ」ということは話をしてた、ね。・・そうそう。フォトストーリーの時とかもね、一緒に夢を考えるあれだった、あの一、話だから、それで話をして、できるよみたいな。それでフォトストーリーでつながったことは今だにブラジルで頑張ってる、応援してるよみたいなく笑い。

調査者：なんか、そこから、その話を聴いてた人から、今度うちでもしゃべってよとか、なんか、ある種、発信が次の発信の機会を呼ぶみたいな。あたりしますか。

対象者：そうそうそう。うん。そうだね、そんな感じだったね。

否定された経験

調査者：わかりました。はい。その次が、ブラジルにルーツがあることで、これまでに否定されたような経験ってあたりしますか。

対象者：・・否定はない。ない、うん。

調査者：ブラジル人だから、こうなんだみたいな。ブラジル人だから勉強できなくて当然でしょとかいうような、あるじゃないですか。時々、そういう声が。

対象者：うんうん。私自身はない。

調査者：というと、まわりは。

対象者：今その、仕事上で、ねえ。そういうこと聞いたりするよ。「ブラジル人だからどうせ休む」だとか、やらないだとか、みたいな。っていうのは聞くけど、私自身はないし、否定されたことはないけど、まあ、外国人だから差別じゃないけど、こう、何、国籍は日本じゃんね私は。でも、まあ、見た目は外国人だし、だから国籍は日本にも関わらず、例えば、その、行政のところに行った時に、外国人の窓口があったとしたら、国籍は日本だし、こっち(日本人用窓口)でもいいのに、あっち(外国人用窓口)行ってくださいみたいな。感じで言われたりしたりとかはある。

調査者：そういう経験、苦労されている経験っていうのが、その後の活動につながっていたりとかはどうですかね。

対象者：うーん、まあ、活動に直接、じゃあこうされたから、直接のっていうことはないけれど、でもやっぱりブラジル人って言ったって、ひとまとまりにできないし、日本人だっているんな人がいるわけだし、ブラジル人だっているんな人がいるんだよって、こう、それ(「ブラジル人だから」という発言)を言った人たちに話をするようにはして

る。だからこう、「あたしだって同じブラジル人だけど、あたしはそんなことしないよ」
みたいなく笑い>。

調査者：モチベーション的な面ではどうですか。

対象者：モチベーションって？

調査者：うーんと、そうした言葉が火種になって頑張るとか、

対象者：いやー、でもそういうのがあるから、ねえ、その何だろ、気づいてもらいたいから、
話をしていくことは大事だよなあっていうのを思う。

調査者：はい。ありがとうございます。休学中の時に、スキルアップのために取った HICE と
かの講座で、やらない？ってことで、言われてやったのがってことですね。

対象者：うん。講座で HICE とつながって、私のことを知ってもらって、それで出前講座を頼
まれたのが 1 番最初。

調査者：その時は松岡さん？

対象者：うん。松岡さん。

調査者：それは 2000 何年とか記憶にあります？

対象者：うーん、待って、2007(年)で A は大学に入って、2008、2009 かな？

調査者：2009(年)。じゃあ、多文化教育ファシリテーター講座には出てました？

対象者：出てない。

調査者：出てない。あれとは別でいろんな講座取られてて、

対象者：そう。バイリンガル教師の養成講座。

調査者：その時はそのファシリテーター講座の人たちと接点があったりとかは？

対象者：その時は私誰も何も知らなかったから、だから HICE も私のこと知らなかったし、養
成講座で話をしていくうちに、実は日本で育って日本で勉強したしっていうので、あ
たしが、とつながって、みたいなの。だからそれまでは全然、関わりがなかった。

発信にあたって

調査者：そういったような自分の経験を語るとか、まあ、っていうのについては、こう、どう
いう思いを持って発信していますか。

対象者：最初はねえ、言われる言われたから、自分の成長をていうか、経験しておこうみたい
な？、特にそこまで思いもなく、語ってたけど、でもそうだね、今思うとやっぱり、
しかもそれを語り始めて、一時期はどんなに語っても何も変わらんやんって思ってた
時もあるって、それが語り始めたのが 2009 年でしょ？で、今 2015 年だら？6 年ぐらい
経ってるじゃん。語っててもしょうがないら、何も変わらんやんみたいなく笑い>に
思っていたこともあったけど、この前、あの、あれ、あのドキュメンタリーあるじゃ
ん。「HAFU」っていう。そこで、デイビットが映画をドキュメンタリーにする前か
ら、みんなが同じことを聞いてくるみたいなの。自分の生い立ちとか、日本語上手だね
って言われるのがうんざりするよなって私はドキュメンタリー観ながら思ってたけど、

でもデビットが、「でも自分が語ることによって、1人でも多く、今の子どもたちのことを理解してくれる人が増えてくれれば、いいっていう思いでやってる」っていうのを聞いた時、ああって思っ。わかった、私もそうすると思っ<笑い>、今はそんな思い<笑い>。

調査者：結構今もそういう、ああでも働きながら常々そういうお話をする機会ってあるんですか？

対象者：でも、今は学校の外ではあまりやってないね。もう。

調査者：学校の中ではA先生の話を聴きましょうみたいな会があったりするんですか？

対象者：あー、月に、えーうん。1年に1回は5年生の国際理解の授業は頼まれてやったりしてるし、今はどっちかって言うと、みんなの前とか授業でとかじゃなくて、子どもたち個人で、ね、何か悩んだりしている時に話をしたりとか。

調査者：日常的な時にというか、

対象者：そうそうそう。今特に人前でそういう講座とかでっていう機会はないね、やってないね。

調査者：学校現場にいることで、先生にちょっとそういう話をするとか、教育委員会の人、制度をつくっていく人たちというか、にそういう話をするとか、そういう人たちの前で何か話をするとかはありますか？

対象者：うん、ない。

調査者：研修で呼ばれていくとか。

対象者：ないないない。

調査者：わかりました。そういった活動を行うことは自分の中でどのように位置づけていますか。ある種のミッションをもってやっているとか、これは自分にしかできないことだとか、とりあえず、頼まれたからやってるんだとか。

対象者：あー。最初はそう(頼まれてたから)だったね<笑い>。でもまあ、そうだね、今は、とにかく何を、そんな、ねえ、何年も経ってもそう大して変わらないように感じているのが、じゃあ何をしたら変わるんだらうっていうのを見つけたくて、この仕事に就いているし、子どもたちと話をしているし、ま、いろいろ、仕事の中で、何をするのが1番彼らを助けられるのかなっていう思いでやっています。

エージェント

調査者：えーと、そういった自分の生い立ちをいろんな人たちが聴いている中で、そういったところにあたって、(語る)場を設けてくれていた人たち、HICEとかNポケとかっていう人たちと一緒にやっていくことについて、いやー、あの時声がかからなくとも自分でやっていたと思う？

対象者：いや、でもね、最初言ったように頼まれて始めたことだから、いなかったらやっていなかったんだらうなって思う、よ。正直に<笑い>。でもまあ、それがきっかけでい

ろんあ出会いはできたし、それでいろんな支援者と知り合えたし、話をするといろんな支援者の人が話をしてくれて、うちはこういう風にやってるよって相談してくれたりとかして、こっちも知識、いろんなことを知ることができたし、そういうので呼ばれて、HICEの出張講座も誘われた時は私だけじゃなくて、あと3人。一緒に呼ばれたじゃんね。ベトナムルーツ、フィリピンルーツ、ブラジルルーツの。それで、一緒に行くことによって、お互いのこと知らなかったけど、それがきっかけで知り合っただけじゃなく、仲間増えたし、だからすごい、いいきっかけをくれたなって思います。

調査者：主にHICE、Nポケだと思んですけど、それらについては、例えばHICEの担当だったら、その時は松岡さんですよ？

対象者：うん。

調査者：今はCOLORSの関係で鈴木恵梨香さんもいると思うんですが、Nポケだったら小林芽里さん。そういった人たちはどういう風に接してくれてる？

対象者：うん？

調査者：自分への接し方。

対象者：普通。普通。

調査者：自分をブラジル人っていう一括りじゃなくて、それこそ。

対象者：ああ、まあうん。それは一括りにされることなく、全然普通に、ね。それぞれをその人を通して見てくれてるとは思ってます。

調査者：Nポケでやられていた時には、仕事のやり方でこういう風にしてくれたとか。例えば、企画の内容はAさんに任せるとか。

対象者：ああ、Nポケの時は、1番大きいのは交流会だったから、それは本当にうちにやらせてくれて、企画から運営から。でも必要な時には、ね、お金とかさ、そういう資料とか、報告書とかをうちらが慣れていないところをすごいフォローしてくれたし、教えてくれたし、困ったらすごい助けてくれたし、そうそう。でも、うちらがやりたいこと、目的とかやりたいこととかは考えさせてくれたし。

調査者：交流会は神戸のワールドキッズコミュニティとかから来てるじゃないですか

対象者：うん。

調査者：あれってのは、連絡とか集まる場所の確保とか、そういうのも全部Aさんがやったんですか？

対象者：場所(の確保)は(小林)芽里さんがやってくれた。参加者との連絡は私が取ってた。でも一緒に全部やってくれたよ。場所とか打ち合わせに行った時とかも。うん。

調査者：小林芽里さんには9月にお話を伺いに行ってきた、(Aが)すごく大変そうにやってたって(小林氏が)言われてて

対象者：ま、大変だったけどね<笑い>。そう。参加者とのあれが、連絡がすごく大変だった。

調査者：難しいですよ。返事が返ってこないとか。

対象者：そうそう。来るの、来ないのみたいな<笑い>。

調査者：〈笑い〉。その参加者の方々とはその後もつながり続けています？

対象者：あ、うんうん。全員じゃないけども、それがきっかけで友だちになって、まだつながっている子たちはいるよ。

調査者：いいですねえ。

対象者：ねー。やってよかったなって思うよね。

発信後の変化

調査者：自分の生き立ちを語るようになってから、まず自分自身の変化はある？

対象者：語るようになってからかわかんじゃんね

調査者：例えばですよ、自分の経験とか、発言が

対象者：ためになるんだなあとか。こんなに関心を持っている人たちがこんなにいるんだって
いうことにびっくりしたけどねえ。でも、逆にこんだけ、外国人の子どもたちを支援
したくて、あの場に集まるわけじゃん、100人ぐらいが。やあ、(子どもたちは)恵ま
れとるなあって〈笑い〉。

調査者：子どもたちが？

対象者：そうそう。そうだね。

調査者：さっき、話をすることで別の場所でもしゃべる機会がってことを言われていたから、
そういう別の場での発信機会が持てるようになったのはひとつなのかなあって聞いて
て思いました。

対象者：うんうん。そうだね。出会いをすごい増やしてくれたのは、すごいありがたいよね。
知らなかったこともいろいろ知れたし。それがきっかけで、(これまでは)外国人の子
どもの支援をやっているところばかりだったけど、そういうところで話している中
で、休学して自分で働いて大学に通っていたってということで、今度その貧困？の子た
ちを支援している団体からも話が来たりして、また違う、ちょっと違う、関係あるけ
ど、ちょっと違う分野にも行かせてもらったりとか。あと、若者が活動してる人たち
の場っていうのに呼ばれて、自分は外国人の子どもたち(が対象の活動)だったけど、
他の人たちはその何、弁護士のねえ、やってる弁護士の卵の人たちが何か自分たちの
発表の場を設けたりとか。町おこしとか、ホームレスの人たちを支援している人たち
とか、いろいろなところを知れたから、やあ、すごいなあって。

調査者：異分野というか、横のつながりみたいなものができた

対象者：そうそう。知らないことがね、いっぱい知れたなあって思うよ。広がったなって思う。

学校での語り

調査者：(就学)サポーターの仕事をしていた時に自分の経験が生きるとわかったと前回言われ
ていましたが、今支援員として学校現場で子どもたちと接していて、子どもたちに話
をする時はどうですか。

対象者：今は学校で働いているから子どもたちに常に話をしているし、子どもたちと。なんか説得力が持てるじゃんね。自分も同じ経験しているから。「やらないと後で困るよ」とかさく笑い>。

調査者：(子どもたちは)それを聴いて、「うん」ってなりますか？

対象者：「うーん」って感じく笑い>。「わかってるけど・」みたいな。で、ブラジルでね、(日本学校で)勉強が嫌になって「ブラジル帰るからいい」って言ったりするけど、「いや、だから、じゃあ、あんたポルトガル語完璧に書けるわけ？」って。「書けないやろ」って。でもブラジル行ったらすごい大変な思いするし、同じ勉強を使うことになるし、しかもブラジル行ったら、またゼロから？になるから、こっちからメリットの日本語を持って行かないと、それこそ辛いよってという話をしたりとか。

調査者：やっぱりそこは担任の先生が言うのと自分が言うのとでは、同じことを言っても違いますか？

対象者：違うと思うし、ブラジルのことを言えるのはねえ、担任はブラジルのことを知らないし、結構先生たちも「ブラジル人学校行くなりいいや」って思っちゃう先生もいるけど、いやいや、それに行ったら、じゃあ日本語ができないからといってポルトガル語ができるかといったら違うし、やっぱポルトガル語しゃべってるの見て、「ああすごい、彼らはポルトガル語はしゃべれるから」と先生は思うけど、実際ポルトガル語のレベル見ると、すごい、あの一、幼かったりとか、言葉を間違えてたりしてるし、そう思うと、ダブルリミテッドにならないために、何かねえ、働きかけないといけないってすごい思うけど、彼ら自身、自覚ないし、親からしたら自分の子どもは日本語もポルトガル語も話せるって思ってるけど、どっちも中途半端だからみたいな。そういうところをね、気付いてもらわないと、ほんと今後が大変だよってという感じ。

調査者：保護者の方はどうですか？

対象者：保護者ねえ、うーん。子どものことをもうねえ、みんなすごい心配してるし、あの一・・・どうにかしてあげたいって思ってる気持ちは強いけど、どうしてあげたらいいのかわからない親が多い。

調査者：小学校だからまだ早い話かもしれませんが、進路どうするとか、将来どうするか、年て言えばいいですかね。見通し？学校の先生になりたいとかこういう職業になりたいって時にじゃあ(日本で)どうやったらそうなれるかって言うのが、親御さんの中にはそこがわかっていない親御さんがいると思うんですけど、そういう話ってしたりしますか？

対象者：そこまで具体的にね、こうなりたいからこういう道進みましょって話はまだしない。しないけど、もうほんとにブラジルに行くのか、日本に残るのかすら決まってない家庭はあるし、親が日本に適応できてなくて、ブラジル戻りたいけど、いつ戻れるかわからなくて、うーん、はつきりしないままだと子どもも「どうせいつか帰るし」って感じで。勉強なかな身が入らなかつたりとかする家庭もあるし、で、その日本で進ん

でいくうえでの自分の子どもが結局どのくらいの学力を身に着ける必要があるかっていうのをやっぱり親は自分が勉強してないわけだから、それがわからない。自分の子どもがどれだけできてて、どれだけ(学力が)足りてないのか、はっきりわからないし、正直先生たちもそれをはっきり言わないし、うん(苦笑い)。それも問題だと思うけど。「学校がちゃんとやりますから宿題を」って言うけど、だめだめ、間に合わへんみたいな。そういう感じだからはっきり言った方がいいと思うけど・・・みたいなことを思いながら・見てたりすることもある。

調査者：今は日本に来た第2世代が親になって、だから第3世代が小学校に入ってくるようになってきているんですよね？

対象者：そうそう。だから、親が教育をそんなちゃんと受けていないから、教育をちゃんと受けていない人に教育がどれだけ大切か、子どもたちに伝えてって言っても、伝えられるわけないでしょって感じ。

調査者：なんか、それでどうしたらA先生みたいになれますかとか、日本語がうまくなりますか、とかそういったことは保護者の方に聞かれたりしますか？

対象者：ああ、あたしが保護者に聞かれるかってこと？うーん、ま、それは普通にね、子ども、自分の子どもが心配で、何をするのがいいかねえっていう相談してくれる親はいるよ。

調査者：その時ってどういう返しをするんですか？

対象者：でもそしたら、宿題ももちろんだけど、本読みとか、子どもがそれぞれ苦手になっているものは違うから、それに応じて、なんか漢字を苦手にする子が多いんだけど、だからその本読みは必ずやるとか、漢字をただひたすら書くだけじゃなくて、意味を考えながらやるとか、そういうアドバイスをする。

調査者：はい。まわりの主にいわゆる日本人という人たちが生き立ちや経験を聴く人たちのリアクションってどうですか？

対象者：でも、聴いて、「いやあ、すごいね。素晴らしいね」って褒められることが多い。そんなに頑張っていないけどって思いながら<笑い>。

調査者：支援者じゃない人がそれを聴いていたりとかは、

対象者：どうなんだろう。印象的に、ないね。思い出そうとしたけど、特にないね。

祖父母

調査者：最後に、2つ。祖父母について。母方の祖父母と父方の祖父母と。それぞれ、記憶があれば、お聞かせいただけると。

対象者：そう、あんま記憶にないんだよねー、お父さんの方は、あたしがブラジルにいた時に、まあ7歳で(Aは日本に)来てるけど、あたしが記憶がある内から寝たきりだったから、全然関わりがなかった、しゃべれなかったし、(父方のおばあちゃんはポルトガル語が片言で、あんまりコミュニケーションが取れてなかったけど、でもまあおばあちゃんの家に行けば、日本食が食べれるなあっていうのは覚えてる<笑い>。それ

ぐらい。お母さんの方は、お母さんの祖父母は離婚してたから、おじいちゃんとはほほ会ってなかったし、おばあちゃんは(Aのお父さんとお母さんが先に(日本)に来てたから、その間は(Aは)おばあちゃんと(ブラジルに)残ってたから、よく面倒見てもらってたって感じ。

調査者：こういう風に接してもらったとか、こうして生きるんだよとか、こうしなさいよっていうのは何かあったりしましたか？

対象者：そーれは覚えてないね。特に言われてなかったね。

調査者：お父さんから、おじいちゃんは昔こうだったんだよとか(言われたりしたか)、特にないですか。

対象者：特にない。

両親

調査者：わかりました。今度、ご両親。お父さんがブラジルに行ってから、すごく苦労されて働いていたっていう話は前回伺っていて、他にそういうところも含めてですが、何かこう、日本に来てからもですが、こういうことを言われたとか、将来こうしなさいよとか

対象者：うん。お父さんはねえ、どっちかって言うと、自分の好きにしなさいっていう。高校とかも大学進む時も、行きたいんだったら行けばいいし、行かないんだったら行かなくていいみたいな。それはあたしだけじゃなくて、兄妹みんなにいつもそういうスタンスだった。やりたいことをしなさい。で、お母さんはうちらが小さい時から、私たちみたいに工場で働かないために、もっときれいでそんなに疲れない仕事をしないために(仕事をするために)頑張って勉強してみたいな。いい仕事に就いてって言われ続けた。

調査者：それを言われ続けることで、工場が悪いとは言わないですが、例えば、工場じゃない、別の仕事をするにはっていうことを考えるようになったりとか

対象者：うん。そうやって言われてたから、そんだけ工場大変なんだなみたいなことは思ってたけど。そう。でも、それがあったから、工場やめて他っていうわけでもなく、まあ何となく小学校の時に、ね、日本語を覚えて、それで外国人を手伝える仕事って思ってたから、だから別に工場で働きたいとか思ってなかったし、でもお母さんの言ういい仕事は稼げる仕事だから、あたしの中でそれはなかった。別に<笑い>、それはなかった。

調査者：他にこう、こういうことを言われたな、今の自分は、ああいう風に言われたからこうなのかなとか。

対象者：うーん。いや、でも、将来のことについてはそんな感じ。

調査者：自分の意志を尊重してくれるという。お母さんもそれはそうでした？

対象者：別に反対することは一切なかったよ。まあ、でもお母さんの気持ちとしては今でも、

もっと稼げれる会社に就きなさいよみたいな<笑い>。すみませんという感じだけど
<笑い>。

調査者：はい。わかりました。ありがとうございます。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：B
- ・ 日時：2015年3月10日10時～15時
- ・ 回数：1回目
- ・ 場所：Bが在籍する大学の個室
- ・ 記録：1時間30分45秒

■ 育ち(資源形成)

ブラジルの小学校と日本の小学校

調査者：教育はどのような形で受けてきましたか？

対象者：ブラジルでは小学校4年生の終わりまで学校に行き、日本では小学校6年生初めに合わせて通うように。実質小学校6年生というものを(ブラジルと日本の)どっちでもやっていない感じなんですよ。

調査者：小学校6年生？5年生じゃない？

対象者：向こうは4年生終わって、こっちに来た時に5年生に入る予定だったのが、誕生日の関係で6年生に。5年生というものがありません。

調査者：ブラジルにいた時はどんな小学校生活だった？

対象者：ブラジルにいた時は普通<笑い>っていう。普通に、はい。向こうは半日制で、どちらか。

調査者：午前の部、午後の部どちらか、だね。

対象者：そうですね。

来日の経緯

調査者：日本に来ることになった時は両親と一緒に来た形？

対象者：そうですね。1年前にお父さんが先に来て、で、いろいろ整ってから1年後に私たちが家族でって感じです。

調査者：ブラジルから日本来た理由は？

対象者：向こうで両親が自営業をやっていて、それが上手くいかなくて、いろいろ考えた結果、じゃあ日本に、本当はデカセギの目的で来て、いわゆる3年いようって言ったのが10年になっちゃったっていう、まあ、いつものパターンですね。

調査者：3年のつもりが10年いるようになった要因ってありますか？

対象者：私たちも学校に入って、思ったより学校に慣れてしまったのと、お母さんも日本の方がいい、お父さんも元々日本人なので、日本の方がいいってことで、まあ、今に至るって感じです。

日本の小学校の記憶

調査者：ブラジルから日本に来て小学校6年生に入ったわけですが、その時の記憶

対象者：ああ、

調査者：日本語はブラジルで学ぶ機会はあった？

対象者：あったかもしれないですけど、学ばなかった。

調査者：じゃあ日本に来てから小学校に入るまでの期間、学校には入らなかったけど、5年生に相当する期間、その時に日本語を勉強することはした？

対象者：来たのが、2月なんです。なので、今学校に入ってもあれなので、っていう話になって、じゃあちゃんと4月になってから入ろうって話で、その2か月は何もしてなかったです。

調査者：じゃあ学校に入って日本語全然わからないって状態で

対象者：ほんと、そうです。

調査者：日本語がわからない状態で授業に出なければならない、その時の気持ちはどうでしたか？

対象者：うーん、なんだろう。最初はどうだったかな、私迷子になって、学校で。なんか6年4組とか、何組か自分がわからなくて、それでなんかいろいろろついてたってのは覚えてるし、何だろう・・・うん、最初はそんな感じでしたね。で、最初は本当にクラスみんなと同じ授業、何もわからないですけど、とりあえず受けて、そこから取り出したいな形になりました。

調査者：取り出しは、決まった時間に？

対象者：うん。

調査者：国語だけ？

対象者：国語と社会。

調査者：算数の時間はなかった？

対象者：なかったです。ちょうど向こうで習ったことが、今あの、ちょうど覚えているのが最大公約数とか最小公倍数のあれで、その時はついていけたかなっていう感じで、そのまま。

調査者：国語と社会については、取り出し授業だったわけだけど、それは小学校卒業するまで？

対象者：そうですね、一応。

調査者：まわりの子たちは教室に残って勉強するわけだけど、自分は違うところに行って勉強することに対して抵抗はあった？

対象者：最初は何も特に感じなくて、むしろあっち行った方が自分は勉強になるなって思ってたんですけど、半年くらいかな、経った頃に、何だろう、あ、その(取り出し)教室がない時とかは、教室に残されるので、なんか、なんでいるの？みたいな視線は感じる、たぶん主観的だと思うんですけど。特に言われたってわけではないんですけど。

調査者：学校に今で言う支援員はいた？

対象者：支援員ではなくて、通訳はいた。週に1回来て、それもほんとその時の状況だったのが最悪で、あの、プリントとか来るじゃないですか、で、なんか結構適当というか、読んでもわかんないんですよ、ポルトガル語を。通じないっていうか、何が言いたいかわからない状態。

調査者：それはその通訳の方のポルトガル語が？

対象者：そうなのか、わからないんですけど、

調査者：同じポルトガル語でも何を言っているかわからない

対象者：そうなんですよ、全然わからないし、ただ単にローマ字振っただけみたいなの、ただ言葉をローマ字にただけっていう印象が大きくなって。お母さんも読んでわからないよねって。うん、そうですね、来たのは週1回なので勉強も見てもらえず。今の感じとは全然違うんです。いたけど、いなかった。

調査者：ほかにも外国から来た子はいた？

対象者：ええっとですね、同じクラスに1人いたんですけど、その子、日本の方が長くて、ポルトガル語がむしろ苦手な子だったので、で、それを毎回私の隣に座らせてたんですよ先生が、たぶん、たぶんいいと思ってたんですけど、その子はそれが嫌だったみたいで。一時期こう、ちょっと関係が悪くなったときはあって。その子もそれが嫌だったみたいで通訳するのが。わからないし言葉。

調査者：じゃあ、あまり先生の思惑も機能しておらず

対象者：うんうんうん。

調査者：小学校中学校って義務教育の範疇にないわけだけど、学校やめたいな行きたくないなっていうのはなかった？

対象者：うーん、あんまりなかったのかな。その、取り出しの教室、なんて言葉だったかな、国際教室みたいな名前だったのが、それが楽しかったんですよ、先生がすごく面倒見がよくて、日本人の先生で。すごい教えてください。

調査者：その教室があったから他の授業も頑張っていた

対象者：そうですね。あと、近所にフィリピンの子が住んでて、その子も日本の方が長かったんですけど、その子がずっと一緒にいてくれて、それもなんか楽しかったなっていう思い出です。

調査者：しっかりみてる先生がいたということと、周りに仲の良い友だちがいてってことで

対象者：うん。

調査者：それは小学校中学校通して？

対象者：そうですね。

調査者：日本語がわかるようになったって実感を持てたのはいつ？

対象者：半年後です。あの時から、友だちが何を言っているかわかったっていうのが。

調査者：取り出し授業以外で家に帰ってから自分で勉強したりは？

対象者：正直覚えてないんですよ。ただ、算数の授業についていけなくて、その最大公約数とかが読めなくて、それをひたすら辞書を片手に調べたのは覚えてますね。これをポルトガル語にするとこういうことか、ああなるほどっていうのがありましたね。

調査者：社会はどうだった？

対象者：ああ、ノータッチ<笑い>。だから日本の歴史わからないんです。

中学校時代の記憶 日本人のようにになりたい自分

調査者：中学校生活はどんな生活を送りましたか？

対象者：なんか、なんかわからないんですけど、その1年間(小6の1年間)でけっこう日本語習得できた気がして、中学は行った時はああ、外国人だって知らなかったっていう。国籍上はブラジルってなっていたんですけど、全然普通に日本語話せるって思ってたって言われて、なんで、それくらいは、なんか、日本語力あったんだろなっていうのを感じ、で、自分もそれに合わせていこうって、日本人向きの生活、日本人寄りの生活にしていこうと思ってやりました。

調査者：日本人寄りのって話をしてくれたけど、それに抵抗はなかった？自分はブラジル人なのによって具合に。

対象者：なんか、むしろ、日本人に近づかないとやっていけないって思ったのかもしれないですね。なんか、こう、小学校過ごして、同じになりたかった。

調査者：突っ込んだ言い方をすると、自分がブラジル人だってことが嫌だったってこと？

対象者：そうです。1年、中1の時がそうで、で、中2の途中でブラジルの子が入ってきたんですよ、で、その時に、いろいろ関わるようになって、あ、やっぱり私ブラジルだって感じて、そこから、いやもうちょっとポルトガル語は勉強したいって思って、高校行かずに、じゃちょっとブラジルの学校に行きたいっていう話をして担任の先生に止められたっていうのがありますね。

調査者：1年生の段階では自分がブラジル人だということを隠したい、嫌、

対象者：どっちかっていうと、そうですね。

調査者：中学校2年生のときにブラジル人の子が転校してきて、自分はブラジルって話があったけど、それは何かエピソードがあったから？それとも日常的に一緒にいた中で？

対象者：先生がとりあえず紹介して、この子ブラジルから来たから、よろしくねみたいなの。通訳までは頼まれたわけではないんですけど、クラスも別で違ったので、紹介してもらって、その子がわたしに話しかけてくれて、で、その子ともう1人の友だちとかで、そこで遊ぶようになった。

調査者：もう1人の友だちって日本人？

対象者：ブラジル人です。そこでちょっとブラジルのコミュニティに関わったってのがきっかけかなって思います。

調査者：中学校2年生の時に学校に入ってきた子は日本語は話せない状態で入ってきた。

対象者：片言でしたね。はい。

調査者：ただ、通訳まではBさんはしていない

対象者：してないです。

中学時代の部活動

調査者：部活はやっていましたか？

対象者：そうです。ソフトボール部やってて。

調査者：どうだった？

対象者：普通でした。

調査者：周りとも仲良く、

対象者：うん、そうですね。

調査者：日本の学校って上下関係とか、

対象者：ああ、そうなんですよー。

調査者：連帯責任とか、

対象者：うんうんうん。

調査者：いろいろ特有のものがあると思うんだけど、それについてはどうだった？さっき言っていたように日本人と一緒にしなきゃって意識だった？

対象者：うーん、何だろう。いろいろ新鮮だったんですよ、その時に。だから逆に部活やったことによって敬語覚えたし、日本って上下関係こんなに激しいものなんだって身についたのがその中学の部活のおかげだと思っているんですよ。なので、なんかわからないけど1年生は荷物持たなきゃいけないし<笑い>、なんかわからないけど1年生が片付けしなきゃならないし、みたいな。3年になったらなんかわからないけど、みんながやってくれるっていう実感ですよ。周りに合わせるというか、周りと同じようにやる、へえそうなんだとか思いながら。

調査者：じゃあ部活抵抗あるなって感じではない？

対象者：私よりもお母さんが、いつも土日いないし、帰ってくるのが遅いわで、何やってるのみたいな。そうですね。お母さんの方が心配してました。

調査者：それについては適宜説明をして、

対象者：そうですそうです。

調査者：部活やめなさいとか早く帰ってきなさいってことはなかった？

対象者：ああ、なかったです。お母さんも仕事をしていたので。

調査者：理解を示してくれた、

対象者：そうですね。今こういう練習をしてるからっていう説明をすると、そうなんだって。あと試合とかに呼ぶと、ああなるほどこんなことやってるんだあの人みたいな。

中学時代の学習面

調査者：勉強の方については。話す言葉と書く言葉、生活言語と学習言語って違うわけだけど、
対象者：国語と社会が点数悪くて。英語は元々好きでやってたので、英語はまあまあ取れてて、
理科もほんとだから好きだったので、それも勉強してて。

調査者：理科って(扱う)言葉が難しいけど

対象者：でも結構好きで、勉強してて。なんか CO₂を二酸化炭素っていうんだ、へーっみたい
な。そういう頑張ってる漢字を写したりとか。

中学時代の進路選択

調査者：中 3 は受験があるよね、高校へは行かずにブラジルの学校へ行こうと思ってたけど、
学校の先生に止められたと。それはどういう理由で？その時にブラジル人学校を選ば
うとしたのは自分がブラジル人だからとか、家族内でブラジルに帰る話があったから
とか？

対象者：ああ、そう(ブラジルに帰る話が出たから)ではなくて、友だちブラジル人の子が来た
時からなんか、ポルトガル語が落ちているって感じて、どっちも中途半端は嫌だとな
って思って、私学歴だと、ブラジルの義務教育を終わっていないことになっているので、
せめて義務教育は終わりたいなって思って。じゃあブラジル人学校か、なんかそういう、
例えば中卒認定とか義務教育認定みたいなのを受けてちゃんと学歴をつけたいっての
が当時の私だったんです。

調査者：それは自分の中で自分はブラジルに帰るからブラジルの学歴が欲しいって考えてたっ
てこと？

対象者：いやあ、特に。どっちも中途半端になるのが嫌で。と、日本の、進学するって意識が
元々なかったんで、だったらブラジルの義務教育は終わりたいって。

調査者：学校の先生にはどういう風に止められたの？何が理由で？

対象者：もったいないって言われたんですよ。あなただったら日本の高校は行けるよっていう
のがまず言われて、で、そこであの、g(高校)インター紹介してもらったんです。「こ
この学校だったら日本の教育もできるし、あなたがやりたいポルトガル語ができる」、
その先生がちょうどそこ出身だったので、ちょうどその情報を知ってて教えてくださ
ったんです。「とりあえず、説明会があるから行ってみな」って言ってきて、で、ブ
ラジル人の先生もその高校にいたので、お母さんも一緒についてきて通訳してもら
ってとかって感じでした。

調査者：ブラジル人学校に行こうと思ってたのは両親に話していた？

対象者：あ、言いました言いました。

調査者：その時に両親はどういう反応だった？

対象者：「とりあえず待て」みたいな。で、あの、ブラジル人学校の教科書を集めたんですよ、
まず。とりあえず自分でやってみたい。やってみたんですけど、追いつかないんです。
両立ができなかったです、部活と日本の学校とそれ。だったらやめようっていう。

調査者：やってみてブラジル人学校は無理だと思ってやめたのか、学校の先生に言われて学校見学会に行ったらこの高校だってなったからブラジル人学校はやめたのか、

対象者：そうですね、どっちかっていうと先生に言われて、ああ私高校行けるんだってわかったんですよ。成績はまだまだ足りなくて、でも頑張れば行けそうな、手は届きそうな、入試システムも3教科で済んだんですよ、あたしが苦手な社会がいらなかったから、だったら国語頑張ろうかなって。

調査者：先生から高校に行けるとい話をしてもらったのはいつ？3年生？

対象者：言われたのが中1の最後なんです。その時の担任。その担任の先生が中1と中3をちょうど担任してくださって、で、それを知って2年、中2の時にいろいろ調べて、ああ、g(高校)行こうって。ちょうどそれに中国人の友だちもあの、その中国人の友だちの先輩もg(高校)インターだったんですよ、で、その子も知ってて、じゃあ一緒に頑張ろうよって言ってくれて、それもまたきっかけになって。2人で頑張ってる。

調査者：その先生から中1で聞いて、

対象者：聞いて、

調査者：中2でそこを目指す友だちもいて、

対象者：その子もg(高校)インター(高校)インターって言って、へえーみたいな感じで、じゃあ入試も説明会もずっと2人で行ってましたね。

調査者：学校を知る前、知った後では勉強に対する意欲は変わった？

対象者：変わりますね。それを聞いて国語頑張らないとまずいし、なんか内申点、元々レベルの高い高校だったので、内申点はないとまずいって言われて必死で全部上げて。

調査者：その段階で自分の近い将来が明確化されて、自分のすべきことが見えてきた？

対象者：そうですね。あたしg(高校)インターのポルトガル語やりたいみたいな。

調査者：中1で先生に言われるまでは勉強に対しては？

対象者：普通にテストで点数取るためぐらい。ほんとに中1の時にあの、日本語教室通わなかったっていうのが来たんですよ。当時、あの、W小でやってた、えーっと、ことばの教室っていうのがあって、それが週2回の月水の5限をその普通の学校じゃなくてその学校に通うってのがあって、で、なんか5限5時間目に出れないのが嫌だったので、部活も出れないし嫌ですって断ったのがなんかきっかけっていうか、それで普通の生活が送れたっていうのは今でも思っていて、だから必ずしもその今の子どもたちも学校やめて、学校やめてというか授業をやめてまでも、学校に通、日本語の学校に通う必要性はないなって思います。もっとなんか特別な目で見られるじゃないですか。あの子いつもいない。それは嫌だったんです私。

調査者：中3になって受験して無事合格して、

対象者：うん、なんとか。

調査者：小学校とか中学校の時は漠然とでもよいから将来こういう仕事がしたいとか、こうなりたいとかあった？

対象者：ああ、なかったですね。

調査者：中1であなた高校行けるよって言われて、まずg高校行こうって

対象者：そうです。

調査者：受験を終えて、受かったときどうだった？

対象者：私泣きましたね<笑い>。すごい嬉しかったですね。

高校1年生 インターナショナルクラス

調査者：高校生になって、1年生(の時)だよ、インターナショナルクラスは。

対象者：そうですね、はい。

調査者：そこでまわりに外国にルーツがある生徒が集まってくる中、どうだった？

対象者：なんだろう、あったことがなかったんですよ、そういう外国にルーツを持つ子たちだけで集まったクラスは初めてだったので、面白かったですね、なんか。同じ悩みだったんですよみんな。例えば、国語のことわざが出てきたときに、これ意味わかんないって言うとみんなも、ああそうだよ意味わかんないよね、逆に先生が困る。ああそうかわかんないんだって感じで説明してくださるとか、あとほんとになんか、うん、国語の授業が特にそうでした。難しい言葉を知らないから、先生はそれを説明しなければならないという。

調査者：取り出し学級って中学校のときはあった？

対象者：なかったです。

調査者：小学校の時は周りに同じような形で取り出しで来ている子たちはいた？

対象者：ああ、ありましたね。

調査者：そこではそういう話にはならなかった？

対象者：なんかみんな、学年違ったんですよ。あたし小6で、小3とか小1の子がいて、みんなばらばらでそれぞれをやってるって感じで。

調査者：それぞれの課題をこなす、

対象者：そうですね。授業ってのはなかったです。

調査者：高校生になって初めて同じ内容を、

対象者：授業としてって感じが。

調査者：外国にルーツのある子たちがひとつのクラスになって、ひとつの内容を共有する

対象者：うんうん。

調査者：同じような学習面の悩みを共有して、

対象者：そうです。

調査者：そこで1年間過ごす中で、自分が日本に来た背景や友だちが日本に来た理由とか、そういう話を学ぶ機会ってあった？

対象者：ああ、学ぶ機会・・・

調査者：学ぶじゃなくてもお互い話すとか、

対象者：ああ、あんまなかった。そういう話題意外と触れなかったですね。うん。そうね。ど
っちかって言うとどれぐらい日本にいるのか、いつ来たとか、くらいですかね。

調査者：2年生以降は普通クラスに入ることになると思うんだけど、2年生以降も、インター
ナショナルクラスの子たちとは交流は続いた？

対象者：ああ、続きましたね。

調査者：1年生を過ごす前と過ごした後ではどう？

対象者：うんうん、えーなんだろう。逆にいろんな背景がある子たちがいるっていうことを知
って、あ、ベトナムもいるんだっていう、のはあって、うん。いろんな子たちがいて
いろんな背景を持っている人たちがこの中にいるんだってのが実感としてありました。

調査者：中学2年生の時に自分はブラジル人っていう話があったけど、高校生になっているん
な背景を持った人がいるという気づきがあって、

対象者：そうですね。

調査者：中学校1年生の時は自分は日本人みたくなりたいと言っていたけど、中2以降は自分
はブラジル人だ、

対象者：っていうのもあって、でそれが、自分はブラジル人で日本の中にいるっていうのが、
どっちかっていうとそっちの意識の方が大きかったですね。

調査者：じゃあ中2の段階で自分のことは認められてた、

対象者：だと思っんですけどね。

調査者：高校生になって苦労されたことはありますか？

対象者：特になかったです日本語に関しては。

調査者：周りとも仲良くうまくやっていた？

対象者：普通に、はい。

高校時の進路選択

調査者：勉強の方も、大学進学の方も進学校だから言われると思うんだけど、ポルトガル語も
高校で勉強してきた中で、将来はこうしたいとかってあった？

対象者：ブラジルの大学に行く選択肢が元々なくて、自分の中では。向こう行っても自分の
将来が見えなかったんですよ。だから日本の大学出て、まあそのあとまだ考えてな
かったと思っんですけど、その時は。とりあえず日本の大学出た方が自分の未来って
いうか、こう確立したのが見えたってのが日本の大学だったので、じゃあ日本の大
学に進もうっていうのが。

調査者：受験を考えた時に、今の学科の分野を希望していた？

対象者：元々ここ第一志望じゃなくて、あの東京の某外国語大学に<笑い>、行きたくって、
あの言語がやりたかったんですよ、スペイン語とかフランス語とか英語がやりたく
て、あそこ目指していた。

調査者：言語がやりたいっていうのはどういう理由から？

対象者：元々好きだったんです。英語とか、まあ日本語もそこに身についたし、あたし言語能力あるんじゃないかって勝手に思っていて、で、じゃあもうちょっと言語やりたいなあって思っている。

調査者：それは人と話すのが好きだから、とか？

対象者：何でしょう、(理由は)わからなかったですけど、言語が好きで、そうですね。

調査者：で受験して今の大学に来たと

対象者：そうです。

調査者：<雑誌 V に B が書いた文章を調査者が示しながら>高校生の際に自分の経験を生かしてできることは何だろうと思って大学進学を、

対象者：ああ、そうです。

調査者：漠然としてはいるけども、自分のこれまでの経験を生かせないかってことで

対象者：そうですね。(そういう思いは高校生の時に)ありました。

調査者：そう思うようになったきっかけはあった？

対象者：高校1年生の際のインターナショナルクラスの担任の先生がああ、あたしたちをみて、なんか、もうちょっと自分にできることがあるなって転任？別の学校に行ったんですよ。それが U 高校で、その U 高校で、あるじゃないですか・・・

調査者：定時制？

対象者：ああ、定時制のなんか、クラスやってるじゃないですか、外国人向けの。そっちに行きたいってことでその先生は異動になったんですよ。自分で希望を出して、異動されて、それを見て、だったらあたしたちにもできることあるでしょって思っていて、で、ちょうど上に先輩、あ、T さんなんですけど、その時に先輩がいて、先輩がここに入ったんですよ。なんで、あ、じゃあ先輩と同じようにあたしも大学行ったら、下で見てる子たちもきっと大学行きたいんじゃないかって思っただけで大学。大学でじゃあ自分の好きなことやりたいから、言語の大学って感じでした最初は。

調査者：自分にできることがあるんじゃないかってことで異動された高1の際の担任の先生は日本人の先生？

対象者：日本人の先生です。

ロールモデル

調査者：その後、同じ高校を出た先輩で大学進学を果たした T 君が大学進学してから活動をしているってところまで知っていた？

対象者：ああ、知らなかったです。とりあえず、進学したっていう(ことを知っていた)。

調査者：インターナショナルクラス出身の先輩が大学進学が決まったと。自分も大学進学と続くことで、後に続く子たちが出てくるんじゃないかと、

対象者：うんうん。

調査者：彼がロールモデル？こうなりたいっていう、

対象者：ああ、そうなんですよ。

活動のきっかけと自己効力感

調査者：大学生になって、現在されているような活動は1年生の段階からしている？

対象者：うん、そうですね。

調査者：スタートは？

対象者：Tさんに誘われた。元々は、部活も一緒だったんですよTさんと。彼がもう、インターナショナルクラス出身でなんか、それをみてじゃあみんな同じ部活入ろうって、なんでかわからないけど、わたしの代みんな同じ部活に入ったんですよ。で、その時に部活のなんか送別会だかんかがあって、先輩たちも来てて、大学の合格がもう決まっていたので、報告して今度よさこいソーランっていう活動をやるから、人が欲しいからやってっていうのを頼まれて、ああ、わかりましたって行ってみたんです。

調査者：それはいつ？何月ぐらい？

対象者：ええと、活動自体は6月、誘われたのはたぶん3月。早い段階で「へえ、そういうのあるんだって。入学する前から知ってたんですよ<笑い>」。

調査者：やってみる前とやってみた後は何か違う？

対象者：なんか、その時あたしが担当してたのが、あの、ロジ部って行って通訳とか、あの、ブラジルから来たグループをいろいろ案内して、それが全部ポルトガル語日本語ポルトガル日本語っていう仕事だったので、それが楽しかったんですよ。あたしこういう風に役に立ってるんだって思ったのがきっかけでした。

調査者：その後はそうしたいろいろな場で活動をされ、活躍され、

対象者：そうです。で、ちょうどその時にあの、同じ活動に興味を持っている3年生の先輩たちとつながったのがすごい大きなきっかけだったなあって。その時はSさんなんですよ。そこで知ったんですよあの先輩を。ああ、すげーなって。

調査者：すげーなってというのはどういうすごさ？

対象者：何だろう、めっちゃ動く人だし、いろいろ活動されているなっていうのが、へえーおもしろいなって。で、Tさんもその下において、で、私たちの代だったので、面白かったですね。

調査者：先輩の姿を見て、

HICE との接点

対象者：ああ、かもしれないですね。で、よさこいソーランがあって、そうですね。で、HICEとつながったのが、たまたま受けてた授業、あの、異文化と教育って授業があって、で、なんか、プレゼンをすると「優」もらえるっていうただその理由で、100点優もらえるからCと2人でちょっとやろうよって。ブラジルに関する教育事情をプレゼンした時にたまたま、R大学のあの、Q先生がたまたまいらしてて。

調査者：それは通常の授業の時だよ？

対象者：映画の宣伝だったんです、映画 P の。で、ちょうど、わたしたちのプレゼンみて、ああ、いいねって声かけてもらって、それが何月だったのかな、10月の、あの、誰、何大臣だっけ、何とか大臣が浜松に来るから、そのフォーラムに出てほしいみたいな。で、あの、ここに住むブラジル人、外国人として発言してほしいっていうのがきっかけ。たまたまっちゃたまたまなんですよ。偶然で、そう繋がって。で、その大臣のフォーラムに出た時に、HICE の松岡さんがいたんですよ。で、それ(フォーラム)が終わった後に、ちょっと HICE で今後外国にルーツを持つ活動をやりたいんだけどって言われて名刺渡されて、連絡とりあってそれからいろいろと連絡を取り合ってきたのが RESTART なんですよ。

調査者：その時には C さんとか、自分の周りにいる外国にルーツのある友だちと一緒に？

対象者：巻き込んでいった。1 人で行くの嫌だから一緒に連れて行っちゃった<笑い>。彼女はもうどう思っているのかわからないんですけど、私はちょっと(彼女を)ひっぱっちゃった感がある。

RESTART と家族の歴史

調査者：HICE との関わりは RESTART が最初？

対象者：あれが最初ですね。RESTART のミーティングを経て、最終的にじゃあ RESTART というイベントをやろうってのが最初のきっかけです。

調査者：その時までには自分がブラジルから日本に来ることになった背景って聞いたりしていた？

対象者：背景か、うーん。

調査者：移民の歴史、家族の歴史

対象者：ああ、でも前には聞いてましたね。お母さんじゃない、おばあちゃん、母方のお母さん(おばあちゃん)がああ、戦後、戦争の時に(→戦後)ブラジルに渡ったって話は知ってましたね。でも、それが何か移民の歴史自体はまだ知らなかったのかなあ。

RESTART の時に知ってたのは。

調査者：おばあちゃんがブラジルに渡った話はどうやって知ったの？自分から聞いて？

対象者：どっちかっていうと話してくれたのかなお母さんが。あとは、なんか、そういう活動に関わっていくと、何世ですかって言われると、いやわかんないってお母さんに聞きに行くと、で、そういう話が聞けるっていう。

調査者：人と接する中で必要になった時に聞いた感じ？

対象者：ああ～！そうですね。そうですね。自分で調べたというよりはそんな感じですよ。

調査者：知った後と知る前って何か自分の中で変化はある？

対象者：ああ、こういう背景があるんだって思ったし、なんか、いろんな授業とか多文化共生とか文化人類学を受けて、ああこういう背景でいろんな人たちもここにいるんだって

いうのを知った。

調査者：RESTARTもそう？多様なバックグラウンドの人の話を聞いて

対象者：うんうん。

調査者：多様な人がいるということについてはどう思いますか？

対象者：うん、今は面白いというか、むしろそっちの方がいいって思っていますね。

調査者：今はってことは？

対象者：昔はそうですね、中1の時代とかは日本人になりたかったっていう感じだったので、
そうですね。

家族のスタンス

調査者：自分の教育に対する家族のスタンスってどうでしたか？

対象者：普通に、なんか勉強しなさいと言われたことがなくて、うん、やりたいことをやりな、ただ自分でやることはちゃんと自分で責任を持つっていう。「学校行きたくないんだったらどうするの？」っていうのがずっとお母さんが言ってたのがひとつと、お母さんお父さん工場だったんですねその時期。で、それを、しかも派遣だったので、それをずっと見てきて、お母さんは「絶対工場で働くな」って言ってくれたんですよ。そうならないために、じゃあどうすればいいだろう、高校出なければいけない大学も出なきゃいけないっていう話の中2の後半ぐらいから出てきて、余計高校行かなければいけないというのがわかりました。

調査者：中学校を出たら働いてほしいという親も中にはいるわけですが、そうではなくてむしろ工場勤めにはならないでほしい、勉強しなきゃねっていうスタンス

対象者：むしろ、そうですね。

調査者：教え通り、自分は工場勤めはしないようにって思いはあった、

対象者：そうですね。その選択肢すらなかったですね。働くっていう。

調査者：お父さんはどうでしたか？

対象者：お父さんも同じ。

調査者：妹さんたちは、

対象者：1人は高2と小6の子がいます。

調査者：妹たちも同じように日本の学校に入っている

対象者：そうですね。

調査者：妹2人に対しても両親の言うことは同じ？

対象者：同じです。

調査者：一番下の子は何歳の時に来日だ・・・

対象者：小6だから2歳。2歳で来たんですよ。

調査者：家族内では何語を使って話しますか？

対象者：私はポルトガル語、真ん中の子がポル語交じりの日本語、日本語交じりのポル語、一

番下が全部日本語。聞いてポルトガル語だけど返すの全部日本語。

外国にルーツがあるということ

調査者：外国にルーツがあってよかったことを教えてください。

対象者：ええと、まず言語が話せるのは自慢できるし、向こうに住んでたということも自慢できること。ポルトガル語で話しているときに、かっこいいって言ってくれたのがすごい自信につながったっていうか、ああすごいんだあって思っ。

調査者：かっこいいっていうのはいつ言われたの？

対象者：ええ、わかん、でも高校の時はずっと言われていたので、中2、3。そのブラジルの子たちが来て、「すごいってすごいね」って。(その子たちとポルトガル語で話している様子を見てた)日本人の子たちが「すげー、かっこいいね」って言ってくれた。ああ、すごい、かっこいいんだって。で、自信が持てるようになったっていうか。

調査者：他にはありますか？

対象者：今ではこういう活動ができていし、あの、びよびよクラスをやっていた時に、あの、実際に家庭訪問をしてお母さんと話したりするんですけど、あの、ポルトガル語で話すときすごいあの、いろいろと理解してくださって、ああぜひぜひっていうのになってくるので、日本人が行くのとまた違うことができるんじゃないかなあって、思っているのと、ああ、本当に今になってなんですけど、例えばいろんな調査に関わるようになってから、実際にポルトガル語で話すのと通訳を通して話すのとでは全然違う意味になってくるし、こう、話す人自身ももっと表現ができるんじゃないかなあって今いろいろ思います。

調査者：日本人になりたかった中1の時には抵抗があったものが今ではそれが強みになっているんだと実感できている、

対象者：そうです、はい。

調査者：外国にルーツがあって大変だったことを教えてください。

対象者：ええっと、いや、ありすぎてどこから話せばいいのかわかんない<笑い>。うーん。何だろう。えーと、国籍を中、たぶん中2、高校はいる前だったので、中学校のどこかで変えたっていうよりも、お父さんが元々日本国籍を持っていたので、その子どもっていうことで日本人。だから帰化まではいかないと思うんですけど、それで(日本国籍を)取得したので、特に国籍というものはなかったんですけど、あの、カタカナの名前をそのまま残したのが、どっちかというとならぶらジル人でありたかったっていうのがあって。あと大変だったこと。うーん。お母さんと例えば銀行行くときに、こうあたしが話すといろいろ話してくれるけど、お母さんがちょっと片言の日本語で言うと、変ななんか嫌な顔をされる。銀行員さんに。今はたぶんそんなことはほとんどないと思うんですけど、まあちょっとはあると思うけど。昔はそうだった。ちょっとポルトガル語入れるとなんか嫌な顔をされる。ずーっと今まで続いていることだし、病院で

結構通訳として駆り出されるんですけど、それもちょっと、はあく溜息>みたいな、めんどくさい感じはあるんですよ。

調査者：病院の通訳は家族内での話？それとも近所の方とかでも必要あらば通訳してるの？

対象者：家族、あ、病院は家族内。で、他の物、例えば銀行とか、何やったんだろう、は親の友だちの友だちとか知り合いで、こう、行ってました。

調査者：それはいつから？

対象者：高校ぐらいですかね。日本人側からこういう風な目で見られているっていうのが感じました。ああ、すごい嫌な顔されているとか。また来たかよみたいな感じがすごいあった。あとは国籍で言うと直接自分ではないんですけど、銀行でクレジットカード作れなかったりとか。そこまでは話は全然進むんですけど、名前をカタカナで書くと、「あ、外国人ですか」。「あ、そうなんです」って言うと、あ、じゃあちょっと今の話はなかったことについていうのもあるんですよ。

今の自分がある理由

調査者：いかにして今の自分があると考えていますか？

対象者：ええっと、ひとつは親。両親がすごく支えてくれて。高校にも行かせてくれたし、あのちょうどリーマンショックがあったので、その時に一時期高校やめなきゃいけなかったかもしれない時期でもなんか、いろいろ学校に相談してくれて、学費免除してもらったりとか半額免除して下さって、いろいろお父さんお母さんが支えてくれたのが一番大きな要因だったのと、2 個目が、先生が誰かしら、こう、タイミングよく、先生たちがタイミングよくアドバイスくれたのがきっかけだったのかなあって。小学校 6 年生のええっと取り出しの先生がすごくサポートしてくれたのがひとつ、中学の時に担任の先生がインターナショナルクラスを勧めてくれた。で、えっと高校の時にインターナショナルクラスの先生が、えっとすごく熱心に活動されてしてくれて、私たちにいろいろ教えてくださっていて、異動になってその「活動もっとしたい」って言って異動になったのがきっかけだったんですね。今だと池上先生や M 先生もタイミングよくいろいろ教えてくださるので、ほんと先生がきっかけでした。

調査者：リーマンショックの話が出ましたが、両親のお仕事の状況にリーマンショックの影響はありましたか？失職してしまったとか、働く時間が減ってしまったとか

対象者：ええと、ちょうど 2009 年か、そのちょっとあとだったか、あまり覚えてないんですけど、お母さんはもう完全にリストラされてて、お父さんは週に 3 日行けばいい方。しかも 5 時間勤務とか、短時間。(働く時間は)激減。

調査者：ポイントポイントで先生がいた、親の支えがあった、

対象者：そう、すごい偶然だと思うんですけど。

■ 活動と自分

調査者：活動を始める前と活動をしている今って自分に違いはありますか？

対象者：今は、いろんななんか結構いい感じにこう、ブラジル人の学生が入ってきてくるから(→入ってくるから)、継続はできそうだなって。こういう活動をしていくと、なんだろう、がんばったねって必ず褒められるって思うと、ああ頑張ってよかったなっていうのはすごいあるし、これからもっと頑張らなきゃいけないし、あと結構今、てか最近になって、あの親の方と関わる事が多くて、自分の子にもぜひそうなってもらいたいって言われてすごく嬉しいですね。

問題意識と活動のきっかけ

調査者：外国にルーツのある子たちが置かれる状況については活動をすることで見えてきた？
それとも、それ以前から知っていた？

対象者：実感として、あの一、あたしが小学校から中学に入って、そのフィリピンの子がずっと友だちでやってくれたんですけど、その子は結局、工場になったんですよ中卒。それを見て、なんか、あの子だったらもっといいところ行けたなあって思ってるのがきっかけでもあるし、高1の時にそれを見ているのと、まわりのブラジル人がみんな工場行っちゃうんですよ。それがもったいないなって思って。何か変えれないのかなって思ったのが中・・・まあ高校の時の頭の片隅のどこかにあって、それが大学になってこう、出して行けたっていうのが、なんか、なんでこうなるのかとか、なんでみんな大学目指さないのかなって。絶対長期的に見て、どっちかっていうとちゃんと大学出てちゃんと勤めた方がお金になるのに、なんでみんなは今の段階にあってこんなに働きたいのかっていうのが理解できなかった。

調査者：高校生の時に周りの状況を見て疑問があった中で、

対象者：うん、そうそう。

調査者：大学生になって授業をとったり、実際に関わっていく中で、

対象者：そうですね。

調査者：状況が整理されてきた？

対象者：そうです。あとは成功したこういう例って結構珍しいじゃないですか。で、なんでみんなは成功できなかったっていうのもずっと考えていて、自分は、たまたま、ほんとに偶然的にいい先生に巡り合っていていい支援を受けていい両親に恵まれて、でもそうじゃない子たちがいる中で放置はできないし、だったらその偶然ではないんですけど、きっかけを作ってあげなきゃいけないってのは思ってたんです。

調査者：それはいつから？

対象者：ええっと、それは大学入ってからだなあ。

調査者：それは知ったから？

対象者：そうですね、授業とか、いろいろ自分で勉強して。自分が当たり前だと思っていたんですよね。だからこう進学できない子たちはたぶん働きたいだけだと思ってたんですけど、そうじゃなくて、もっとなんか要因があるんじゃないかって思って。

調査者：活動をされているのは高1の時に感じた疑問が発端としてあって

対象者：(発端として)あってー、

調査者：大学が決まって先輩に声をかけてもらって活動に入っていて、授業でも勉強するようになってそうした子どもたちの置かれている状況を知るようになって

対象者：うんうん、

調査者：今言ってくれたように自分がきっかけを作ってあげるんだってなつたと

対象者：そうですね。あとは自分はずっとTっていう存在がいて、じゃあ誰かがこう、前にいてくれれば、きっと追いかけてくる人たちがいるだろうって思ってじゃあ自分がそのきっかけを何かしらの形でつくりたいって思ったのが高校だったんですね。

COLORS

調査者：COLORSは自分の中でどのような位置づけですか？

対象者：はああ、どういう位置づけ。っていいますと？

調査者：じゃあ、そもそもCOLORSを結成しようと思ったのは？78か国、RESTART？RESTARTが前準備みたいな感じで。報告書だと78か国が発端だと言われているけど

対象者：そうですね。えと、RESTARTのメンバーと78か国やったメンバーがちょっと入れ替わったのでどっちかというとなら78か国のメンバーがそのままCOLORSになったという方が正しいので自分がずっとRESTARTから関わっていく身としてはRESTARTのような団体とか組織がずっと継続的につづけたらいいな、で、78か国ができて、HICEもそう思ってくださいって、じゃあやろうっていうのが、COLORS。

調査者：継続する組織ができたらいいなって話だけどそれはどういうことを思って？

対象者：終わっちゃうのももったいないし、もっとそういう活動をしてくれる子たちがずっと出てくるだろうなって思ってじゃあ、こう、なんか、一発イベントじゃなくてちゃんと継続したものがほしい、だったらリクルート始めて人入れたりとか、っていうのもしていきたいなって思って、それがきっかけでした。

調査者：COLORSの名前の由来は？

対象者：<調べて>Communicate with Others to Learn Other Roots and Stories。松岡さん、(鈴木)恵梨香さん、COLORSで企画準備をいつもします。

調査者：「78か国(の浜松市民が大集合!～未来はみんなで作る!～)」のメンバーはどうやって集まったの？

対象者：KさんはHICEの紹介で、Cは連れてった、AがRESTARTで何気に会ってるんですよね。で、ちょっと来てって。司会やってもらって。どっちもですね、HICEからも

私たちからも、ちょっと身の回りでもいい、そういうやりたい人いたら誘って、あと HICE も声かけますみたいな。K と C、J が出てきた感じですね。

調査者：J さんはどういう形で入ってきた？HICE？

対象者：J はそうですね、RESTART が元々 HICE から声かけられて、そこで初めましてで、そこからつながってって、RESTART やって 78 か国やってみみたいな。

調査者：いろんな立場の人が COLORS のメンバーに集まっていると思うんだけど、そうした組織に属している自分、各々活動する場が別にもあって、そうした人たちが集まる COLORS という場に属す自分ってどう？

対象者：面白いですね。大学の活動とはまた違うし、自分がいる、こう、地域のコミュニティのとはまた違う活動でしかもいろんな分野でいろいろ活動されている方々と会うのはすごい楽しいっていうか、いろんな目線からいろんな情報がくるんで、例えば今日の学校現場だと親がこう言って先生がこう言って子どもはこうとか。カフェだと今日はこういう人が来たとかってすごいいろいろな話をしてくださるので、面白いですね。それを自分も中に入れるってすごい面白いなって。で、大学生の立場から発言できるっていうのが面白いなあ。

調査者：B さん自身は大学のプロジェクト以外にやっている活動は HICE と N-pocket で？他にもある？

対象者：磐田ですね。あれと、今はやってないんですけど、びよびよはやってて、2 年、グローバル人材(一般社団法人グローバル人材サポート浜松)の I さんのところでやらせていただいた。びよびよは文化人類学の授業でびよびよの説明があってこれはやりたいと思って池上先生に、先生これやりたいのであの、ぜひ紹介してくださいって言ってその時に先輩に紹介してもらって、で、I さんの事務所に通ったのがきっかけですね。

調査者：COLORS の企画はこれまで 5 回、就職関係で 2 回 1 セットをやっている。来年度もメンバーを新しく入れていくって話は以前聞いてるんだけど、自分自身は就職活動も始まったわけだけど、来年度はどうするの？

対象者：あ、でも全然やりますよ。また別。むしろ、気分転換になるので、いいなって思ってた。でもほんとなんか自分が COLORS として、たぶん活動できるのがあと 1 年。就職してどうなるかほんとにどうなるかわからないので、それを続けてくれる人がいたらいいなあって感じでまだ会議はしていないんですけど、またミーティングしてどういう風にリクルーティングしていくのかとかってというのは今後の話かなとはおもいますけど<笑い>。

調査者：組織継続についてはどう思う？

対象者：(継続は)難しいですね。

調査者：後から入ってくるメンバーには自分たち(設立メンバー)の思いを引き継いでほしいのか、それともその時々メンバーの思いを形にしてほしいか

対象者：あー、どっちかっていうと自分たちの思いのほうがいいのかなあって。これ (COLORS の由来を) 見ていくと自分たちのルーツを伝えていく、いろんな人のルーツを_____って感じなので、その子たちにあったニーズっていうか、あたしは就活不安だったのでじゃあ就活セミナー開こうっていうのが元々の発端だったので、じゃあその子たちが自分たちの思うこと、発信しつつも自分たちがやりたいことをやってくれば良いとは思いますがね。

調査者：就職セミナー2回目は見学の形での参加だったんだけど、なぜか堂々と一番前のど真ん中に座ることになって、会場にいたんだけど、後々聞いたんだけど、企業側が日本生まれの外国にルーツのある子が増えている、その存在を知らなかったって声が上がって、こういう気づきがあるっていうのは、企業が採用するときに違ってくるんだろうなって、思ってた、変化をもたらしていると思うんだけど、この点どう？

対象者：すごく嬉しかったですね。私たちも、一応入りたい、就職活動してるけど、企業にも知ってほしい。地元の企業だし、こういう人材がいるんだっていう HICE も言ってたと思うんですけど、グローバル人材って世界だけじゃなくって足もと見ない見てないっていうのが、あの感じてたので、それを知ってくださったのがあの、嬉しかったし、もっとこういう人たちが増えてくることも知ってほしいし、だからただ単に国籍だけ見て切ってしまうのはもったいないことしてるし、むしろこっちの方がポテンシャル高いんじゃないかっていうのも訴えていきたいと思っています。

外国籍の子どもたちの日本社会への参加

調査者：外国籍の子どもたちの日本社会への参加について考えていることを教えてください。例えば、ブラジル人学校の子どもたちはブラジル人コミュニティだけで過ごせなくない。ブラジル人学校の子たちだけでなく、日本に暮らす外国籍の子の日本社会への参加について

対象者：ブラジル人学校に行く子たちってほんとにそこしか行かないっていうか、逆にバイト先にブラジル人学校から入ってきた子は逆にすごいなあって思って。ちゃんとか、出てきたっていうか、という感じだったので。あの、名古屋のフォーラムでブラジル人学校の生徒と意見交換した時もあの、卒業しても自分の将来が見えないっていう子たちが殆どで、海外行くとかっていうのがあった時に、ああもったいないなあって。せっかく日本にいるのに日本語ほとんど話せないとか、そういう時にもっと、こう、せっかくここにいるんだったら日本語学ぼうとか、せめて日本の文化を知ろうっていうのが、もっとあったらいいとは思いますが。それがなんか、いろいろ結構いじめの経験とか日本の恐怖が多少あるのかわからないですけど、そのきっかけがなかなかつかめないのか、っていうのがありますね。

調査者：日本に住んでいるんだから日本社会に積極的に関わってほしいという思いが、

対象者：うん、ありますね。

HICE や N-pocket との協働

調査者：HICE や N-pocket と協働しているわけだけど、協働してっていう点はどう思う？

対象者：ああ、いいと思います。大学じゃない組織っていうのもあるし、HICE とかだと行政と関わってくるので、それでなんか、行政にももっと訴えられるものはあるし、すごく面白いっていうか、いい場だし、この先もたぶんなければならない場だと思いますね。あとはそこに関わることで、今も実際にポルトガル語スタッフもいると思いますけど、こう、実際に現状、今リアルで感じている私たちの声を拾ってくださって、さらに政策に活かすことができればいいなとは思いますが。

当事者と事業者のギャップ

調査者：事業の実施期間が決められているのが現状で、施策と実際のニーズの間のギャップについてどう思われますか？

対象者：家の近くになんていう名前だったかな、juntos(プロジェクトジュントス)?っていうものがあって、ポルトガル語教えるみたいな、があつて。面白そうだから、家近いし、すぐ歩いて行けるしで、行って、すぐだったかな、半年もなかったかな、いなくなっちゃったんですよ。あれ?みたいな。なんかまあ、お母さんも行って、これはうまくいかなさそうだなって感じてたらしいんですけど、それでなんかどっか行っちゃうものどうかなあと。

調査者：それっていつの時？

対象者：いつだったかな、1回だけ行ったので、土曜日で。自分が学ぶ側で、あとは妹たちにポルトガル語を学ばせたっていうことで、お母さんが送ってたんですけど。うん、半年後にはいなくなつて、あれ、空き地になつてんじゃんみたいな、感じのはあつたり。それを例えばほんとに日本語の場でそれを必要としている子たちにとってはそれはないなあってまあ、それは行政とか事業のあれかもしれないですけど、ちょっと不思議な部分もあるし、あと最近思うのは進学支援。あの、高校に行く進路情報とか、いろいろと行政出してるって言うんですけど、実際に親たちに聞くと、「いやわからない」っていうのが、それだめじゃんってわたしは思うし、実際にこう、求め、今家庭教師やってるんですよ、ブラジル人の子に。で、お母さんもずっとブラジルで過ごして日本の制度まだわかってなくて、で、そういう高校の情報全部わたしに求めてくるんですよ。そういう進学情報あるの知らなかったんですかって聞くと、「いや全然知らなかったよ」っていうの、あつて。でも行政は出してるって言うんですよ。だからそのギャップもどこかで埋めなきゃいけない。

調査者：(用意をしているところは)用意はしているんだけど・・・(行き届いていない)

対象者：そうそう、行き届いていない。届いていないと思います。でも逆に、こういういろんな活動に関わる人たちがいるじゃないですか、その人たちは、「いや、情報ある」って言

うので、そういうブラジル人の人でも。あるって言うけど、実際に必要としている人たちに届いてない。から、それが最近のわたしの中の問題というか、どうにかしなきゃいけないなあって。

調査者：政策と必要としている人たちのそうしたズレはどうすれば埋まると思う？

対象者：うんうん、そうですね、どう、どうなのでしょうね。実際にこう、ブラジルの団体 NPO 団体が情報あるって言っている以上、行政もあるって思うじゃないですか。だから、そうじゃなくて本当にニーズ、必要としてる人たちまでは、NPO も実際届いてないんじゃないかって最近の疑問で。じゃあ、なんだろう。NPO にもっと新しい人を入れて行ったほうがいいんじゃないのかなって。今けっこう見ると年代高いじゃないですか。どこの集まりも。結構フォーラム行くと、わたしよりも結構上の人たちが行ってるから、その彼女たちの概念というか、固体概念かもしれないんですけど、(その概念)が、まだこの新しいニーズには届いてないんじゃないか。だからもっと新しい人たちの意見を取り入れるべきなのかなあとは。

調査者：現場の従事者が考えているニーズと当事者のニーズの差があるってこと？

対象者：ありますね、まだ。あと、結構、小っちゃい子たちには(支援は)厚いんですけど、たぶん池上先生も言っているかもしれないんですけど、高校情報は本当はない。H の調査行っても、「高校の情報はまだわからないですね」という人たちすごく多い。家庭訪問(家庭訪問プロジェクト?)の時もそうでした。だから実際に本当に必要としている人たちはどこ行けばいいかもわからないので、ああ、それが元々だめじゃんって思います。

調査者：たとえば、進学ガイダンスはやっているところはやっているよね。

対象者：そうですね。

調査者：でも今年浜松市では金銭的な面から実施しなかった。例えば、HICE の取り組みに入れてしまうと、行政の施策の中に多言語でのガイダンスを入れてしまう、システム化するのが、個人的にはよいのかなあと思うけれど、そのあたりはどういう風に考えている？

対象者：行政っていうと、どういうお金の組み方しているのかわからないんですけど、そうですね、継続したもの、のほうが親が聞いて、(例えば)「ああ、HICE に行くと必ずあるよ」という「必ず」の部分がないんですよ今。例えば、N ポケ行っても、ああ今年やらないじゃんみたいな。必ずの部分がほしいというか、必ずそこに行けば、必ずその情報がもらえるというところがまだ、こう、HICE だとしたら、その HICE っていうところがあるって普及してないんじゃないかなあって。たぶん HICE のパンフレット来て、「へえ」くらい。主観として、思いますね。

調査者：話に出てきた家庭教師先のお母さんは HICE とかそうしたところへのアクセスはある？

対象者：それまだ聞いてないですよ。それも今度。まだ 3 回しか(家庭教師を)やってないの

で。その子を受けた時は、「高校行かせたい」、「ああ、わかりました」「どこの高校行きたいですか」「うーん、近くにあるから h(高校)」みたいな。「あ、そうですか」みたいな。何があるかもわかってないし、どういう高校があるかわかんないんですよね、そのお母さんは。で、入試のシステムもたぶんまだわかってないんじゃないかなあって思って。で、ちゃんとわたしとしては、学力に合ったものを提供しなきゃいけない。で、お母さんが言うには、大学進学させたい、文芸大みたいな学校に行かせたいってとこだと、進学校に入れないと。たぶんいけないじゃないですか、で、その進学校もわからない、どれが進学校で、どれが進学校じゃないのかっていう情報が今まで見たことがないですよ実際、ポルトガル語で。みんなが言うのは、システム上でお金で制服とか。で、実際にどの高校がどこにあって、どういう科があるっていうのを多言語で見たことがないのが、これが不足している情報。真の情報なんじゃないかなって思います。そのニーズが(施策従事者に)届いてない。すいません、熱く語っちゃって<笑い>。

■ エスニシティ(ルーツ)への肯定感

エスニシティへの肯定感

調査者：自分のエスニシティ(ルーツ)への肯定感を 1(低)～5(高)段階で表すと。

対象者：ええ、自分のルーツ、5 です。

調査者：なぜそのように思うか？

対象者：ああ、いろんなこういう活動にも手を出しちゃったっていうのもそうなんですけど、いろんな人たちからも見て、これ(自分のルーツ)は自分にとってプラスなんですよ。ポルトガル語を話せるとか、どこどこで過ごしたことがあるとか、あと日本の文化を知っているっていうのがそうですし、ええと、別の観点から日本の文化とか日本語っていう言語が見れるっていう意味で、それを今、それを活かして今自分はその活動をしていたりするんですね。例えば日本語教員養成課程を取って、実際に留学生に日本語教えるときは、「別の観点から教えるのはおもしろい」って実際に先生から言われたことがあったりとか、あとは今就職活動をしていて、必ずブラジルにつながっている企業とか会社を選んでいくときに、それは自分のルーツが強いきっかけを与えてくれているって意味で、5 です。

肯定感の変遷

調査者：ブラジルでの小学時代、日本での小学時代、中学時代、高校時代、大学時代と来ているわけですが、ずっと 5 なのか、変化がある？

対象者：ブラジルにいた時は、一応日系扱いだったので、なんか普通っていうか、それが普通

っていうか、うーん、自分のエスニシティあんま考えたことがなかったっていう意味で3ぐらいかな。あの会館通ってて。あのわたし沖縄にルーツ持ってて、沖縄の県人会みたいなの会館っていうところがあって、そこでフットサルやってたりとか、通ってて、そこでまあ、あたし日本とブラジルがあるんだあって思ってっていうことで3かなって思って、自分が日本人だと思って日本に来ると、外人みたいなこと言われると、はあなんなんのかなって思って、あたし一体何人なんだったっていうジレンマに落ちたのがその時だったので、来た時は、そうですね、中学1年生で言うと、1っていう感じで。

調査者：そのジレンマは小学校6年生の時からあった？

対象者：ありましたね。外国人扱いされるので。

調査者：それは小学校6年で学校に入ってから中学2年でブラジルの子が同じ学年に入ってくる時まで？

対象者：そうですね。

調査者：自分が何人かわからない・・・

対象者：そうですね。(自分が何人か)わからないです。1、2くらい。

調査者：中学校2年でのブラジルから来た子と友だちになってからは？

対象者：来て、ポルトガル語で話して、「ポルトガル語かっこいいね、いいね」って言ってもらえるとうれしかったので、4くらい。4まではいかないですかね、3くらいですかね？ポルトガル語話せることってかっこいいんだって思った。

調査者：そこでひとつポイントがあって、

対象者：そうですね。

調査者：その後はどういった形で今の5に至りますか？

対象者：そうですね。高校入って、やっぱりインターナショナルクラスがあって、みんなでポルトガル語でわいわいしてるとか、あの一、向こう、一般クラスに混ざった時も、あのちょっと廊下でポルトガル語で話していると、いい感じ。に見られるのが、すごいなんか優越感じゃないんですけど、自分はポルトガル語話せるんだっていうことが、こう、プラスになっていったっていう、その時に自慢できるようになったんですよね。わたしブラジルでこうこうこうだって話をして。

調査者：それは高1の時？

対象者：ですね。インターナショナルクラスの時代だったので。うん。自分自身が自分を認められるようになっていったっていうのも大きいかなって。

調査者：大学生になって、いろんな活動をしたり、そこでの出会いや大学での学びを経て、高校生の時と比べて変化はあった？

対象者：ああ、なんか自分にしかできない活動をもっと、元々すごいずっと思ってることで、自分だからこそできる、言語話せるし、こういう背景をもっているからこそ、こういう新たな支援じゃないんですけど、こういうロールモデルを作ろうっていう活動ができ

るって思ってるのも、5にしたきっかけなのかな。こう、だんだん上がってきたきっかけ。

調査者：高校生のインターナショナルクラスの時と、大学生の今では同じ5?

対象者：4.5があったとしたら、高校の時が4.5で今が本当に5っていうか、最高値と思うので、そんな感じですね。

生きる戦略

調査者：後から続く子どもたちに、日本でよりよく生きていく戦略。自分はこういう風に生きてきたからよかったという戦略って何かありますか?

対象者：すごいざっくり言うと媚を売る。わたしは頑張ってる日本語勉強しているんだっていう、頑張ってる感をアピールすると誰かしらがそれを見てくれている。結構頑張って日本語を勉強すると、その、一生懸命小学校の先生がついてくれたし、たぶんまあ何かしら一生懸命中学の時もやっていたから、「ちょっとブラジル人学校やめて。行くのもったいない」って人が言ってくれた。自分が頑張れば、誰かしら見てくれる。から今頑張るしかないっていうのが、こう、戦略っていうか。のと、いい意味でも悪い意味でも周りに合わせる。ある意味、中学から高校へみんな行くからわたしも高校行ったっていうのが流れのひとつだし、ええと、進学校入ったからみんな大学行ってるからあたしも大学入ろうってすごい合わせてた。周りの環境ってすごく大事なのかなって、思ったのと、とりあえず日本人の友だちを作るっていうのがすごい大切だなあって。その子の友だちの友だちと友だちになる。友だちが増えていくし、こう、日本のシステムとかいろいろ学べる機会になるから、そこなのかあって思うのと、支援に頼りすぎないこと。わたしが中高ことばの教室に行かなかったことで、部活ちゃんとやれたし、こういろいろ進めていけたのが本当にいいとは思っているの。

調査者：中学高校と地域の日本語教室や塾とかに行ったこともなく、

対象者：なくて、たぶん、中学高校の時もHICE知らなかったのかな。なんか来るなパンフレット、あれが来るぐらい。実際何やって、NPOとかそういう概念全くなくて。

調査者：自分自身が中学生高校生の時もそうした情報がなく、

対象者：なかったし、自分が探そうとしていなかったっていうのもあるかもしれないけど、知らなかったですねNPOがあって、Nポケとかも全然知らなかったし、へえ、くらい。

調査者：受験に関する情報も先生が教えてくれるまでなかった?

対象者：なかったです。うんなかったです。はい。

調査者：人との出会いが大事、

対象者：うん、ほんと偶然じゃないですか、そういうの。ほんとにそういうない人たちって結局落ちこぼれていくかもしれないし、工場行っちゃうかもしれないし、もったいないっていうか、なんでそうなるのかって。ほんとひどい先生もいるし、なんだろうな。

将来のビジョン

調査者：高校生までは目の前の目の前のって話だったけど、大学3年間を過ごして、将来こういうことがしたいなってことはある？

対象者：今ですか？将来はやはり、日本とブラジルの間にずっと生きてきたから、それを続けていきたいっていうのがあるし、浜松市で育ったし、いろいろまあ、支援を受けたかよくわからないんですけど、まあ制度的にも受けたかもしれないから、こう、浜松市ないしは静岡県に何か貢献している企業とブラジルに連携している企業。その両方がある企業が今、自分の中で絶対条件で、その中で自分は働きたい。どっちにも貢献するところにいたいってのが今、将来の夢というか、就職活動にあたってっていう感じですね。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：B
- ・ 日時：2015年7月21日13時～14時
- ・ 回数：2回目
- ・ 場所：Bが在籍する大学の個室
- ・ 記録：43分47秒

■ インタビュー

高校進学に至るまで

調査者：よろしくお願ひします。

対象者：お願ひします。

調査者：まず最初に、前回話をしてくださった時に、話してくれた、「あなたは高校に行ける」と日本の学校に行くように中学校の先生に言われたと。それは中学のいつの時？

対象者：ええと、担任の先生がちょうどg(高校)出身だったので、その先生が担任だった時なので、1年生の時。1年生の時のどっかの3者面談のはずです。

調査者：ブラジル人学校に行こうと考えていたのは、いつになる？

対象者：たぶん、その時にはあまり深く自分の進路について考えていなかったです。深く、で、とにかくポルトガル語がだんだんわからなくなってきたっていう実感が湧いてきて、で、(ポルトガル語と日本語の)どっちも中途半端になるのが嫌だったので、じゃあ、だったらブラジル人学校行こうって。で、そのたぶんそれをその3者面談、中1かなあ、で先生に伝えた。

調査者：じゃあ、中1のどこかの段階でブラジル人学校っていう選択肢が頭の中にあって、

対象者：そうですね。

調査者：それを3者面談で担任の先生に言ったわけだ。

対象者：そうですね。

調査者：それで、「あなたは高校行けるよ」ってなって。

対象者：うんうん。とりあえず、そのヒントをもらってみたいな。

調査者：その話を受けて、中2、中3と来て、中2、中3の時にはもうg高校っていう話を(前回)されてて、

対象者：そうですね。同じ友だちが中国人の友だちがその、中国人の友だちの従妹がもうg(高校)にいたんです。1個上？私たちより。2個上か。2個上でもうg(高校)にいて、なので、その中国人の友だちが、「ああ、私の従妹いるから私もそこ(g高校)に行く」。それで(Bも)「私も行く」みたいな感じで、こう、まあ行けるし、さらにその自分の友人の従妹もいるし、まあ行ってみようかなっていう雰囲気でした。

調査者：それはいつのこと？

対象者：それが思い出せないんですよねー。

調査者：もう中、

対象者：中1ではないと思うんですよね。3者面談やって何となく、ああ高校行けるんだってくらい。

調査者：じゃあその時にはまだ、g(高校)しかないんだ g(高校)行くんだっていう感じではなかったんだ？

対象者：っていうのはなかったですねー。高校に行けて g(高校)っていう学校があるんだっていう認識だったと思うんです。で、たぶん、その従妹が入ったのは私たちより2個上のはずなので、私が中2の時のはずなんですよね。なので、中2の時に入った時に、たぶん友人の従妹が g(高校)に入った、ので、その従妹いるし、親友も目指しているから私も行こうかなっていう感じでしたね。

活動と先輩

調査者：はい。わかりました。それで、次なんだけども、大学生になってよさこいソーランから活動に関わったと。

対象者：うん。

調査者：その時に先輩方との出会いがあって、「先輩すげー」ってなったっていう話を前回してくれているんだけど、

対象者：ああ、

調査者：こういった先輩、まあ国籍問わずね、活動されている先輩っていうのはどういう存在だった？

対象者：ああ、あの一、Sさんは普通に何だろう、むちゃくちゃ活動されてて、輝いてて、っていう存在で、なんかTさんっていう自分と同じルーツを持った人たちはまたちょっと違う見方をしていて、自分、こういうルーツのある人でもこういう活動できるっていう何だろう、プラスの見方、自分の可能性が見えてくる存在でした。

調査者：Tくんが。

対象者：そうですね。Sさんが何だろう。日本人っていうステレオタイプチックになってしまうんですけど、こう、普通に活動をされている人。でもTさんとかNさんとかの方が自分と同じルーツを持っているから、それで親近感が湧いてっていうか。で、それでこういう同じルーツを持っている人とか何だろう、割とマイノリティじゃないですか。でも、そういう活動してるっていう。それでも目立っていて、いい方で目立っていて、っていうのが自分にとってはまた違う感じでしたね。

否定された経験

調査者：次の質問なんだけど、外国にルーツがあることで、今まで否定された経験はありますか？

対象者：主に小学校の時でしたね。

調査者：具体的に。差し支えなければ。

対象者：1番、すごい覚えているのは、ええと、小学校6年生の時に来て、半年ぐらいでついていけるようになって、で、あの一、算数のテストであの一、友だち、何か間違えて、で、そのクラスメイトに「どうせ外人だからできないでしょ」みたいな(こと)を言われたのがすごい悔しくて、それって外国人関係ないじゃんって思ったのがきっかけで、「絶対お前超えてやるし」って思ったのがあって<笑い>、それで勉強してテストでその人(を)超えたっていうのがあって、それがあつたんですね。

調査者：その負けん気みたいなものはもう、それはずっとある？

対象者：たぶんありますね。成績もずっとトップでいたいっていうのもありますし、ブラジルにいた時からそうだった。

調査者：負けん気っていうのは、今振り返ってみて、学業達成とか就職に関しても、今まで生きてきた中でこう、重要なファクターだったりする？そうでもない？

対象者：ああー、(重要なファクターだったり)しますね。高校の時も絶対負けたくない、で。インターナショナルクラスってすごい、孤立しているというか、別の棟にあつたっていう感じだったんですが、こう、絶対特進の平均(点)を超えるみたいな<笑い>、みんな5人でやろうっていうのがあつたから、そういうのは強いんじゃないかなあ。

調査者：否定された経験というのが、今話してくれたように、「絶対負けない。頑張ろう」のような感じで、影響をもたらしていると。何かこう、今、今だからそうした否定された経験がこういう影響をもたらしているんだっていうのはある？

対象者：ああ、まず、何だろう。そういう風に思っている人がいるんだっていうのがわかつたのがひとつ。こういうなんか、外国人をよくないっていうか。ブラジルってそんな外国人とか関係ないんですよ。日本人だとか、何人だろうが、ブラジル人だしっていうのがあつたんですが、日本ってすごい外国人遠い存在だし、なんていうかこう、排他的扱いされちゃうのが衝撃的で、ああそういう存在なんだ私っていうのがあつてからの「いや、そうじゃダメでしょ」って思って、高校とか大学でこういう活動をしましたきっかけにはなりましたね。

ブラジル人大学生

調査者：ええと、最後、高校生の時に、Nさんの座談会、g高校に行ってなのかな、っていうのがあつたと。で、その時の記憶ってあつたりしますか？

対象者：残ってない、ほんとに覚えてないんです<笑い>。何となく来たっていう。なんでいらしたのかもあまり記憶にない。

調査者：あんまりじゃあ記憶にない、

対象者：なんか、来て一、話して一、「ああこういう人がいるんだ」っていうのは何となく。こういう人がいるんだっていうのは。何だろう。Nさんってポルトガル語があんまり得

意じゃないって聞いてて、その時私とちょっと違うのかなって思ったのが大きかったかもしれないですね。割と日本がメインで育った人だったので、「私ちょっと違うかもしれない」っていうのを思ったのが正直な感想です。

調査者：ブラジル人の大学生がいるんだってという衝撃がっっていうことはなく、

対象者：そうですね。どっちかって言うと Tさんが大学に入れたことの方が近かったです自分にとっては。部活も先輩後輩という関係だったので、割と近くにいた人でした。

調査者：はい。あ、ちなみにだけど、それまでに日本で大学進学を果たしたブラジル人がいるっていう話は聞いてた？

対象者：あああー、この Nさんの話の段階でも含め？

調査者：うん。

対象者：ないな。

発信にあたって

調査者：わかりました。発信について、どういう思いを持って発信活動を行っていますか？

対象者：はい。えーと、これって全般的な活動ですか？COLORS やら。

調査者：まあ、そうだね、特に RESTART や、あの一、「物申す」のような活動、

対象者：うんうん。

調査者：あとは JICA で話をする、自分の経験だとか、教育、日本の教育こういうところを改善した方がいいんじゃないかとか、あとはその、子どもたちにメッセージを送ったりとか、保護者の方に情報提供をしてるじゃんね。そういうような活動に対する思いというか。

対象者：ええと。それぞれあって、子ども、自分より下か同年代の人たちに新たな道、選択肢をもうひとつ与えられたらいいなって思ってた。なんか、今って高校って定時制とか出て、工場みたいになってというのが1番多く、多いっていうか、未だにそのイメージが多い。そうじゃなくて、こういう大学も行こうと思えば行ける、自分の努力次第で何とかなるっていう、お金だって何とかなる、奨学金もあるっていう、こういうこの3つの中だったらこれにしようかなっていうもうひとつの選択肢を与えられたらいいなって。もしくは自分に夢があったら、その選択肢を増やして、そこに突き進めばいいっていうことを伝えたいなって。

調査者：じゃあ、保護者の方に対しては？

対象者：保護者の方は、こう、ちゃんとサポートしてほしいっていう、が多くて、あとは(日本とブラジルを)行ったり来たりせずに親がちゃんと決めないと、進路とか日本にいるのかブラジルにいるのかっていう、ちゃんと決めないと子どもだって自分の将来(の計画を)立てられないので、こう、ある意味サポートを、そういう意味でもサポートだし、こ、頑張ろうとしていることをやめて、「工場行きなさい」っていうことではなくて、その子どもの夢をサポートすることと、絶対こう、あきらめずに日本でだって大学に

行けるということを伝えていきたいなと思っています。

調査者：その場にはさ、例えば RESTART の時にも日本人の方もいるよね。その日本人の方にもこういうメッセージがあるんだっていうのはある？

対象者：ありますね。前、今はかなり少なくなりましたが、こう、前はブラジル人がうるさいとか、ごみの出し方がわからないとか、いろいろトラブルメーカーだっていうイメージがあったんですが、それをまず払しょくしたかったっていうのがひとつ。と、外国人って、私たちって日系だから完璧な外国人ではない、元々日本の血入ってる、なのに、そんな排除することもない(でしょう)って思ってた、なおかつ外国人だからって教育に興味がないわけではないし、学校だって行きたいし大学だって行きたい。夢を持ってるっていうことを伝えたかった。

調査者：はい。

対象者：教育委員会とかは、まず当事者がいなかったんですよ、まず。この「物申す」でやった時からだんだんひとり、アドバイザーみたいな感じで、で当事者が出てきたんです。でも、それまではいなかった。いないのに、どうやってそういう政策をやっていくっていうのが、私は不満で<笑い>、それで上手くいくわけがないって思って、じゃあ「私たちの声聞いてよ」って思って、「物申す」ができたんじゃないかなって思います。

発信の位置付け

調査者：今、こうやっていろいろな機会が発信をしているわけだけど、自分では発信をどう捉えている？

対象者：ある意味プレッシャーでもあり、ある意味なんだろう、そう語ることによって決心が固まるっていうか固くなるっていうか、っていう感じはしますね。なんか、自分が就職すれば、きっと日本で就職も可能だし、大学出たって就職する場所はあるんだって伝えるために、まず自分がそうならないとっていう。プレッシャーもあるけど、それも自分の夢だしっていうなんか両方の立場があります。

エージェント

調査者：はい。発信にあたって、HICE であれば松岡さんや鈴木恵梨香さん、「物申す」であれば池上先生、そうした場を一緒につくっていくエージェントがいるわけじゃんね。そのエージェントとの出会いを自分ではどう思っている？

対象者：ああ、偶然っちゃ偶然かもしれないし、必然っちゃ必然だったかもしれないなあって思ってた、何だろう、いろいろこう、つながりつながって出会っている気がして、で、なんかそのひとつの要因が自分がすごいやりたいことを口に出していることだと思うんですね。こう、ブラジルの、元々のきっかけはあれですね、(中川)大臣との対話で松岡さんがいらしていた。で、「ちょっとこういうこと企画しているんだけど、どう？」みたいな感じで、その HICE に行ったら、「私こういうことやりたい」って言ったら、

こう、採用してくれてみたいな感じです。

調査者：大臣のフォーラムでの話、(松岡さんから)こういうことやろうと思っているっていう話は、RESTARTにつながるの？

対象者：そうですね。「何かやりたいです」ってとりあえず。

調査者：それは松岡さんから具体的な投げかけがあったわけじゃないんだ？

対象者：松岡さんからこういう、なんか、何だったかな、「若者が発信していく何かやりたい」とか、「HICEで若者が集まって何かしたい、興味ない？」ってことでとりあえず行って、いろいろ話していくうちに、えと、高校出た時からずっとなんか、高校生とかに向かって何か伝えていきたいっていうのを思っていたのがずっとあって大学に来たので、それを伝えたら、じゃあそれをやってくれればいいよっておっしゃってくれたので、なんか、それでRESTARTになっちゃったっていう<笑い>。RESTARTになり、COLORSになり、「物申す」になりって感じですね<笑い>。

調査者：こうした後続の子どもたちへの発信はRESTARTが初めて？前にしてた？

対象者：ああ、あの本当に記憶にないんですが<笑い>、あの一先週に高校時代の担任の先生に会って、(中学生が対象の)U(高校で)のステップアップ(教室)に私行ったことがあるらしいんですよ。あまり記憶にないんですが<笑い>。

調査者：<笑い>。

対象者：で、その時になんか、勉強を教えながら自分の経験を語って、小学校6年生で日本に来て全然(日本語が)しゃべれなかったけど、今大学にとか高校に入った先輩たちの話をするみたいな(会)っていうのをやったことがある、らしいです。

調査者：それは自分ひとりで行った？

対象者：Cと行きました。

調査者：2人で行ったの？他のインターの子は？

対象者：(インターの他の子)は、行かなかった・・あまり記憶にない。で、その理由が担任の先生がその私たちの思いを聞いて、それができる高校に行きたかったらしいんですよ。G(高校)すごい忙しい進学校で。「U(高校)に移って、U(高校)でそういう活動したい」、で、その活動をしていた先生がちょっとおいでよってことで、高2か高3の最初かなあ。

調査者：じゃあ、高1のインターの時にはそういう思いがあったんだ。それで呼んでもらったと。

対象者：(呼ばれて話したことは)ほんとに覚えてないんですけど<笑い>。「あったっけ、そんなこと」って思う位。「Bいたよ」って言われて。いたらしいです私。

調査者：それがあって、次はもう大学生になってから？

対象者：そうですね。

調査者：ちなみに、他にもJICA横浜や磐田のフォーラムとかで話したりしていて、他にもある？

対象者：県の、

調査者：Dと一緒にいったやつ？

対象者：ああ、そうですそうです。ああ、あと滋賀、滋賀県のなんか多文化共生系のやつ、でも話しました。

調査者：いつ？最近？

対象者：ええとですね。去年、去年かな。

調査者：それは自治体職員とかが聴きにくるやつ？

対象者：そうですそうです。

調査者：それじゃあ、その場には子どもや保護者が来てっていうより、実務でやってる、

対象者：そうですね、先生とか、の方が多かったですね。

発信後の変化

調査者：発信するようになってからの変化について。わかれば。まず、自分自身はどう？

対象者：自分は何だろう・・・。何だろう<笑い>。

調査者：さっき、ちょっと話してくれた自分にプレッシャーっていうところ、

対象者：そうですね。それですかね。プレッシャーでもあり、自分の夢でもあるので、苦でもなければ、楽しいのかな。自分自身の変化、うん、プラス要因が多いですね。結局、その場で「頑張ったね」って言われると、「そういえば、私頑張ったな」っていうことで、「あ、私頑張ってるんだ」って認めてもらっている。こういうポジティブになれるですね。

調査者：そこから話をすることで、今後別の機会に話をさせてもらえるようになったとか、何かこう、新しく情報が入ってきたとか、そういうのはある？

対象者：あーありますね。[希望により詳細は伏せる。就職活動にあたって企業関係者が自分の生き方を評価してくれて、それがとても大きかったという旨を語ってくれた]。究極の例はD。私が磐田に教えに行っていた時に、文芸大で活動しているこういう人がいて、余計文芸大に入りたいと思ってくれたことが嬉しかった。それを(県の)協議会で聞いて、えええって<笑い>。今言うみたいなく笑い>。っていうのが大きかったですね。

調査者：それは、自分自身がTくんをロールモデルとしたようにDくんも、

対象者：続いて、

調査者：続いてくれた。

対象者：こうやって続いていくんだって思って。嬉しかったですね。

調査者：他に何かリアクションがあったりする？外国籍の子から。「あれを聴いてこうだったんですよ」とか。

対象者：直接はないですね、その場ではみんな「勉強頑張らなきゃ」とか「やればできるかもしれないね」という風には言ってくれますね。実際にどうなったかはわかりません。

調査者：あとは、保護者さん。RESTART とか今まで言ってきたやつもそうだし、あとは絵本プロジェクトでブラジル人家庭に訪問をされているじゃんね。その中で何かあったとかはある？

対象者：うーん。絵本プロジェクトは、たまたま訪問した家庭がその子のお姉ちゃん大学生で高校あたしと同じだったという。お姉ちゃんが大学生だったんで、大学生いっぱいいるんだねっていうことを(保護者)はおっしゃってくれて。その他には、奨学金の話を親が聞いてきたりとか、大学の入試のシステムとか制度とか、聞いてきたりとか、「私立と公立って、どちらがうの？」とか。間接的に聞いてくるので、たぶん、保護者もそういう情報に関心がある。そういう変化があるのかなあって思います。

調査者：他に機会に何かそういうリアクションがあることはある？例えば、「物申す」とか絵本プロジェクトの報告会でとか。

対象者：なんか、よく聞かれるのは、どうやって日本語を勉強したのか(ということ)。「うちの子は全然勉強してくれない」という悩み相談。

調査者：うん。あ、じゃあ具体的な質問になるんだね。

対象者：そうですね。なんか、「何時間勉強した？」とか、「どうやって漢字覚えた？」とか、「小学生の時、何してた？取り出し(授業)があったのか、塾行っていたのか？」っていう「どうすれば、あなたみたいになれる？」っていう質問がすごく多いです。「私も分かんないですけどね<苦笑い>」みたいなね。答えちゃったり、しますけどね。

調査者：そういった発信を聞いた日本人の反応っていうのは？

対象者：これ1番わかりやすくて、みんな何かしら名刺やら(持ってきて)、うちのところに来て、なんか何とか協会とか、NPOの代表の方だと、「今度話しにおいでよ」というのが1番多いです。1番多い。あとは、あの、先ほども言ったように「頑張ったね」とか、「この先も大丈夫だよ」とってすごい、自信を与えてくださるのが、ありがたい。ありがたいですよ。あとは、イメージが変わったっていうのも多いし、「あっこういう風に頑張っている子がいるんだ」ということも言われたことがありますね。RESTARTで。

調査者：はい。次、さっき少し話をしてくれたステップアップ(教室)とかは日本の学校に通っている子が対象じゃんね。ブラジル人学校の子どたちに対して発信していくっていうことは考えたりする？

対象者：あー。

調査者：RESTARTの時って対象はあんまり考えてない？

対象者：そうですね。

調査者：日本の学校に在籍している子たちが対象でやった、という感じでもない？

対象者：本当はそうだったんですが、実際に集まったのが、割とそういう活動をされている日本人の方、だったので、ターゲットには届いていない気がしますね。RESTARTは特に。実際難しいんですよ。

調査者：自分自身が発信する場合は日本の学校の子が対象？ブラジル人学校の子も含む？

対象者：あー。

調査者：どこの学校にしようともブラジル人の子どもが対象なのか、日本の学校に行っている子ども、ブラジル人学校の子もっていう風に個別になっているのか。

対象者：本当は日本、ブラジルコミュニティってなってほしいんですけど、実際日本語で全部話しているので、届くのは日本語、日本語なので、実際届くのはたぶん、日本の公立学校に通っているブラジル人ですね。

調査者：その辺りはどう？ブラジル人コミュニティを対象にしたいから、(対象の)範疇にはブラジル人学校の子も、

対象者：そうですね。

調査者：現実問題、日本語って言葉でやっている分、届きにくい、

対象者：そうですね。あと、ブラジル人学校にいる子たちって、ちょっと考えていることが違うのかなって。どうなんだろう。すごい失礼な言い方をすると、もっと将来が見えていない気がするんです。もちろん見えている人たちもいる。けど、名古屋とかのフォーラムで実際にブラジル人学校の子たちと話をした時にこう、何だろう、学校出ても将来がないっていうか、進路を考えていないような気がするんですね。実際こう、ブラジルに帰ったりとか、結局工場に行ったりするっていう子が多いので、どっちかっていうと、日本の社会で生きるって決めた人たちって、たぶん、日本の公立学校に入ると私は勝手に思っているんで、その子たちに頑張るって決めたんだったら、よりよい未来を与えてあげたいなって思って、そっちの子たちがメインになってしまっています。

調査者：ブラジル人学校の子に、何て言うのかなあ、何かしてあげられるというか、自分の発信っていうのがブラジル人学校の子たちに何か影響をもたらせるか、そういうのはどう？現実問題難しいよねってなんかこう、言葉の面もそうだし、日本社会から遠ざかっている子もいる状況があるから、届けたいものはあるんだけど、なかなか現実問題難しいよねって考えているか、いやもう、これからやるんですって考えているか。

対象者：あんまり考えてないかもしれません。実際私通ったことがないんですよ、日本のブラジル人学校。っていうのがひとつ。なんか、自分が自ら日本社会から遠ざかっているのか、日本社会から距離を置かれたとか、わからないんですけど、ある種の逃げ場のような気がするんですけど、どうしても。私の目からすると。なので、そこで言っても伝わるのかなってところがひとつ、なのかなって。何かしらブラジル人学校にいる理由があると思うので、今のところはそれを考えてはいないですね。

調査者：はい。わかりました。ちなみにだけど、あんまり浜松の例がないから難しいかもしれないけども、不就学の子どもはどう？

対象者：ああ、

調査者：活動する中で会ったことある？

対象者：今のところはないですね。

調査者：であれば、発信の対象がその子たちにはない？

対象者：ないですね。

家族

調査者：次、家族についてのお話を聴かせてください。祖父母、おじいちゃんおばあちゃんがどういった人なのかっていうことなんだけど、父方母方それぞれ、どういう風に接してもらってたかとか、こういうことを言われていたとか。

対象者：ああ、ええと、父方のおじいちゃんは早くから亡くなったので私は知らないです、会ったことないです。で、おばあちゃんの方は、・沖縄の人なので、何だろう、ウチナーグチでしゃべられる<笑い>、しゃべってた。ウチナーグチとポル語混じりでしゃべってて、市場で仕事をしていました。あの一果物とかをどっかから仕入れていたりとか

調査者：それはブラジル？

対象者：ブラジルです。

調査者：父方のおじいちゃんも沖縄の人？

対象者：たぶん沖縄の人。お父さん沖縄なので。たぶん、おそらくそうです。

調査者：お父さんとかから、おじいちゃんのこと聞かない？

対象者：あんま聞かないですね。うん。

調査者：おばあちゃんからも？

対象者：あまり(おばあちゃん)言わない。父方の方はラフというか、やさしいタイプの家系というか、雰囲気でした。

調査者：おばあちゃんからは、「こうしなさい」、「ああしなさい」とか何か話をされたりする？

対象者：どうだったかな・・・あんまりないかもしれないですね。記憶では。

調査者：じゃあ、お母さん側のおじいちゃんおばあちゃん。

対象者：おじいちゃんは、たぶんブラジル国籍になっているんですけど、元々日本人、たぶん移民でブラジル国籍取得したのかな。よくわからないんですけど。で、おばあちゃんは日本人、日本国籍。おばあちゃんが沖縄。たぶん両方沖縄だと思うんですけどね。おじいちゃん元々、ええと、農場ではないけど、持ってて、昔。そこでいろいろ、牛とか馬とかいろいろいて、いろいろ栽培していたらしいです。

調査者：それはブラジルで？

対象者：ブラジルでブラジルで。

調査者：母方の方のおじいちゃんおばあちゃんはどういう風に接してくれたりとか、こんなこと言っていたなあっていう記憶はある？

対象者：おじいちゃん、なんか言ってましたね。なんか。おじいちゃんはずごいいろいろアクティブな人で何だろう、いろいろ自分で作っていた人。なんか、ないものを全部自分

で作ったりしてた人。おばあちゃんは何か言っていたかな・・・あんまり記憶にないですね。お母さんから(B の)おじいちゃんおばあちゃんについて聞いていたりした？お母さんがこういう風に育てられたとか。

調査者：それはあるかもしれない。ええと、おじいちゃん、お母さんの方のおじいちゃんが昔スーパーみたいな。スーパーマーケットみたいなものを持っていて、で、お母さんとお母さんの兄妹がそこで働いていたらしいんですね。で、まあ、働いていたので何ももらえずにいた、ただ働きじゃないですけど、お手伝いみたいな感じで働いていて、そこが経営が上手くいかなかったときに自分たちにも何も手元がない状態ってなったらしいんですね。だからお母さんは自分のこう、子どもたちには働くんだったら自分のそれに見合う収入というか、自分たちの手元に残るものは絶対今与えたいみたいなことをこないだ言っていましたね。たぶんなんだろう、結局今何もない、お店も今なくなってしまったんですけど、何もない時に自分たち、子どもの方にも何もない状態っていうのがお母さんはよくないって思っているらしいです。

対象者：そういう話がされるのは自分のBさん本人のね、就職関係の兼ね合いで話をされるの？
そういうことではない？

調査者：(就職関係)とか、何だろう、アルバイトとかしてて(家に)帰ってくると、「私の時はこうだったのよ」みたいな話とか、「若いうちに好きなことやりな」っていうことは言われますね。「私はできなかったから」って。ずっとお店を手伝っていたりして、お母さんのお父さん(B にとってはおじいちゃん)を手伝っていたから、あまり自分がやりたかったことはできなかったみたいなことは言っていたんで、すごい好き放題<笑い>やらせてくれています。

対象者：お父さんからはそういう話をされたりする？

調査者：お父さん、何だろう。お父さんも同じ。とりあえず「工場行くな」みたいな。お母さんもずっとそれは言っていますね。「工場だけは行くな。そのために大学出たわけじゃないでしょ」ってっていうのをずっとずっと言われています。

対象者：ちょっと話が今出たんだけども、ご両親がどういう人かかっていうことなんだけど、ブラジルの方では前に話してくれたように、自営業をやられていた、

調査者：うん。

対象者：自営業っていうのはどういう？

調査者：何て言えばいいんだろう、ドラッグストアみたいな。うーんと、でも薬の方じゃないんですね<笑い>

対象者：えーと、シャンプーとか売っている、

調査者：わかるわかる。

対象者：何て言ったらいいんでしょう。化粧品を売ったりとか、ボディケア関係とかシャンプーとか。そういう系のドラッグストアのドラッグじゃない方<笑い>。

調査者：<笑い>ご両親の学歴っていうのは聞いたことある？

対象者：ええと、お母さんは大学中退。お父さんはわからない。義務教育は終わっているはずなんです。

調査者：そういう話はされたりとか、聞いたりする？

対象者：ああ、聞きます聞きます。「何してた？」とか<笑い>、普通に(聞く)。お母さんはあの、美容師やってました。なので、その大学やめた後に美容師になりたくて、専門学校みたいなのに通って、美容師してた。で、私を妊娠した時にやめて、みたいな感じですよ。

調査者：はい。

対象者：お父さん、何してたんだ。あ、お父さんはトラックの運転手だ。

調査者：それをやられてて、(その後)自営業？

対象者：そうですね。なんでかわからないんですけど、何かのきっかけで、そのドラッグストアをやった。私よく覚えてるんですけどね。一緒に仕入れとかやっていたんですよ。あと、お店手伝ったりとか。レジに立って、全然わからない、こう打ったりとか<笑い>。接客してました<笑い>。

近隣の人々との関係

調査者：最後。日本に来てから、近隣の人々との関係はどうでしたか？

対象者：ああー・・・どうだったか。

調査者：ずっと同じところに住んでる？地域的には。

対象者：そうですね。で、何だろう。マンションが2棟あって、みんな、小学校が徒歩5分ぐらいのところにあって、みんな同じ学年の子がいたりしたので、小学校の時はその子たちと遊んだりとか、あと大家さんがマンションのこの辺(→近く)に住んでて、いい人で、いろいろ声をかけてくれたりとか。「大学行ったんだ。おめでとう」とか、すごい話してくれたりしますね。

調査者：なんか、こう場所によっては、隣にはどんな人が住んでいるのかわからないとかあるかと思うんだけど、

対象者：ああ、

調査者：場所によっては、地域の子は地域で育てるっていう感じで、

対象者：ああ、

調査者：例えば学校行くのも人に挨拶するのは当たり前みたいな。誰々さんっていったら、あの家の子だよみたいな。

対象者：あああ。

調査者：そういう感じではない・

対象者：小学校の子っていうか、友だちは知っていました。何々さん家あそこだよって。あとは、そのマンションの人たち。ブラジル人が住んでて、そうですね。結構ブラジル人が多くて、引っ越した当初は。結構親としゃべったりとか。地区っていうと、ちょ

っと違う気がして、マンションの2棟の間。自治・何とか町の集まりとかあるじゃないですか。

調査者：自治会？

対象者：自治会とか。そんなのは行ったことないです。あとは児童会とか。あるじゃないですか。わかりません。浜松祭りとか全然わかりません。お掃除してとか言われたら草取りに行ったりとかはします。

調査者：町内の行事とかでお掃除やりますよって時とかに行くってこと？

対象者：たまーに。行ける時に親が言ったりして、廃品回収とかリサイクルとかの時とかは学校の関係で行っていますね。

調査者：そういう時に地域の人と話したりする？

対象者：お母さんはしてますね。PTAの何かをやっていたらしくて、その時にいろいろ話していたみたいです。

調査者：今聞いている感じだと、お母さんは地域の人と接点があって、全くシャットダウンしているわけではない、

対象者：というわけではないですね。

調査者：むしろ積極的に(接点を)持とうとしている？

対象者：うん。しゃべるのが好きなんでお母さん<笑い>。日本語片言でも<笑い>。たぶんそれですごくフレンドリーな人なので、自分から行ける人だと思います。

調査者：はい。わかりました。ありがとうございます。

対象者：はい。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：C
- ・ 日時：2015年3月11日10時～12時55分
- ・ 回数：1回目
- ・ 場所：Cが在籍する大学の個室
- ・ 記録：1時間25分3秒

■ 育ち(資源形成)

保育園・託児所・小学校1～3年生

調査者：日本の保育園の段階ではポルトガル語はどうだった？

対象者：家ではしゃべるって感じだと思います。

調査者：日本の保育園の方では？

対象者：日本語をしゃべってた。

調査者：その時の記憶はある？

対象者：薄いですね。写真見てああこんな感じかなっていう。

調査者：意識的にポルトガル語と日本語を使い分けてた？

対象者：ああ、覚えてないですね。うん。

調査者：保育園の後は託児所で、そこでポルトガル語を勉強した？

対象者：はい。読み書き等、覚えましたね。

調査者：その段階でもう両言語とも読み書きできてたってことかな？

対象者：うん。

調査者：話す分にも？

対象者：はい。テレビ番組とか、よく日本の番組見てたんで、(ブラジルの託児所に)通ってたとしても日本語はしゃべれた。

調査者：その後はブラジル人学校でなく、日本の公立小学校に入ったわけだけど、これは親御さんの意向？

対象者：はい。

調査者：どういった理由で？

対象者：日本の教育の質の方が良いのでやはり。やっぱりそこに通わせなかったっていうのがたぶんあると思います。その当時、あんまりブラジル人学校っていうのもなかったのかな。うん、あまり選択肢としてブラジル人学校ってのはなかったんで、まあ自然と日本の学校に入ることになったと思います。

調査者：言葉については問題なかったという話だったけど、小学校入学から小学校3年生の終わりまでの期間はこういった生活を送っていた？

対象者：普通の日本人と同じ生活を送っていました。

調査者：周りの子たちに馴染めないということは？

対象者：一切なくって。

調査者：家ではブラジル、学校では日本だったわけだけど、学校と家の違いを感じていましたか？

対象者：結構友だちも日系ブラジル人の友だちが多かったりして、そこはあまり気にならなかったですね。

調査者：学校には外国籍や日系ブラジル人が自分の学年や他の学年にも多くいた？

対象者：そうですね。F小学校になるんですけど、E団地っていうのがあって、まあそこにはたくさんの方の方が住んでいて、自然とそういうことになる(学校に日系ブラジル人の児童が多くなる)ことが多くて。

調査者：取り出し学級はあった？

対象者：(私は)なかったですね。

調査者：まわりで取り出し学級に行っている子はいた？制度上学校に取り出し学級はあった？

対象者：うーん。あったかもしれないです。放課後学習ってのが、その時あって。それには通ってましたね。

調査者：その教室は外国籍や外国にルーツのある子が対象の教室？

対象者：確か、そう思うんですけど、あんまり鮮明には覚えていないです<笑い>。

調査者：それは学校で先生がやってくれるの？

対象者：学校で、はい。どうでしょう、先生だったような気がします。

調査者：そこで宿題やったり、日本語勉強したりした？

対象者：宿題・・・なんだったんでしょうね。そういうのがあったっていうのは覚えているんですけど、内容は、はい、覚えていなくて。

調査者：小1から小3までで他にはどんな風に過ごしていた？

対象者：週に1回、ブラジル人の家庭に行って、で、プライベートレッスンみたいな形でポルトガル語を学んでいました。

調査者：休みの日？

対象者：土曜日とかが多かったです。

調査者：そこに通ってた時の気持ちを覚えていますか？

対象者：なんか、英会話に行くような感覚で結構。うん。テキストがあって、それを解いて、先生としゃべったりしてっていう形で。

調査者：そこに行きたくないという気持ちはなかったですか？

対象者：いや、なかったですね。自分の中では結構自然だった。

調査者：小1から小3までで勉強面はどうでしたか？

対象者：たぶん、いい方だったとは思いますが。

ブラジルでの小学校生活

調査者：小3が終わってブラジルに戻るようになった時はどうだった？

対象者：もう、行きたくなかったです。うん。

調査者：それはどうして？

対象者：友だちがいるからってずっと言ってたんですね。もう泣いて駄々こねて、行きたくないって。まあ結局行ったんですけど。

調査者：家族でブラジルに戻ったのは、どうして？

対象者：もう、ずっとブラジルにしようっていう決意をもってブラジルに行ったんですけど、やはり職が見つからなくて、あの、すし職人になろうとしていたんですけど、ま、それも上手くいかず、で、結局(日本に)戻ってくることになっちゃったんですね。で、その時に父が1年前に(日本に)戻って1年後にまた、家族で(日本に)来るって形で。

調査者：ブラジルでは学校に2年間通っていたということですが、その時はどういう生活をされていましたか？

対象者：最初はすごい珍しがられて、「日本語しゃべってよ」とかすごい、もう日本人の顔なんです。その当時、日系人が出ている番組が流行っていたので、その子の名前と呼ばれたり、結構日本人日本人っていうのがすごい意識してて、あたしもすごい日本人っぽい面がすごいあったので、なかなか最初はブラジル人に馴染めなかったのかなって今思えますね。でも、1年くらい経った時にはもう結構馴染めてて、向こうの勉強にもついていくことができていたかなって。

調査者：日本で学校では授業が日本語で行われたわけだけど、ブラジルで学校に入った当初はポルトガル語で授業を受けることで苦労しなかった？それともスムーズに入っていた？

対象者：そうですね。たぶん、(日本では)週に1回の(ポルトガル語の)レッスンがあったんで、それが結構助かってですね、読みとか、あの、書きとかは全然問題なくて、やっぱ知らない単語が多かったんで、その時は随時先生に聞くなり、周りに聞くなりしてたって記憶ありますね。

調査者：勉強については環境が大きく変わったことでやる気がなくなってしまったということはない？

対象者：(やる気がなくなったこと)はなく。考え方の違いっていうのが最初慣れなかったんですね。算数とか。

調査者：解き方っていうこと？

対象者：うん、割り算とかが違うんですね。

調査者：そこはどうやって乗り越えた？

対象者：友だちに教えてもらって。その時も日系の友だちができて、その子にいろいろと教えてもらいました。

調査者：ブラジルに戻ってからは日本語を使う機会はあった？

対象者：ないです。

調査者：家族とも？

対象者：ポルトガル語で。

調査者：日本にいた時は家族とはどうだった？

対象者：家庭ではポルトガル語をしゃべる。学校では日本語をしゃべる。

調査者：日本の学校とブラジルの学校での文化的な違いについてはどうでしたか？ やったーって感じでしたね<笑い>。日本ってあの、小学校制服なかったんで、あの向こうに行くとジャージだけでも、あの、毎日決まった服装があって、結構それが嬉しくて、毎回。あの、制服が着るのがちょっと夢だったっていうか、その、小っちゃい子の考えで、毎回同じ服着て学校に行くみたい。ちょっとその時はウキウキしていました。

調査者：戸惑ったというよりは、嬉しい

対象者：ちょっと楽しい。あと、結構(日本の学校よりブラジルの学校の方が)自由になる方なんで、髪型とか毎回いろいろアレンジして行ったりとか、あと、アクセサリつけたりとか。それは逆ですね。日本だと全然できないけど、ブラジルではできたっていうのがちょっと嬉しかった。

調査者：1年目を終えた後、お父さんが単身で日本へ行って、何か変化があった？

対象者：やっぱ、存在は大きいですもんね。あの、スカイプとかであの、しゃべったりはするんですけど、やっぱ父がいないとなると、なんか寂しいっていうのはやっぱり。

日本でのブラジル人学校時代

調査者：自分たちも日本にまた行くことになった時はどうでした？

対象者：嬉しかったですね。友だちもいましたし、日本の方が慣れてるっていうのがあったので。治安の問題もありますし。ブラジルだと外で遊ばせてくれなかったんですね。うん。あの。マンションがあって、マンションの中、敷地内だけでしか遊んではいけないって言われていて。日本だともう普通にスーパー、公園みたいなところに友だちと行けたりしていたので、そこは結構嬉しかったですね。日本に帰ってくるってなって。

調査者：日本に戻ってきてから、ブラジル人学校に通い始めたのはどういう理由があった？

対象者：5年後にブラジルに帰るっていう計画だったんですよ、その当時は。なので、全員ブラジル人学校に入ってそのままブラジルで教育を受けさせようっていう親の思いがあったので、ブラジル人学校に行きましたね。

調査者：ブラジルの初等教育としての義務教育をそこで終えた、

対象者：(義務教育を)終えましたね。

日本の中学校編入～2年生3学期

調査者：その後日本の中学校に入ったのはどういった理由から？

対象者：その時、2008年だったんですね。ちょうどリーマンショックで、学費が3姉妹で10万円なんです、月に。それがすごい負担になってしまって、日本の学校に移そうっ

て思ったんですね、両親が。

調査者：それは姉妹3人とも？

対象者：3人とも皆で、日本の学校に移って、その当時はブラジルに帰れるっていう予感もなく、なので、もう日本で生きていこうってたぶん、そこで思ったんだと思うんですね。なので、(日本の中学校に)移って。ま、編入するときもなかなか編入させてくれなかったっていうのもあって、あの、日本の中学校に行った時になんか、結構ブラジル人、ブラジル人のイメージがよくなって、すごい騒ぎとかを起こす代のブラジル人が多くて、その当時。で、なかなか受け入れてもらえずみたいな感じで。最終的に面接をして、どうしても入りたいんですという思いを伝えて、「じゃあしょうがない」みたいな感じで、まあ、中学校2年生の3学期って結構微妙じゃないですか、もう次受験だみたいな感じで。結構日本語が3割ぐらい、2,3割ぐらいの人が入るのって結構彼らにとっても負担かなって思ったんですけど。たぶん(編入がなかなか進まなかったのは)そこがあって。ちょっと壁でしたね、そこは。

調査者：日本で生きていこうって話がありましたか、ご両親は共働き？

対象者：当時は、父だけです。

調査者：リーマンショックの影響を受けて解雇されてしまったり、働く時間が減ってしまったりする人が多かった中、お父さんはどうでしたか？

対象者：父は採用する側だったんですね。派遣会社で勤めていて、採用、何て言うんですかね、工場から依頼が来てっていう、その依頼がなくなってくると、やはり仕事の量も減ってしまってクビになる可能性も高かったんですね。ま、周りではやめていくっていう、自らやめていくっていう人もいたので、そこはどうか生きとどまったというか。

調査者：中学2年生の3学期から通い始めたということだけど、3学期の初めから？

対象者：3学期の初めから。

調査者：入った中学校はF中学校？

対象者：R中です。

調査者：それまでブラジル含め、5年間ブラジルの教育を受けてきて、そこから再び日本の学校に入るってどうでしたか？

対象者：うーん。制服、また制服になるんですけど<笑い>、制服着たかったんで、まあ制服は着れて嬉しいなって思ったんですけど、自由が奪われる。その当時、髪の毛染めたりとか、あの、普通にアクセサリして学校に行くのが習慣だったんですけど、ま、それがやめなきゃいけないかったりとか。たまに着けて行って、怒られちゃった時とかもあったので、ま、自由がないなっていうのがあったんですけど。とにかく、修学旅行の時期なんですよ、中学校2年生の3学期って。最悪の修学旅行をあたしは迎えました。友だちもいなく。あの、班作るじゃないですか。で、そんな時にその、「みんな班できた人は座って」みたいな形になるんですね。で、あたしだけ最後にひとり立ってるみたいな。で、先生が「入れてくれる班いませんか」みたいな形で。ま、あんまり

日本語わかんなくてもこの状況は理解できるっていう形で。その時はつらい思いをしましたね。

調査者：スムーズに適応とはいかなかった、

対象者：そうですね。内容も結構高度な内容になってきてて、小学校3年生から4年生何て結構切り替えることができると思うんですけど、中学校の内容って結構難しくって最初はただ聞くだけ。黒板をひたすら写すっていう感じで、家に帰ってブラジルの教科書を見て、それに相当する内容を探して、あ、こういうことだったのかっていう形で結構ポルトガル語でメモしたりとか。最初はそうでした。

調査者：その時期は自分自身について、どのように見ていましたか？日本人みたいになりたいとか、自分はブラジル人として頑張っていきたいとか、

対象者：うーん、まだそこまでは考えられていなかったんだと思いますね。学校にいた時はかなり優秀な方で毎回クラスの1位2位を争うようブラジル人な。毎回満点取ったりとか。で、それがいきなり中学校に行くと5点とか。もう全然できないっていうのが、すごく劣等感感じて。それがすごく嫌でした。

調査者：自分のルーツに対して何かっていうよりは

対象者：そうですね、なぜ私はできない<笑い>。別にそれは日本語になったからできないっていう思いはあまりなくて、やっぱみんなと同じようにできないっていうのが、嫌でした。

中学校3年生

調査者：中3になって、その状態から変化はありましたか？

対象者：唯一できる教科が英語だったんですね。ま、英語だったら褒められるとか、英語だったら40点以上とれるとか、そういうことがあったんで、じゃあ英語スピーチに参加しようと思って、学内でまず、スピーチコンテストみたいなものやって、ま、それで1位になって、市内大会、西部大会、県大会と行って、そこで、やっと周りから認められるようになったんですね。うん。

調査者：大会出場を決めたのは何がきっかけ？先生？

対象者：その時はえーと、結構周りがでなよ、クラスで1人選ぶんですけど、周りからも結構できるって思われていたんで、Cさんどう？って。先生からも、言葉かけられて、「どうですか？」みたいな感じで。それで、じゃあやりますって。

調査者：その時期は中3のいつになりますか？

対象者：中3の9月かな。

調査者：その頃までには周りに友だちもいた？

対象者：数少ないですけどね。

調査者：日本人日系ブラジル人問わず？

対象者：うん。そこにいた日系ブラジル人っていうのは日本人の方にはかなり偏った日系ブラジル

人だったので、あまりブラジル人として見ていなかった。日本人と同じような。なので、あまりブラジル人とは一緒にいなかったの、もう日本人と一緒にしようと思って。そのおかげで結構日本語もしゃべれるようになったし、聞けることも全部友だちに聞けたし。

調査者：スピーチコンテスト出る前と出た後では何か変化は自分にあった？

対象者：うーん。やっぱり語学が好きだと思ったんですね。スピーチコンテストに参加して。語学ができるとすごい友だちの輪も広がったりとか、すごく新しい世界を知れるなって思ったんですね。その時にポルトガル語ももっと勉強しようと思って、あと、日本語ももっとできるようになりたいって、その時にもうどんどん連鎖な形で。英語日本語ポルトガル語みたいな。

調査者：テストの点数で劣等感を感じていたという話がありましたが、スピーチコンテストに出るまでの中3のテストの点数はどうでしたか？

対象者：すごく良かったのが、たぶん中間テスト、3年生の時の中間テスト。やっとなんと同じくらいになれたかなっていう。頑張りましたね。(点数は)平均って感じですね。

調査者：その時はどうでしたか？

対象者：嬉しいですね。うん。結構、かなり勉強したなっていう記憶が、家帰ったらすぐルーブリフにまとめるみたいな形で。テスト前もわーって見て、で、進研ゼミにも入って。

調査者：その後は学校の成績ってどうなっていましたか？

対象者：最終的には平均だったと思うですけど、でも最初の時に比べたら。

調査者：劣等感については？

対象者：消えていきましたね。うん、段々と。周りから認められるようにもなったし、英語はできるんだっていう自信も持てましたし。

調査者：小学校中学校の時は、将来こうしたいっていうのは何かありましたか？

対象者：中学生の時にキャビンアテンダントになりたかったんですね。世界中を飛び回りたいとか、もうすごく。語学を使って仕事がしたい。

調査者：それはスピーチコンテストに出るようになってから？

対象者：たぶんそうだと思います。

調査者：スピーチコンテストから、語学に対する姿勢はもっと積極的になった

対象者：(積極的に)なりましたね。

調査者：市の日本語教室やNPOの学習教室を利用したことはあった？

対象者：あんまり聞きもしなかったですね。一個あるって知ってたのが、今遠鉄の新館のところに日本語教室があったっていうのは知っていたんですけど、そこに通うことはなく、日常の中で、友だちと接する中で、日本語を極めたいと思ひまして、ま、テレビ番組もすごいよく観るようになって、もう家に帰ったらすぐにテレビつけて、すごい、字

幕出るじゃないですか、あれがすごく助かってて。知らない漢字があると検索するなり、調べるなりして。

調査者：それは中学校に編入したばかりの頃と日本語を学ぶ姿勢が違う？

対象者：うーん。そうですね。学校に電子辞書を持って行っていいか聞いたりして、1人特別電子辞書使えるっていうこともあったり、漢字の書き取りも毎回必ず出したりとか。

調査者：中学校にいた時は取り出し授業ってあった？

対象者：ありましたね。でもあたしは受けなかったですね。W小学校に行く取り出しで、授業中にもう向こうに行かなければならないって知って、ま、その分移動の時間もあつたりとか、うん、結構不利だなと思ったんですね。

調査者：その参加は選択できる？

対象者：選択できます。みんなとどんどん遅れるっていうのが分かったんで、ま、それは嫌だっていう。

調査者：それは取り出し授業の内容を聞く機会があったから？

対象者：たぶん、説明を聞いたんですね。説明聞いてちょっと。(周り)と差ができちゃうから、みんなと同じことをしたいから。

調査者：社会、国語、理科は授業受けていてどうでしたか？

対象者：ちんぷんかんぷん。

高校受験

調査者：高校受験についてはどう考えていましたか？

対象者：もう決まっていたんですね。もう、g高校に入りたいって。(中学に)入学する前から入りたいって思ってた。それはブラジル人学校で見学する機会があったんですね。行きたい人っていうのに手を挙げて、g高校見学して。たぶん、インターできてすぐだったと思うんですけど、その時行って、もうすごい入りたいなこの高校って思ったんで、それもあって日本の学校にも編入させてくれたんだと思うんですけど、ま、親もすごい気に入って、ポルトガル語の授業もある、結構進学校、校舎もきれいなんで、そこにしか目が行ってなかったとか、他に選択肢はなかったっていうので、受験もそこしか受けていないですし。もうそこしかないと思っていた。

調査者：学校の先生もg高校受験をよしとしてくれた？

対象者：うん、かなり(学力的な面で)低いところを勧められました。私学も保障として一校受けておいた方がいいんじゃないとか、担任の先生が言うべきことを言っていました。でも、私はそれを聞き入れずみたいな感じで、自分の意志を貫いて、g高校だけ。ま、もしそれが受かっていなかったら、工場行きだったかもしれないですね。

調査者：ブラジル人学校にいた時に学校見学をしてg高校に行きたいって思ったのはどうして？

対象者：ポルトガル語があるっていうのがもう本当に考えられなくて。その時。あと、校舎

が素晴らしい。校舎講堂がある、こんな高校行きたいなってすごい思ったんですね。で、レベルが高いって知って。そういうとこ好きだから<笑い>。そう。

調査者：ポルトガル語はやっぱり大事だった？

対象者：ポルトガル語は大事でしたね。他には(ポルトガル語が勉強できる高校が)ない。

調査者：受験勉強する時に、塾とか学習支援教室とか選択肢が考えられ得るけれど、その辺りはどうしていましたか？

対象者：そういう情報がなかったんですね、何も。自力で勉強するのと、わからないところは先生に聞く。もう、これの繰り返しです。

高校1年生 インターナショナルクラス

調査者：高1のインターナショナルクラスでの1年間はどうか？

対象者：たぶん、高1以上に勉強したことはないっていう位、その時がピークでしたね。1番勉強したっていう。

調査者：それは宿題が多かったとか、そういうこと？

対象者：同じスタートラインに立てたことが初めてで、みんなと。それが、もう RESTART につながるんですけど、ここからじゃああたしは頑張ろうって思ったんですね。みんなと同じっていう、スタートラインが同じだったから、もう頑張っってここからみんなと、みんなというより、みんなよりも、うーん、できるような子になりたいっていう思いがあっって。

調査者：中学校の時は元々みんなとスタートラインが違っているという意識があっって、

対象者：うん。

調査者：それで周りよりも劣等感を感じていたっていう

対象者：はい。

調査者：インターナショナルクラスに集まってきた生徒たちとの関係はどうだった？

対象者：もう、良好ですね。うん、本当に。親友って呼べるみんながいて。Bもそうですけど、今までずっと一緒に。初めてそういう同じ境遇の子たちが集まって、同じ、何だろう目標を持って。もう、普通のクラスよりも平均点を上げようとか、もうクラスで頑張っってたり。

調査者：安心できる場のような、

対象者：そうですね。今までにはなかった感じ。

調査者：自分と同じ境遇の子たちが集まった中で、お互いに自分のこれまでの苦労を話すことはあった？

対象者：それよりも、あるあるとか。こういう漢字読めないよねとか。こんなのわからないよねとか。日本の習慣これ意味わからないよねとか。すごく分かりあえたので。

調査者：みんな同じような悩み、

対象者：うん。

調査者：インターナショナルクラスの先生はどうだった？

対象者：すごい熱心な担任の先生で。

調査者：日本人の先生？

対象者：日本人の先生で、もうすごい、その担任の先生が大好きで、もういろいろと面倒を見てくださっていて。で、否定をしないんですね。なんでわかんないのとか、そういうことがなくて、ちゃんと教えてくれる。たとえ、低レベルのことも教えてくれる。それがすごく嬉しかったですね。

将来について

調査者：インターナショナルクラスで過ごしていた時、将来については考えていた？

対象者：あの、ブラジルと日本の架け橋になりたいって思って。その理由で(g 高校に)入ったんですね。

調査者：じゃあ、中学校の時にそうおもっていたんだ

対象者：うん、もう。自分にできることをやりたいって思ってて。

調査者：そう思うようになったきっかけって何かありますか？

対象者：うーん、何だろう。日本語もしゃべれるし、ポルトガル語もしゃべれる、だったら、何かつなげられるのかなって、たぶん思ったんですね。スピーチの時にそれもしゃべったんだと思います。たぶんしゃべりましたね、それも。それ(スピーチコンテストで架け橋になる思いを話したこと)もあって、言葉にしたことによって、思いも強まったというか、そういうことあると思うんですけど。

調査者：どういう風につなが、具体的に考えがあった？

対象者：国際関係が学びたいってその時はたぶん思っていた。

調査者：高校生の時？

対象者：高校生の時。

調査者：中学の時から？

対象者：中学生の時は語学がやりたい。高校に入って国際関係やりたい。

調査者：高1の時はリスタートだということで、頑張って、2年生以降は日本人の子たちとクラスが一緒になっていくわけだけど、2年次以降はどうだった？

対象者：その時は特進クラスに入ったんですね。もう、そこでまた差を、差をつけられて、うん、またできない子になったっていう、のがあって。うん、それはまた頑張りましたね。頑張ったけど、やっぱり何か追いつかない部分もあって。ちょっと劣等感感じてましたね、またその時も。できないなっていうのがあって。

部活動とインターナショナルクラスの先輩

調査者：周りの人間関係は？

対象者：部活で結構人間関係ができていたので、部活が心のよりどころだったり。

調査者：何部だったの？

対象者：合唱部です。

調査者：中学校の時は？

対象者：中学校の時はテニス、ソフトテニスだったんですけど。入ってすぐにやめちゃったっていう。3年生引退で。期間が3、4か月ぐらいしかできなかったんですけど。

調査者：高校で合唱部に入って、T君も合唱部だったよね、そこはどうだった？同じインターナショナルクラス出身の先輩を見て

対象者：まあ、影響力は結構ありましたね。

調査者：どういう影響力？

対象者：部活も勧められてはあったのもあって。

調査者：T君に勧められたということ？

対象者：＜笑い＞Tさんに勧められたりとか、あと勉強もすごく熱心にされていて、(T君が)2年生3年生も特進クラスに行っていて、すごいなって。すごく尊敬する先輩で、大学にも進学して、あぁいいなって。ずっと尊敬する先輩でしたね。部長でもあったんで。うん。

調査者：高3生になって大学進学は頭からあったこと？

対象者：そうですね。

調査者：大学を選ぶときにも国際関係を学べることを重視して、今に至ると

対象者：そうです。

活動のきっかけ

調査者：大学生になって現在されているような活動を始めたきっかけは何ですか？

対象者：g(高校)に入れたっていうことがすごい助けられたんですね私は。すごく未来が切り開けたというか。それがなければ、工場行きだったかもしれないっていうその感謝する気持ちがあって。恩返しをしたいって、思うんですね。この地域だったり、日本という社会だったり、その恩返しの気持ちで何か私にできないかという思いで、そういう活動に参加してますね。

調査者：最初は何だった？

対象者：最初は、大学入ってからですよ？

調査者：大学入る前にそういった活動をした？

対象者：一個だけ、U高校に学習支援しているところで、その語ったりとか。高校生の時です。高校1、2、3年生、1年生の時かもしれない。

調査者：それはどういう経緯で？インターナショナルクラスの先生に声を掛けられたとか？

対象者：うん。(C自身が)やりたいってずっと言っていて、何か自分にできないことはないか(→自分にできることはないか)って言うこと言っていて、先生がそれを用意してくれた。

調査者：その時はどうでした？聞いていた子たちの反応とか

対象者：その子たちがg(高校に)入りたいて言ってくれたんですね。もう、それがすごく嬉しくて。目標をもってもらったんで、うん。

調査者：その場では自分の経験を話した？

対象者：そうです。

調査者：自分の経験はこんな風に役立てられるんだっていう思いはあった？

対象者：ありましたね。

調査者：その後、大学での活動は何からスタートしたの？

対象者：よさこいソーランで。(大学に)入ってすぐ6月ぐらい。

調査者：参加のきっかけは？

対象者：先輩。あの文化人類学で、あの、あるじゃないですか毎回(活動の)紹介みたいな感じで。それですごく興味を持って、で、先輩からも勧められて、やりたいって思ったんです。

調査者：T君？

対象者：(T君)も含め。

調査者：今いろいろな活動を展開されていて、活動する前と活動されている今って自分に何か変化がありますか？

対象者：うーん、なんか、こんなにも影響力があるとは知らなかったっていう、自分自身が。小さいことやっているなって思っていたんですけど、ま、結構総合的に見ると、いろんなところにこう、発信できていたりとか、影響力があるのかなあって、最近思いますね。最近よくあの、ロールモデルとか言われたり、先生から、すごく嬉しいんですけど、うん。それが自分のモチベーションを上げる、何て言うんだらう、自分のモチベーションも上がる。で、さらに他の人のモチベーションも上がれば最高だなと。

家族のスタンス

調査者：両親の自分に対する教育のスタンスはどのようなものでしたか？

対象者：絶対大学は出てほしかったんですね両親は。どちらも大学出て、大学は絶対出なさいってずっと。教育熱心な両親で、まあ2人とも日本語もすごい頑張っていて、日本語能力試験を家族で受けに行ったりとか、3人で受けに行ったりしたり。なので、その(両親の)頑張っている姿を見ているので、あたしもじゃあ頑張らなきゃっていう。お互いこう、刺激し合えるという。(両親は自分に対して)働けといったことは一切ないです。

外国にルーツがあるということ

調査者：外国にルーツがあってよかったことを教えてください

対象者：うーん、やっぱりすごく、世界がすごく広い視野で見られる。ブラジルっていう背景があるから、こう、世界がこう、別の視点で見れるのかなって思ったり、日本だけだっ

たらどうなっていたんだろうって思いますね。もしくはブラジルだけだったらとか。
だから両方あるから、いいんだなって。

調査者：2つの面から見られる

対象者：うん、見られる。

調査者：外国にルーツがあって大変だったことを教えてください

対象者：うん、やっぱり国籍ですね。国籍の問題が自分自身感じて、あの、合同説明会で a 市役所を見に行ったんですけど、すごく、説明を聞いて、ああいいなあって思ったんですね。で、最後にその、採用の試験みたいな感じで見たら、その、試験を受けれる条件が日本国籍だったっていう。それさえなければ、こう、受けれたんですけど、まあ、無理だっていう、最初から無理だったっていう。あとは、日本語の教員で、うーんと、アジアで日本語を教えるっていう、何て言うんですかね、そういうのあるんですよ。え、それに応募できるのが日本国籍。

調査者：何かこれがやりたいっていうことがあっても、国籍が要件になってくる

対象者：(国籍)で、引っかかってしまう。うん。ていうのが、ま、わかるんですけど、やっぱりそこは何だろう、受け入れてもらいたいなっていうところですね。

調査者：生活していて日常的な面でこういうことがあったとかは？

対象者：まあ、(ブラジル人だと)ばれないですね私は。この顔もあたりとか。全然ばれないから問題はない不利益を(被ることは)全くない。うん。

今の自分がある理由

調査者：いかにして今の自分があると考えていますか？

対象者：難しい質問ですね<笑い>。

調査者：ちょっと答えにくい？劣等感を感じた部分があったと思うんだけど、それをどうやって乗り越えてきた？

対象者：その、ブラジル人学校から日本の学校に編入するときに、すごくブラジル人のイメージが悪いっていったじゃないですか、で、その時にブラジル人のイメージを変えたいってすごく思ったんですね。その時にもう絶対いい成績取ってやるとか、もう日本語ペラペラになってやるとか、すごい思ったんですね。もう、お手本になってやろうって思って、もうそこからずっとブラジル人のイメージを変えたいっていう思いがすごくあって、もうブラジル人だからこう、っていうのはもう言わせたくなくて。なので、自分自身、日本の文化を受け入れながら尊重しながら、でもブラジルもいいところがあるよっていう感じで。

調査者：それは中学に編入するときも、高校にいるときも、今もそう？

対象者：ずっとです。今もそうです。

調査者：いろいろな活動をしている自分の真ん中の思いはそこが大きい？

対象者：大きいですね。

■ 活動と自分

活動の理由

調査者：活動の中心にある思いは話してくれたブラジル人のイメージを変えたいっていうところでよいのかな？

対象者：うん。

調査者：そこからいろいろなプロジェクトをやっている中で、子どもたちに関することもしているよね。後に続く世代に対してどのように考えている？

対象者：ああ、姉妹。妹たちにも常にお手本であろうって思いもあって。ま、長女ですし。ちゃんと、勉強もして、アルバイトもして、っていう。家庭内でもすごく何でしょうね、長女のポジションっていうのも結構意識してて、そういう面もあって、まあ、子どもたち、他の、まあ妹じゃない子どもたちでも、そういう風(お手本として)に見てもらえたらいいなっていう。なんか頼れる人になりたいなっていう。

COLORS

対象者：COLORS は自分の中でどういう存在、どういう位置づけにありますか？

調査者：うーん。COLORS は何でしょうね。あたしがあって、こうちょっと重なっている部分というか。まあ、いろんな背景を持った人たちがこう、集まる、そういう、ちょっとした拠り所みたいな感じがありますね。あたし結構後から入ったんですね、COLORS に。留学してて。で、後から入って、ま、今段々と馴染めてきているというか、COLORS のメンバーに慣れてきているというか。

調査者：COLORS に参加してみようと思った動機、きっかけはありますか？

対象者：もちろんそれは、自分ができることがあるなっていう、またそれになるんですけども、ま、やりたい。

調査者：HICE から声がかかったのか、周りのメンバーから声がかかったのか

対象者：うん、同時ですね、どっちも。ま、B からきましたし、HICE の方からも是非やらないかっていう。

HICE との接点

調査者：HICE との接点はいつから？

対象者：あの、中川(正春)大臣が浜松学院大学でしゃべりに行った時に、松岡さんと出会ったんですね。その時に松岡さんからちょっと声がかかって、で、グローバルフェアで何かやらないか、がそこが始まりですね。

調査者：その中川大臣が来ていた時って講演？

対象者：講演だったと思います。

調査者：それで、何で松岡さんから声がかかったの？

対象者：あの、発言したんですね。発言して、(講演が)終わった後に声がかかって。

調査者：ブラジルにルーツがあります、みたいな発言をしたら松岡さんから声がかかったと

対象者：はい。

RESTART

調査者：それで声がかかって、最初が RESTART？

対象者：RESTART。

調査者：RESTART についても、多様なバックグラウンドの若者が集まって自分の生い立ち、自分のメッセージを発信しているわけだけど、その場に参加して気づき、今後につながる何かがあったとか、その辺りはどうですか？

対象者：うーん。ま、結構(RESTART が)きっかけになった部分が多くって、池上先生もすごく取り上げてくれることも多くって、そのおかげで、どんどんいろんな、ま、講演会だったり、中学校に講演会に行けたりだとか、うーん、そういうきっかけを与えてくれたのがやっぱグローバルフェアの RESTART だったかなって思いますね。動画もアップロードされてますし、すごくアクセスしやすいっていうのもあって。

調査者：自分の今している活動のある種本当に

対象者：原点と言えるかもしれないですね。で、あれほど、自分を振り返ってっていうのは初めてだったので。

自分の歴史

調査者：それまでは自分がブラジルと日本を移動しているとか、家族のバックグラウンドとか、移民の背景を知る機会があった？

対象者：うーん。

調査者：例えばお父さんが話してくれたとか

対象者：ありますあります。

調査者：それは C さんが自発的に聞いてみたのか、お父さんやお母さんが話してくれたのか？

対象者：聞きに行きましたね。うん。

調査者：それは RESTART の時？それとも中学生とか高校生の時？

対象者：(中学生や高校生の時は)あまり関心がなかったかもしれないですね、その時は。大学に入って、そういうことに興味関心を持ち始めてから、ああだこうだ聞いたり、なんでこうなったのとか。

調査者：それは RESTART 以前に大学の多文化関係の授業がある中で興味が出てきて聞いた？

対象者：うん。

調査者：聞いてどういう感想をもった？

対象者：すべて正しい道を歩んできたなって思いますね。

調査者：正しい道、

対象者：うん、一步も間違えてないなってすごく思います。両親の決断が一步も間違えてないなって。

外国籍の子どもたちの社会参加

調査者：外国籍の子たちの日本社会への参加について考えていること、思うことはありますか？

例えば、ブラジル人学校の子どもたちに多いと思うんですが、ブラジル人コミュニティの中で暮らそうと思えば、日本社会と接点が殆どなく暮らすことができると思うのですが、それについてはどうですか？

対象者：だめですね。うん。やっぱり、あれですよ。見えない、見えないじゃないですか。やっぱり知らないことに対して、怖いって思うじゃないですか。知ることによって、どんどん、「あ、こうだったんだ」とか明るくなっていくと思うんですね。でもずっとその見えない存在でいることによって、まあ変な噂が経ったりとか、嫌なことを言われたりとか、イメージだけで語られたりとか。そういうことがあるのはやっぱり暗いところにいるからだと思うんですね。なんで、やっぱりもっと外に出て、っていうのも難しいと思うんですね。だって朝送り迎えて学校に行って、で学校で勉強して、ずっとブラジル人のコミュニティ。で、家帰って、で、家ではずっと家庭内。私はずっとそういう生活してきたんで、わかるんですね、すごく。全然、接点がないんですよ。

調査者：それはブラジル人学校に通った時に身をもって知った

対象者：うん。で、すごくね、自由な時間があるんですよ。(ブラジル人学校に行くのは)午前中だけか午後だけかなんですよ。自由な時間がありすぎるんですよ。その自由な時間を別のものにこう、費やせば、もっとなんかできるんじゃないかと。例えば、公民館でスポーツクラブで何かスポーツするだとか。そういうことができると思うんですけど、やっぱりそういう一步踏み出せないとか。すごく運動したいんですね。ブラジル人学校通っていると。

調査者：そうだね、体育館ないもんね。

対象者：体育館ないんですよ。で、(運動できるのが)週に1回とかなんですよ。そおいうことがあれば、絶対(日本社会に)参加すると思うんですけど、そういう接点もないし。

調査者：それは日本の学校に通っているブラジル人や他の外国籍の子にも同じことが言える？日本の学校に通っていることが少なくともそこで接点にはなっているといえるけども。日本の学校にいる彼ら自身ももっと積極的になるべきだとは思う？

対象者：うん、そうですね。

調査者：どうしたら接点を持てるようになる？

対象者：うーん、なかなか難しい。もうなんかサイクルみたいになっているんですよ。学校行って、家帰ってきて、ゲームやって、<笑い>、それかチャットしてっていう。そのサイクルから抜け出すのは本当に難しいと思うんですよ。何かすごい好きなもの

ができないとか、外で何かをやるとか、なんか趣味とか。すごく好きなものができれば、もう必ず外には出られると思うんですけど、その最初の日本人との接点をどこでつくるかですよね。なに、学校で何かあれば、必ず目に留まると思うんですけど、学校以外でどこじゃあ目に留まるかっていうと難しいので。学校に誰か日本の方が来て、日本人が何かするとか、そこから「興味を持った人はこっちおいでよ」とか言われたら、行くかもしれないですね。

調査者：自分自身がブラジル人学校に行っていた時はそうした日本社会との接点はあった？

対象者：もう、少ないですね。消防署が来たり<笑い>とか。

調査者：そのサイクルにいた時はそのサイクルから抜け出したいと思っていた？

対象者：日本の学校に通っている子たちがすごく羨ましく思えたんですね。部活とかやってて、番組見てるんで、あるじゃないですか、あの、中学校頑張ってますよってというような。そういうの見ててすごく羨ましいって思ってたんですね。

調査者：ブラジル人学校にいるから見たら日本の学校いいなあっていう思いはあった

対象者：思いはありましたね、すごく。(ブラジル人学校は)物足りなかったですね、いろいろと。

調査者：物足りなかった？

対象者：うん。音楽もないし、家庭科もないし、体育も少ないし<笑い>。うん。

調査者：5年後にはブラジルに戻るっていう家族の計画があったから、日本の学校に行きたいとは両親には言わなかった？

対象者：そうですね。親の意志に従うというか。

調査者：そこはそういうものなんだということでブラジル人学校に通っていた

対象者：うん、ブラジル人学校にいた時はもう、ブラジルの大学行くんだらうとか、そういうことを思っていましたね。

調査者：先々のことは見えていましたか当時？

対象者：いや、全然もう。一日一日を。

調査者：先のことを明確に考えられるようになったのは高校生になってから？

対象者：はい。考えないですね、中学生の時なんか<笑い>。

HICE や N-pocket 等、活動の場について

調査者：HICE や N-pocket のようなところと協働していることってありますよね。そういった活躍の場があることについてどのように考えていますか？

対象者：私たちのような、が活躍できる場？を提供してくれる、

調査者：そういった場があること、そういった人たちと一緒に何かをやっていくことについて考えていること

対象者：ああ、ほんとにありがたいですね。うん。自分を認めてくれるじゃないですか。そのHICE だったり、N ポケだったり。今まで結構否定されてきたっていうことが何度か

あって、認めてくれるっていうのが本当に自分の中で嬉しくって、その思いが。で、ぜひぜひっていうところがあって、すごく楽しく、楽しく活動できるのは本当にありがたいなって。

否定された経験

調査者：否定されてきたっていうのはどういった？中学に編入するときになかなか編入させてもらえなかった経験？

対象者：うん。そういう経験。

調査者：何か他にはあったの？

対象者：うーん。例えば、本当に細かいことなんですけど、国語の時間で、あの、本読みするじゃないですか、みんなの前で。その時に読めない漢字があったんですよ。で、「お前そんなのも読めないのか」。

調査者：それは誰に言われたの？

対象者：隣の子が。ほんと悔しくて、その時。今でも覚えているんですけど、己っていう漢字が読めなくて、ま、そういう細かいことだったりとか。

調査者：そういう思いをすることは頻繁にあった？

対象者：うーん。あと、変な日本語をしゃべったりとか。<笑い>

調査者：それを周りに言われる？

対象者：うん、言われる、笑われるんですよすごい。

調査者：自分(C)の日本語が変だって言われる笑われる

対象者：うん。「おかしくね？」って。

調査者：それは中学校の時？

対象者：中学校。

調査者：高校の時は？

対象者：高校の時はその同じ境遇の子たちがいて、まあ、あるあるだねっていう、すごくポジティブに捉えるようになったんですけど。

調査者：高2高3の時は

対象者：ある、あまあ、部活の時で。否定はされなかったですよ。

調査者：中学校の時はそれで本当に嫌な思いをしていた。高校生になってからはそういうことで、嫌だって思うことはなかった？

対象者：まあ、そうですね。

当事者と事業者のギャップ

調査者：事業の実施期間が決められているのが現状で、施策と実際のニーズの間のギャップについてどう思われますか？例えば、学習支援に通っていたけど、事業が期間が終わったから今月もう教室ありませんっていう状況

対象者：まあ、もちろん支援とか情報を提供してくれるのは本当に本当にありがたい感謝すべきことだと思うんですけど、やっぱり支援される側から見たら、もっと努力できる部分があるんじゃないかとか、思ったりするんですね。

調査者：支援される側自身が、

対象者：もっと自分で情報を知ろうとする、情報を求めたりとか、まあ、学習支援だったら、もっと頑張れるんじゃないか、自分だけでも。それか知り合いに頼むとかでもいいですし、あたしも家庭教師しているんですけど、その人がその、家庭の親御さんがぜひ勉強みてもらいたいということで、行ったりとか。もっと求めれば、得ることができるのが、たくさんあるんじゃないかなあって思う時があるんで、それに甘んじてはいけないなあって。支援される側は。もちろん支援する側でも、こっちの声もきいてほしいっていうのも。ま、どっちからも見えるんですけど、という。

■ エスニシティ(ルーツ)への肯定感

エスニシティへの肯定感

調査者：自分のエスニシティ(ルーツ)への肯定感は1(低)~5(高)段階でどれぐらいですか。

対象者：うーん。4.5<笑い>。

調査者：そのように評価しているのはなぜですか。

調査者：まだポルトガル語が完璧じゃないって思えるので。

対象者：それはどうしてそう思う？完璧じゃないって言われたりするの？

調査者：やっぱりそのまだ、最近ブラジルから親戚が来たんですね。その時にすごく日本人だって言われたんですね。ポルトガル語もなまってるし<笑い>、「日本人風のポルトガル語になってるよ」って言われて、やっぱりそこは完璧じゃないんだなっていう思いもあって。読み書きとかは簡単、まあできるんですけど、まあそれ以上のしゃべりとか、やっぱり、日本人ぽいところが出ちゃったりとか。まだ完璧じゃないなって思えるんで、4.5ぐらいかな。そこができれば、まあ完璧じゃないかなって。

肯定感の変遷

調査者：物心ついた時から、日本の小学校からずっと同じ状態で肯定感が来ているのか、上下あって来ているのか。そこはどうですか？

対象者：うん、小学校の時は考えないですね、まず。でも、日本人だとちょっと思っていた時期もあったり。

調査者：ブラジルに戻ってからはどうですか？

対象者：どっちつかずっていうのがずっとあって。ブラジル人じゃないし、日本人じゃないし。(日本で)ブラジル人学校に行っていたときも、なんか日本人ぽいって言われたり、も

う完全なブラジル人になったことがなく、でも完全な日本人にもなったことがなく。
どっちつかずっていう時期がすごい長く続いたんですね。

調査者：その時は自分自身に引け目を感じることはあった？

対象者：わざと、わざと、何かをしたりとか。

調査者：どっちつかずっていうことだから、日本人ぽさを消したり、ブラジル人ぽさを消したり、そういうことはあった？

対象者：ありましたね。

調査者：どっちだった？

対象者：どっちもありましたね。日本の学校(中学校)に行っている時は日本人ぽくならろう、ブラジル人としてではなく、日本人として見てもらいたかったなあとか。同等の扱いをしてもらいたかったっていうのもあったので、他のブラジル人がすごくイメージ悪かったの、見放されないようにも、日本人ぽく振る舞ったりとか。

調査者：ブラジルにいた時と日本のブラジル人学校にいた時はどうだった？

対象者：もう、すごく日本人ぽいって言われたんですね。真面目だとか、もう、勉強できたので、まあ、勉強できるのは日本人だからだとか、そういうことを言われて。

調査者：じゃあその期間はブラジル人により近づきたかったというか、日本ぽさを消したかった

対象者：化粧濃くしたりとか。うんまあ結構そうですね。ブラジル人ぽくなりたかった。

調査者：そういうどちらかを消そうとしていた自分に対してはどう思っていた？

対象者：どっちでもないなあって思ってた。

調査者：そこには引け目を感じていた？

対象者：うーん、その時はその時で頑張るしかないって思ってたので。

調査者：じゃあ自分が嫌いっていうことはなかった？

対象者：(自分が嫌いということ)は、ないです。

調査者：学力的な面での劣等感があったと。

対象者：うん。

調査者：エスニシティを意識し始めたのはブラジルに戻ってからかな？

対象者：そうですね、その時にああ、ブラジル人だって思ったと思うんですね。

調査者：ブラジルにいた2年間と、日本でブラジル人学校に時期、日本の中学校にいた時期、高校、大学にいた時期、となると今思えばどうですか？

対象者：うーん、小学校からずっと3だと思うんです。高校入って4になって、大学4.5。

調査者：高校入って4になったのはインターナショナルクラスが要因？同じ境遇の子たちが集まった場で、

対象者：そうですね。うん。どっちかじゃなくって、どっちでもいいんだっていう。どっちがあってもいいんだっていう。

調査者：そういう気づきがあって、大学生になって4.5になったのはなぜ？

対象者：うーん。やっぱり活動しだすと、何て言うんでしょうね、自分、自分が自分でいってすごい思えて。でも、ポルトガル語があとちょっとできない、あとちょっと頑張れば、たぶんいいと思うんですけど。ま、その活動しだしたことによって、自分をこう、もっと、自分を誇れるようになったというか。今まで頑張ってきてよかったとか。

生きる戦略

調査者：自分自身がこれまで様々な環境で生きてきているわけだけど、生きていくうえで戦略みたいなものはありますか？これから続く子どもたちに伝えたいこと。

対象者：やっぱり家族が大事だと思うんですよね。ほんとに家族に支えられてきた分って、数知れないっていうか、もうずっと家族が心の支えだったんですね。もうどこ行っても家族はいるっていう。もうほんと両親にはすごく感謝してて、やっぱりその家族の絆っていうのが強い家庭こそ、子どもも強くなれるなって、すごく最近思うんですけど。

調査者：それはいろいろな活動をする中で、いろいろな家庭を見てきて？

対象者：家族を見てきて、ああ、やっぱこの家族だと子どもも強くなれるんだなあって。

調査者：どう違うの？

対象者：子どもを第一に考えている両親。例えば、その、中学校を終えて、じゃあ工場でいいよっていう両親と比べ物にならない。ちゃんと考えて、子どもには絶対に工場に行かせたくないっていう意思を持っている両親。もっといい教育を受けさせたい。日本でもブラジルでもどっちでもいいんですけど。そういう思いがある家庭こそ、やっぱ子どもにも伝わりますし、子どもはそれに応えようとする。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：C
- ・ 日時：2015年9月2日10時～14時
- ・ 回数：2回目
- ・ 場所：Cが在籍する大学の個室
- ・ 記録：録音時間34分2秒

■ インタビュー

イギリス留学

調査者：はい。じゃあ、お願いします。大学2年生の時にイギリス留学されている話を前回伺って、

対象者：はい。

調査者：それで、そのイギリス留学の経験が今の自分に何か影響をもたらしていることは何かありますか？

対象者：うんうんうん。自信が持てたっていうのが1番大きいですね。うーん。留学してみて、1回家族とも離れて、すごく、何だろう、すべてに感謝するっていう気持ちすごく、芽生えたんですね。留学してみて。で、何だろう、自分には何が出来るのかってすごく、毎回思ってるんですけど、その気持ちもどんどん強くなって、やはり日本に帰ってきてからも、自分には何が出来るのかっていうことで、また活動もさらにこう、何だろう、熱を加えてやるようになったっていう。もうすごく大きいですね。あとは、何だろう。うーん。1番はやっぱり自分に自信が持てたっていうところが1番大きいかと思いますね。

調査者：その自信が持てたっていうのは、イギリスでこういうエピソードがあったから、こういう経験をしたとか、何かそういうきっかけってある？

対象者：うーん・・・。最初に長い話になるかもしれないんですけど<笑い>、うんと、行くときに台風でフライトがキャンセルになったんですよ。で、その着いた当日にみんな、留学生みんな、ウェールズに向かうっていう予定だったんですけども、それができなくなってしまって。で、2日遅れて、ひとりで、ヒースロー空港に着き、そこから何もわからずホテルを取り、バスに乗り、電車に乗りっていうところで、まずそこからすべて自分で何とかしていかなければならないところから始まったんですね。で、もちろん留学先の大学に着いて、講義とかもすべて英語じゃないですか。英語が少しわかったとはいえ、すべて英語の授業はついていけるはずもなく<笑い>、大学の授業初日に自己紹介をしてくれと言われ、もうたどたどの英語でまったく、日本についての紹介もしてほしかったんですけど、全然しゃべれず、みたいな感じで、それがもう、すごく落ち込んだんですね。全然できないっていう<笑い>。今までの自

信はどこに行ったんだっていう、ことがあったんですけど、まあやはり1か月、とか過ぎたところから、うーんと、友だちも増え始めて、英語でもコミュニケーションが取れるようになり、スーパーでも買い物ができ、家に着いて料理ができ、この日々の生活を精一杯送ってって感じで、で、最終的には何でもできるぞっていう気持ちになったなあっていうのがあります。

調査者：どれくらい留学していたの？半年とか？

対象者：3か月。

調査者：学校の留学プログラム？姉妹校とか、提携校というか。

対象者：はい。

調査者：その、友だちがたくさんできたっていうことで、それで何かこう、友だちとの関係はどうだった？

対象者：うーん……ん、友だちとはどういう関係だった。まあ、もちろん現地の友だちもできましたし、いろいろと一か所に集まったりとか、遊んだりとか。

調査者：集まってくる人たちは他の国からも来ているの？

対象者：ああ、いますいます。アメリカ、カナダ、えー、スイス、中国もちろん中国も多かったんですけど。

調査者：いろんな国のいろんなバックグラウンドの人たちが集まって、っていう感じで、英語でコミュニケーション取って。

対象者：もちろんそうです。英語で。

大学の先輩

調査者：はい。話がとんで、大学生になって、ブラジルにルーツのある先輩もいるし、日本人の先輩とも例えば、大学のプロジェクトとかやっているわけだけでも、日本人の先輩っていうのはどういう存在として位置付けられる？

対象者：うーん・、例えば、Sさんだったら、ま、すごいなあって。尊敬する先輩だなんて思う部分もある一方、負けたくない<笑い>、すごく負けず嫌いな性格で、こう、何だろう、Tさんとかもそうなんですけど、ずっと尊敬はしている一方、負けたくないっていう思いがあって、うん。どこでこう、勝ろうかと思ったり<笑い>。いろいろそうですね。もちろん、ついていこうって思う、ますし、うん。

発信にあたって

調査者：はい。例えば、RESTRTであったりとか、あとは学内のフォーラムであったりとか、そうした場で、こう、あとに続く子どもたちのために、相手は日本人であれ、行政関係者であれ、教育関係者であれ、子どもたち自身、保護者であれ、いろんなメッセージを発信しているわけだけでも、どういう思いを持って発信していますか？

対象者：今まで私が生きてきた人生の、そのほんの一部でもいいんですけど、そこを見たり聞

いたりして、少しでもこう、何て言うんですかねえ、勇気を持ってもらいたいだとか、(自分も)やれるんだっていう気持ちにさせたいなという部分が1番大きいですね。同じ境遇の子どもを支えたいっていう部分が、そういう意味合いになってくると思うんですけど、うーん・・・そうですね、ぜひ幸せになってもらいたいなっていう気持ちで、やはり発信していますね。

調査者：はい。それで、その発信なんですけども、発信を行うことの自分にとっての意義って何かありますか？

対象者：もちろん、モチベーションも上がりますし、私の話を聴いて、何かしら思ってくれたって言ってくると私もやはり嬉しいですし、どんどん増やしていこう、もっとやりたいっていう気持ちに今までなってきたので、このような活動を多方面に展開しているのかなと思います。

調査者：1回目のインタビューの時に、RESTARTが自分にとっての原点だったっていうことを(Cが)言われてて、あの場で話を聴いていた人から「うちでもしゃべってよ」とかっていう形でつながっていったっていうことなんだけど、それは今でもつながっている、

対象者：うん。すべてがこう、点としてつながっているなっていうのは思います。

エージェント

調査者：はい。次ですが、発信するにあたって、HICE担当の松岡さんであったりとか、そういった一緒に企画を行っていく、こういったものに声をかけてくれる、場を用意してくれるエージェントとの出会いについて、自分ではどういう風に考えていますか。

対象者：運命的としか言えないと思うんですけど、やはり欠かせない存在なので、池上先生もそうですし、松岡さんもそうですし、その人たちがいてくれたからこそ、今の私がいるのかなっていう風に思います。

調査者：そういう人たちとの関係というか、そういう方々は一概に言えないかもしれないけど、どういう風な接し方をしてくれる？

対象者：どういう風な接し方<笑い>？

調査者：なんというか、こう、例えば一緒に企画する時に自分たちの意見を尊重して自分たちのやりたいようにやらせてくれる、もしくは本当に一緒に「どうする、どうする」って考えると、それか、あちらでこういう企画やりたいから、その関係で何かやらなかっていう形で投げかけてくれるか。

対象者：基本的には自由にやらせてくれますね。池上先生もそうですし、松岡さんももちろんそうですし、「今回じゃあ何か企画してよ」っていう風に言われて、COLORSのメンバーで集まって、じゃあ今度は何しようかっていうことでいろいろ企画してます。

調査者：じゃあ、大枠があって、その中で何かするっていうよりも、

対象者：ああ、違いますね。

調査者：むしろ、ちょっとまた何かやってほしいからやってくれませんかっていう形で、あとはメンバーの中で何をしようか考えて、こうしますよーみたいな形で。

対象者：そうですね。ミーティングの中で出たキーワードを次の企画の、何て言うんですか、メインとして、前は就職活動に関してだったので、就職に関する、何だったっけ、あれは<笑い>。

調査者：説明会というか、講座？あの一、2回で1セットのやつでしょ？冬の、違う？

対象者：あの、1月にやった、

調査者：遠鉄とかヤタローとかの担当者が来た、

対象者：ああ、そうですそうです。

調査者：ああいう形で

対象者：そうそう。あれも全部ミーティングの中で、就職活動について話してて、じゃあ、何て言うんですか、外国にルーツを持つ子どもたちのためには(講座等がないよねって)いう話から発展して行って、企画までたどり着いたという。

調査者：b 大学での「物申す」とかもそう？

対象者：「物申す」もそうですね。えと、大学の大学内での外国にルーツのある学生たちが集まって、じゃあ今回のフォーラムではどうしましょうかっていう話から始まって、じゃあ、「物申す」っていう風に決まったんですね。うん。

調査者：提言した内容については、自分たちで話し合っ、これ言おうこれ言おうっていう風に決めていった感じ？

対象者：はいはい。そうです。

調査者：はい。わかりました。ちょっと話が戻ってしまうかもしれないんだけど、静岡県の国際交流協会で1月12日？に(Cが)しゃべったじゃん。日本語関係のフォーラム？

対象者：ああ、日本語ボランティアセミナーですか？はい。

調査者：そうそう。県のやつ。

対象者：はい。

調査者：他はJICA 横浜で話したりとか。あれっていうのは、RESTARTとか雑誌Vで書いているのを担当者が見たり読んだりして呼ばれた形？

対象者：それは、池上パワーですね<笑い>。はい。

調査者：<笑い>。先生が、うちにはCっていう子がいるから、

対象者：そう、その通りです。でも、先方から何かいい人材はいないか誰かいい人はいないかっていう声がかかって、池上先生から、「このような学生がいます」と例えば、RESTARTのリンクを送ったり、雑誌Vの掲載部分を送ったり、そのようにして、たぶん向こうも興味を持っていただいて、じゃあ、「今回出演しませんか」というかたちで、ほとんどがそうだと思います。

発信後の自身の変化

調査者：はい。それで、発信をするようになってから、ご自身、それを聴いた外国籍の子、あとはその保護者さん、一緒に聴いていた浜松の、浜松でだったらね、そこに、浜松に住んでいる人たちが何か変化が見られたりしましたか？まず自分自身については、発信が次の発信機会を呼んでいるっていうのは、ひとつあると思うんだけど、他に何か自分自身、そういうことを話すようになってから変わったことってある？

対象者：使命感っていうのが強まったんですね。私はこれをしな、しな、なんか難しい<笑い>。

調査者：うん<笑い>。

対象者：難しいんですけど、言い方が。うーん、することがいい。うん？違うな、何て言えばいいんですかね。

調査者：あの、強制されているわけじゃないんだよね、

対象者：強制されているわけじゃないです。

調査者：けど、これができるのは自分なんだっていうこと

対象者：そういうことです。っていう思いは強まりましたね。

自己の立ち返り

調査者：こうさ、自分自身が、こう、話をするわけじゃん。それで、何を話そうかって考えるわけでしょ、それで、自分の経験を踏まえてこういうことを伝えたいってことで、自分自身のこれまでを立ち返るといえるか、就職活動じゃないけどさ<笑い>、

対象者：うん。

調査者：そういうところは結構考えたりした？

対象者：・・・大学入ってからずっと自己分析しているようなものです<笑い>。

調査者：(就職に)強いね<笑い>。

対象者：<笑い>。

調査者：それでその、それにあって、お父さんとかお母さんにいろいろお話聴いたりしてる？

対象者：そうですね。その都度。昔はどうだったのかとか。

調査者：それを聴いてどう？自分自身が自分の過去を立ち返ってみて思うことって何かある？

対象者：うー・・・ん、やっぱり今の自分がいるのは、今までいろんな経験をしてきたからこそだなんていう風には思いますね。昔を思うとあんな辛いこともあったとか、あんな嬉しいこともあったとかもちろん思いますし、うん。それはすべて必要なことだったなって。

調査者：言ってる自分で思ったんだけどさ、これ就職面接みたいになってる<笑い>。

対象者：<笑い>。

発信を聴いた子どもたちの反応

調査者：はい。じゃあ、なかなかじゃあすぐにリアクションていうと、すぐにリアクションがあるかというところも難しい部分もあると思うんだけど、自分の話を聴いてくれた外国籍の子からは何かリアクションあったりする？

対象者：うーん、どうなんですかねえ。うー・・・ん、誰かいるのかなあ。

調査者：前回話してくれたのだとさ、(C が)高校生の時にあの、U 高校のところに行って、それを聴いてくれた中学生の子たちが自分も g 高校行きたいって言うてくれてすごく嬉しかったってことは言われていたと思うんだけど、何か他に大学生になってから活動が活発化した中で何かこう、反響があったとかはある？

対象者：うーん、なかなか(自分のところには)届かないですねー、うん。その子たちが思ったことはよくわからないですけど<笑い>、そんなネガティブな反応はないなっていう。

調査者：まあ、今後だよな。例えば、発信を聴いた中学生が高校生になって、大学行ってみようって思うのは今後だからね。またこれからだね、そこはね。

対象者：はい。

発信を聴いた保護者

調査者：じゃあ、子どもたちの保護者さん。まあ、親世代の人たち。

対象者：うーん、「すごいね」。ってやはり思われますね。うん。考えられないんだと思いますね。

調査者：自分の子が例えばこんな風に日本で大学進学まで果たしてってことは、やっぱりなかなか思い描けないってこと？

対象者：うーん、それはたぶん夢のようなことだと思っているんですよね。でも、ぜひ自分の子どもにもっていう風に強く思っている方が多くて、でも今の現状を見て、なかなかそれが難しいなって実際は思っているのが伝わりますね。

調査者：なんかさ、話しました、その後こう、個人的に、「どういう風に勉強していたの？」とか、「日本語どういう風にマスターしたの？」とかさ、そういうことを聞かれるようになったりした？

対象者：ああ、聞かれましたね。あんま覚えてないですけど。うん。それはそうですね、それは外国籍の子どもの方から聞かれたことはたぶん、うん。もっと何て言うんですかね、フランクな場でというか、

調査者：日本の学校に行かせたいんだけど、例えば高校受験の仕組みとか大学受験っていろいろ種類があって、どういう風にやったらいいか手続きわかんないとか、それを教えてくれないかとかはある？

対象者：うー・・・ん、家庭教師してた頃は、やはり高校についていろいろ聞かれましたね。「公立(と)私立(が)どう違うのか」「公立は1校しか受けられないのか」とか。そこら辺のシステムはいろいろと聞かれましたね。

調査者：その辺りは保護者の方とね、接してみても実感として、多言語での情報提供がなされて

いるものの、伝わっていない部分があるということ、

対象者：そうですね。うん。あとは、保護者が私の母に連絡してくるということは多々ありますね。

調査者：「お母さんが(Cを)どういう風に育てたの？」みたいな？

対象者：うーん、まあ、経験者として、(入試の)システムとかの話であったり、ま、いろいろと学校についての相談もよく母が受けたりします。

調査者：それは今も？

対象者：そうですね。

調査者：お母さんは結構それはその都度しっかり答えて、

対象者：うん。

ホスト社会の住民

調査者：はい。RESTART とかもそうだと思うんだけど、日本人の方でも関心がある方、例えば NPO で関わっていますよとか、学校現場で担任とか、教育委員会とか、市役所の方とかも、そうした場で聴いていることがあると思うんだけど、その時のリアクションって何かある？

対象者：「感動しました」、「応援してます」、「素晴らしい活動ですね」<笑い>、この3点はよく聞きますね。

調査者：日本の方からはさ、「ブラジル人のイメージが変わりました」とか、「こういう人がいるのは知らなかったです」とか、そういうのは？

対象者：たぶんありますね。知らなかったっていうのは大きいと思います。

調査者：あの一、それこそこの前の就職関係の COLORS のセミナーで、どこかの企業で留学生として日本に来ているとか、10代途中でブラジルから来ましたとかっていうことは知っていたけれど、日本生まれ(の外国人の子どもたちが)が増えていることが知らなかったみたいな声があったと思うんだけど、そういう声って他にも聞いたりする？そんなに聞かない？

対象者：うーん・・・そうですね。知らない人が多いと思いますね。なぜブラジル人がこんなにも浜松に多いのかっていうことを知らない人は本当に多くなってしまいますね。自分がこのような活動をしてて、もうすごいわかりきっている<笑い>つもりなんですけど、例えばアルバイトで「あ、ブラジル人なんですねー、なんでそんなにブラジル人が浜松に多いんですか？」とか聞かれたりするんですね。やはりこう、知らない人が多いなって。うーん。

調査者：その、(ブラジル人がなぜ浜松に多く住んでいるのか)知らない人が多いっていうことについてはどう思う？その理由をもっと多くの人に知ってほしい？

対象者：もちろん。そうですね。

調査者：知ってもらって、そのうえでホスト社会の人々にこういうことを知ってほしいとかは

ある？こうなってほしいとか。

対象者：知ることで、お互い気持ちよく生活できると思うんですね。前日も言ったと思うんですけど、知らないということが1番怖いこととか、やはり知れば知るほど、こういう経緯でこういう背景を持ってっていう風に、知れば助けようとか思うかもしれないですし、まあ逆に向こうからブラジルの文化を知りたいとか思うかもしれないので、やはりそうですね、何かきっかけが必要だと思いますね。

調査者：きっかけ、

対象者：そこが難しいと思うんですけど、うん。

調査者：そのきっかけを作っていくことに自分自身、今の活動がそのきっかけになっていくのか、いや、それとは違うのかということはどう？

対象者：もう、いつでもどこでもきっかけだと思うんですよね。例えば、アルバイト先でもそうですし、ちょっと、なんですかね、ポルトガル語をしゃべって、で、あれは何語なんだ<笑い>みたいな感じで聞かれて、

調査者：<笑い>

対象者：「実はブラジル人なんですよー」（と言うと）、で、向こうが「なんでブラジル(人が浜松に)こんなに多いんですか」とか聞かれたりすると、まあ、ちょこっと説明したり、で、その時点で向こうのこの何ていう、何て言うんですかね、ブラジル人に対するイメージはちょっと変わるかもしれないですし、うん。すべてがきっかけだと思います。

ブラジル人学校の子どもたち

調査者：前回、ブラジル人学校の子どもたちの話をしてくれたと思うんですけども、今、自分が発信を行っている中で、その対象はブラジル人学校の子どもたちは入っていますか？

対象者：うーん、含めたいです。ね。含めたいんですけど、今の活動ですと、公立学校に通っている子たちがメインとなってしまっているかなって思います。

調査者：その辺り、どう？今後例えば、ブラジル人学校に縁があったら、ぜひやりたいけども、けど、現実にはなかなかアクセスするチャンスがないのか、ちょっとまだ足を踏み込めないっていうのが自分自身にあるのか。

対象者：うーん。アクセスがないのかもしれないですね。あの、ブラジル人学校 G で進路ガイダンスみたいなのがあったらいいですよ。卒業生が日本の大学に進学を果たした人と、海外の大学に進学した人で、経験を語りに来たっていう場があったらいいですよ。そういう場にも、もし行けるのであれば、うん・・発信する場として、いいかなって思います。うん。

調査者：今思うことでいいんだけど、仮に例えば、うちに来て話してってことでブラジル人学校で話をするってなった時に、あの、今話していることは主に日本の学校にいる子に向けてってことを話してくれたと思うんだけど、話す内容って変わってくる？どう？

対象者：うーん。変わってくるかもしれないですね。生活のリズムが全然違いますし、うん。あまりキラキラしたことを言っても、向こうから受け止めた時に「私には無理だ」って思うかもしれませんし、「なんだこいつ」(って思うかもしれない)＜笑い＞、やはりしゃべり方とか言い方とかも変わると思いますし、うん。

調査者：わかりました。

対象者：はい。

祖父母

調査者：次が、家族についてお聞かせいただけたらと思うのですが、まず祖父母がどのような人だったかっていうことで、まずご自身に対しては、母方父方それぞれいらっしゃるかと思うんですけども、どちらもお話してもらえとう嬉しいですよ。自分に対して、おじいちゃんおばあちゃんこういう風に接してくれたとか、どうですか？

対象者：父方の方はあまり、あまり接しなかったですね。ブラジルにずっといたんで。父方の祖父は早く亡くなったので。祖母はあんまり、あの、ブラジルに帰った2年間だけしか接していなくて、で、母方の方の祖父母は日本で暮らした一緒に暮らしたことがあるので、やはり思い出は多いとか＜笑い＞。で、おばあちゃんの方が厳しくて、礼儀とかに対して厳しくて、で、おじいちゃんが常に優しい感じで、公園連れていってくれたって思い出が多いんですけど。2人とも工場勤務していた経験もありますし、あとは何だろう、うん・・・あんまり思い出せないんですけど。

調査者：父方母方のおじいちゃんおばあちゃんが自分(C)のお父さんお母さんに対して、なんかこういう風な、おじいちゃん実は昔は厳しかったんだよとか、優しくかったんだよとか、何かこういう風に自分は教えられてきたんだってことを何か聞いていたりする？

対象者：うー・・・ん、勉強の面に関しては「やれ」と言われたことがなくて、母が自主的にこう、勉強熱心に頑張っていたって話は聞きましたね。なので、私も一切「勉強やれ」とか言われたことはないですし、自分からやろうという風に仕向け上手＜笑い＞みたいなどころはあります。

両親

調査者：ご両親について、ちょっと今出たんですけども、前回お話を伺わせてもらった時に、大学までは行ってほしいということを思われていて、それで、日本語、ご両親自身も熱心に勉強されてて、日本語能力試験を一緒に受けに行ったりとかして、いい刺激だったってことを話してもらって、

対象者：はい。

調査者：こう、勉強面だけじゃなくて、普段の生活面、生きていくうえでの教えとか、人としての教えみたいなものって何かあったりしました？

対象者：うん。他人を第一に考えると、相手のことを思いやるっていうところは、ずーっと

小さい時から教えられましたね。

調査者：それは(ご両親の)どちらかに、ではなくてどちらにも、

対象者：ご両親(どちらにも)。ご両親って自分が「ご」をつけるのもおかしいですけど<笑い>。

調査者：<笑い>。

対象者：ずーっと他人を思いやるっていうことは言われ続けてきましたし、..ああ、何だろう、嘘をつかないとか。細かいことですけど。感謝の気持ちを持つ。うーん、あとは何だ.....、間違えても次頑張ればいいのか。失敗しても次頑張ればいいのか。

調査者：その教えが今自分にとっては、あの時言われていたから、今こうなんだなって思ったりするところってどう？ある？

対象者：もう、まさに言われ続けてきたことの通りのことをやっている<笑い>つもりではないです。

調査者：そうかそうか。わかりました。

対象者：自分の子どもにもそう教えたいですし。

調査者：はい。

対象者：はい。

近隣の人々との関係

調査者：最後に、近隣の人々。特に浜松にね、住んでいる中で地域の人々。まあ、お隣さんとかね、出会ったりしたときとか、同じ近辺に住んでいる人たちの中での関係っていうのがどうだったかっていうことについて。

対象者：うん、まあ一切トラブルっていうのはなかったですね。例えば、団地に住んだ頃に向かい側のお隣さんは、小学校中学校の子どもたちがいたんですけど、その家族、私まだ中学校だったと思うんですけど、まあ、「親がいないときは来ていいよ」と言ってくれたり。あとは何ですかね、同じ階に住んでいる人たちと挨拶を交わすことは日常的にありましたし、今の家でも隣の人とは、挨拶も普通に交わしますし、全然。うん、あと、2,3戸隣の人とは、物々交換をしたり<笑い>とか、

調査者：へえー

対象者：<笑い>

調査者：お魚持って行ったりして、葡萄いただいたり。こういうこともありますし。

対象者：トラブルがあるというより、仲良くやっているという感じで。ブラジル人だからというだけで一切嫌な顔をされたことはないですし、片言な日本語でもしっかり聴いてくれるし。

調査者：まわりに住んでた方でブラジルに住んでいた方はいた？

対象者：団地の時はありましたね。

調査者：そのブラジルの方とは接点はあった？

対象者：うーん。なかった。なかなかないですね。うーん。親戚だったらあるんですけど。あんまりないですね、夜遅くに帰ってきたりとか、朝早く出てっちゃったりとか。

調査者：はい。わかりました。ありがとうございます。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：D
- ・ 日時：2015年4月29日
- ・ 回数：1回目
- ・ 場所：Dが在籍する大学の個室
- ・ 記録：1時間24分42秒

■ 育ち(資源形成)

日本の幼稚園時代の記憶

調査者：教育はどのような形で受けてきたかというところなのですが、

対象者：はい。

調査者：日本の幼稚園の時の記憶って何かありますか？

対象者：教育をどういう形で過ごしてきたか？

調査者：どういう風に幼稚園で過ごしてきた？

対象者：普通だと思いましたし、たぶん、ま、なんか、自分がブラジル人であるとか、そこら辺の意識はたぶん一切なかったかとは思いますがね。

調査者：家で何か、お母さんにポルトガル語で話しかけられたりとかはなかった？

対象者：ありましたね。あの、小っちゃい頃からどっちもしゃべれるようになってる感じで。

調査者：日本語の方も家でしゃべるし、って感じ？家ではポルトガル語？

対象者：家ではポルトガル語。わりと覚えるまでは、日本語で話してくれてたんですけども、親もそんな、当時はすごい(日本語を)しゃべれるわけじゃなかったんで、まあ、たぶんポルトガル語も軽く織り交ぜながらって感じで、日本語しゃべれるなって判断してから、もうポルトガル語オンリーでって感じで。

調査者：その時は日本語とポルトガル語の使い分けは意識していた？

対象者：や、物心ついた時にはどっちも使えていた感じだと思うんですよ。たぶん。

日本の小学校1年生～2年生

調査者：はい。日本語の小学校に入って、ブラジルに行くまでの間の学校生活はどうだった？

対象者：ああ、なんか、ネームプレートとかそこら辺も全部、Dってのはローマ字とかでなってる、まあ、ちょっとブラジル人だよって、まあ、みんなとは違うなっていうのはわかったんですけど、まあ、特にショックはなく、ま。「すげー、ローマ字いいなあ、羨ましい」って感じでむしろ。憧れの目とかもあつたし。あと、何だろう。国語の授業の時だけ、別の教室、たぶん取り出しだと思ってるんですけども、その授業があつて小学校の時。 (Dにとって取り出し授業は)いらなかったんじゃないかなっていう<笑い>。そんな感じで取り出し授業で、国語の時だけ。全部抜け出すっていうわけではな

く、週に2回ぐらい、なんか取り出して感じで行って。でも支援、まあ、お遊びみたいなやっててという感じだったんですけども。

調査者：ローマ字かっこいいっていう眼差しは周りの友だちから？

対象者：そうですね。

調査者：その時に、何かこう、周りの子たちは平仮名でネームプレートがあるわけでしょ？

対象者：そうですね。

調査者：ネームタグが自分だけ、ローマ字になっていて、そこについては、嫌だなんていう感じはなかった？

対象者：まあ、一貫して嫌だなんていう感じはなかったんですけども。

調査者：むしろ、周りが「すげー」っていう、

対象者：やったって感じがありましたし、そうですね。

調査者：取り出し授業についても、周りがクラスで通常の国語の授業を受けている中で、自分だけは、週に2回別の教室に行かなければならないことについては、何か、こう、何で行かなければならないんだろうとか、自分だけ違うところ行かなければならないの嫌だとか、そういうことはあった？

対象者：その時の自分はたぶん、深く考えるタイプではなかったんで、まあ、その教室自体楽しかったですし、それで同じ外国籍の人たちともつながりをもてたっていう、なんか、仲良くなれたしっていうのもあったんで。

調査者：結構(外国籍の子は)多かった？まわりで。

対象者：そうですね。ええっと、1年から6年までまとめてその教室に行くんですけども、何人ぐらいだろうな、まとめてたぶん、10(人)は超えてたと思うんですけども。ま、基本ブラジル人ですけども、そうですね、10(人)はいたかなって思います。

調査者：じゃあ、通訳に入ってもらおうとか、上の学年の子が通訳しに自分のところに来るということはなかった？

対象者：それはなかったですね。

調査者：むしろ自分が通訳してた？

対象者：あー・・・そうですね。自分が一時期、帰ってきてから何ですけども、あ・りましたね。

調査者：じゃあ、本当に周りの子たちとか全然、勉強面では、変わらず？

対象者：そうですね。

調査者：周りの子たちからは、むしろ、ネームタグのローマ字然り、すげーって

対象者：うん、そうですね<笑い>。「これ何て言うのポルトガル語で」って。こんな感じですよって。

調査者：ブラジル人だからちょっとこう、

対象者：引け目というのはなかったですね。

調査者：うん。周りからブラジル人だからちょっと距離を置かれてしまったりとかはなかった？

対象者：小学校2年生の時は何もなかったですね。平和な感じで。

ブラジルでの小学校生活

調査者：2年生終わって、3、4年生とブラジルへ

対象者：そうですね。

調査者：帰国するってなった時は、どういう感じだった？もう、ブラジル行くぜ！って(乗り気の)感じだった？

対象者：まあ、離れたくなかったんですね。友達たちと。学活の時間にわざわざ、もうなんか、何回も前から計画立ててくれて、お別れ会とかもなんかやってくれてっていう感じ。だからまあ、悲しいなっていうのもありましたけども、なんか、親戚が、ほんと小っちゃい幼稚園ぐらいの時に、おばあちゃんとかも日本に(いる)時期があったんですよ、だからおばあちゃんの記憶はあるんで、おばあちゃんと会えるなっていうそこら辺のわくわくはありましたけども。

調査者：ブラジルに帰国する、戻る・・戻るっていうか、初めて行くわけだから、

対象者：そう。そうなるんですね<笑い>。はい。

調査者：(初めてブラジルに行くこと)に対して。ブラジルに行くことになった理由は？

対象者：えっと、何だっけな・確か、4番目妹が生まれて、なんか、嫁姑問題でごたごたして、親が離婚したっていう感じだったと思うんですけど、そこで女手ひとつで、あまり日本語も完全ではなくて、子ども4人抱えているとなると、難しいんじゃないかってなって。たぶん親戚が家に来なよって、ブラジル来なよって感じで誘いがあったんじゃないかなって記憶だったと思います。

調査者：両親が離婚されたのは日本で？

対象者：そうですね。どっちもブラジル生まれ、ブラジル育ちですけども、まあ、日本で知り合って日本で離婚してって形ですけども。

調査者：Dが小学校・・2年？

対象者：小学校2年、そうですね、2年前後で。

調査者：ブラジルに戻って、ブラジルの小学校に入る時、それまでに日本語もポルトガル語もどちらもいけるって状態だったわけでも、学校文化としてはちょっと違うわけじゃんね。例えば、ブラジルの学校は午前中か午後でしょ。その辺の戸惑いとか、算数とかでも考え方の違いとかあるじゃん。その辺とかさ、日本から来たということで、周りから珍しがられたりとか、そういうところはどうですか？

対象者：ええっと、珍しがられるっていう点では、すごい皆、「すげーなー！」ってなったりして、あんまクラスにいなかったんですよ。1人だけ確か日系の子がいたんですけど、日本語は全然って感じで。ま、その子も、そろって、「お前すげーなー！」って。「これどんな感じ？」って。ま、いろいろ聞かれたりして。日本に対する興味がすごくよかったっていうのがあったのかなって、思いますし。算数の面でいうと、小学校2年生掛け算までだったかな・・たぶん。割り算は向こう(ブラジル)なんですけど、やっぱ

公式が違うじゃないですか。で、ちょっと、日本で俺がイメージしてた割り算と違っていたんで、あれ、こんなんだっけって最初は混ざっちゃったんですよ。で、まあ、なんとか矯正してって感じで。

調査者：その辺、どう矯正したの？

対象者：いや、なんか家族とか親に聞いたりして。これこうだよねって。「あんた何やってるの」って言われてって感じで、はい。

調査者：その時って、テレビで日系人ブームってあった？

対象者：俺・・・全然記憶ないです。

調査者：そうでもないのかな、

対象者：でもちょうどその時、ブラジルに住む日系人の話題が、というか話が上がっていると思うんですけど。今の自分が調べてちょうどこの時期かってなったんですけど、当時としては全然知らなかったですね。

日本人の自分

調査者：もちろん皆が皆じゃないけども、ブラジルに行くと、日本人って言われて、いざ日本に来ると、

対象者：ブラジル人って言われて、

調査者：っていうのは向こうではなかった？

対象者：ブラジルでは日本人って言われていましたけども。ま、それでまあ、ブラジルに行ったのがきっかけかな、ああ俺日本人だわって。たぶん思ったのはその時だと思うんですよ。

調査者：その時に、周りから日本人って言われて、日本人なんだってすぱっと割り切れちゃった？

対象者：そうですね。なんか、日本人だって。漢字教えるよってっていう感じで。

調査者：じゃあ、そこに迷いというか、葛藤というかそういうものは

対象者：そうですね、単純ですね僕は<笑い>。

調査者：僕は日本人なんだってってことで、

対象者：そうですね。

アイデンティティの葛藤の始まり

調査者：それは今も変わらない？

対象者：いや、帰国後からちょっとなんか自分の中の受け止め方がすごい変わったんですけど。

調査者：帰国後っていうのは日本に戻ってきてからのこと？

対象者：そうですね、小学校5年生以降の話になるんですけど。

日本に戻るきっかけ

調査者：それで、ブラジルで過ごした2年間があって、また日本に戻ってくるようになったきっかけは？

対象者：あの、やっぱ、ずっと兄妹4人日本に帰りたいって、まあ言ってる。

調査者：帰りたいっていうのは、ブラジルの生活に馴染めなかった？

対象者：別に(ブラジルの生活は)好きだったんですけど、やっぱ・生まれ育った日本があるから、日本が恋しいっていうのもありましたし、あの一、幼稚園から続いていた交友関係をいきなり全部すばって切るわけだったんで、ま、寂しいなって。ブラジルもブラジルすごい、好きだったし楽しめたんですけども、やっぱ恋しさの方が勝っちゃったっていう感じだと思うんですけども。(日本に)戻るって聞いて喜んだんですけど、ちょっとやっぱ悲しいなってなったんですよ。親戚の大半がブラジルに住んでいたんで。まあ・・・その葛藤はあったんですけどね。

日本の小学校5年生 学校での適応

調査者：戻ってきて、同じ小学校の5年生に入って、また、ブラジルの教育から日本の教育へ入っていったわけだけど、その辺のすり合わせというか、

対象者：まあ、まず2年間のブランクがあってっていう感じで、カリキュラムも当然違うわけなので、最初ついていけなかったっていうのがもう本音で。

調査者：言語的な面から？

対象者：日本語はまあ、大丈夫だったんですけども、うーん、何だろ、進度的なものもあるし、数学(→算数)に関しても計算のやり方に違いがあったり、あと、漢字がめっちゃくちゃだったりとか。

調査者：その時どうしたの？

対象者：あの、漢字テストで0点取って、ね、先生に言われて、まあひたすら頑張るしかないなってなって。その範囲をひたすら書き取りのページ数増やしたりとか、なんか、何だろうな、先生に聞いたっていうのもありますし、先生もなんか、うん、聞いたらもういくらでもなんかサジェストっていうかあの、導きはしてくれたんで、ま、その力で何とか。

調査者：そこで訳わからなすぎるから放り出すとかは、

対象者：投げ出すのは何かすごい嫌だったんですよ、やっぱ。なんか、何だろう。帰国しても、完全にブラジル人だっという扱いになってその温度差って言えばいいんですかね、なんか。そこでなんか違和感を感じて、そこからなんか、違和感感じだしたんですけども。それで、ちょっとできないことがあると、やっぱブラジル人だからっていう(視線)は当然あって、それが嫌で嫌で、っていう感じだったんで。投げ出すのは、負けた感じがしたんですよ。

アイデンティティの葛藤

調査者：その時に周りから、例えば漢字ができなかったから「ブラジル人だから」っていうのがあって、違和感を感じていたって言っていたけれど、自分の中でのアイデンティティ、

対象者：そうですね。

調査者：ブラジルにいた時は日本人だなんて思ったけど、日本に戻ってきてブラジル人だと言われて、

対象者：揺らぎましたね。

調査者：その時って、どっちかに、周りが日本人だから日本人になりたいとか、逆に、周りからブラジル人って言われたからブラジル人なんだってなったか、もしくは他にあれば

対象者：あの、たぶん人生の中で一番葛藤した時期なんじゃないかなって思うんですけども、やっぱ、自分はどうあるべきなんだって悩んだわけなんですけども、自分は日本路線でいきたかったなって。たぶん、そうですね。見た目もこんなんで自分はやっぱ日本人だと思ってたんで、やっぱ、みんなと一緒にしょって感じになりたかったですね。

調査者：周りのクラスメートとか友達みたいに日本人になりたかった

対象者：そうですね。

調査者：周りにそのような風に見られ、このまま漢字わからないまま終わりにたくないって話があったと思うんだけど、何て言えば言いかね、その思いがあったからこそ続いた？

対象者：あ、そうですね。やっぱ、うん。負けたくないっていう気持ちですね。

調査者：揺らいだ時期が変わってきた時期はいつになる？

対象者：小学校の時は常に揺らいでいたと思う。

調査者：6年生の時も？

対象者：はい、たぶん。もう、揺らぎは小さくなったと思うんですけど、辛かったっていうかまあ、時期だったと思うんですけど、

調査者：揺らぎが小さくなっていったのは、

対象者：慣れですね。

調査者：その時は漢字もある程度分かるようになっていた？

対象者：そうですね、もう1か月で、割と克服しようと思って、あの一、ノルマ、ノルマがあって漢字テストの方。受からなかったら、来週もう一回みたいな感じで。先生に1か月くださいって言って、5年の範囲は、範囲っていうかまあ、テストの範囲は1か月で網羅して、まあ何とかあったと思うんですけど。で、それまでの小学校3,4年生の時の感じも、その1か月で詰め込もうと思って、ワーク、先生からもらって、余ってる古いやつあげるよってなったんで。

調査者：克服できたところからある種、(葛藤は)小さくなっていった？

対象者：そうですね。たぶん。

調査者：小さくなって行って、その後はどう？

対象者：どうだろう。中学入ってなんか、別の小学校と混ざるじゃないですか。それで、同じブラジル国籍の子がまあ、クラスにひとりいるっていうぐらいの数でいたと思うんですけど1人2人いて、で、まあ普通に接しているからなんか、なんかいいのかなって。なんか、別になんか全然気にしなくていいのかなみたいな感じになっていって。何だろう、いつからでしょうねえ<笑い>。

調査者：<笑い>。

対象者：でもやっぱ褒められてやっぱ伸びるタイプだったんで、なんかちょっとここ頑張ろうって1点頑張ってちょっと先生に認められて、ああ、俺でもなんかできるものはあるんだってなって。3年生、中3上がる頃には割と(日本人かブラジル人か自分はどうかあるべきか)固まったんじゃないかと思うんですけども。

調査者：何(を)頑張ったの？漢字然り

対象者：漢字然り。もう、部活とかも頑張ったりしてて、部長やったりして、うん、まあ、いろいろ勉強も運動も頑張ってるっていう感じで。で、なんか小学校の時に、小学校6年かな、教頭先生に1回呼び出されされたことあって。何がなんだかわからないですけど、「君はすごいよく頑張っているよ」って、呼び出されてそれだけ話されて<笑い>、

調査者：<笑い>。

対象者：ありがとうございますってなって。そういう感じに似たのが、中学にもあって。中学入った時にもあって。でも自分でも状況がわかんなくて。なんで褒められているんだろうって。でもなんか認められてるって感じがするから、まあ、嬉しいなっていう感じがして。その時は心持ちは日本人だったのかなやっぱ。

調査者：先生が褒めてくれる。まわりの子どもたち、さっきブラジル人だから・・・っていう目があった中で、学年が上がっていく中で、頑張って、そうした目はどうなっていった？

対象者：なんか、別にそういう話も聞かなくなりましたし、なんか、あの一・中3の時には漢字テスト全部できるようになって、漢字マスターって呼ばれてて。なんか、やっぱブラジル人の子が僕以外にもいるんで、まあ、彼らと遊んだりしているうちに気にしなくなったっていうのもあると思うんですけども他の子たちも。割とブラジル国籍の子はまあ、うん、短期的に入ってきてもうすぐ帰っちゃうみたいなケースも結構あったんで、まあ、慣れてきたのかなっていうのもありますし、

調査者：自分自身が慣れてきたってこと？

対象者：自分自身もありますし、まわりもですね。まあ、でもちょっと来たばかりの子は全然馴染めずにいたんですけどもね。

適応、まわりと違うところがある自分

調査者：はい。中学校入って部活に勉強に頑張ったと。

対象者：そうですね。はい。

調査者：ちなみに部活何やってたの？

対象者：バスケット部。部長やってみました。

調査者：部活でさ、よくあるじゃん。連帯責任だとか、日本独特のしきたりとか。例えば、1年生は早く来て準備したりとか。

対象者：ありましたありました。

調査者：そういうのはどうだった？理解できないとか、

対象者：僕たぶん順応はすぐできるタイプだったと思うんですけども。親にやっぱ早めに行かなきゃって言って、(親からは)「なんで？」って言われて、1年生だけ準備あるんだよって言うと、(親からは)「なんで(1年生だけ準備があるの)？」って言われるんですよ。「みんなでやればいいじゃん」ってまあ。親がやっぱり疑問を抱いて、それに対応できなくて、なんでだろうねって流れることもよくあったんですけど。まあ、僕自身の疑問はあんまなかったのかなあ・・・。

調査者：お母さんはその点疑問であったけど、

対象者：結構あったと思います。

調査者：自分としてはそういうものなんだって具合で、

対象者：そういうものなんだって受け入れようって。はい。

調査者：そういうことがあるから部活嫌だなんてことはなかった、

対象者：まあ、そうですね。

調査者：部長を務め、

対象者：受け入れなければ、たぶん、やっぱみんなから別の、なんか違う目で見られるのも嫌だったなっていうのもきつとあったんだと思いますね。

調査者：慣れてきたっていう話がさっきあったと思うんだけど、そういう中でも、違う目で見られるということがあった？

対象者：そうですね。なんか、全然記憶がおぼろげなんですけど、違う目で見られるたびにすごく嫌な思いはして。

調査者：慣れてきた中でもないことはなかった、

対象者：そうですね。

調査者：やっぱりそれは嫌で、

対象者：そうですね。自分の違うところが嫌になったって。(違いを)指摘されることが嫌じゃなくて、自分が違うっていう自分に対して嫌っていう感じだったんですよ。

調査者：まわりと違うところがある自分自身に対して

対象者：そうですね。

調査者：わかりました。

対象者：はい。

多文化交流センターに通い始めたきっかけ

調査者：高校受験があったわけですが、その辺りはどのような記憶がある？

対象者：あのー1年生の時から、多文化交流センターで。

調査者：中学校1年生。

対象者：そうですね。小学生の時も夏休み(に多文化交流センターに)行ったりして勉強していたんですけども。

調査者：そのセンターの情報、勉強する場があるよっていう情報はどこで知った？

対象者：うーんと、何だろうな。親がなんか、(センターは)団地の近くにあるんで、まあそこから情報を手に入れてきたんだと思うんですけども。(お母さんから)「あんたらそこ行きなさい」ってなって。わかりましたって。そうですね。情報を仕入れたのは何でだろうなあ。まあでもやっぱ、積極的にそういった活動をやっているんで、告知とかもしているんで、

調査者：お母さんがね？

対象者：そう。センター自体もなんか、何々大会やりますよみたいな、焼き芋、何だろう、大会やりますよみたいなものもあったりしたんで自然と耳に入ってきたのかなって。

調査者：センターが告知してたんだね。お母さんが告知していたわけじゃないんだね。センターが告知していて、お母さんがそれをどこかで知ってって具合？

対象者：センターの告知で、はい。何かしらで自然と、はい。

調査者：行きなさいよって言われて、夏休みだし、嫌だな遊びたいよって感じにはならなかった？

対象者：友だちも一緒に行こうって、日本人だったんですけども。一緒に行こうよって誘ったら来てくれて。割と楽しく、そんな長く拘束されるわけでもなかったんで、まあ、割と楽しく行けていたと思うんですけどね。

多文化交流センターでの勉強

調査者：中学校1年生の時には、

対象者：週・2かな。水金(曜日)で、はい。

調査者：学校の勉強のわからないところを聞く感じ？

対象者：そうですね。自分で聞きたいところや、やりたい単元をやってって感じなんですけども。まあ、社会とか理科はぶっちゃけ自分でできるってものだったので、国語とか、まあ数学は自分で見てもわからないところがあると思うので数学、国数英ですかね。メインでやっていたのは。

調査者：理科と社会、結構その、学習言語、話す言葉と勉強で使う独特な言葉、例えば社会でも校倉造りとか言われても、なんだそれっていう話じゃない。

対象者：それは正直わからなくて、単語だけインプットして、テストで紙で出てきたらアウトプットする感じでした。

調査者：テストの点数としてはしっかり取れていた？

対象者：普通ってうか、まあ普通ぐらいですかね。はい。

調査者：その時には、センターの方では大学生は(来ていた)?

対象者：まだ来ていなかったはずですね。中3か高1に上がるぐらいに大学生が来た感じだったと思いますけども。

中学時の将来したいこと

調査者：中学校の時や、高校受験する時に、将来何がしたいのかって話にたぶんなと思うんだけど、

対象者：そうですね。

調査者：そういう話があった時にどんなことを考えていた?

対象者：あーのー・やっぱどっちも、日本語もポルトガル語もどっちも使えるから、なんか有効活用と言いますか、薄々思っていて、そっからまあ、漠然とした感じで言語どっちも使える仕事ができればいいなっていう。

母親の姿を見て

調査者：それは人に言われたりして思うようになった?

対象者：たぶん親の姿を見てだと思っんですけども。いわしんバモスのやつもそうですし、そこから辺で日本語を教えたってのもありますし、あの一、幼稚園で通訳の仕事って言えばいいですかね、もやってて、かっこいいなっていうのもありましたし、そこを見て自分もなんか需要があるならば、供給したいなっていうイメージはそこから生まれたかなと思いますね。

高校生活 ブラジル人の友だち

調査者：高校受験をして、高校に進学したと。高校生活、普通科だよな?

対象者：そうです。普通科です。

調査者：特に、インターナショナルクラスであるとかそうしたものではなかった

対象者：じゃあなかったですね。

調査者：まわりにブラジルの子とかいた?

対象者：1人いて、

調査者：同じ学年で?

対象者：そうですね。同じ学年に1人いて、1年生の時同じクラスだったんですけども。

調査者：俺もブラジル人なんだよってなった?

対象者：特になかった。名前がcってなんか完全に一目でわかるなって感じの奴だったんで、気になったから話しかけて、仲良くなったんですけどもね。

高校時の日本人との関係

調査者：まわりは日本人がほとんどだったわけだけど、どうだった高校生活。

対象者：どうだったか。

調査者：新しい環境になるわけで、まわりからブラジル、ブラジルにルーツがあるっていう話をまわりにしていた？

対象者：していましたよ。

調査者：それに対して、どういう反応があった？

対象者：へええ、すげえなあってのと、いや嘘だろって。まあ、顔から判断して<笑い>。いや違うよ本当だよってのもありましたし、でもやっぱあの、何だろうな、英語すごい頑張っていて1年の時に(英検)2級受けてみたら受かっちゃったってあって、3年生と一緒に受験した形なんですけども。それでなんか、「すごいな、ポルトガル語がしゃべれるからでしょ」って。いやちょっと待て、違うでしょって。自分で頑張ったからだよっていう、まあ嫌って程ではないですけど、ちょっともやっとしたものはあったんですけども。

調査者：ポルトガル語がしゃべれるから英語ができるんでしょっていう。

対象者：そういう感じ(の見られ方)もあって。頑張ったからだよって。

調査者：新しい環境に飛び込んで、違った目で見られるというよりも、比較的うまく

対象者：たぶんそうですね。なんか、俺たぶんまわりに馴染むのちょっと遅いタイプだったんですけども、まわりがいい人たちばかりだったんで、気がついたら馴染めれて、まああの、このあたり近辺、磐田近辺だとやっぱ、同じクラスにブラジル人いたっていうのもほとんどがまあそうだったと思うんですけども、ブラジル人に対する悪いイメージ、勝手なイメージは特になかったんでね。よかったなど。

高校時の勉強面

調査者：英語の話が出たけど、他に勉強の面ではどうだったの？

対象者：あの一・最初の模試で学年3位っていうのがポーンって取れて、ああいけるじゃんってちょっと、頑張ればいけるかなって思ってまあ、頑張って維持しようとしたんですけども、やっぱ2年生で墮落するって言うじゃないですか<笑い>。

調査者：中だるみってやつね<笑い>。

対象者：そうですね。中だるみにまんまと引っかかって。けど、英語だけは唯一の救いだったんで、まあ、何でしょうね。勉強は1年と3年は頑張ったって感じですね。

高校時の将来したいこと

調査者：中学の時はポルトガル語と日本語の両方を生かしたことがしたいと考えていたって話をしてくれたけど、高校生の時もその思いは一貫していた？

対象者：そうですね。英語も使えて3か国語できればいいなっていう感じで、そこを頑張っていた記憶がありますね。

高校時の多文化交流センター

調査者：高校生の時には多文化交流センターには？

対象者：まだ行っていました。基本中学生のみだったんですけども、幹の会の前の会長のあの、
dさんって方がいたんですけども、「せっかくだから続けられれば？来てもいいよ」みたいな感じになっていて、その方もすごい支援っていうか理解のある方だったんで、まあ、その方の後押しとかもあってセンターも続けてって感じで。その時に大学生が来るようになったって形ですね。

調査者：その時は週に2回？

対象者：そうですね。週に2回。あの、元々中学の時に自分の部活の予定とかに合わせてくれて、時間帯も。基本僕と弟ともう1人しかいなかったんで。

調査者：ああ、そうなんだ。

対象者：そうですね。最初は3人でしたね。

調査者：じゃあ高校生になった時に中学生の勉強を見てあげてよっていうのは人数的になかったの？

対象者：あー・・・まあ、(参加する中学生は)増えたっちゃ増えたんですけども、自分の勉強もやりたいんで、まあ、たまーにぐらいしかなかったと思うんですけど。

調査者：通訳とかはしなかった？

対象者：特に必要な子はいなかったかなと思うんですけども。子どもたち大体もうほとんど日本に馴染めている子たちばかりだったんで。

中学生の勉強をみて

調査者：時々お願いされて勉強を見た時はどうだった？何か思ったことはあった？

対象者：思ったことか。

調査者：自分の弟世代じゃんね。

対象者：そうですね。

調査者：その子たちをみて何か感じたこととか

対象者：ああ、でもなんか、すげえ頑張ってるっていう目で見ているのはすごい思い出にありますね。

調査者：それはどういう理由からそう思ったの？

対象者：なんか、どっかで腐っちゃったりせずに、たぶん何かで悩んだりしているだろうからやっぱ、頑張ってるっていうのもあって、たぶんそこからかな、こういう活動したいなってちらって頭に浮かんだ気がしましたね。

調査者：何か悩んでいるんだろうなって思ったのは自分がそうした経験をしてきたから？

対象者：そうですね。

外国籍の子どもの悩み

調査者：まわり、同じ中学校でブラジル人の子がいたって話だったけど、まわりの子の状況とかは中学校の時には知る機会があった？

対象者：今の状況ですか、それとも当時の？

調査者：自分が中学生の時にいたまわりのブラジル人の友だちの当時の状況、例えば〇〇という悩みを抱えているとか。

対象者：あーの一、親同士のつながりは結構あったんで、ちょっと小耳にはさんだりとかも、「全然馴染めない、日本語もそんなにうまくない、どうしようね、帰りたいけども帰ったら帰ったで、あんまうまくポルトガル語を使って馴染める気がしない」って。悩んでるんだなああっていうのもあるし、何だろうなあ、ちょっと同じような子も1人、家の近くにいたんですけど、いて、その子は部活、野球すごい頑張ってる高校も推薦、野球の推薦で行った感じだったんですけども、苦労はしているんだなあとは、やっぱり小耳にはさんだりしてましたね。

外国籍の子どもの進学

調査者：自分が高校生になる中で、周りの子も同じように進学した？

対象者：ひとりはずう、たぶん帰りたいって、ブラジル行きたいって高校進学はしなかったのかな確か。一応合格通知までもらって、全員合格しましたねってところまではいったんですけども。結局高校には行かなかったっていう感じでしたね、1人だけ。あとは全員進学しましたね。

外国籍の子どもの悩みに触れる機会

調査者：まわりの状況を知りつつ、高校生になっていって、ある種自分の経験もあり、センターに来ている中学生に頑張ってもらいたいなど。

対象者：そうですね。

調査者：高校生の時にセンターで勉強を教えている時に、悩みを聞いたり彼らの置かれている現状に触れる機会はあった？

対象者：高校生の時は特になかったですね。まあ軽く教えてって感じだったので。

調査者：さっき言ったようにちょっとそこで(活動意欲が)芽生えた感じなんだね。

対象者：そうですね。

B、Cとの出会い

調査者：大学生が来るようになって、その時に来ていたのは日本人学生？

対象者：センターですか？

調査者：センター。

対象者：あの一、BさんとCさんはボランティアで教えに来ていた。BさんとCさん以外は日

本の人に来ていたと思いますね。

調査者：同じブラジル人だと。そこで何か話になった？

対象者：何だろうな・まず大学に触れる機会っていうのはセンターが初めてで、交流会とかもあって、センターの。そこで軽く、話聞いたりすることも。すげーなってなったりとか。

調査者：その時まで大学の情報はなかった？

対象者：実際にb大に来ての交流会だったので、はい。実際に直で見て、得たっていうのもありましたね。

ロールモデルとしてのB

調査者：b大に来よう(進学しよう)と思った理由は？

対象者：Bさんを見たっていうのもありますし、

調査者：それは実はBさんから聞いてるんだ、県の審議会の場でDがこんなこと言ってくれたんだよって。

対象者：まじかー<笑い>。そういう感じですね。

調査者：それはどういう視点でBさんを見てb大に来ようと思った？

対象者：憧れっていうのと、なんか、なんか道筋、ロールモデルになったのかな、どうなのかな。やっぱ見えて、ハッて、いいかもしれないって。

調査者：先輩すごいな、こうなりたいなっていう先輩がいて、あの先輩がいる大学だからっていう。

対象者：そうですね。

在籍している学科を選択した理由

調査者：それで、2言語3言語ってことで、e学科？学科を選んだ理由は？

対象者：そうです。なんかあの、パンフレットとかもらって、多文化共生って単語があっただけの中に。あの専門科目。おっ！て。ピンとくるなって。

調査者：高校生の時には多文化共生って言葉は知ってたの？

対象者：あの一、まあ、センター行ってたんで知ってたっていうのもありますけども。あのそれがこの近辺でどう関係しているのかっていうのは深くは知らなかったんですけども。

調査者：言葉としてはセンターにあったから知っていたけど、具体的にじゃあどういうものかってところまではって感じ？

対象者：そうですね。多文化交流センターって名前なので、一応形だけは(知っていた)って感じですね。

地元で活動したい

調査者：BさんCさんという先輩たちを見てきて、受験して。他は考えなかった？

対象者：他の大学ですか？それもやっぱ考えてて、やっぱあの英語とか勉強できるようなところ、関西外大も、まあ一応オープンキャンパスとか行きましたし、南山とかも先生に薦められて、「そこで英語勉強しないか」って言われていろいろ考えたんですけど、やっぱあの・・・地元で動きたいなっていうのがあって。決め手はそこら辺にあったんです。

調査者：地元で動きたいっていうのは地元で活動したい、

対象者：活動したいっていうのもありますし、ま、活動できるかどうかは知らなかったんですけども、できれば、あわよくば地元で活動したいし、センターの大学生のボランティアを見て、

調査者：例えば、外国籍の子に関係することとか、多文化のまちづくりのような。

対象者：はい。そうですね。で、まあ、基本高校の時までは本当英語英語してて、もう英語ばっか。受験期とかそこら辺になって変わったんですけども。

調査者：受験期に変わったっていうのは？

対象者：大学のパンフレットとかいろいろ見て、ああでも英語を勉強するだけじゃなくて、多文化共生って、何でしょうね、そういうものに従事したものをやりたくなってきたなって。そういうのもあるんだって知って、やっぱ変わってきたのかなきっと。

調査者：情報が入ってきて、

対象者：やっぱ自分の考えが変わってきた。

調査者：ブラジル人の先輩が自分の通っていたところに来て、交流していく中でb大の情報を調べて、わかって、ああってなったと。

対象者：そうですね。

調査者：わかりました。

対象者：はい。

大学生生活

調査者：大学生になって1年間過ごして、どうですか？大学生生活<笑い>。

対象者：すごい大雑把な質問ですね<笑い>。

調査者：授業面は？高校生の時に多文化共生について勉強してみたいと思ってb大に進学して、授業として関連した授業があるじゃんね。授業を受けてみて、自分に変化があったとか、気づきがあったとか、その辺りはどう？

対象者：国際関係論とか、広い目で動きを見る講義とかもあるんで、こういうのもあるんだなって知ったりして、まあ、俺的に多文化共生ゴリゴリに行こうって思ってたんですけども、まああの、卒業に必要な単位があるんで、これも受けなきゃいけないなっていうのもありましたし、専門的に入るのは2年生からだだったんで、ああ、こんな感じなんだなって。最初知っていききましたね、きっと。

■ 活動と自分

活動のきっかけ

調査者：活動をしたいなって思いがあったわけだけど、進学後、実際にスタートしたのはいつ？

対象者：受かったのが決まったのが12月の6日なんですけども、その時にセンター行って大学生の人たちにあの、ひとつお知らせがありますって言って<笑い>。受かりましたって。「ほおお、感動したわ」って言われて、そこでじゃあ、「一緒に教える側になる？」ってなって、一応、非公式じゃないですけど、そこで動きだして、動いたっていう。

調査者：センターで教えるようになりましてってのは、受かりました、僕はこういう関係の活動がしたいんですって言ったの？

対象者：したいんですっていうよりは、受かりました、「あ、ほんと？」って。で、「じゃあ教える側に回る？」みたいな感じ。

調査者：じゃあ特にこちらからってことじゃなくて

対象者：こちらからの発信ではなくて、

調査者：声をかけてもらったと。

対象者：はい。

活動に関わったことによる気づき

調査者：学習支援はそうした形でやるようになって、それまでの自分から何か変化はありますか？

対象者：いろんなケースがあるなっていうのもありましたし、

調査者：ケースっていうのは？

対象者：こういう境遇もあるんだなみたいなものもありますし、ほんとに馴染めていない子だったり、自分は外国籍であることを認めないっていう子もいましたし、もうなんか、日本が嫌いだって言う子もいましたし、いろいろいて、やっぱ実際にセンターであの、日本語をしゃべれない全然できない子入ってきて、で教えてってなってつきっきりで教えたりしたんですけども。うん、なんか、やっぱり頑張ってもらいたいっていうものもありますし、あの、めげないでほしいっていうものもあります。その気持ちは相変わらずあってってのもありますし。でもやっぱなんだろうな。自分はもう外国籍であることを受け入れないって断固拒否した子がやっぱ衝撃的だったっていうのはありましたね。ある種、自分の親とかも否定しているのにもつながりかねないなって思って。その大きなギャップっていうか、ショックもあって。

調査者：学習支援から入って、そこから今に至るまでいろいろな取り組みをしてるよね。

対象者：そうですね。びよびよもやったりして、(多文化共生)ワークショップもやったりして、

調査者：それは大学進学して、授業の中で、ゲストを最初に呼んで告知って形のものの中から？

対象者：文化人類学とかで、紹介があつたりしていいないなってなって。そういうところか

らだったりしますね。

活動の戦略

調査者：いろいろやっているわけだけど、やろうと思ってやっているわけじゃんね、それは自分の中で何か戦略みたいなものはあったりするの？

対象者：戦略・・・

調査者：とりあえず、全部やってみようなのか、これはこういうところに関係するからちょっとこれはやってみようのか、

対象者：一種の義務感が出てたんですよ、なんか。

調査者：義務感？

対象者：なんか、やんなきゃいけないなって。こういう活動を。なんか、なんだろう。みんながみんな、外国籍で入ってきたわけじゃないんで、あの、外国籍でも動けるんだよって教えられるのはそんなにいないんで、謎の義務感が生じていて、姿を見せなきゃなって。見せなきゃって言うとなんか強いんですけど、何でしょうねえ、

調査者：自分だからこそできる？

対象者：うーん、そうですね、自分だったらやっぱ、日本人も活動しているんですけど、自分だったらもうちょっと衝撃っていうかインパクトを与えられるんじゃないかっていうのもありますし。

調査者：インパクトかあ。

対象者：実際にワークショップとかで小学校行って、日本人がワークショップやったりすると、やっぱ、ポルトガル語できますブラジル人ですって言った方がやっぱ子どもたちの反応も「えっ！」ってなったりして、なんか、何でしょうね。

調査者：日本人がやることとは、同じことをやるにしても違う可能性があるっていうか

対象者：そうですね。

調査者：ちょっと違った話の展開ができるんじゃないかとか、そういう感じ？

対象者：そうですね。はい。

調査者：なるほど。義務感というより、責任感？何だろうね。

対象者：うーん、よくわかんないんですよ。これ<笑い>。

調査者：でもやらされている感じがあるわけじゃないんでしょう？

対象者：そうですね。やりたいなって思って。

調査者：そうでしょ。だからそこは義務感っていう感じではないのかな？

対象者：自分の中で勝手に義務化されているっていう感じです。

調査者：うーん。それは今も変わらない？

対象者：そうですね。COLORS にもたぶん入ることになりって。で、WISH の副代表も半ばやらされることになり。

調査者：あ、そうなんだ。へえ。今年ってもう終わったんじゃないの？まだやっているの？

対象者：あ、もう終わってて、次期です。

調査者：ああ、そういうことか。はいはい。

学外の団体との接点

調査者：学外の団体が主体になってやっているじゃんね。学外との接点は WISH が初めて？

対象者：そうですね。かもしれないですね。

調査者：大元を辿るとグローバル人材サポートなのだけど、I さんとは接点あるの？

対象者：いやなんか、最初は代表で挨拶してきて、会話することはなかったんですけど、なぜか、ああ D かって、なんだろうな、お邪魔する機会があって、勝手に名前が知られていて、まあ、知られるのは当然なんですけど、

調査者：まあ、有名人だからね。

対象者：なんか、話したことあるっけこの人ってなって。ちょっと接点ができて。打ち上げとかでもしゃべったりしてて。接点はちょいちょいありましたね。

調査者：それいつ 4 月？入学してすぐの。

対象者：どうだろうな。募集掛けたのいつだろうな、4 月じゃなかったんですけど全然。いつだろうなあ。動き出したのは後期だったと思いますけど、5 月ぐらいに募集かかったかな 5 月 6 月ぐらいに。募集かかってそこら辺で、I さんとも接点はその頃はなくなってって感じで後期動き出すようになってって感じですかね実際。

調査者：そうかそうか。他は地域との接点でいうと、HICE？

対象者：そうですね。

調査者：HICE については？初めて接点を持ったのは？

対象者：え・・・いつだろう、夏かな。夏休みに慶應大学の交流会が

調査者：i 先生のね。

対象者：そうです。そこで HICE に 1 回寄って、(鈴木)恵梨香さんからああ、D 君ねって初めてましてってなったのがたぶん初めてだったと思います。

調査者：ああ、そうなんだ。その時にはブラジルにルーツがあるって話はしてたの？

対象者：してなかったんじゃないですかね。

調査者：(鈴木)恵梨香さんからしてみたらブラジル人じゃなくて日本人の子

対象者：ああ、でも知っていたんじゃないですかね。一応、浜松の、あの外国籍の人たちがまあグループでリードしてるっていうことなので、まあ知っていたんじゃないですかね。きっと。

調査者：松岡さんとはその時は話さなかったの？

対象者：たぶんいなかったですね。

調査者：あーじゃあ、No-Side の時に(調査者が D を HICE に)連れていった時に初めて松岡さんとは。

対象者：そうですね。はい。

調査者：そうかそうか。他に地域のNPOや公益法人と接点ある？

対象者：そんなに機関との接点はない、かな。まあでも、地域の磐田の公民館の通学合宿、あのまあ、子どもたちがテレビゲームとかから全部離れて合宿する感じ、学校行って、ここ帰ってきてっていうのがあって、僕そこに参加したんですけど、やっぱり外国籍の子もいて、公民館の館長さんとか、磐田市の教育長さんとかともお話しする機会、接点をそこでもったり、したっていうのもありましたね。あとなんだろう、なんかありますかねえ、どうでしょうねえ。ぱっと今出てくるのはそこら辺で。

調査者：まわりからっていうよりは自分から情報があって、やりたいなって飛びついてっていうか手を伸ばしてっていう形で。

対象者：そうですね。

家族の教育に対する姿勢

調査者：家族の教育に対する姿勢、お母さんの自分の教育に対する姿勢はどうだった？

対象者：あの一、スパルタ教育だったのかなどうだったのかな。なんか、教育への熱はすごく強かったんじゃないかなって思いますね。テスト見せるのが怖かったっていう感じでしたね<笑い>。

調査者：<笑い>

対象者：一言でいうと。やっぱ、あの、2言語、ポルトガル語と日本語ができてほしいっていうのは常に頭にあったらしくて、小っちゃい頃には、テキストがあるんですけども、なんか、そのテキストを丸々一冊家庭で教育するっていう感じでポルトガル語そうやって文法から何から何まで教えるっていうのはやっていたんで、やっぱポルトガル語と日本語をどっちも使えるっていうのはやっぱ、強く願っていたって言うのはありますし、大学進学も少なくともそこまでは行ってほしいっていうのは、本当にやりたいものがあればそっち、子どもの優先なんですけども、まあ、できれば大学進学して、いいところに就いて働いてほしいっていうのはありましたね。

調査者：それは小さな頃から言われ続けていた？

対象者：小っちゃい頃から大学までは行きなさいよみたいなことはありましたね。しっかり勉強しろっていうのはありましたね。

調査者：2言語っていうことについては兄妹も同じように言われている？

対象者：そうですね、下3人はみんな、下3人ていうか2番目と4番目はもう親と日本語で会話しているんですけど、どっちかっていうと苦手な方なんですけど。

家族内の言語

調査者：D自身はお母さんとは？

対象者：ポルトガル語で、はい。

調査者：兄弟とは？

対象者：日本語ですね、はい。

調査者：それは他の3人とも日本語で話す？

対象者：そうですね。兄弟とは全部日本語ですね。

調査者：その辺りの使い分けは意識せずとも出てくる？

対象者：そうですね。でも、食卓は面白い感じで。ポルトガル語の文法で日本語の単語入れたり、日本語の文法でポルトガル語の単語入れたりとか。それは誰も違和感なくみんな使っている。でもやっぱり、生活の基本的な用語はポルトガル語になっちゃうんですよ。あの、「ハンガーどこ？」とかじゃなくて、カビジって言うんですけど、「カビジどこ？」って弟に聞いたり。「ああ、そこだよ」って。なったりするんですよ<笑い>。

調査者：<笑い>。

家族の歴史

調査者：自分を含め、家族の歴史、ブラジルに渡った歴史、おじいちゃんおばあちゃんがとか。そもそも、どういう感じでブラジルに渡って、自分は日本で生まれてるわけだから日本に戻ってってこう歴史というか、知る機会があった？

対象者：なんか、もう崇拜ってわけじゃないですけども、なんかすごい、自分たちのルーツここから始まったってすごく重んじているとか大切にしているというのもあったんで、ブラジル行ったときもね、あの、君のひいじいちゃんひいばあちゃんはね、って話はされたりしましたね。

調査者：ブラジルに行って、小学校3年生か、3年生4年生でブラジルにいた時にそういう話を知った？

対象者：ひいじいちゃんがブラジルに行ったんだよって話は元々聞いていたんですけども。

調査者：それは日本にいた時から？

対象者：そうですね。親から聞いて、うん。でも詳しいことは知らず、ブラジル行ったっていう事実だけで、どういう背景かっていうことは聞かなくて、そうですね、知りましたね、ブラジル行っている。

調査者：ブラジルに行ってそうした話を聞いて、どう思った？

対象者：なんか、すごいなっていう。その一言に尽きると思うんですけど。なんか、こういう経緯があって今の自分が生きているんだなっていうのもありますし。不思議な感覚って言えば言いですかね、なんか、両親とも母方のおばあちゃんが日本人だけでもブラジルで生活してて、なんか、何でしょうね、文化のミックスを見ておもしろいなって。

調査者：その話をブラジルで聞いて、小学校5年生で日本に戻ってきて、ブラジル人だって言われて、その時どうだった？葛藤したって行っていたじゃんね、ひいじいちゃん、なんでブラジルに渡ったんだよって思ったり？

対象者：そこら辺は、なかったですよ。自分一点を責めていた感じだったと思うんですよ小っ

ちやい頃は。

調査者：特に家族に対して、なんでブラジルなんだよって思うことはなく、自分がまわりとちよっと違っていて、それに対して、

対象者：自分を責めるタイプでしたね。はい。

調査者：はい。わかりました。

ブラジルにルーツがあってよかったこと

調査者：ブラジルにルーツがあってよかったと思うことがあれば教えてください。

対象者：よかったと思うこと、やっぱり言語に対する興味っていうのも出てきましたし、言語に対する強さもあるのかなあってのもありますし。そこはよかったなと思いますし、今こういった活動ができるというのも自分に対してプラスに働いているところなんで、むしろ本当に日本人のままだったら、もう何もなくて、今過ごしているのかなって思っています。

調査者：言語に対する強さって言うのは2言語話せる強さってこと？

対象者：そうですね。あと英語も、うーん、聞き取りやすいのか知らないですけど、リスニングはもう難なく、常にできていたので、よかったなというのもありますし。自分の世界が広がったんじゃないかなっていうのも。

調査者：広がった？

対象者：うん。日本のままだと何もない感じかなと。

調査者：もうひとつ背景・バックグラウンドがあることで2つの見方というか、違った視点から物事が見られる、

対象者：はい。

調査者：そんな感じかな？

対象者：そうですね。

ブラジルにルーツがあって大変だったこと

調査者：逆にブラジルにルーツがあって大変だったことがあれば。

対象者：まわりからの目っていうこともありますし、あの一・帰化かな帰化。帰化最初にしようと思ったときも、すぐにだめって言われて、却下というかほとんどNG出されていたんですけども、外国籍で苦しい思いはしたっていうのは実際ありますし、私生活でちょっとめんどくさいことめんどくさいっていうこともありましたし、ちょくちょく。

調査者：帰化がNGっていうのは？

対象者：母子家庭でやっぱ子どもたち4人も扶養しなければいけないっていうのは、それは定住者のあの女性1人ができるかって話、この先わからないでしょっていろいろ言われてて。

調査者：それは、あの入管側にとってことだよな？自分が帰化するって言ったらお母さんにダメ

って言われたじゃなくて。

対象者：そうですね。向こう(入管)がダメって。マジかあってなって。

調査者：まわりの目だとか、外国籍だから感じてしまうっていうものはあった？

対象者：そうですね。

ブラジルと日本の真ん中の自分

調査者：葛藤していた時期があったって言っていたけど、今は自分自身はどう？日本人だなあとか、ブラジル人だなあとか、もしくは他の概念があれば。

対象者：簡単に言うと、一地球人だなと。すごい広く。国籍はもう何も気にしなくなったっていうのはありますね。ぶっちゃけ言えば人間でしょって感じで。国籍の有無はあまり気にしなくなりましたし、アイデンティティとしても真ん中の人間だとは思っているんですけども。

調査者：それはさっき話してくれた、ブラジルの友だちと話しているときに気にしなくていいんだなって感じ？

対象者：うん、そうですね、はい。

調査者：どっちでもいいんだなって感じ？

対象者：はい。いつかは覚えていないですけど、どっちでもいいんだなって、俺はもう真ん中だっていうぐらい自分でどっか、いつか見つけてそこから落ち着いています<笑い>。そこで。

今の自分がある理由

調査者：はい。世間の目とかいろいろな困難があったと思うんだけど、それをどうやって乗り越えていかにして、今の自分があると思っていますか？

対象者：うーん、何だろう。

調査者：あの時ああいうことがあったから今自分があるんだなあとか。

対象者：うーん。何だろうな今の自分がある理由。

調査者：ここをこういう風に頑張ってきたから今があるんだ。

対象者：やっぱ、小学校2年生の時の担任の先生がなんだろう、平等に扱ってくれたんですけども。まあ今でも1年に1回会ったりしているんですけども。その先生のサポートというか支えは強かったなというのはありますし、そこで知り合ったオーストラリア人の子も結構交流があって、彼の深い、深いお話を聞いて、へえ、こんな考えもあるんだなって、いろいろ聞いてやっぱりいろいろな要素が、まわりの人間との関係でいろいろ学んでいったと思うんですけども、それがあって、今の自分が構成されているのかと思いますね。

調査者：はい。

活動を行う理由

調査者：活動をなぜ行っているかという点については 2 言語を生かせるっていうのがあって、センターで見た子たちに頑張ってもらいたいっていうのがあったわけだ、

対象者：そうですね。はい。

調査者：それらに加えて、今他にもしている活動があるよね。なぜそれらをしようと思ったの？ さっき言ってくれた義務感？自分だからできるんだってことで。

対象者：そうですね。うん。

外国籍住民の日本社会への参加

調査者：外国籍の子どもたち、外国につながる子どもたちの日本社会への参加。例えば、浜松に住んでいても日本人との接点がないとか。エスニックコミュニティに入っていてそこで生活しているような子たちっていると思うんだよね。ブラジル人学校の子どもたちとかそうだと思うし、不就学とかになっている子どもたちもそうだと思うし、もちろん日本の学校にいる子どもたちもなかなか馴染めない子たちもいるじゃんね。そういう子たちの日本社会への参加について考えていることがあれば教えてください。

対象者：まあ、でもずっとブラジルっていうまとまりのエスニック集団にいと、うーん、何でしょう、なにもいい、全然問題はないんですけど、そこにいるのはブラジルの文化も知れるし、やっぱ文化の伝統を守れるのは全然いいことなんですけど、やっぱ日本の社会になんか馴染んでほしいなっていう思いはあって。うん、何でしょうね、まとまらない。具体的に何ができるのかは何もないんですけども、うん。なんでしょうね。

調査者：コミュニティ内にいることも大切だけど、どんどん日本人との接点は持ってほしい

対象者：そうですね。その思いは強くありますね。

調査者：それはどういう理由から？

対象者：団地の調査があったと思うんですけども、訪問した家庭であの、もう 30 年くらい日本にいる方がいて、でも日本語は全然という方がいて、それで本当にいいのかなって。あの一世界がすごく狭くて、子どもたちだけが俺の頼りだって言って、うん、でもその子どもたちも独り立ちして離れていったらどうなるんだろうっていうのもやっぱあって。日本にいるからには日本の良さも知ってもらいたいな、楽しんでもらいたいなっていうのもありますね。ブラジル人に対する悪いイメージとかも、やっぱなんか、あの集団だけでわいわいがやがややって、なんかマイナスイメージを持ちちゃうと思うんですけど、その全然マイナスなことをしてるつもりじゃないのにマイナス(のイメージ)を持たれるのはなんか、嫌だっていうのもありますし。それをやっぱなくしたいなっていうのがひとつですかね。

調査者：子どもたちに特化した話ではなくて、ブラジル人全般に対して日本人と接点を持つべきだっていう。

対象者：そうですね。

調査者：どうしたら接点を持てると思う？

対象者：うーん、難しいんですよね、それが<笑い>。うーん・・・どうしたら・・・うーん・・・
どうしたらいいんでしょうねえ。それはやっぱ自分の今後の課題かなと思っているんですけどもね。はい。

調査者：わかりました。

活動する場

調査者：Dの場合はHICEであったり、WISHであったり、a大であったり、活動する場があるわけじゃんね、その場についてどう考えているか。例えば、そうした場があることは自分を生かすことができるからありがたいとか。もっとこうしたらいいのになとかでもいいし。

対象者：何だろうな、貴重な場であることは間違いないでしょうね。うーん、何だろう、ただその情報がどこまで届くのかっていうのが気になる場所ですけどもね。情報がばーって広く行き渡るようなものがもっと増えていけばなっていうのもありますし、

調査者：機関や団体、取り組みが。

対象者：(もっと)あればいいなと思いますし、うん、何だろう。中立な立場があればいいなと思います。

調査者：中立な立場、

対象者：何て言えばいいんだろうな、ほんと上下関係のない日本人が外国人を支援する感じじゃなくてやっぱり、何て言うんでしょう、中立的なところが広がっていけばいいなと思うんですけど。

調査者：そういった面から見るとHICEの取り組みやWISHでの取り組みは縦の関係じゃなくて横の関係？

対象者：そうですね。横の関係を作りやすい、いい場所じゃないですかね。

■ エスニシティへの肯定感

エスニシティの肯定感の推移

調査者：自分のルーツ、エスニシティへの肯定感っていうのを1から5段階で。1が低くて5が高いで考えると今はいくつ？

対象者：5とかじゃないですか。普通にもう。

調査者：5だと思う理由は？

対象者：なんだろうな。やっぱ自分のエスニシティ、ルーツを否定するとなんか、自分の家系とかそこら辺を全部ぶった切っている感じもしますし、やっぱりあの何でしょうね、先代が頑張ってきたって聞いているんで、その努力はやっぱり無駄にしたいくないなっ

ていうのもありますし、それを受け継いでなんか、強くやっついていかなきゃいけないな
っていうのもありますし。肯定は強いですね。

調査者：その肯定感、自分のルーツを大事にするというのは今まで物心ついた時からね、日本
の小学校入って、ブラジルに1回2年間行って、ブラジルの学校で過ごして、日本に
戻ってきて、日本で小中高大ときてるわけだけど、変動はあった？

対象者：変動？

調査者：この時期はこうだったとか、時系列的に見ていくと同じ5なのか、それとも変化があ
って紆余曲折して5に至っているのか。

対象者：葛藤の時期はもう下がったのかどうかわからないですけど、5とは言い難いなと思
いますし、最高でも3ぐらいじゃなかったのかなって思いますね。小学校の時期に下が
ったかな。

調査者：小学校何年生？

対象者：小学校5、6年生。

調査者：小学校2年生の時期は？

対象者：肯定も否定も特になく3という感じですかね。3スタートで。

調査者：そもそもブラジル人だって意識がそこまでなかったわけでしょ

対象者：そうです。

調査者：あんまり考えてはなかったってことで、

対象者：そうです。ブラジルから帰ってきてからがやっぱ始まった。

調査者：ブラジルに行ってから日本人だってことでそんなに悩んでいたわけではなく、

対象者：そうですね。日本人ですねって感じで。

調査者：じゃあ、ルーツが嫌だっていうこともなく。

対象者：そうですね。あの、日本人街のリベルダーデにもちよくちよく行ったりしてやっぱ、
日本人も元気に暮らしてるんだなっていうのを知って安心したりしましたし<笑い>。

調査者：日本に戻ってきて、日本の小学校で葛藤が始まって

対象者：ちょっとなんか葛藤が始まってっていう形ですね。

調査者：中学校の時？

対象者：うーん、どうだろう。でも振る舞いとしては日本人らしくっていうのはありましたね。

調査者：意識としてあったということ？まわりと同じように

対象者：そうですね。

調査者：そのまわりと同じようにということなんだけど、小学校5年生とか6年生の時と比べ
て違う？

対象者：うーん、違うんじゃないですかね。何だろう、(小学校5、6年生の時)同じようにの
やり方がまずわからなかったわけで、中学校入って何となくつかめてきたっていうの
もありますし。

活動する自分

調査者：その中で、今の5っていうのはいつ5になったの？

対象者：いつでしょうね・・・いつだろうなあ。うーん。高校のときは完全に5っていうか4。

あのまあ、5にする決定的な理由があるというわけでもないんですけども。大学入って自分の活動の場が広がったっていうのがあって、自分でも活躍できるってなって5になったんじゃないですかね。

調査者：その活躍できるっていう実感はどういうところから？まわりから「すごいね」とか「頑張ってるね」とかそういうところから？

対象者：そういうところからもありますし、実際にボランティアをして教えるということを通して、なんかまだできることあるなっていう実感もあって。

調査者：活動を通してこう自己肯定感が生まれた部分がある。

対象者：活動を通してっていうのは大きいかなって、思いますけども。

調査者：はい。

発信する機会

調査者：自分の今までの経験を中学生の子とかに話す機会ってあったりした？

対象者：高校の時に1回公民館で。なんかあって。

調査者：それは新聞に載っていたやつ？あれ、新聞に載っていなかったっけ？

対象者：新聞、あー新聞に載っていたやつは誕生日の時に家に来ただけなんですよ記者が。それとは別だと思うんですけど、同じ学校のブラジル人とどこだろうセンターがらみなのか知らないですけど、呼ばれて話してくれないかって言われて。団地近いんで、そこら辺の子どもたちもいますし、その地域のご年配の方もいたんで、そこで発信したっていう。で、磐田のフォーラムでやっぱ、池上先生に呼ばれたっていうのもあって、市役所でもあって、うん。そこら辺でありましたね。いくつか。

調査者：その時に話を聞いていた人は日本人の一般の人もいたの？

対象者：いましたね。公民館で話したやつはもう、地域の人たちも基本日本人で、地域ボランティアやってるっていう人が多かったんで、まあ理解のある人たちが多かったと思うんですけども。

発信に対する反応

調査者：その時の聞いている人たちの反応はどうだった？

対象者：「おおう」て。こういうんでしょうね、驚きに近いのかな、なんか、うん。葛藤とか抱えて生きてきたんだなって、でもちゃんと高校進学大学進学できたんだなっていうのもありますね。大人からは。

調査者：聞いていた子ども、中学生とかからは？

対象者：センターの子でなんか、目標にしてくれるっていうかなんか、本当にちょっと家庭の

都合で引っ越ししてセンターやめるってことになったんですけど、それでも一緒に写真撮ってくださいぐらいの勢いで、見習って頑張りたいですって親同士の会話で、うちの子がずっとD君のこと言ってみたいな話聞いたりするとやっぱ、反応あったりしますね。

調査者：そうした大人や、D君のようにになりたいんですって言ってくれる子の反応を聞いて、どう？

対象者：まあ嬉しいっていう、純粹に嬉しいっていうのもありますし、やっぱあの、うーんなんでしょね。どの外国籍の子もこうやって輝いてほしいな、頑張ってるほしいなっていうのがありますね。将来的にはこうやって活動してる場もない、活動の必要がないものがあればなっていう思いですね。

調査者：そうだね。高校生になってそうした発信をしてリアクションがあつてっていうのが、今の活動につながっているってことはある？

対象者：つながりか、

調査者：そこで話したことで、話したことで自分が役に立てるんだって気づきがあつて、自分はこうした活動がしたいと考えるようになったとか？

対象者：たぶんそうだと思いますね。

調査者：役立ち方が分かったというか、

対象者：そうですね、はい。

調査者：なるほど。

生きる戦略

調査者：最後に、自分が日本社会で生きていくうえでこういう風に生きてきたからうまくやってこれたっていう戦略というか、後続の子どもたちに伝えたいこと、アドバイスがあれば教えてください。

対象者：アドバイスかあ。うーん。うーん。やっぱ負けず嫌いだったというのが燃料だったというのがあるんですけども。何だろうな。

調査者：今負けず嫌いだったっていう話があつたけど、中にはくじけてしまう子がいて、例えば、学校行かなくなってしまう子がいるじゃんね。そうした子がいる中でどうしたらよいのかなって。

対象者：ポテンシャルは持っていると思うので、そこを、自分は何かで生きるだろうっていう希望はまあ、くじけた時は捨てちゃいそうになったんですけど、捨てずに行つたのがと、それと負けず嫌いでやってやるって。日本人に負けないぞってものがやっぱりあつて、そこら辺の気持ちのつけ方ができると。

調査者：D自身はくじけた時もあったんだけど、そういう時は負けるもんかと。

対象者：そうです。負けない。

調査者：それで頑張ったからこそっていう。

対象者：あきらめたら負けだっていう感じで。「どうせ自分は何々だ」ってなんか、どうせって
いう使い方がものすごい嫌いで、自分は投げ捨てちゃいけないって思っ

調査者：それはやっぱりお母さんからそういう姿勢をって感じ？言われていた？

対象者：いや、なんででしょうね。やっぱりすごい働いて、それでも生活がきつい親の姿を見て、
うん、ここで頑張らなかったらちょっとなんか痛い目を見るじゃないですけどなんか、
うん。自分の思うような生活はできていけないのかなってのがあって。これに負けたら
社会に負ける。ダメだって。

調査者：先が見えていたっていうか、

対象者：そうですね。先を見るっていうのがあって。それは親にもなんか、小っちゃい頃なん
ですけど、「ここでこういうのがしっくりできないと将来何もできないよ」みたいなもの
のは。

調査者：言われてたんだ、

対象者：ほぼ口癖みたいなものでなんか。

調査者：中には、全然先のこと将来のことが見えない子がいるじゃんね。そういうわけではな
くて、ある程度この時期はこういうことをしなきゃってというのがはっきりしていた？

対象者：そうですね。

調査者：勉強しなきゃ高校生になれないとか。

対象者：やりたいことが将来できないって言っても具体的な職業はイメージしていなくて、も
う仕事しているっていう大きな枠組みで見えていて、頑張んなきゃできないぞって。親
も「工場勤務は絶対やめときな」っていうのがあって。

調査者：それは小っちゃい時から言われていた？

対象者：そうですね。親も日本に来た当初は、日本に来てもう 20 年くらいになるんですけど、
日本に来た当初たぶん 16 歳かな。16 歳ぐらいで工場で働いたんですけども、「やっぱ
大変だった」って。長い期間そこで、いろんな工場転々としたって感じですけども、
「やっぱすごい量の仕事だったし、あの、身体もたないし、いいことないよ」って。
一時的な収入はあるだろうけども、っていう感じでやっぱそういうケースが多いでし
ょうね、きっと。親がそういう感じだから。

調査者：親がそういう風に聞いていた分、自分はそうはならないぞっていう意識が

対象者：そうですね。はい。

調査者：わかりました。気持ちと先を見据えることが大事と。

対象者：はい。

■ インタビュー概要

- ・ インタビュー対象者：D
- ・ 日時：2015年8月4日12時10分～13時
- ・ 回数：2回目
- ・ 場所：Dが在籍する大学の個室
- ・ 記録：36分45秒

■ インタビュー

使命感

調査者：お願いします。

対象者：はい。お願いします。

調査者：前回のところで確認しておきたいところで、活動する理由っていうのが、「義務感」がっていう話だったんだけど、あの後考えてみて、「使命感」なのかなあって。もちろん違ったら違うって言うてくれていいんだけど。その辺りどう？

対象者：まあ確かに使命感に近いものはあるんじゃないですか、なんか自分でもまあ適切な言葉が当てはまらないんで、ま、代理で義務感とか責任感って言葉を(前回)出しただけなんで。義務感とか責任感というより、使命感の方が近い？

調査者：義務感とか責任感というより、使命感の方が近い？

対象者：うん、まあ、そうですね。なんか、やんなきゃみたいな感じがありますね。きっと。

調査者：同じく前回の話で地元で活動したいっていう。それはどうして？

対象者：やっぱなんか、外国籍が多いのはここら辺かなって。で、ブラジル人が最も多いじゃないですか。ここは。なんでまあ、一応自分が活躍できそうな場っていうか、比較的相手の共感を得やすい場かなって。

調査者：相手の共感を得やすいっていうのは、

対象者：同じブラジルルーツで、まあ、こういう境遇があったっていうのは結構理解しやすいと思うので。

否定された経験

調査者：はい。わかりました。外国にルーツがあることで否定された経験、

対象者：ああ、ブラジル人だからみたいなの？

調査者：前に言われていたブラジル人だからできないんだっていう視線とか。そういう。

対象者：はいはい。とあと、借りられなかったっていうのは前に話したかな。公的にも否定されたっていうのがあって。

調査者：借りられなかった？

対象者：はい。なんか借りたいですってなって、契約の説明までいったのに

調査者：ああ、アパートとかってこと？

対象者：はい。それでお名前いいですかって言われたときに、名前を言って、「あ、外国人なんですか。すみません」ってなって。ちょっと契約できなかつたっていうのはあったりしました。

調査者：その経験、前回ちょっと話してくれた部分と重なる部分があるんだけど、今の自分、もしくは当時の自分に影響をもたらしている部分はある？

対象者：ああ・・・あるんじゃないですかね。否定されないように頑張らないとじゃないですけど、なんかやっぱり意識を変えたいなって気持ちはあってまあ、そうした活動の原動力のひとつになっていたりするかもしれないですね。

発信にあたって

調査者：うん。それで、次に発信するにあたって、どういう思いを持って発信してますか？

対象者：うー・・・ん。

調査者：例えばいろいろな活動をしているわけだね。

対象者：はい。

調査者：ちょっと意地悪な言い方をすると、学習支援しているなら、それでいいじゃん。それとは別に発信しているわけじゃん。

対象者：そうですね。

調査者：どうして発信をするのかっていうことかな。

対象者：ああ、何のためか。学習支援だけだと、やっぱ何、達成できない面っていうのがあると思うんですよ。学習支援であれば、勉強を教えるっていう、姿を見せる。実際1対1で話すっていうのはあまりないと思うんですよ。で、発信することによって、僕的には、外国籍の子どもに焦点を当てて、発信していると思うんですけども、発信することによって何か、負の流れとかが、あると思うんですよ。外国籍だから、工場で働くみたいな。その負の流れを止めて可能性を拡げたいなっていう。次の子たちの可能性を拡げたいなっていうことで発信してて、と思います。

調査者：対象としては、もちろん外国籍の子ども、

対象者：子どもですね。

調査者：他に、その保護者を見据えているとか、

対象者：ああー、もちろん保護者も付随するっていうか、保護者来たりして、子どもの話はするわけですけども、保護者にも聴いてもらって、子どもと保護者のどっちもいるっていうのがベストだと思うんですけども。まあ、たぶんね、保護者はほしいなって思っていますね。当然。それで保護者の意識が変わればって思うんですけども。あの一、来る人たちは元々何かしらに関心があるわけで、関心がない人たちにも(来てほしい)っていう課題じゃないかなって思っています。

調査者：うん、あとは県の審議会で話したように、そういったまちづくり関係で関わっている

人たちとか、行政の人とか、もしくはフォーラムみたいな場で教育関係者や学生とか、
そういった人たちも視野に入っている？

対象者：まあでも、含んでないかっていうとそうではないんですけども、メインターゲットで
はないです。あくまでも。

調査者：あくまで外国籍の子どものため。彼らの環境を改善するためや子どものモチベーショ
ンを高めるためにだとか、そういうことをするために発信って感じ？

対象者：そうですね、それで理解が深まってくれば嬉しいなって思いますね。

調査者：はい。発信を行うことってのは自分にとってはどう位置付けている？

対象者：どう位置付けているんでしょうねえ・・・

調査者：発信することで何か自分にとってはプラスになっているとか、

対象者：そうですね。プラスになるかもしれないですけど、他人にとってプラス。外国籍の子
どもにとってプラスになればいいなっていうことで、まあ自分も一種の何でしょうね、
何だろうな。着火剤にしてもらえればいいなっていう感じでやっていると思います。

エージェント

調査者：はい。次に発信するにあたって、HICEやCSN、大学でもそういった取り組みをやっ
ているかと思うんだけど、中で例えば池上先生やM先生、CSNでも担当の方とか。
発信の場を一緒につくろうよっていうことで場を用意してくれる人たち、エージェン
トとの出会いはどう捉えている？

対象者：あー、何でしょうね。たぶん自分の可能性を上げてくれる、可能性を上げてくれるっ
ていう人でもあるし、新たな、そこで発信をすることで新たな出会いが出てきて、ま
た新たな発信活動につながっていくんじゃないかなって思ってます。

調査者：そういうのは今実際ある？次につながるっていう。

対象者：ありましたありました。あの実際、(多文化子ども)教育フォーラムの時に、磐田東部
小学校でお話してくれませんかかっていうのはありましたし。COLORSのミーティン
グでもちょっと見学しに来たっていう同じHICE、U-ToCの人なんですけども、そう
いうお話してくれませんかかっていうのもありましたし。

調査者：今回自分の話を聞いた人たちが、また別の発信の機会につながっていく。

対象者：うん。どんどんまわっていく感じですね。

発信後の変化

調査者：はい。そういった発信活動を行うことによる変化っていうことで、今のもひとつだと
思うんですが、自分自身の変化、外国籍の子の変化、保護者の変化、あとまあ、ホス
ト社会の人々？教育関係者や行政関係者、学生でも、それを聞いた人たち。

対象者：はいはい。

調査者：わかる範囲で聞けたらいいなあと思うんだけど、まず自分自身の変化。さっきの話以

外にも他にある？

対象者：なんか、自分のことについてよく考えるようになったというのはありますよね。そういえばこういうことあったなあっていうのが記憶の底に沈んでいたりするんで。それを思い起こしたり、(豊橋 CSN での発信)FUTURE LESSON(→FUTUTE LECTURE)ですごいそういうのがあって、自分もこんなことですごい苦しんだなってあって、自分を再発見っていうわけじゃないですけど、考え直すことができたりして。で、外国籍の子とその保護者は、たぶん保護者の方々は熱心な方が多くて、経済状況というか、お金はどうすればいいとか、学力どんな感じで必要なのか、いっぱい聞いてくれたりするんで、その手助けというかサポートをしたりしたと思いましたし。

調査者：子どもの反応はなかなか、(FUTURE LECTURE は)まだやったばかりだから、なかなか難しいと思うんだけど、どう？中学生が参加してたの？

対象者：たぶん中学生だと思います。みんな。で、大学行きたい人一つて聞いたら3人ぐらいばばって、そんな全体いなかったんですけど。まあ挙げてて、反応はどうだったんだろう。磐田の学習支援で教えるようになって、なんか「僕も大学行ってみたい」という子がいたりしたんで、何かしらの影響は与えているのかなって。その子は勉強頑張っていてっていう感じで、期待の株で<笑い>

調査者：<笑い>

対象者：何かしら影響あるかな。ホスト社会は、

調査者：ひとつは、さっき話してくれた、「うちでもしゃべってよ」かな？

対象者：そうですね。

調査者：日本人の人から。ブラジル人のイメージが変わったとか、そういうリアクションがあったりするのかなあとか思ったんだけど。

対象者：ああ、でも、知らなかったっていうリアクションがあります。こんな苦労してたんだなあとか、こんな文化あるんだなっていうのはちょくちょく、聞きますね。なので、理解深めたりするんじゃないですかね。

調査者：県の審議会でも話しているよね。その時の会の参加者の方の反応とか

対象者：常葉大学の方がなんか感激して、涙流したっていうのがありましたし、「ほおー」みたいな、こんなに努力したのかっていうなんか、反応はありましたね。まあ、割と比較的に近い市の何とか会館のセンター長もなんか結構興味を示してくれて、「他にもこんな活動があれば教えて」みたいなもありましたし、いろいろですよ。

FUTURE LECTURE

調査者：はい。CSN 豊橋では FUTURE LESSON、FUTURE LECTURE か、失礼しました。

どういうことを話したかっていうのを教えてもらえると。

対象者：今日持ってきてないや。

調査者：あ、持ってないのか。

対象者：3人いて、僕とLくんとCSN豊橋のブラジル人の人かな？国籍どれだかわからないですけど、一応ブラジルにルーツにある人。それで、自分の生い立ちとか経験。ここで生まれて、こうした経緯で高校進学大学進学はこういう目標でこういう気持ちでやってみたいなとかを話して、うーんと、最後に何か皆さんに一言。頑張ってくださいみたいな。ねえ、僕は親のサポートは大事ですよっていうことを話して、それで第2部ではグループディスカッションで、ひとりずつ僕とLくんと、もうひとりCSNの人で3グループに分かれて行って、まあ、フリートークみたいな、感じをして、終わりかな。

調査者：そのお誘いはどうやって来たの？

対象者：ええと、元々、Lくんの同級生がCSN豊橋のところで活動してて、Lくんにお話が行って、同じ高校の同級生。

調査者：その子は日本人？

対象者：そうですね。「何かやりたいね」って、「ああそういえば私の同級生にLくんっていう子がいるんだよ」って話になって、Lくんにかかかって、彼が(Dに)一緒に出ようってなって。うんいいよって。

調査者：聴いてた子たちはみんなブラジルの子？

対象者：はい。ブラジル人です。なんでまあ、一応全部ポルトガル語で言って、一応市の、豊橋市の職員の方も何人か来てくれて、そこは一応はレジュメの資料に日本語があったりするので、そこで。何とか理解してくれればなあって。グループディスカッションの時はちょくちょく通訳を入れて頑張ったんですけども、ブラジル人(が参加していた)っていう感じでしたね。

調査者：高校生はいなかった？

対象者：そうですね。高校進学を視野に入れている子たちで保護者の方もまあ、熱心な方みたいな。

調査者：普段のCSNの教室に来ている子たちが、

対象者：そうですね。そこの生徒たち、というか近くに団地があって、基本その団地の子たち。

調査者：はい。さっき自分のことを考えてっていう話をしていたけれど、それで何か気があったとか、新しく何かこうしてみようとか、どう？

対象者：ええー、

調査者：立ち返ってみて何か変化があった？

対象者：たぶんなんか、次話すとすれば、もうちょっといい話ができるようになるんじゃないかな<笑い>と思っているんですけど、まだその機会がないんで。なんとも言えないですけども。うん。なんか保護者に聞かれたことも具体的には覚えていないんですけども、自分でも難しい、答えられないってなった質問、結構ざっくり聞かれて。「日本社会を変えるには」っていう大きな質問をされて。それもやっぱ考えることがあって。ちょっと自分を振り返ってみたら、こういうことがあればいいんじゃないかなって

のは何個か思いついたりして。うん。ちょっと変わったと思いますよ。

発信の対象

調査者：さっき、発信の対象は外国籍の子だっという話をしてくれて、それで、外国籍の子っというの、日本の学校に通っている子が対象なのか、ブラジル人学校にいる子も含む、いや、そうじゃない不就学になっているような子も含むとか。

対象者：割とまあ、全部広く含めているつもりなんですけども、どういう子たちが来るかによって、どういうメッセージを伝えるかっていうのを変える、変えているつもりですけども。まあ、外国籍の子たち全般(が対象)かな。まあでも基本来るのは日本の学校通っているって子たちなんですけども。

調査者：ブラジル人学校に行っているよっという子と接する機会はある？

対象者：あんま、ない・ですね。そういう話が今1個持ち上がっていて、そのうち、行こうかなって。

調査者：磐田？

対象者：磐田っというか浜松？

調査者：浜松市内のブラジル人学校ね。

対象者：これ(D)の親づてで話が来ていて。

調査者：経験を話す感じ？

対象者：経験を話す感じで、なんか割となんか生徒たちやる気のない子が多くてどうしようってなんかそこの先生の方から親に話が行って、何とかしてみるっということここみたいな。

調査者：その辺りはどう？自分自身は日本の学校で勉強してて、ブラジルに戻って、戻ってじゃないね、ブラジルに行って、ブラジルの学校で2年間過ごしている。で、ブラジル人学校っというの日本では経験していないじゃんね。

対象者：そうですね。

調査者：その辺りで、じゃあ自分とは立場が違うというか、

対象者：はい、

調査者：その中で何が伝えられるかっていうと。

対象者：うん。たぶん、自分のあり方っというの、たぶん、結局迷うと思うんですよね。「俺日本語うまくしゃべれないし、どうせ」みたいな感じで。でも結局日本に残るパターンが多いと思うんで、ま、日本での可能性をもう少し考えてほしいと思いますし、実際、卒業して、工場で働いて、そこから日本語を勉強し始めるっという人もいるので、うーん、まあ日本にいるんだったら日本語を勉強してっという必要性とか、もうちょっと、こういう道もあるよって。自分自身そういう道を進んだことないから、ちゃんとしたアドバイスではないですけども、提案的な感じはしていきたいと思っいて。

調査者：言えることはあるっということだね。

対象者：そうですね。

家族

調査者：うん。次、家族についてなんですけど、おじいちゃんおばあちゃんがどういう仕事をしてたかとか、あとは学歴はどうだとか、お母さんに対して、こういう教えをしていたとかもしくは、自分に直接こういう教えがあったとか。お父さん側は答えられるかわからないけど、それぞれどう？

対象者：えっと、お父さん側からいけばいいかな。

調査者：うん。

対象者：あの一、僕が生まれた時にはお父さんの方のおじいちゃんは亡くなっていたっていう感じで。おばあちゃんが女手ひとつで育てたっていう感じなんですけども。まあ、一応、日系一世っていう人なんで、日本人 100%っていう。結構長い間、ブラジルに住んでいるんですけど、ポルトガル語が全然っていうか、あんま、しゃべれないっていう感じの人だと思うんですけど。精神的には本当に日本人みたいな。もうお前は長男だからこうあるべきだとか、そういう話を結構されていて、日本のスタイルは父方のおばあちゃんから来ていた感じで。

調査者：それはD自身が言われていた？

対象者：そうです。

調査者：お父さんが言われていたわけじゃなくて、

対象者：お父さんもたぶん言われていて、僕もたぶんそういうの言われていて。

調査者：それで、日本風(→日本流)もスタイルはこうなんだって言うものが、

対象者：そうですね。それでお父さんには医者になってほしかった、医者といひかなんといひかみたいで針治療をこり押ししてて、東洋医学の道に進んでほしかったっておばあちゃんが僕のお父さんに言っていて。で、だからDもこの道もあるよって言われてて。なんかそういうのやってみな(おばあちゃんに言われて)。「はい」ぐらい(の返事)で。まだ小学生ぐらいだったし、なんか、「はい」ぐらいで済ませたんですけど<笑い>。そういう感じかな。

調査者：じゃあ、結構将来について、いろいろと。家を継ぐの長男だからあなただよとか。

対象者：そうなんです。難しい本も渡されて。小っちゃい時に。これを読めば、人生の道しるべがどうのこうの。結局は読まなかったんですけども。あと、割とお金、政治については、とやかく言う人で。政治がらみの本も例えば日米貿易のどうのこうのとかも渡され、今の状況はこうこうこうなんだ、お前はこうこうこうやって生きなければならぬんだよってお話はされていた記憶はあります。お堅い人でしたね。

調査者：じゃあ、学歴からすると高学歴な方？

対象者：そこまでは把握してないですね。

調査者：その辺りは聞けばわかるもの？

対象者：もう連絡が取れないんじゃないかなって。

調査者：社会に対する関心は強かった方？

対象者：かなり強かった方。日本の社会ですけども。今ブラジルに住んでいて、ブラジルではどうだろうな、割と楽しく暮らしているっていうのをつい数か月前に磐田に引っ越して来てたまたまおばあちゃんのご近所さんだった方がいて、「ブラジルこういう人がいてね」、「ちょっと待った。それうちのおばあちゃんだ」って。

調査者：世間というか、世界は狭い<笑い>。

対象者：磐田来たんだっていう。そういうのがあったりして

調査者：お母さん側のおじいちゃんおばあちゃんは？

対象者：ええと、おじいちゃんはある一何でしょうね、フリーダムな人間だと思うんですけど
<笑い>

調査者：フリーダム<笑い>

対象者：あの、なんか、「やりたいことは好きにやれ」みたいな。でも結構お酒もよく飲んで、女性も大好きみたいな人なんですけどね<笑い>。

調査者：自由にやれているのは、Dに言ったの？それともお母さんに？

対象者：いやなんか、お母さんが小さかった頃はすげー厳しい人だったらしいんですよ。で、親がまあ、成人して仕事とかするようになって、日本来てブラジルに帰ってっていうのをやっていたりしたら、いつの間にかすごいキャラチェン(ジ)したっていうか<笑い>、

調査者：ああ、

対象者：変わっちゃった、びっくりしたっていう感じなんですけど。で、なんか、「勉強難しいだろ、やめていいぞ」っていう<笑い>。

調査者：じゃあDがそういうことを言われるようになった頃には、キャラが変わっていて、

対象者：「もう好きにやれお前の人生だ」みたいな感じの人でしたね。いわゆる父方のおばあちゃんとはもうほんと正反対の人ですよ。

調査者：お母さんに対しては厳しかったんだ、

対象者：厳しかったって聞いてて、あの、ね、結構物騒な人で<笑い>、なんか銃とか所持してた、ブラジルなんでそれは認められてるんですけど。

調査者：おばあちゃんの方は？

対象者：おばあちゃんの方は昔からみんなに愛されていたっていう話は聞いてて。けど我は強くて自分の意志は曲げないっていうタイプの人だって聞いたりした。ちょうど去年亡くなったんですけど、おばあちゃん何だろうな、ブラジルに行って、待ってよ、ひいおじいちゃんおばあちゃんが母方の、が、ブラジルに移って、その子どもで一緒に行ったっていう感じですかね。たぶん。なので、移民2世っていうのかな。そんな感じ。で、学校もある程度、向こうで経験したと思うんですけど、日本語はもう、日本人みたいな感じで、しばらく仕事して日本来て、日本で暮らしていた時期っていうのも、

割と長めにあったんで、(ブラジルと日本の)どっちもだいぶ経験して流暢なネイティブの人。で、どうだろう。教えるにはどうだろう、結構僕おばあちゃん子だったっていうのが在るんですけど、すごい大事にされてたっていうのがありましたね。何だろうな・・・

調査者：お父さん側のおばあちゃんと同じ感じ？

対象者：あー、(そう)ではないですね。

調査者：勉強しなさいっていう感じでもない、

対象者：(そう)じゃあ、ないですけども。なんか、「お前頑張ればできる子だよ」みたいなことがありましたね、たぶん。あとはすごいゲーム好きな人だったので、夜一緒にゲームやって、親に、お母さんに怒られる<笑い>

調査者：そうなんだ<笑い>。

対象者：自分の息子と母を同時に叱るっていうことをやっているのです<笑い>。

調査者：お母さんについては。前回教育のスタンスについては伺ったんだけども、他に何かこういう人だっているのがあれば。お母さんの背中を見て、言語を生かせる仕事いいなって思ったっていうことはあったと思うんだけど、なんかこう、お母さんの子の前の話を伺っても思ったんだけど、まわりとのつながりがすごくある人なのかなって印象をすごく受けて、

対象者：うんうん。はいはい。

調査者：お母さんのまわりに人がたくさんいる。お母さんが中心にそのまわりを人が囲っているみたいな。

対象者：あながち間違っていないと思いますね。今保育園で仕事してて、で、まあ磐田市の保育園ほんと日替わりみたいな感じで。大体網羅しているんですけど、(Dのお母さんは)保護者も網羅していて、園に連絡っじゃなくて、お母さんにまず連絡してそこから園に伝わるみたいな、中間役をやってて、あの人(は)人を巻き込むのが上手いのか何なのか知らないですけど、結構そういう力がありますね。で、あの一、新しく保育園の子どもたちに個別でちょっと直接なんか、まあ家に呼んでブラジルの子なんですけど、ポルトガル語と日本語を教えるっていうことを始めたんですよ。それで生徒も思いのほか多くて困っているって言い出したんですけども<笑い>

調査者：(Dはその場に)駆り出されないの？

対象者：駆り出されそうなんですけど、ちょっとバイトがって。

調査者：Dがしてる活動について、お母さんは何か言う？

対象者：直接自分には言ってこないですけどね。どう思っているんでしょうね。

調査者：こうしなさいっていうものがあったりするのかなあて思ったので、そこはまあ、

対象者：それぞれ独立して動いている感じではありますね。

調査者：嬉しいと思うけどねえ。

対象者：きっと。はい。

近隣の人々との関係

調査者：最後。日本、磐田ね、近隣の人々との関係。さっき言ってくれた、お母さんが保護者の方との関係が密だとか、以前からお話聴いてると友だちが泊まりに来たとか、結構D家が集まるたまり場みたいになっている印象を持つわけね。

対象者：はいはい。先週も泊まりに来たんですけど、弟兼自分の友だちみたいなく笑い、うーん、なんだろうね。近隣の関係かあ。関係を持ったらだいぶ仲良くなるっていうのはあるんですけど。関係持とうとしない、本当に近隣住民っていうのはいるわけで、なんか、ね、何だろう。あんま話そうともしない。なんだっけな。結構あの、理解がある保護者が多いんですけど、あの磐田市のエリアでは。

調査者：それはあれなの、日本人外国籍の人問わず？

対象者：はい。あ、ま、日本人の話なんですけど。言ったっけな、なんか連絡網が回ってきていろいろ言ってきて、最後には「まあ、日本語わからないでしょうから、まわりに聞いてください」ってバーンって。散々説明しといてそれかいっていう。

調査者：そういうちょっと理解がないというか、ちょっとこゝ嫌な感じの方もいたり、でもそうじゃない人もいて理解がある人もいます。

対象者：はい。

調査者：結構、例えばね、Dって言ったらあの家の子ねっていうようになったりする？

対象者：大学入って東新町のところのセンター言ってる、まあ、東新町から大学進学する外国籍の人が出たっていうことで、あの東新町の人がみんな喜んでいうのも聞いたりして、地域の人にもなんか、「あ、Dくん」ってなって、「こないだDくんの弟見たけど、ほんとにDくんの弟かどうかわからなくて声掛けられなかったけど、そう？」って言われて、「あ、そうですよ」っていうのもありましたし。

調査者：結構、何、もう地域の中では有名人？

対象者：バイト先でも「広報にいたでしょ」って主婦方が<笑い>。案外みんな見ているんだなって感じましたね。

調査者：じゃあ、全然まわりの住民の人と全然挨拶がないとかそんなこともなく、

対象者：まあでも、お隣さんとかその前とか(の方)とは挨拶したり。

調査者：地域の方とはお話しする関係にある、

対象者：そうですね。

調査者：それは小学校の時からそう？

対象者：ええと、小学校の時に最初に住んでいたのが、あの、外国の方がメインの、たぶん、1、2、3、4、5、6。6軒入れる分のアパートだったんですけど、外国外国外国日本日本みたいな、感じで。すごい怖い人だったんですけど、下の(階の)人。小っちゃい頃にサッカーしてたら、すごい怒ってきて、「俺の車に傷がついたらどうするんだ」って、「すみません」ってなって。ちょっとそこから(その人との関わり)はなかったですけ

ど。でもまあ、近くに小学校の友だちもいたりしてよく遊んだり、泊まりに行ったり来たりはあったんで、ちよくちよくそういう関係はありましたね。はい。

調査者：はい。わかりました。以上です。ありがとうございます。

対象者：はい。お疲れ様でした。